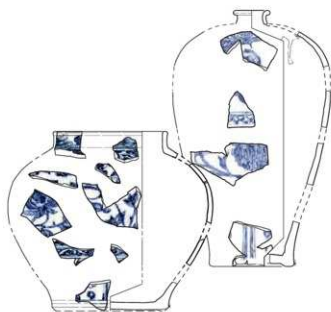


ちや たん ぐすく
北谷城

— 総括報告書 —



2020（令和2）年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

序文

本書は、保存目的のため昭和 58（1983）年度以降、計 17 回実施された北谷城の調査成果をまとめたものです。

北谷城は本町に残る唯一のグスクであり、沖縄県内の中でも五指に入る規模を有していることがこれまでの調査で明らかとなっています。さらに令和元（2019）年度に実施した踏査調査において、新たに「五の曲輪」と捉えられる平場や、一の曲輪東側にて「石切り場」と想定される場所が確認され、グスクの構造を考えるうえで非常に有益な知見を得ることができました。資料整理作業を行った膨大な量の出土遺物のなかにも、おもしろさうして「きたたんのてだ」「きたたんの世のぬし」と褒め称えられた按司の有力さを物語る貴重な品々が含まれていることが確認されました。

また、北谷城内には町指定民俗文化財である「殿（とぅん）」、「アガリス御嶽（うたき）」のほか、「グスク火の神」や「イリス御嶽（うたき）」といった拝所が所在しています。現在においても、かつて村落祭祀を司っていた「北谷ノロ」の子孫の方々や、北谷・玉代勢・伝道の「三箇字」の方々による祭祀が行われており、北谷城は地域の方々に聖域として大切に守られてきました。

これまでの調査成果をまとめることで本報告書が本町のみならず、沖縄県内のグスク時代の様相、現在にまで継承される村落祭祀の一旦を伺い知ることのできる資料となり、町民をはじめ多くの方々に歴史・文化を実感し、これらを学ぶために広く活用されるよう期待しております。

2020年3月現在、北谷城の所在する丘陵を含む一帯は在沖海兵隊施設「キャンプ・フォスター（キャンプ瑞慶覧施設技術部地区）」の敷地内に所在していますが、同年3月31日に北谷城の所在する丘陵を含めた一部（約11ha）が返還されることが決定いたしました。返後は北谷町教育委員会が主体となり、北谷城を本町のかげがえのない歴史的遺産として保存し、歴史・文化を守り育む公園として整備・活用を行うことを目指しております。

最後になりましたが、多くの関係機関の方々よりご助言・ご指導を賜り厚く御礼申し上げます。ともに、調査及び資料整理作業にご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

2020年3月
北谷町教育委員会
教育長 津嘉山 信行

例 言

1. 本報告書は、昭和58年度以降に北谷町教育委員会が実施した北谷城に関わる発掘調査について、既報告分も含めて総括したものである。各発掘調査の実施時期や概要は本文にて詳述した。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図（昭和54年測量）をもとに北谷町役場都市計画課が作成したものである。本書に掲載された緯度・経度の平面直角座標はすべて世界測地系にもとづくものである。
3. 遺物の同定については下記の方々からご教示を賜った（所属当時）。
陶 磁 器 大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
脊椎動物遺体 樋泉 岳二（早稲田大学教育学部）
貝 類 遺 体 黒住 耐二（千葉県立中央博物館）
石 質 大城 逸朗（理学博士・おきなわ石の会）
4. 第Ⅵ章の論考は、富眞嗣一、赤嶺政信の各氏から玉稿を賜った。
5. 出土した金属製品の保存処理・成分分析については、株式会社文化財サービスに委託した。
6. 放射性炭素年代測定はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、上田圭一氏から玉稿を賜った。
7. 本報告書の編集は、松原哲志・太田菜摘美・照屋元子が行った。執筆分担は目次のとおりである。
8. 本遺跡の遺物の注記及び遺物・取上げの凡例は次のとおりである。

・北谷城の注記凡例

遺跡名	調査年次	グリッド	層	台帳番号
北グ	2次	T82	Ⅲ層	台271

→ 北グ T-82 Ⅲ

※小破片等については、いくつかの項目を省略して記入し、台帳番号ごとにユニバックに入れ保管している

9. 遺物の注記については調査時に設定された層序（元層序）を記入しているが、本報告書を作成するにあたり、調査した層序を整理して総括し、基本層序を設定した。そのため、本書において報告する層序は基本層序に基づいて行う。基本層序の詳細については本文中にて記述した。
10. 本報告書において報告する遺物については、基本として過去に刊行された北谷城の報告書で未報告のものを選定した。
11. 本報告の編年表記は、それぞれの項目を執筆した担当者によって時代表記が異なっているが、あえて統一せず、担当者が使用する時代表記のまま記載した。
12. 「グスク」の表記については、過去に刊行した報告書の表記に倣い、固有の名称として用いる場合は「北谷城」のように「城」の漢字をあてて表記し、それ以外の場合にはカタカナで「グスク」とした。
13. 既報告では石垣で囲まれた平場に「郭」の字を充てている。しかし石垣の有無が明瞭でない場所もあるため、本報告では「曲輪」の字を充てた。ただし引用箇所については「郭」の字を使用している。同様に、既報告で「舎殿」とした遺構は「殿舎」と表記した。
14. 本書に掲載した発掘調査に関する写真・実測図などの記録および出土遺物については、全て北谷町教育委員会が保管している。



卷首図版 1 北谷城周辺航空写真（西側より） 2019年撮影



巻首図版2 戦後間もない頃の北谷城（北東より） 山川昌栄氏撮影



巻首図版3 巻首図版2の撮影ポイント (1945年 米軍撮影航空写真使用。○が撮影ポイント)



一の曲輪東壁（外壁？）検出状況



一の曲輪東壁（内壁？）付近 骨壘出土状況



二の曲輪 U-103-104 北壁 I b層によるIII a層上部改変状況



二の曲輪 石列検出状況



三の曲輪 畝（右側の部分）周辺



三の曲輪北西 鉄器出土状況



三の曲輪北西地区 融着した銭貨出土状況



四の曲輪城門付近 城門ほぞ穴核出土状況



四の曲輪城門周辺 階段状遺構核出土状況



会議の様子 (2019年8月28日)



委員による現地確認 (2018年10月25日)



民俗調査 (2019年6月17日、赤嶺政信氏と)



縄張調査 (2019年1月21日、富嶺剛一氏と)



地形・地質調査 (2019年9月12日、大城逸朗氏と)

本文目次

巻首図版

序文

例言

第I章 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

- 第1節 北谷町の概要【松原】・・・・・・・・ 1
- 第2節 北谷城の概要【松原】・・・・・・・・ 8
- 第3節 北谷城に関連した遺跡・場所【松原・土岐】・・・ 16
- 第4節 北谷城にまつわる記録・伝承【松原・土岐】・・・ 28

第II章 調査に至る経緯と経過・・・・・・・・ 31

- 第1節 調査に至る経緯【松原】・・・・・・・・ 31
- 第2節 調査体制【松原】・・・・・・・・ 31
- 第3節 調査経過【松原・土岐】・・・・・・ 33
- 第4節 既往調査の成果と課題【松原・土岐】・・・・・・ 41

第III章 その他の調査・・・・・・・・ 46

- 第1節 踏査調査【松原】・・・・・・・・ 46
- 第2節 宿道（道筋）の検討【山城】・・・・・・ 57
- 第3節 聞き取り調査【松原】・・・・・・ 61
- 第4節 植物調査【佐藤・藤】・・・・・・ 65

第IV章 発掘調査・・・・・・・・ 75

- 第1節 基本層序【松原・太田・土岐】・・・・・・ 75
- 第2節 検出遺構・・・・・・・・ 77
 - 1 一の曲輪【松原・土岐】・・・・・・ 79
 - 2 東側の丘陵【松原・土岐】・・・・・・ 86
 - 3 二の曲輪及び出入口【松原・土岐】・・・・・・ 89
 - 4 三の曲輪【松原・土岐】・・・・・・ 104
 - 5 三の曲輪北西端部【松原・土岐】・・・・・・ 111
 - 6 四の曲輪【松原・土岐】・・・・・・ 117
 - 7 城門付近【松原・土岐】・・・・・・ 122
 - 8 グスク丘陵南麓（伝道村周辺）【松原・土岐】・・・・ 130
- 第3節 出土遺物・・・・・・・・ 140
 - 1 土器【松原】・・・・・・ 141
 - 2 カムイヤキ【東門】・・・・・・ 157
 - 3 白磁【東門】・・・・・・ 160
 - 4 青磁【東門】・・・・・・ 166
 - 5 染付【東門・上地】・・・・・・ 192
 - 6 髹輪陶器【東門・上地】・・・・・・ 202
 - 7 半練土器【上地】・・・・・・ 213
 - 8 天目【上地】・・・・・・ 215
 - 9 タイ産無輪陶器【上地】・・・・・・ 218
 - 10 本土産磁器【太田】・・・・・・ 220
 - 11 本土産陶器【太田】・・・・・・ 224
 - 12 煙管【太田】・・・・・・ 227

- 13 神調産施輪陶器【山城】・・・・・・ 227
- 14 神調産無輪陶器【山城】・・・・・・ 240
- 15 陶質土器【太田】・・・・・・ 254
- 16 土製品【太田】・・・・・・ 256
- 17 瓦質土器【太田】・・・・・・ 258
- 18 その他の陶器（近世）【太田】・・・・・・ 261
- 19 石器・石球【上地】・・・・・・ 262
- 20 石製品【上地】・・・・・・ 288
- 21 球状製品【太田】・・・・・・ 290
- 22 滑石製品【太田】・・・・・・ 292
- 23 ガラス製品【太田】・・・・・・ 292
- 24 銭貨【太田】・・・・・・ 294
- 25 鉄製品【太田】・・・・・・ 298
- 26 銅製品【太田】・・・・・・ 302
- 27 貝製品【太田】・・・・・・ 306
- 28 骨製品【太田】・・・・・・ 310
- 29 円盤状製品【太田】・・・・・・ 314
- 30 瓦【太田】・・・・・・ 315

第V章 理化学的分析・・・・・・・・ 317

- 第1節 脊椎動物遺体【太田】・・・・・・ 317
- 第2節 貝類遺体【太田】・・・・・・ 327
- 第3節 年代測定【バリノ・サーヴェイ株式会社】・・・・ 340

第VI章 論考・・・・・・・・ 345

- 第1節 縄張り構造から見る北谷城【常眞綱一】・・・・ 345
- 第2節 北谷グスクの拝所と祭祀【赤嶺政信】・・・・・・ 352

第VII章 まとめ・・・・・・・・ 357

- 第1節 地質・地形【松原】・・・・・・ 357
- 第2節 丘陵利用の変遷【松原】・・・・・・ 357
- 第3章 層序・遺構・遺物【松原・太田】・・・・・・ 360
- 第4節 総括【松原】・・・・・・ 364
- 第5節 今後の課題【松原】・・・・・・ 368

参考・引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・ 369
報告書抄録

挿図目次

第1図	北谷町の位置	1	第55図	四の曲輪（城門付近）遺構立面2	129
第2図	北谷町全体	1	第56図	グスク丘陵南麓調査地拡大	131
第3図	地形分類	2	第57図	no.1トレンチ西壁・人骨埋葬遺構断面	133
第4図	表層地質	3	第58図	no.2トレンチ東壁断面	135
第5図	表層地質断面	3	第59図	建物址遺構と溝状遺構平面・断面	137
第6図	北谷町道跡一覧	6	第60図	土壇墓平面・断面（検出及び完備）	138
第7図	地形断面略図	8	第61図	井戸（チンガー）平面・断面	139
第8図	北谷城周辺地形図	9	第62図	土器1	146
第9図	1919（大正8）年	10	第63図	土器2	148
第10図	1948（昭和23）年	11	第64図	土器3	150
第11図	1992（平成4）年	13	第65図	土器4	152
第12図	周辺に所在するグスク	15	第66図	カムイヤキ	158
第13図	北谷城関連道跡等位置	17	第67図	白磁1	162
第14図	北谷トンネル（作画 山川昌永氏）	20	第68図	白磁2	164
第15図	グリッド配置（丘陵全体）	37	第69図	青磁1	174
第16図	グリッド配置（調査区拡大）	39	第70図	青磁2	176
第17図	北谷城地形図	47	第71図	青磁3	178
第18図	縄張り図と地形図の重ね図	49	第72図	青磁4	180
第19図	白比川に通ずる三～四の曲輪北側斜面地の現地踏査	51	第73図	青磁5	182
第20図	踏査地現況	53	第74図	青磁6	184
第21図	踏査位置	56	第75図	青磁7	186
第22図	北谷城周辺の道筋	58	第76図	青磁8	188
第23図	宿道（道筋）の想定	59	第77図	青磁9	190
第24図	北谷城地形図	70	第78図	染付1	198
第25図	調査地全体	77	第79図	染付2	200
第26図	一の曲輪遺構配置（略図）	79	第80図	褐輪陶器1	206
第27図	一の曲輪・東丘陵調査地拡大	81	第81図	褐輪陶器2	208
第28図	一の曲輪遺構平面	83	第82図	褐輪陶器3	210
第29図	D-112断面	84	第83図	半練土器	214
第30図	V-115平面・断面	85	第84図	天目	217
第31図	東側丘陵断面	87	第85図	タイ産無軸陶器	219
第32図	二の曲輪調査地拡大	91	第86図	本土産磁器	222
第33図	二の曲輪遺構配置	93	第87図	本土産陶器	226
第34図	二の曲輪遺構平面1	95	第88図	煙管	227
第35図	二の曲輪遺構平面2	97	第89図	沖縄産施軸陶器1	236
第36図	二の曲輪断面1	99	第90図	沖縄産施軸陶器2	238
第37図	二の曲輪断面2	101	第91図	沖縄産無軸陶器1	246
第38図	二の曲輪遺構平面3	103	第92図	沖縄産無軸陶器2	248
第39図	三の曲輪遺構配置	104	第93図	沖縄産無軸陶器3	250
第40図	三の曲輪調査地拡大	105	第94図	沖縄産無軸陶器4	252
第41図	U-82～84平面・断面	107	第95図	陶質土器	254
第42図	三の曲輪遺構平面	108	第96図	土製品	257
第43図	B'-81平面・断面	109	第97図	瓦質土器	260
第44図	W-77平面・断面	110	第98図	その他の輸入陶器（近世）	261
第45図	三の曲輪北西部遺構平面	112	第99図	石斧重量と刃部幅の相関	267
第46図	三の曲輪北西部調査地拡大	113	第100図	石器1	270
第47図	三の曲輪北西部断面	115	第101図	石器2	272
第48図	M・N'-55平面・断面	118	第102図	石器3	274
第49図	四の曲輪調査地拡大	119	第103図	石器4	276
第50図	P-32平面・断面	121	第104図	石器5	278
第51図	四の曲輪（城門付近）遺構平面	123	第105図	石器6	280
第52図	四の曲輪（城門付近）遺構立面1	125	第106図	石器7	282
第53図	四の曲輪（城門付近）遺構断面1	127	第107図	石器8	284
第54図	四の曲輪（城門付近）遺構断面2	128	第108図	石器9	286

第109図	石製品	289
第110図	球状製品	291
第111図	滑石製品	292
第112図	ガラス製品	293
第113図	銭貨	296
第114図	鉄貨	300
第115図	銅製品	305
第116図	貝製品	308
第117図	骨製品	312
第118図	円盤状製品	314
第119図	瓦	316

第120図	脊椎動物遺体の全体的な組成	319
第121図	魚類の組成	319
第122図	波浪の変化に基づく海洋地形の3タイプ(模式図)	327
第123図	生息地類型に基づく出土割合	328
第124図	暦年較正結果	343
第125図	北谷城の縄張り	347
第126図	北谷城内の拝所	352
第127図	2期(貝塚時代後2期)のイメージ図	359
第128図	3期(15世紀頃)のイメージ図	359
第129図	4期(17～18世紀頃)のイメージ図	359

図版目次

巻首図版1	北谷城周辺航空写真(西側より)	U-82 東壁	107	
巻首図版2	戦後間もない頃の北谷城(北東より)	図版37	B'-81 東壁	109
巻首図版3	巻首図版2の撮影ポイント	図版38	W-77 壁面	110
巻首図版4	出土遺物・遺構1	図版39	四の曲輪南側城壁	117
巻首図版5	出土遺物・遺構2	図版40	M'-N'-55 平面	118
巻首図版6	出土遺物・遺構3	図版41	P-32 平面	121
巻首図版7	北谷城調査審議委員会	図版42	土器1	127
巻首図版8	北谷城に関する調査実施状況	図版43	土器2	149
図版1	輝緑岩製石厨子	図版44	土器3	151
図版2	銘書	図版45	土器4	153
図版3	北谷城航空写真	図版46	カムイヤキ	159
図版4	クワノハエノキ	図版47	白磁1	163
図版5	1946(昭和21)年2月22日撮影	図版48	白磁2	165
図版6	1970(昭和45)年5月12日撮影	図版49	青磁1	175
図版7	1977(昭和52)年11月24日撮影	図版50	青磁2	177
図版8	1984(昭和59)年10月31日撮影	図版51	青磁3	179
図版9	1993(平成5)年撮影	図版52	青磁4	181
図版10	2015(平成27)年撮影 赤色立体地図	図版53	青磁5	183
図版11	2018(平成30)年撮影	図版54	青磁6	185
図版12	掘立柱建物跡(後兼久原遺跡)	図版55	青磁7	187
図版13	カムイヤキ副葬墓(小堀原遺跡)	図版56	青磁8	189
図版14	改造池城橋碑文(拓本)	図版57	青磁9	191
図版15	北谷トンネル(1917年頃)	図版58	染付1	199
図版16	池タスクの先端部(1963年頃)	図版59	染付2	201
図版17	旧・金満按司の墓(入口)	図版60	褐輪陶器1	207
図版18	移転した墓にある石碑	図版61	褐輪陶器2	209
図版19	西御嶽	図版62	褐輪陶器3	211
図版20	殿	図版63	半纏土器	214
図版21	北谷城崖下にある堀川	図版64	天目	217
図版22	合祀されている井戸	図版65	タイ産無釉陶器	219
図版23	復元されたチンガー	図版66	本土産磁器	223
図版24	現在の北谷祝女殿内	図版67	本土産陶器	226
図版25	秘匠塚の入り口	図版68	煙管	227
図版26	嘉手納家系図	図版69	沖縄産施釉陶器1	237
図版27	新設の大川按司之碑	図版70	沖縄産施釉陶器2	239
図版28	佐敷興道の墓	図版71	沖縄産無釉陶器1	247
図版29	踏査状況写真	図版72	沖縄産無釉陶器2	249
図版30	北谷城周辺航空写真(1945年)	図版73	沖縄産無釉陶器3	251
図版31	東壁石垣(内側)北向けに撮影	図版74	沖縄産無釉陶器4	253
図版32	遺物出土状況(東壁付近)	図版75	陶質土器	254
図版33	D-112 壁面	図版76	土製品	257
図版34	V-115 壁面	図版77	瓦葺土器	260
図版35	水溜り遺構	図版78	その他の輸入陶器(近世)	261

図版 79	石器 1	271
図版 80	石器 2	273
図版 81	石器 3	275
図版 82	石器 4	277
図版 83	石器 5	279
図版 84	石器 6	281
図版 85	石器 7	283
図版 86	石器 8	285
図版 87	石器 9	287
図版 88	石製品	289
図版 89	球状製品	291
図版 90	滑石製品	292
図版 91	ガラス製品	293
図版 92	銭貨	297
図版 93	鉄製品・鉄滓	301
図版 94	銅製品	305
図版 95	貝製品	309

図版 96	骨製品	313
図版 97	円盤状製品	314
図版 98	瓦	316
図版 99	脊椎動物遺体 1	321
図版 100	脊椎動物遺体 2	322
図版 101	脊椎動物遺体 3	323
図版 102	脊椎動物遺体 4	324
図版 103	脊椎動物遺体 5	325
図版 104	脊椎動物遺体 6	326
図版 105	貝類遺体 1	336
図版 106	貝類遺体 2	337
図版 107	貝類遺体 3	338
図版 108	貝類遺体 4	339
図版 109	フナウクイモイ 現況	353
図版 110	トンンでの採み	355
図版 111	ノロ殿内での採み	355

目次

第 1 表	北谷町道跡一覧	7
第 2 表	滑石出土量比較	16
第 3 表	出土傾向比較	43
第 4 表	調査実施日	69
第 5 表	北谷域植物目録	71
第 6 表	人工遺物全体出土量	140
第 7 表	石器出土量	141
第 8 表	土器観察一覧	155
第 9 表	カムイヤキ出土量	157
第 10 表	染付出土量	194
第 11 表	染付曲輪別層序出土量	197
第 12 表	染付観察一覧	197
第 13 表	褐輪陶器出土量	204
第 14 表	褐輪陶器観察一覧	212
第 15 表	半練土器出土量	213
第 16 表	半練土器観察一覧	213
第 17 表	天目観察一覧	215
第 18 表	天目(黒輪)出土量	216
第 19 表	タイ産無輪陶器観察一覧	218
第 20 表	本土産磁器観察一覧	220
第 21 表	本土産磁器出土量	221
第 22 表	本土産陶器観察一覧	224
第 23 表	本土産陶器出土量	225
第 24 表	沖縄産施輪陶器観察一覧	232
第 25 表	沖縄産施輪陶器出土量	233
第 26 表	沖縄産施輪陶器出土量(グリッド別)	234
第 27 表	沖縄産無輪陶器出土量	240
第 28 表	沖縄産無輪陶器観察一覧	242
第 29 表	沖縄産無輪陶器出土量(グリッド別)	244
第 30 表	陶質土器観察一覧	254
第 31 表	陶質土器出土量	255
第 32 表	土製品出土量	256
第 33 表	土製品観察一覧	256

第 34 表	瓦質土器観察一覧	258
第 35 表	瓦質土器出土量	259
第 36 表	石器出土量	262
第 37 表	形態別重量分類	263
第 38 表	形態別刃部相関	263
第 39 表	石斧観察一覧	263
第 40 表	敲打器類形態分類	264
第 41 表	砥石形態分類	265
第 42 表	石器観察一覧	266
第 43 表	器種別岩石相関(点数)	268
第 44 表	器種別岩石相関(重量)	269
第 45 表	岩石の性質と分類	269
第 46 表	石製品観察一覧	288
第 47 表	球状製品出土量	290
第 48 表	球状製品観察一覧	290
第 49 表	ガラス製品出土量	292
第 50 表	ガラス製品観察一覧	293
第 51 表	銭貨出土量	294
第 52 表	銭貨観察一覧	295
第 53 表	鉄製品観察一覧	299
第 54 表	銅製品観察一覧	303
第 55 表	鉄製品・鉄滓・銅製品出土量	304
第 56 表	貝製品出土量	306
第 57 表	貝製品観察一覧	307
第 58 表	骨製品出土量	310
第 59 表	骨製品観察一覧	311
第 60 表	円盤状製品出土量	314
第 61 表	瓦出土量	315
第 62 表	北谷域における脊椎動物遺体の組成(NISP)	318
第 63 表	北谷域出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型	329
第 64 表	北谷域出土貝類遺体の詳細	331
第 65 表	放射性炭素年代測定結果	344

第1章 はじめに

第1節 北谷町の概要

1. 地理的環境

北谷町は沖縄島中部の西海岸、県都那覇市から北東約16kmに位置している。北に嘉手納町、東に沖縄市と北中城村、南に宜野湾市と接し、西に東シナ海が面し、彼方に慶良間諸島が眺望できる。町の総面積は13.93㎢で、南北約6km、東西約4.3kmの長方形をなし、ほぼ中心（北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒）に町役場は位置する。

本町は、米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が3番目に高い自治体で、町総面積における軍用地の比率は52.9%を占める（2019年12月現在）。そのため土地利用上大きな制約があり、丘陵台地からなる東部地域と主に海岸埋立地からなる西部地域の両居住域は基地により分断されている。

産業は西海岸地域を中心に第三次産業が盛んで、ハンビー地区や美浜アメリカンビレッジなどでは国内外から訪れる観光客で賑わいをみせている。また、近年はフィッシャリーナ整備事業や自然海製塩事業など、地域特性を生かした新しい地場産業の創出に取り組んでいる。

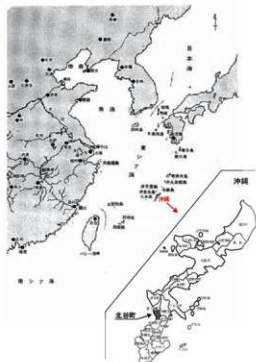
交通の面では、国道58号が西海岸側を縦断し、県道23、24、130号線が国道以東へ延びる。現在は、国道58号の道路拡幅や県道24号バイパスの建設が進められているが、基地の存在により部分的な工事となっている。

2018年1月末現在の人口は約29,288人で、現在進められている桑江伊平土地区画整理事業認可前（平成16年3月11日認可）に比べ2,930人、率にして1.10%増となっている。今後も公有水面埋立地の利用や返還軍用地の跡地利用に伴って、一層の人口増加が見込まれている。

2. 自然的環境

本町の気候は亜熱帯海洋性に属し四季を通して温暖である。年平均気温は22℃、平均湿度は77%前後で冬期が短い。年降水量は2,000～3,000mmと多雨で、梅雨と台風期に集中する。

地形を概観すると、町の北西-南東方向に走る桑江断



第1図 北谷町の位置



第2図 北谷町全体

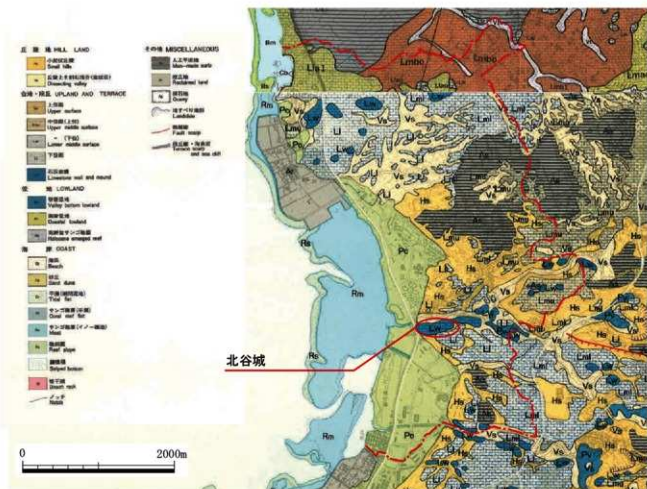
層を大きな境とし、東高西低を呈す。東部・南部では3段の段丘（標高100 m以上、100～50 m、50～30 m）が見られ、侵食が進み起伏に富んだ地形となっている。北部では、洞穴やドリーネ、石灰岩堤、石灰岩丘等のカルスト地形が発達し、西部の海岸低地は、ほとんど埋立地や人工ビーチとなっており僅かに自然海浜が残る。

表層地質は、基盤の鳥尻層群を琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆う。琉球層群は、砂礫堆積物の国頭礫層とサンゴ礫性堆積物の琉球石灰岩層からなり、前者は沖縄島北部、後者は中・南部に広く分布する。

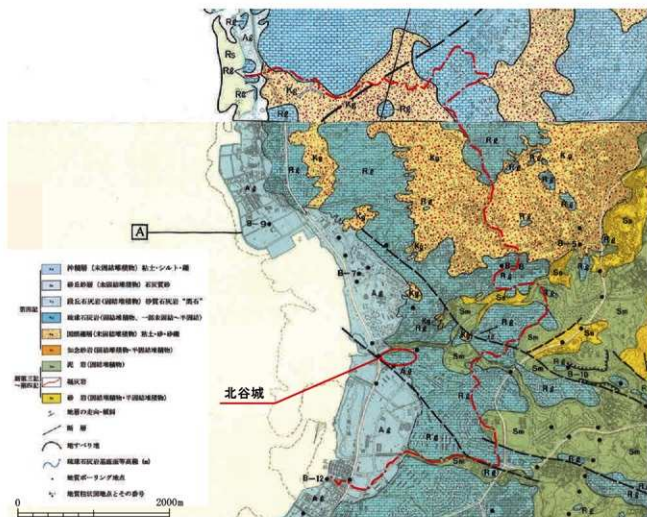
本町にも国頭礫層が分布しており、同層は基盤である名護層の影響を受けて酸性化し、風化した土壌（国頭マージ）にはイジュやヤマモモが生育する。

水理地質は、不透水層の基盤とこれを不整合で覆う帯水層（琉球石灰岩）との不整合部で湧出する。国史跡伊礼原遺跡に隣接するウーチヌカーも同機構による。

植生では、先述のイジュ・ヤマモモ等と、中南部に広がるアルカリ化した土壌（鳥尻マージ）に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等が混生し、学術的にも貴重な地域である。嘉手納基地内やその周辺、庁舎北側の丘陵地、北谷城周辺、河川流域に森林が比較的良好に残るも、その割合は町土の7%と高くない。動物相は、良好な植生が残っている場所を中心に1,411種が確認され、2000年に行われた動物調査では、希少性の高い哺乳類のオリオオコウモリ、鳥類のミフウズラ、昆虫類のクロイワゼミ等を含む陸棲動物や、海城、汽水城、河川域で多様な水棲動物が確認されている。



第3図 地形分類（「土地分類基本調査 沖縄中南部・中北部」に加筆）



第4図 表層地質 (「土地分類基本調査 沖縄中南部・中北部」に加筆)



第5図 表層地質断面 (「土地分類基本調査 沖縄中南部・中北部」に加筆)

3. 歴史的環境

旧石器時代

本書刊行時点で旧石器時代に比定される遺跡は存在しない。1966年、多和田真淳によって発見された桃原洞穴遺跡出土の化石人骨が約16,000年前のものとされたが、近年の研究では中世に属すると考えられている。同遺跡付近では1983年に土地区画整理事業が施行され、その際に鹿化石が3点発見されているが、現在は宅地化しているために鹿化石出土地を確認することは困難である。

貝塚時代前期（縄文時代相当期）

本町最古級の遺跡は、桑江断層下の標高2～4mの沖積地に立地する伊礼原遺跡である。同遺跡は、縄文海進ピーク時にあたる前1～2期（縄文時代早期～前期）の頃は海食崖付近の低湿地に、海退によって陸地化が進む前3期（同中期）以降は、1～2期の頃には無かった砂丘上に遺跡が形成される。一帯の砂丘は、前4期のほか、続く後1期（弥生から古墳）にも侵食と再堆積を繰り返しており、地形の発達過程を良好に示す。低湿地からは滑石を含む骨土器が出土し、九州との交流が窺える。町北部に位置する前4～5期の砂辺貝塚は、標高33mの残丘カルストの台地上に住居跡を、崖下に貝塚を形成する。砂辺貝塚から南西に300m、標高7mの鍾乳洞内に前5期の墓域を形成するクマヤー洞穴遺跡があり、洞内からは50数体分の改葬人骨とともに副葬品が発見された。近年、沖繩島の洞穴遺跡から前1期に比定される爪形土器より古段階の尖底土器の発見が相次いでいる。クマヤー洞穴遺跡からも同尖底土器に類似する資料が得られており、今後の詳細な調査・研究によっては町内最古の遺跡となる可能性がある。

貝塚時代後期（弥生時代から平安時代並行期）

本期の遺跡はキャンプ桑江北側地区の標高3～5mに集中する。平安山や桑江の低地では砂丘や浜堤の発達に伴って後1期の遺跡が増加する。遺跡からは燃焼遺構や貝塚、土壇墓などが検出されるが、住居跡は認められない。後2期からグスク時代の初期にあたる小堀原遺跡では、10～12世紀代のオオムギ・イネ・アワや、カムイヤキ埋納土壇墓が発見され、喜界島城久遺跡群との関連が注目されている。その他、平安山原B遺跡からは10世紀まで遡り得る風呂鉢が出土するなど、一帯からは農耕に関連する遺物が多くみられる。

グスク時代

北谷町役場の建設に伴い発掘が行われた後兼久原遺跡からは、掘立柱建物跡と高床式倉庫がセットで検出されたほか、製鉄・鍛冶関連の遺物や遺構、土壇墓等が発見された。近年、隣接する小堀原遺跡との比較により、ほぼ同時期に存在した、集団・集落間内部の社会的な位置づけに迫る研究が進んでいる。本町唯一のグスクである北谷城は、町役場から南へ約1.3kmの石灰岩丘陵上に立地し、14世紀後半から15世紀中頃に石垣が構築され、15世紀後半に終焉したと考えられている。按司に関する記録はほとんどなく、金満按司、大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったとの伝承が残る。「北谷」の文字は、嘉靖年間（1522～1566年）の兪姓大宗家家譜中に「北谷間切平安山頭職」と見え、遅くとも16世紀半ばには存在していたようである。また、琉球国王が地方役人に給した辞令書（1577年）に「きたたんまきり」と見られることから、当時は北谷を「きたたん」と読んでいたようである。また、2013年（平成25）に那覇市立壺屋焼物博物館に収蔵された「門上秀叡・千恵子コレクション」の中に、【弘治五年 ■（不明）さふろきたんの犬■（不明）やくもい】と刻銘された輝緑岩製厨子がある。後世作出されたものでなければ、弘治五年（1492）には「きたたん」の呼称があったことを示す一級資料である。



図版1 輝緑岩製石厨子（註1）



弘治五年

■〔まか〕さふるきたゝん
の大■やくもい

五月吉日

図版2 銘書（下記文面は註1より引用）

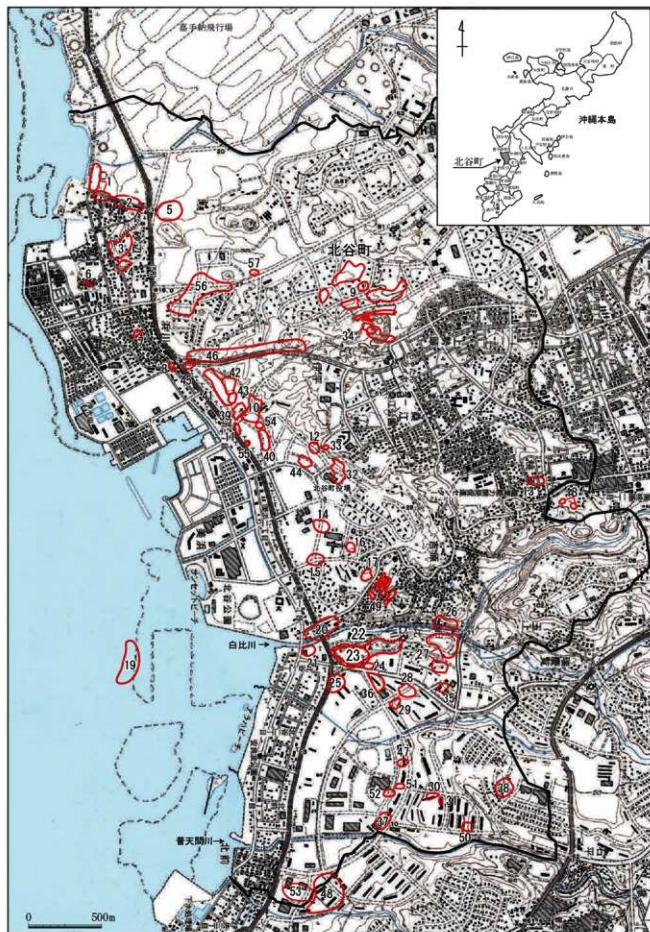
近世（1609-1879）

1649年に作成された『絵図郷村帳』をみると、近世の北谷間切には、北谷・くわい（桑江）・平安山・すなへ（砂辺）・野国・屋郎（屋良）・賀手納（嘉手納）・山内・あきな（安仁屋）の9つの村があったことが分かる。1660～1670年代には、間切の分割・新設に伴って山内が越來間切に、あきなが宜野湾間切に割かれ、新たに玉代勢、伝道、伊礼、浜川、野里が誕生し、計12村となって近代まで引き継がれた。1700年代前半には士族の増大・官職の欠乏により、首里王府が貧乏士族の転職を許可・奨励した。これにより、町方（首里・泊・那覇・久米村）の貧士層が生活の糧を求めて地方へ下り、未開の地に屋取集落が形成された。伊礼原B遺跡では、急激な開墾による土砂流出跡が確認されており、屋取集落形成によるものと考えられている。近世末期の1840年には、北谷沖にイギリス商船のインディアン・オーク号の座礁事故が起き、北谷間切の人々は同船の乗組員全員を救助・保護し、帰国の手助けをした。インディアン・オーク号座礁地では当時の積み荷の一部が今も海底に残されている。

近代・現代

1908（明治41）年に施行された島嶼町村制以後、北谷間切は北谷村（むら）となった。戦前は水田の広がる農村として栄えていたが先の大戦で焦土と化し、沖縄戦や戦後の米軍基地建設により地形は大きく改変された。米軍上陸直前に守備隊が建設した特攻艇秘匿壕は、北谷城が立地する丘陵北側に現在も残されている。戦後は村全城が米軍の軍事占領下に置かれ、中でも嘉手納基地の存在は村を南北に二分し行政執行に支障をきたす要因となった。これらを受け、1948（昭和23）年には北谷村（そん）から嘉手納村を分村し、1980（昭和55）年には北谷町へと町制移行している。

註1 那覇市立壺屋境物博物館編集『沖縄宗教藝術の精華 厨子 門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念報告書』2014年



第6図 北谷町遺跡一覧

第1表 北谷町遺跡一覧

2020年1月現在

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(宇女一)サーク原貝塚	貝塚後期	宇砂辺第1塚
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前中期～近世	砂辺加志塚
3	砂辺貝塚	貝塚前中期～古く	砂辺村内塚
4	砂辺ウザン遺跡	貝塚後期	砂辺加志塚
5	カーシー・ポンソン遺物敷布地	貝塚前中期	砂辺加志塚
6	アヤヤ一割穴遺跡	貝塚前中期～戦前	砂辺村内塚
7	浜川千原古山(はながわせんげんいんやま) 遺物敷布地	貝塚前中期	浜川浜川千原
8	浜川ウザン遺跡	貝塚後期	浜川浜川
9	上・下勢原区古墓群(かみ・しもせごこぼん)	近世	上勢原平山伊森原・伊礼伊森原・下勢原平山下勢原
10	伊礼原(いらいびら) 遺跡	貝塚前中期～戦前	伊平伊礼塚
11	伊礼原B遺跡	貝塚I～V期・戦前・近世・戦前	伊平伊礼塚
12	桑江ノ原(くわいのたん) 遺物敷布地	古く～近世	桑江小塚原
13	養化石出土地	新石器	吉原桑江原・戦前
14	南原古高(みなもとふるたけ) A遺跡	近世	桑江桑江原・南原
15	南原古高B遺跡	近世	桑江南原
16	伊禮原A原(いらいさくばら) 古墓	近世	桑江伊禮原A原
17	南原古墓群	近世	桑江南原
18	熊原(くまばら) 割穴遺跡	中世	吉原東原川原
19	インディアン・オーク号の発着地	近世	北谷橋先
20	池(いけ) 古く	古く	吉原東原地原・西平地原
21	白北川(しろきたがわ) 河口遺物敷布地	貝塚前中期	北谷西表原
22	北谷城(きたたんでん) 遺跡群	貝塚後期末～古く	大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～古く	大村城原
25	北谷番所址	近世	北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらがみすみまはら) 遺物敷布地	古く	吉原東角双原・西角双原
27	山田原(やまのぼら) 古墓群	近世	大村山田原
28	玉代勢原(たましろやま) 遺跡	貝塚後期末～古く	大村玉代勢原
29	長者山(ちやうぢやま) 遺物敷布地	古く～近世	大村玉代勢原
30	大道原(おほみちのぼら) A遺跡	古く	北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前中期	北谷大道原
32	後原久原(おしろくばら) 遺跡	古く	桑江後原久原・宇桑江小塚原
33	ジューシーチャー古墓	古く	桑江小塚原
34	伊礼伊森原(いらいいもり) 遺跡	古く	上勢原伊礼伊森原
35	後原(おしろ) 遺跡	古く～近世	大村玉代勢原
36	坂川原(さかがわ) 遺跡	古く	北谷坂川原
37	福千原(ふくとしはら) 遺跡	貝塚後期	北原福千原
38	横原原(よこはら) 遺跡	古く	北原横原原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	伊平伊礼塚
40	伊礼原E遺跡	貝塚前中期～近世	伊平伊礼塚
41	平安山原(いんざんぼら) A遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
44	小塚原(こづかびら) 遺跡	貝塚後期～近世	桑江小塚原
45	千原(せんぼら) 遺跡	古く	伊平千原
46	大作原(おほさくばら) 古墓群	貝塚後期・近世	伊平大作原
47	東表原(あがらわ) 遺跡	貝塚前中期	北谷東表原
48	新塚下原(あらたさくしちやま) 第2遺跡	貝塚前中期～近世	北谷安仁塚原
49	東平地原(あがらわ) 古墓群	近世	吉原東平地原
50	大道原C遺跡	近世	北谷大道原
51	大道原D遺跡	古く	北谷大当原
52	高勢原(たかしろ) 水田跡	近世～戦前	北谷高勢原
53	安仁塚原(あにづか) 遺跡	古く～近世	北原安仁塚原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前中期～貝塚後期	伊平伊礼塚
55	藤森(ふじもり)	近世～戦前	伊平伊礼塚
56	平安山又上墓跡群	戦前	宇赤川
57	下勢原集落跡	戦前	宇下勢原

注：時代表記は概ね「古く」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」

※番号は第6図と一致

第2節 北谷城の概要

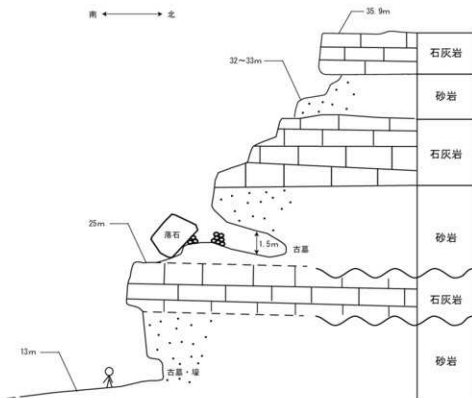
1. 地理的環境

北谷城は、宇大村に位置する東西約500m、南北約150m、標高約44mを最高地とする丘陵上に築かれている(図版3)。丘陵周辺を概観すると、西側は本県の大動脈である国道58号が南北に走り、南側は県道130号線が国道以東へ延びる。北側は白比川が西流し、東側は丘陵が続く。

北谷城が立地する丘陵部の地層は、上部から下部にかけて石灰藻球石灰岩、同質石灰岩と石灰質砂岩の互層、そしてカキ貝化石等を含む石灰質砂岩の卓越した層相変化を示す。丘陵部では、石灰質砂岩の固結度が弱いため浸食されてノッチ状となっている。そのためノッチの岩陰部では、概ね7世紀から11世紀に比定されるくびれ平底土器や貝、人骨等の先史時代遺物が散見される。また、砂岩層には近世墓や沖繩戦時の防空壕が見られるが、同層が石灰岩層に比べて軟弱で比較的造営し易いことに起因すると考えられる。白比川に面した北側では琉球石灰岩が崩れ落ち、比高差5～10mの断崖が多く見られる。現在、丘陵部では湧水は確認できない。丘陵西側麓に塩川(スーガー)と呼ばれる井戸があることから比較的浅所に基盤の存在が推測される。



図版3 北谷城航空写真



第7図 地形断面略図

2. 自然的環境

沖縄本島の植生の特徴は、地質的な違いから南北で大きく2つに分けられ、北部に広く広がる非石灰岩（赤土）を中心とした植生と、比謝川以南、中南部に広く広がる石灰岩地域の植生に分けられる。北谷城の地質は、中南部に広がる石灰岩地域となっており、同地質を代表する植生が確認された。

具体的には、人為的な攪乱を受けた場所で最初に旺盛に生育するオオバギ、アカギを中心に、ガジュマル、ハゼノキ、クロヨナ、クスノハガシワ、リュウキュウハリギリおよびクワノハエノキ（県指定天然記念物フタオチョウの食草）などの大径木が確認された（図版4）。また、それら高木の下ではタブノキ、ヤブニッケイなど、琉球石灰岩の極相林を構成する樹種、いわゆる陰樹も中高木になっており、森林としてある程度良好な状態を保っていた。本丘陵における植生は、沖縄戦や戦後の耕地利用の影響を受けながら、現在は遷移過程にあると言える。

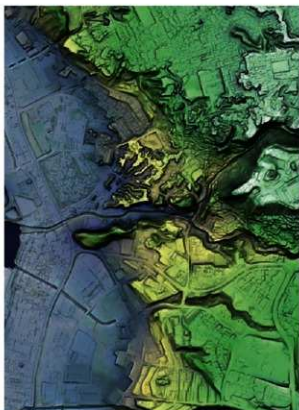


図版4 クワノハエノキ

3. 地形の変遷

標高で色分けした地形図（第8図）を見ると、北谷城が立地する丘陵は、湾状地形の最奥部に位置することに気づく。同丘陵の南側にはかつて河川が存在し、丘陵の麓まで海が迫っていたことが試掘調査で明らかとなった。洋上に突き出した地形は天然の要害をなし、良港となる河口を南北に持つ地勢は、防衛と交易に適した条件を具備していたと想定される。丘陵の南側には「伝道、玉代勢、北谷」の三箇字（集落）が戦前まで展開し、さらに南側に沖縄の三大美田と称される「北谷ターブックワ」が広がっていた。また、白比川の対岸には河川と並走する小丘陵があり、北谷城の出城と伝わる「池グスク」があったが、戦後の米軍基地建設に伴って池グスクは丘陵ごと削平され、三箇字と田畑は消滅した。東側に続いていた尾根も分断されたため、現在の北谷城は独立丘陵上に立地する。

本節では、往時の地形推測の一助として、時系列に航空写真と地形図を列挙する。



第8図 北谷城周辺地形図（カシミール3Dスーパー地形に一部加筆）



第9図 1919（大正8）年

A：池グスクがあったとされる丘陵、B：北谷城がある丘陵

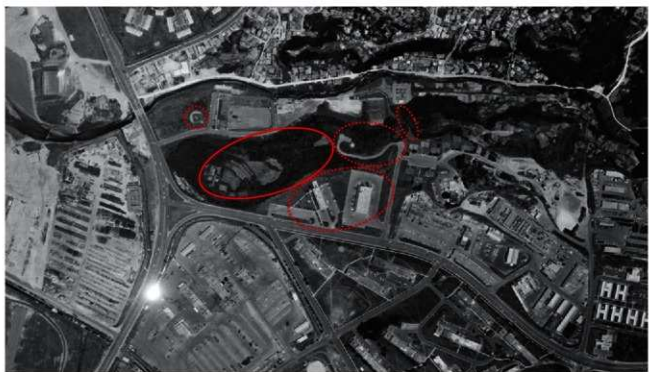


図版5 1946（昭和21）年2月22日撮影（色調補正有り）

破線：左、池グスク丘陵西部開削 右、丘陵東側で大規模な造成が認められる



第10図 1948（昭和23）年
破線：北谷城北側平坦地等に建物が認められる



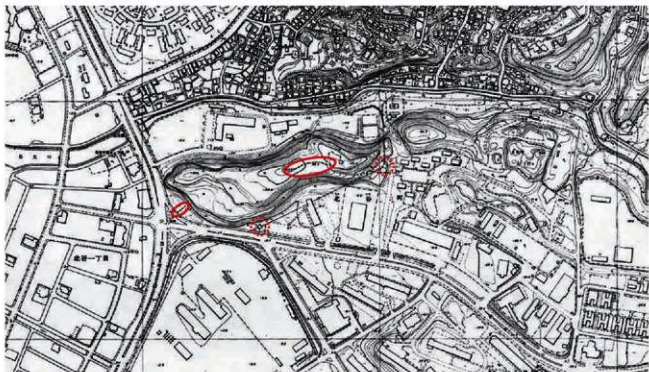
図版6 1970（昭和45）年5月12日撮影
実線：一の曲輪の東側（東丘陵地区）及び三～四の曲輪に耕作域が認められる
破線：道路や構造物の建築に伴い、丘陵の開削、集落の消滅等が確認できる



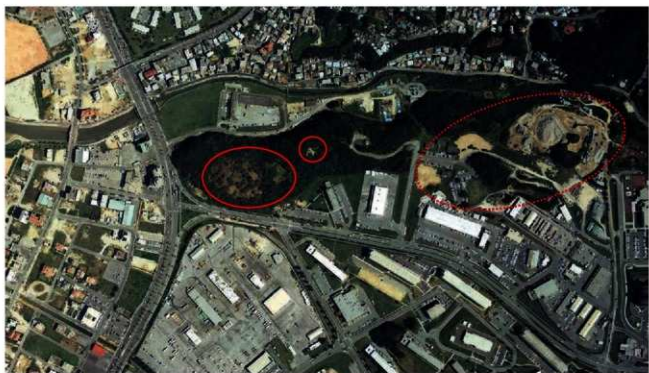
図版7 1977（昭和52）年11月24日撮影
丘陵上部でおこなわれていた耕作域が見られなくなる。北側平坦地の野球場も撤去



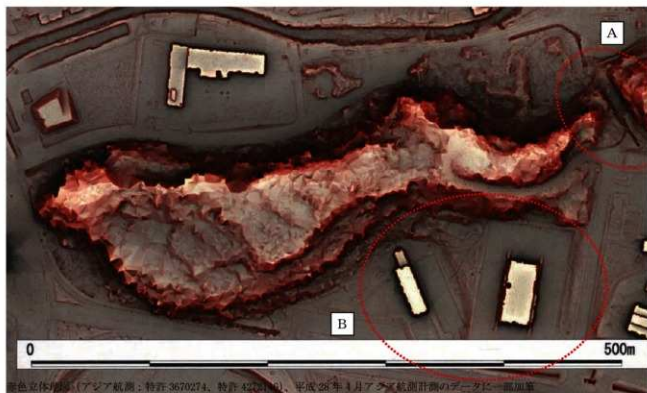
図版8 1984（昭和59）年10月31日撮影
実線：三の曲輪の樹木伐採（第2次調査地）
破線：鉄塔建設中



第11図 1992（平成4）年
 実線：道を示す破線が認められる
 破線：鉄塔が認められる



図版9 1993（平成5）年撮影
 実線：左、過去の調査時に伐採（四の曲輪） 右、一の曲輪の東側伐採（第9次調査地）
 破線：丘陵東側で大規模な造成



赤色立体地形図（アラスカ航路：特許3670274、特許4271816）、平成28年4月アラスカ航路計画のラスタに一部追加

図版 10 2015（平成27）年撮影 赤色立体地図

破線：A北谷城丘陵東側とB南側微高地の切土状態が良く判る

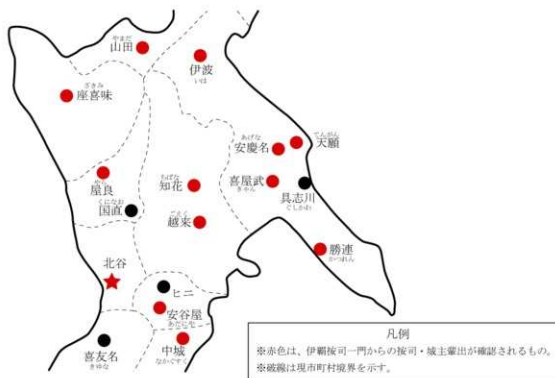


図版 11 2018（平成30）年撮影

破線：河川拡幅

4. 周辺に所在するグスク

『沖縄県史 各論編2 考古』(2003、沖縄県教委)では、県内の「グスク時代の主な遺跡(254P)」及び「主要なグスク(266P)」を掲載している。これをベース資料として、北谷城周辺に所在するグスク配置図(第12図)を作成した^{註1)}。



第12図 周辺に所在するグスク

主要とされるグスクが冠している地名は、前王朝の王の子・孫に当たる王子・按司に冠されるものと多く一致しており、中頭郡一帯では浦添を始めとして中城・北谷・越来がこれに当たる。古くからこれらの地は、地域の中核をなしていたと捉えて良いであろう。

『琉球祖先宝鑑』(慶留間知徳、1933)や『古琉球三山由来集』(東江長太郎、1989^{註2)})といった野史の集成記録類から14世紀後半～15世紀の中頭一帯における新興勢力の台頭が看取できる。怕尼芝(はにじ)に滅ぼされた旧北山王の裔である伊覇按司一門から、中頭各地の地名を冠した按司が多数輩出されており、最も有名な護佐丸・阿摩和利・鬼城からも伝わっている系図上にはこの一門に含まれる。伊覇按司の娘・真鍋金(或いは真鍋樽)は尚巴志王妃となり、後の尚泰久王を輩出したことは、この一門の台頭・繁栄と無関係ではなからう。

これら多くのグスクでは考古学的な発掘調査が行われており、グスク時代初期からの人々の活動を窺わせるものもある。これらのグスクが相互にどのような関わりをもっていたのかについても、今後の解明が待たれる。

註1. 北谷町外にあるグスクのうち、北谷城直近のグスクと言えるであろう喜友名グスク・安谷屋グスク・國直グスク、及び本稿内容に関連する喜屋武グスク・安慶名グスク・天願グスクを追加した。

註2. 元本は1935年にガリ版刷りで出版された『通俗琉球北山由来記』。和尚であった東江長太郎は、明治～昭和にかけて、法事等の度に各地の古老から聞き書きしたといい、混同・混乱については長太郎が調整している部分もある。これに追加する形で、長太郎の子哲雄が刊行に漕ぎ着けたのが本書であるため、刊行年は新しいものとなっている。

第3節 北谷城に関連した遺跡・場所

1. 小堀原（くむいばる）遺跡と後兼久原（くしかにくばる）遺跡

北谷城から白比川を越えた北側、現在の字桑江には小堀原遺跡・後兼久原遺跡がある。隣り合っており所在する両遺跡は、グスク時代前半の集落・墓域であることに加え、滑石多出遺跡として知られており、この2遺跡だけで沖縄諸島で得られた滑石全点数の約6割を占める²¹。この滑石を始めとして玉縁口縁の白磁碗・徳之島産カムイヤキは、グスク時代前半期を象徴する遺物であり、これらの出土状況は以下の通りである。

これを見る限り、両遺跡は北谷城を完全に凌駕した格好となっており、グスク時代前半期における北谷城の存在意義を再考する上で、外すことのできない非常に重要な遺跡である。

第2表 滑石出土量比較

	滑石	玉縁白磁碗	カムイヤキ	所収図書
小堀原遺跡	526	30	224	町30集・町34集
後兼久原遺跡	112	19	936	町21集・県センター22集
北谷城	1	3	30	本書での集計

註1. 「グスク初期における出土滑石からみた集団関係」宮城弘樹、2016



図版12 掘立柱建物跡（後兼久原遺跡）



図版13 カムイヤキ副葬墓（小堀原遺跡）

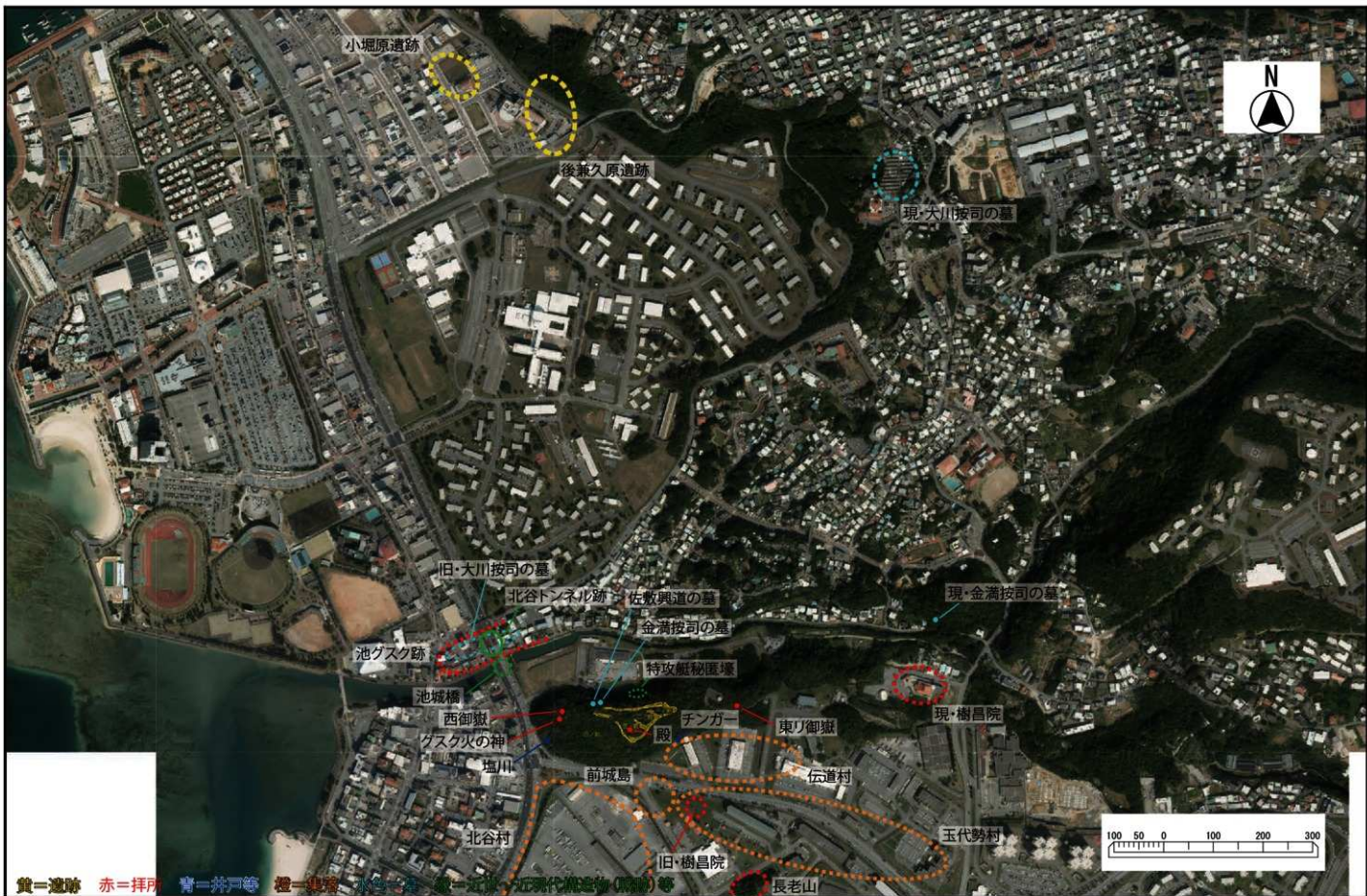
2. 池グスクと北谷トンネル

北谷城丘陵と同様、白比川対岸に発達した河岸段丘は「池グスク」と呼ばれていた。戦後の削平・造成によって現在は全く見る影もないが、北谷城を知る上で非常に重要な小丘陵である。北谷城の「出城」を彷彿させるが、実際にそのような機能を果たしていたかは不明である。言い伝えでは北谷城の「倉庫」があったとも言われる²¹。

伝承では池グスクに北谷城主であった大川按司親子の墓があり、戦前その墓が発見され、墓の移設に際して大川按司を顕彰する石碑が建立された。南西諸島には同じ名を冠したグスクが散見される²²が、「埋葬」に関わるものであることが多いことは示唆的である。

この池グスクに渡された橋が「池城橋」である。この橋が石造になったのは1821年とされ（「改造池城橋碑文」²³）、計5門のアーチ橋が建造された。この時、多量の石材が北谷城から搬入されたという伝承を残している。

さらに1905年、この池グスク丘陵に掘り抜かれたのが、沖縄最初のトンネルとなる「北谷トン

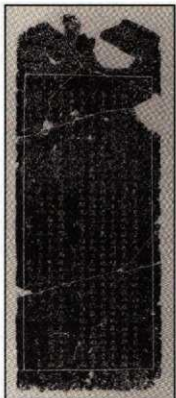


第13図 北谷城関連遺跡等位置

ネル」である。池城橋とともに戦前の写真にその姿が残っており、ノスタルジックな北谷の風景として取り扱われることが多い。馬車が通れるくらいの幅で、長さ18mの筒抜けのトンネルで、内部は風が吹き抜け一年中涼しく、雨宿りにも最適だった。モーアシビの場所としても使われ、夜になると近くの集落から青年男女が集まり、歌・三味線・踊りなどで夜更けまで遊んだという。しかし戦時になると、軍車輻の通行に障るという日本軍の命を受けた国場組により発破・破壊された。屋根の部分が失われた。

琉球政府関係写真資料によると、少なくとも1963年1月段階では、この池グスク丘陵の1号線（現在の国道58号）にかかる部分は残存していた。

- 註1. 元北谷町教育委員会教育長真栄城兼徳氏の発言より。「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成4年12月17日）」（『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教委、1994）。
- 註2. 豊見城市名嘉地の池グスク、那覇市小祿の池グスク（小祿グスク・カニマングシク）、恩納村前兼久のイチグスク、うるま市与那城伊計の伊計グスク、今帰仁村平敷の池城墓、名護市羽地の池城墓、同市仲尾次のヒチグスク。
- 註3. 「其の碑は米軍エンジニア部隊所属建築管理技師ジェームスワトソン氏が元碑建立の場所の下の洞穴の入口に半ば埋っていたものを発見して発掘し同氏によって部隊内に保管されている。此の橋も米軍が一号線拡張に際し昔のた円形の石橋は破壊し改築された。」（『北谷村誌』北谷村役所、1961、P412）



図版14 改造池城橋碑文（拓本）



図版15 北谷トンネル（1917年頃）



図版16 池グスクの先端部（1963年頃）



第14図 北谷トンネル（作画 山川昌永氏）

3. 金満按司の墓

北谷城の北側断崖には金満按司墓（かにまんうふあか）があり、北谷城関連遺跡の1つとして取り扱われてきた。『戦時体験記録』（北谷町役場、1995）の中に、戦中この墓に避難した村民の証言が残る。

「北谷城の北側にカニマン御墓というのがあったが、私たちはそこへ避難した。（中略）ニクブク（藁のムシロ）を九枚ほど墓の中四畳半ほどに敷き、墓の側には石垣を積んだ。中には古い骨がいっぱいあった。「イクサだから見守ってくださいさだろう」と言い合いながら、私たちはお骨の上に荷物を置いた。」（伝道ウシ 明治42年生 北谷）

証言にある「古い骨がいっぱいあった」ということは、被葬者は複数であったと見て良いであろう。また、後述する石碑の裏書には「歴代北谷城主金満按司ノ御墓」とあるから、そのまま受け取れば、金満按司は歴代複数人存在していたことになる。

北谷の中でも、山川門中がカミウシーミー²¹⁾の時に拝んでおり、他に伊礼・嘉手納門中も拝んでいたという。また、内容は分からないが、何かが書かれた碑文が建てられていたとも言われる²²⁾。『北谷町史 第三巻』（北谷町役場、1994）によると、「戦前までは丘陵上部のグスク側から道を下って墓参をおこなっていたが、戦後は下からよじ登っておこなっており、「一九六〇年代に移転を余儀なくされ、現在は利用されていない」という。移転先は白比川のやや上流北岸にあり、石碑には以下の刻字がなされている。

（表書）「桑江殿内（姓嘉手納） 金満按司」

（裏書）「此ノ御墓ハ歴代北谷城主金満按司ノ御墓ナリ

北谷城下在ノ旧御墓ガ米軍地ニ接收サレタ為同御墓ヲ此ノ地ニ遷墓スル

一九六〇年十一月十五日」

註1. 本家の墓で行う祖先供養の行事。『山川門中記録簿』によると、山川門中の元祖・山川太宗は、金満（原文では金丸）按司の三男と伝わる。

註2. 『北谷町の地名』（北谷町文化財調査報告書第24集、2006、P75）



図版 17 旧・金満按司の墓（入口）



図版 18 移転した墓にある石碑（左：表、右：裏）

4. 大川按司の墓

大川按司の墓が池グスクにあったことは前述したが、ここでもう少し詳述しておく。文献上、このことについて触れているものを下記する。

①『琉球祖先宝鑑』P141

〈被葬者〉「大川按司」とその子と思われる「大川王子」

「墓地は前原と云ふ所にありて西向となつて居る」「玉骨は前原にありて父とは異なり墓地は北向になっている」

②『祖先史説』

〈被葬者〉大里ヌルヌチの三男「三代大川按司」とその長男「与那城王子」

「大川按司と与那城王子の御墓は桑江前原にあり。」

両者に記載されている「前原」とは字桑江の小字名^{註1}であり、池グスク丘陵の北側となる。この墓が明治になって発見された経緯について、『祖先史説』はこう述べている。

「大川按司の遺骨は戦争のため（昔年の大川城の戦い）所在がわからず明治元年になって比嘉マカト及座喜味カナナ兩人が現在のお墓の前に埋葬されているのを発見しその後現在のお墓に納骨する」

この記述には「現在のお墓」が二度にわたって出てくるが、それがどこであったかは定かでない。『祖先史説』がいつ著されたものなのか今のところ分かっていないが、この記述から少なくとも明治以降に書かれたものであることは間違いなく、それまでは厨子甕等に納骨されていなかった可能性がある。1983（昭和58）年になってこの墓は平和霊園に移転されるのだが、この時の厨子甕蓋に確認された「大川按司」という新しい墨書は、この明治元年の発見・納骨以後のものと考えられる。

註1. 小字としては、少なくとも1903年から名称・範囲を変えずに現在に至っている。（『北谷町史 第一巻附録』

北谷町教育委員会、2005、P14～23）

5. 御嶽（うたき）・殿（とうん）・火神（ひぬかん）

現在北谷城内には、「東り御嶽」「西御嶽」「城内殿」「グスク火の神」が存在している。前三者は少なくとも近世には存在していたようであるが、近年の史誌において少しばかり混同が認められたので、各文献記録を抜粋掲載する²¹⁾。

A. 『琉球国由来記』1713

各処祭祀

ヨシノ嶽 北谷村 神名、テンゴノ御イベ
 城内安室崎之嶽 同村 神名、イシラゴノ御イベ
 北谷巫火神 前城村
 右三ヶ所、北谷巫崇所。

年中祭祀

北谷城内之殿 北谷村・玉代勢村
 稲二祭之時、花米九合完、五水八合完（此時、朝神・夕神、二度）神酒一完（此時、惣地頭供物、按司同所）花米九合完、五水四合完（此時、朝神夕神二度）神酒一完（玉代勢地頭）花米九合完、五水四合完（此時朝神夕神二度）伝道大屋子・津嘉山大屋子・吉味大屋子。シロマシー器、神酒壹完（麦。玉代勢村百姓中）神酒三完（麦。北谷村百姓中）供之。北谷巫ニテ祭祀也。

B. 『琉球国旧記』1730

神殿

北谷城内殿（在_二北谷邑_一）

嶽・森・威部

吉嶽（在_二北谷邑_一。神名曰_二天眞威部_一）
 城内安室崎嶽（在_二北谷邑_一。神名曰_二石良眞威部_一）

火神

北谷巫火神（在_二前城邑_一）

C. 『沖縄島諸祭神祝女類別表』田代安定、明治時代

北谷間切神拝所

北谷村 三ヶ所 東り城御嶽・イリ城御嶽・ノロ社
 玉代勢村 一ヶ所 長老前御嶽
 伝道村 一ヶ所 山ガマ御嶽

D. 『北谷町海岸・海城地名』北谷町史編集資料（中間報告書）3、1985

城内安室崎之嶽（神名イシラゴノ御イベ）

「北谷グスク内安室崎の御嶽は、岬の突端根方、南の海上にむく地点に位置してあったが、戦後米軍による道路拡幅に伴って、遷座した。この御嶽は、ニライ・カナイの遙拝所と推測されるが、御骨（ミクチ）があったとの伝承もある。」

E. 『北谷城展』北谷町教育委員会、1989

「北谷城は15世紀の前半に按司の居城から、政務を南西下の北谷番所に移転したことが知られ、三ノ郭に位置する「城内安室崎ノ嶽」を残すのみとなったと思われる。」

F. 『北谷城－北谷城第七次調査－』北谷町文化財調査報告書第12集、1992

「調査以前から三の郭には拝所が存在していたと言われており、三の郭中央部には方形にめぐら

せた石積みが露呈していた。(中略)『琉球国由来記』にみられる「城内安室崎之嶽」と考えられ、ノロが祭祀を執行した伝承地とも符合することが判明した。」

G. 『北谷町の拝所』北谷町文化財調査報告書第15集、1995

「かつての北谷グスク内には、「東り御嶽」、「西御嶽」、「殿」の三つの拝所があった。」

①東り御嶽(大村城原369番地)

「東り御嶽は戦後、キャンプ瑞慶覧内の長老山に遷座されたが、1993年12月に、北谷グスク三の郭南側に拝所が再建され、同年12月に再びグスク内に遷して祀った。(中略)この東り御嶽は『琉球国由来記』にみる「ヨシノ御嶽・神名テンゴノ御イビ」ではないかと推測される。

②西御嶽(十三香炉、大村城原383-1番地)

「戦後キャンプ瑞慶覧内に合祀されていたが、1993年12月に北谷グスク生誕丘陵部に再建された。この御嶽について『北谷町海岸・海城地名』は、『琉球国由来記』に記載される城内安室崎の御嶽・神名イシラゴノ御イベと思われる」と記す。現在、この西御嶽には、13個の香炉が安置されている。人々は、その香炉に因み、この御嶽のことを「十三神」、あるいは「十三香炉」と呼んでいる。13個の香炉について北谷ノロ殿内の家人は、十二支とそれを一つに結ぶ火又神であるという。」

③グスク火の神

「この火の神は、北谷グスク西端丘陵部、西御嶽南側ふもとに位置する。伝承によると、西御嶽に入る前には、先ずここを拝んだという。」

④殿(大村城原369番地)

「かつて、北谷グスク内に所在した「殿」も、「東り御嶽」や「西御嶽」とともに、戦後は、キャンプ瑞慶覧内の長老山に遷座したが、1993年12月に、北谷グスク三の郭南西側に再建された。この殿は『琉球国由来記』にみる「北谷城内之殿」ではないかと推測される。」

上記A～Cにおいては二つの御嶽がみられ、その片方或いは両方が北谷城内に存在するような表記となっている。Dでは、このうちの「安室崎の御嶽」が岬の突端にあって、ニライカナイを遙拝するといっているので、城内の西方(海が見える方向)に位置することを暗示していると言えよう。これを受けてかGにおいては、「東り御嶽＝ヨシノ嶽」「西御嶽＝城内安室崎之嶽」に比定している。

これに対してEでは、北谷城の廃城によって城内には「三ノ郭に位置する「城内安室崎ノ嶽」を残すのみとなった」としているが、これは根拠に乏しい話であり、15世紀前半というのも史実に合わない²¹⁾。Eの話を踏襲したFでは、三の郭に所在するものが「城内安室崎ノ嶽」となり、発掘調査で検出された石敷遺構がこれに比定されることになってしまった。

こうした混同を受け、本書においては城内に現存している拝所についてはGの内容が最も確度の高いものと判断し、これを踏襲したい。すなわち、本来東丘陵にあるべき「東り御嶽＝ヨシノ嶽」²²⁾、少し移動したが現在もグスク丘陵先端にある「西御嶽＝城内安室崎之嶽」、元々三の郭にある「殿＝城内之殿」、「西御嶽」の手前にある「グスク火の神」である。これらは昭和35年旧10月25日に長老山に移設再建されていたが、平成5年12月に揃って北谷城内に移転された。

註1. A～Cは、『北谷町史 第二巻』(北谷町役場、1986、P72～84)からの引用である。

註2. 北谷番所の設置は、尚真王による中央集権化政策であり、その年代は1523年ごろ、即ち16世紀前半とされる。『琉球の城』名嘉正八郎、1993、P162)

註3. 昭和35年まで御嶽があった場所は、現在コンクリート杭で示されている。



図版 19 西御嶽 (13の香炉がある)



図版 20 殿 (後方にあるのが東御嶽)

6. 井戸

北谷城を支えたと考えられる井戸の1つが、グスク丘陵西端崖下の塩川(ナীগー)である。現在では飲料水に適さず、専ら農業用水として利用されているが、戦前は澄み切っていて、甘くて美味しい水だった。字北谷にはいくつもの井泉があったが、美味しい豆腐を作る時だけは、わざわざここに水を汲みに来たという。数百年も前には、海水が1kmも侵入していたためにこの名が付いたというのが、湧水は真水であったという。城番(ぐすくばん)が使った根井泉(にーがー)であり、字北谷の御願をする時は、最初に拝む所である。

北谷城配下の井戸と伝えられるものに、旧字伝道の女井(いなぐー)がある。昔は周辺に家が無かったので、女官たちが水浴びや洗濯に利用されていたとされる。「ヌールガー」或いは「ヌルシンガー」とも呼ばれ、ノロがグスクに立ち入る前に身を浄めた井戸であった。現在は字北谷にあった4つの井戸と共に、長老山にて合祀されている。

戦前の字伝道にはこの他、湧水井戸が2箇所、掘井戸2箇所があったとされる^{註1}。掘井戸の1つであるチンガー(あるいはイーバシガー)は第13次調査において発見され、その際に伝道郷友会や在沖海兵隊施設技術部のご協力により復元された^{註2}。

註1. 『北谷町の地名』北谷町文化財調査報告書第24集、2006、P98～99

註2. 『北谷城』北谷町文化財調査報告書第32集、2010、P24



図版 21 北谷城崖下にある塩川(ナীগー)



図版 22 合祀されている井戸



図版 23 復元されたチンガー

7. 伝道（りんどー）村（戦前の字伝道集落）

北谷城の南麓にあり、北谷城直近の集落の1つである。元々は「北谷村」であったが、1660～70年代に既存の村の分割が行われた際に、「北谷村」「玉代勢村」「伝道村」とされ、以後これらは「北谷三箇」と総称される。

「伝道」の名の由来について『北谷村誌』は、仏寺樹昌院に求められるのではないかとする^{註1}。そうであれば、「伝道」という名称が誕生したのは17世紀中頃以降ということになるが、リンドーのドー（トー）は地形用語でもあるため、地形に関連付けて考える方が妥当である、という意見もある^{註2}。『琉球国三山由来記集』には、15世紀以前の北谷に「伝道」の名を冠する人物が複数いたことも伝えられており、この中には北谷城主金満按司の娘を母とする者もいた。

また、戦前の字伝道には、金満按司の長男家「大屋（ウフヤー、伊礼姓）」及び北谷親方系の「殿内（トンチ、伊礼姓）」が居を構えていた。

註1. 『北谷村誌』北谷村役所、1961、P189

註2. 津波高志『琉球国由来記』の村落と年中行事—北谷村と前城村の関係を中心に—『北谷町史 第三巻資料編2 民俗』上（北谷町役場、1992、P493）。この他、屋号大屋の先代・伊禮禮助氏は、「グスタから伝わる道に由来しているのではないかと、生前推定されていたそうである。

8. 前城島（めーぐすくじま）・北谷祝女殿内（ちゃたんぬんどうるち）

前城島は戦前の字北谷に含まれる地域で、伝道村同様に北谷城直近の集落である。『琉球国由来記』では北谷巫火神は前城村にあると言っていて、ここでは村名として取り扱われている。この取扱いについての解釈には諸説ある中、津波高志は「移動集落と残留集落」という視点から諸説を整理し、以下のように理解した^{註1}。

「北谷は二回移動した。最初は前城や上のアタイを含む一帯からチャタンシジ^{註2}へ、次はチャタンシジから戦前の位置にである。最初の移動の際に、一部が元の地に留まった。つまり、ムラとしては一つであるが、集落は二つに分離した。その時点で、移動しなかった集落に対しては、聖地や祭場のあるグスタに注目し、その前に位置するとの意でメーグスクジマの名が与えられた。そして、さらに北谷はチャタンシジの高地から平坦地へと移動した。その際にも、メーグスクジマは移動しなかった。」「北谷ヌルの火の神がメーグスクジマに所在するのは、それを祀るヌドゥルチ^{註3}が残留した結果なのであり、従来の研究成果からすれば、当然過ぎるほど当然のことなのである。」

このように、後に「北谷三箇」と呼ばれる北谷城南方集落の肝心となるのが、この前城島と考えるのは妥当であろう。古老からの聞き取りでも、以下のような話が語り継がれていたことが分かる。

「今婦仁から来た人、今婦仁から来たので北谷と言われている。元は今婦仁と言って塩川の前に暮らしていた。城はその人達が建てた。北谷という名は今婦仁から来たからだそうだ。それで、世の始まりは今婦仁だそうだ。」（伝道ウシ 明治42年 北谷）

今婦仁云々については解釈が難しいが、塩川（サーギー）の前というのは、やはり前城島を指すものと思われるのである。この話は北谷築



図版 24 現在の北谷祝女殿内（末吉家）

城にも言及しており、伝承とは言え非常に興味深い。

戦前、この前城島にあった祝女殿内（末吉家）は、現在北谷2丁目に移転している。入って左側にはノロ火又神が祀られており、中央の神棚の左側に今ノロ・中ノロ・先ノロのクバ扇と香炉、右側に国大碑（クニデー）^{註4}と御先金満（うさちかにまん）の香炉、右側の神棚に関帝王（かんでいんおー）の掛軸と香炉が祀られている^{註5}。

註1. 津波高志『琉球国由来記』の村落と年中行事—北谷村と前城村の関係をを中心に—『北谷町史 第三巻資料編2 民俗 上』北谷町役場、1992、P461～494

註2. 北谷発祥の地とも言われる丘陵で、屋号「石平小」「久米」「安里」「仲宗根小」「仲間」の5家族が住みついたと言われる（『宇誌北谷』金城至盛、1986）。

註3. 祝女殿内（ノロドンチ＝スルドゥンチ）の転流。

註4. 国大碑は、大里グスク、浦添グスク、今帰仁グスクを遙拝（ウトウシ）するものである（末吉家から聞取り）

註5. 『北谷町の拝所』（北谷町文化財調査報告書第15集、1995）の記述によるが、『北谷町史 第一巻附録』（北谷町教委、2005）では、「スル火又神・スルシン・カンティンオー」となっており、中央神棚の5香炉をまとめてスルシンと表現した格好となっている。『北谷町の拝所』では、井戸の項で述べた女井（いながき）の別名である「スルシンガー」について「ノロ神のカー」と括弧書きしているので、中央神棚のスルシンについてもノロ神の意であることが推定される。

9. 北谷三箇（ちゃたんさんか）と北谷田圃（ちゃたんたーぶつくわ）

北谷城の南側にあった3つの字（旧村）、北谷・玉代勢・伝道は元来1つの村であった北谷村が分割されて成立したもので、これらは総称して「北谷三箇」或いは「三村（みむら）」と呼ばれる。「チャタン、タメーシ、リンドーヤイーサンカ、ドゥーティーチ、ククルティーチ。（北谷、玉代勢、伝道は同じ三箇。体1つ。心1つ。）」^{註1}と表現されるように、殆どの行事を合同で行っていた。

北谷同村（ちゃたんどうむら）とも呼ばれた北谷は、三箇の中では最も広く人口も多かった。古島であるメーグスクジマの他、ムラウチ・カニクに分かれ、カニクが最も新興の集落とされる。ムラウチの北側には16世紀に北谷番所（ちゃたんばんじゅ）が設置され、長く北谷間切の行政を担っていたが、これは近代に至って北玉小学校となった。

玉代勢（ためーし）には、私寺である樹昌院の他、最後の北谷城主の後裔、或いは金満按司の母の後裔とされる屋号「桑江殿内（クウェードゥンチ）」（嘉手納家）があった。また、集落の南側には長老山という山がある。南陽紹弘神師（俗に北谷長老）を始めとした樹昌院の歴代住職を葬ったところとされ、北谷村の三大祭り^{註2}の1つである「長老祭」が旧暦9月15日に行われていた。

北谷三箇の分割に至る集落の拡大には、それを支える生産基盤である北谷田圃（ちゃたんたーぶつくわ）の存在が大きかったものと考えられる。戦前の北谷村は美田地帯として知られ、村内の水田の大半がここに集中していたという。北谷田圃の生産力向上には、崇禎年間（1628～1644年）の大旱魃の際の造堰工事が契機となったことが『球陽』に記載されている^{註3}。耕作奉行となった野氏糸満なる人物が、普天間川から水を引き、所々に堰を築いて旱魃を防ぐようにしたところ、以後は五穀豊稔となったという。

宇北谷の古老によると、本来の「北谷田圃」は、この糸満堰から水を引いて作った田圃を指すものであった。しかし、明治の初め頃に普天間川からの取水が不可能になったため、畑に代えてしまったという。現在、一般的にいわれている「北谷田圃」は、後の人々が宇北谷にある田圃の総称

として用いるようになったのだそうだ。美田地域としては羽地田圃と並び称される北谷田圃であるが、面積的には羽地の方が大きいにも関わらず、軽便鉄道や県道からの視覚的広がりが大きいため、北谷の方が広大であるという印象を与えたという。

註1.『北谷町の地名』北谷町文化財調査報告書第24集、2006、P78

註2.北谷村の三大祭り：①北谷長老祭、②海神祭、③野国総官祭。

註3.「巻玉」郭氏系満、普天間後河の水を引きて農田に注す（尚豊王十九、一六三九年）

10. 特攻艇秘匿壕（戦争遺跡）

太平洋戦争末期、米軍の上陸が想定された地域には、陸軍の特攻艇部隊が配置された。特攻艇とは、艇尾に200キロ爆弾を搭載して敵艦近くに投下する小型艇のことである。この基地建設部隊である「海上挺進基地第29大隊」は広島で創設され、1944年12月5日に北谷村に進駐した。北玉国民学校や民家に分宿したこの部隊には応召兵が多かったため、北谷住民からは「タンメー（※おじさんの意）部隊」と呼ばれたという。

特攻艇を秘匿するための壕が白比川兩岸（北谷城丘陵北側及び池グスク丘陵南側）に掘られることとなったが、この時村内からも200名余が防衛隊として編入され、この壕の掘削作業に従事したという。秘匿壕は高さ約2m、幅約3m、奥行き約12mである。

実際にこの秘匿壕から出撃したとの記録もあり、沖縄戦の側面を如実に示す戦争遺跡と言えるであろう。コンクリートで塞がれているものも一部にあるが、現在も当時そのままの状態が残っている。



図版 25 秘匿壕の入り口（右はコンクリートで塞がれている）

第4節 北谷城にまつわる記録・伝承

1. 北谷城の主

奄美・沖縄に伝わる古歌謡集「おもろさうし」の第15巻（1623年編纂）には、北谷の支配者を指すと考えられる「きたたんのてだ」（55・56）「きたたんの世のぬし」（57・58）を褒め称えるおもろが残されている。この北谷の支配者、すなわち北谷城の主として伝えられているのが「金満（かにまん）按司」・「大川（おおかわ）按司」という二つの名である。

『北谷村誌』では、両按司とその後裔について以下のように語る。

「金満按司の嫡流が此の大屋（伊礼家）で二男系を殿地（伊礼姓）三男系を北谷の山川という家であるといわれ、真栄城島の桑江殿地と言う家は金満按司の母の家であると言われ、当主は伝道の大屋（伊礼喜助の家）の弟が養子に行っている。金満按司の統は幾代続いたか明らかでないが大川按司に滅ぼされたと伝えられている。大川按司も谷茶大主に攻められて按司夫妻は自刃し息子は谷茶の虜にされていたが大川の旧臣村原の妻の色仕掛けによる奇計に迷うて按司の息子は奪い返され、村原の比屋夫婦を主とする旧臣等によって谷茶は討伐されて城は奪回されたとの伝説がある。此の大川按司の子孫が宇桑江の与那城（大城姓）という家で桑江の大宗家といわれている。池城の東部の北側に大川按司と称する墓があつて桑江の人々が祭祀を行っている。大川按司の次にも幾度か興亡があつたかも知れないが尚真王の中央集権の頃は北谷間切を統一していた北谷按司が城主となつていたのであると推測される。」^{註1}

これまでこの言い伝えをベースストーリーとして捉えてきたのであるが、今回の整理作業（家譜や諸書の整合検討・聞き取り調査^{註2}等）により、按司の末裔たる伊礼家（大屋）及び嘉手納家（桑江殿内）が伝える認識とは齟齬が生じていることを認識するに至った。

『北谷村誌』発行と前後して作成されたと思われるのが、嘉手納家保管の「北谷大川（金満按司）之世系図」と題された一系の系図である。題名からも分かるように「金満」と「大川」が同一視されており、内容を辿ると当家（嘉手納家）と伝道の大屋（伊礼家）は兄弟筋となっている。これに加えて、『北谷町の地名』（北谷町文化財調査報告書第24集、2006）における金満按司墓の拝みのあり方^{註3}や、『山川門中記録簿』（山川義正・義亀、1953）における見解が、意図せずともこのことを支持する格好となっている。更に『葛氏・北谷親方由来記（知念家）』（林清国、1968）では、伝道の殿内（伊礼家）の元祖が尚円王近縁の北谷親方であることを伝えており、大屋現当主も同じことを指摘している。

つまり『北谷村誌』とは異なる事実認識として、①金満按司の次男の系は、旧伝道の「殿内」ではなく、旧玉代勢の「桑江殿内」である。②この場合の金満按司は、舜天や英祖といった古い段階から北谷で続いてきた血脈ではなく、伊覇按司一門に属する。③従って、北谷のある時期における「金満按司」と「大川按司」は同一視できる。ということを挙げることができるのである。

註1. 『北谷村誌』北谷村役所、1961、389P

註2. 町内在住の屋号大屋（ウフヤー）現当主に聞き取り調査を実施した。また、町内在住の屋号桑江殿内（クウェードンチ）現当主にも聞き取り調査を実施した。

註3. 本書前節「金満按司の墓」参照。



図版 26 嘉手納家系図

2. 金満按司

初期の金満按司^{註1}については、①源為朝の子：「御母は北谷同村の奴留也。居所は同村の桑江と云う。」「母は北谷村の奴留也。在所は同村の桑江と云う家也。」(『琉球祖先宝鑑』)、②舜天の子北谷王子の長男：「(北谷王子は)北谷祝殿地に御持。」(同書)という記録がある。源為朝来琉の真偽や舜天の実在性を敢えて問うことなく考えてみると、金満按司は12～13世紀にはすでに北谷の地に存在していたことになるが、当時から北谷城を「居城」にしていたという記録は見つかっていない。

金満按司が「北谷城主」であった記録として、①宮里主「(宮里主は)北谷間切北谷城主、金満按司のもとに至り、奉公す。(中略)…宮里主が、中城城主護佐丸に奉公中、勝連按司(俗称、屋良の阿麻和利)謀反を起こし…」(『古琉球三山由来集』)、②安座名大親「北谷親方、上間大親、安座名大親、大米須里主、尚円王等は兄弟なりという。(中略、安座名大親は)北谷間切同村の城主すなわち北谷金満按司の女子、乙樽金をめとる。」(同書)がある。護佐丸や尚円王といった15世紀代の人物の頃、北谷城主は金満按司であったことになる。

註1. 『北谷城』(北谷町文化財調査報告書第1集、1984)においては、『琉球祖先宝鑑』をその出典とした上で、北谷王子が英祖王の二男であり、更にその長男が金満按司である、とする。北谷王子なる人物は、諸系図において、舜天王統だけでなく英祖王の子としても登場することは確かである。しかし、出典とする『琉球祖先宝鑑』には、「北谷王子は英祖王の子」という記載はあっても、「北谷王子は英祖王の二男」と記載は見られない。諸書において、英祖王の二男を湧川王子とする説が多い中、北谷王子を二男とする根拠は今のところ探せない。また、英祖王の子である北谷王子の子は北谷按司であった、金満按司ではない。これらのことから『北谷城』に記載される金満按司は、その兄弟関係から舜天王統に属する者であるとするのが妥当である。以上、『北谷城』における過去報告の記述はここに訂正する。

3. 大川按司

一方の大川按司については、諸書にその名が認められるものの、屋良大川按司といった「大川」を冠する別人物との混同があると考えられる場合も多く、組踊「大川敵討」の内容もこれにかなりシンクロした形となっている。しかし、後述するように池グスクに彼らの墓があったこと、北谷城が別名「大川城」と呼ばれていたこと、同じく白比川が別名「大川」と呼ばれていたことからすると、大川按司なる者が北谷城主であったことについては否定されるものではないであろう。昭和に建立された顕彰碑『大川按司之石碑』では、大川按司が尚金福王の頃(1450～1453年)の人物としている^{註1}。

桑江の与那城(大城家)はこの按司の末裔とされるが、北谷廃城は尚金福王治世より半世紀以上も後のこととされる。廃城時に城主であった按司の後裔は、前述したように大屋(伊礼家)・桑江殿内(嘉手納家)・山川(山川家)なのであるが、廃城前頃のごく近い別系に北谷城主を名乗っている者がいることが『系図及び備忘録北谷桃原屋取崎門門中(尚氏)』(梅林居士、1920)他に認められている。従って桑江の大城家もまた、伊覇按司一門に属した系統であることが考えられる。



図版 27 新設の大川按司之碑

註1. 祭神「北谷大川按司」を「尚金福王ノ御宇ノ名按司」としているが、その根拠については現段階では不明である。

4. 島津侵攻と雍肇豊・佐敷興道（ようちょうほう・さしきこうどう）

1609年、琉球国は島津氏による侵攻を受ける。この際、「雍肇豊・佐敷筑登之興道」なる人物が、すでに廃城となっていた北谷城に守備隊として入ったとされる。このことについて真栄城兼良は、「…雍肇豊佐敷筑登之興道が此の城の主持として派遣されたが、興道は四月一日首里城が陥落したと聞いて悲憤慷慨し遂に此の地で刃したと史上伝えられているが、戦況については史上明らかにされていないが口碑によれば此の付近では激戦が展開され多くの死者があつたと伝えられている。」としている^{註1}。また、『喜安日記』^{註2}に残る、薩摩軍に同行していた喜安らが牧港から浦添に向かう際、振り返ると砂辺あたりが焼き払われていたという内容について、田名真之は「砂辺は北谷の砂辺であろうから、北谷の海岸沿いに進攻したということになるか。」としている^{註3}。これらのことから、薩摩侵攻の際に北谷周辺で実際に戦闘があった可能性は十分考えられるものの、同時に「（佐敷興道が）北谷城の守備隊の責任者であったのかどうかは、位階からすると疑問であろう。」と田名は指摘している^{註4}。佐敷興道その人については「興道人と為り軀軀魁偉意氣豪邁誠忠無比深く尚寧王の寵を受く。一日王興道に向はれ御の意氣に似合はず頃常に憂ふるあるか如し如何そやと問はせ給ふ。興道子なきを憂ふる由を言口するや姪める愛妻を賜はる。」との記述が残る^{註5}。



図版28 佐敷興道の墓

註1. 『北谷村誌』北谷村役所、1961、390P

註2. 茶道をもって尚寧王に仕えた喜安入道蕃元の日記。成立年は不明であるが、尚豊王代（1621～40）か。

註3. 『北谷町史 第一巻 通史編』北谷町教育委員会、2005、286P

註4. 註3に同じ。

註5. 『歴史編纂史料（那覇ノ部）』真境名安興、1914

5. 北谷城の破壊

1820年の池城橋造り替えの際、北谷城の石垣が用いられたとされるが、『北谷村誌』では「今から百年余前に牧港橋や佐阿天橋城下の城橋（池城橋）の築造に此の城壁の石を用いたと伝わっている。」^{註1}とのことなので、かなり多くの城壁石が持ちだされたことになる。北谷城の現況に直結する大きな出来事と考えられる^{註2}。

註1. 『北谷村誌』北谷村役所、1961、390P

註2. 「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成6年3月5日）」『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教委、1994）において、戦前の北谷城の姿を記憶する富山憲一教育長（当時）の発言、「スーガーの上の方の届かない所ですが、きれいな石積みがあったような気がするんです。」というのは、戦前の石垣は現在よりも多く残っていたことを窺わせるものである。このことについては伊禮喜市氏も同様のことを聞いたことがあるとした上で、周辺住民が自宅の施設（ワワーフル等）を作造するのに持ち去った可能性を指摘している。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

北谷町では、昭和57年7月1日に「北谷町文化財保護条例」が公布・施行され、文化財の保存・活用の枠組みが整備された。翌58年度には、北谷城の保存状態と範囲を確認するために、城内初となる発掘調査が実施された。地下には遺構が良好に残存していたことから、以後、平成13年度まで保存目的のための発掘調査や地形測量等が行われた。

平成3年3月、町都市計画課は北谷城を貴重な歴史的拠点と位置付け、周辺を公園として整備し、生涯学習センターや資料館等を建設する計画を策定した（北谷城跡地整備基本計画）。左記の計画を受けて、町教育委員会は平成6年3月に「北谷城史跡整備基本構想」を策定し、これまでの発掘調査の成果と今後の整備計画を取りまとめた。しかし、平成7年度以降、本町では米軍基地（キャンプ桑江北側地区）の返還に伴う文化財調査等が急増し、これに対応すべく北谷城の発掘調査等は中断せざるを得なくなった。

平成9年3月、キャンプ桑江北側跡地から後に国の史跡となる「伊礼原遺跡」が発見され、遺跡隣接地に博物館を建設する庁議決定（平成18年11月）が行われた。また、この間に生涯学習センターが旧中央公民館跡地に建設されるなど、教育施設の整備と計画が急速に進んだ。

キャンプ桑江北側跡地の区画整理事業に伴う発掘調査も終盤に差し掛かっていた平成25年4月には、嘉手納飛行場以南の米軍基地返還計画が日米両政府により発表され、北谷城が所在するエリアは「平成31年度またはその後」に返還されることとなった。北谷城では、未だ石垣の存在が不明瞭な場所や遺跡の範囲を確定するための追加調査が必要であったため、平成26年度に調査を再開すべく米軍へ基地立入申請を行ったが認められなかった。平成27年9月28日には、日米両政府によって環境補足協定の署名がなされ、米軍基地返還前の立入調査がスムーズにいくことが期待された。しかし、返還が予定されている基地内文化財の調査の実施は非常に困難なものとなり、事実、基地立入申請から数年越しに基地立入が可能となったが、掘削行為は認めないという条件付きの許可であった。よって、基地返還が示された平成25年度以降は、既往調査の資料整理並びに現地踏査、聞き取り調査等を中心に行った。

第2節 調査体制 （基地返還が示された平成25年度以降を記載。平成31年度は令和元年度とした。）

事業主体	教 育 長	川上 啓一	（平成25～30年度）
	同	津嘉山 信行	（令和元年度）
事業総括	教 育 次 長	比嘉 良典	（平成25・26年度）
	同	佐久本 盛正	（平成27～30年度）
	同	玉那覇 修	（令和元年度）
	社会教育課長	比嘉 敬文	（平成25～27年度）
	同	池原 誠	（平成28～30年度）
	同	仲地 桃子	（令和元年度）
調査総括	文 化 係 長	米須 健	（平成25～29年度）
	同	奥那覇 武	（平成30年～令和元年度）

調査担当	主任主事	東門 研治	(平成25・26年度)
	同	松原 哲志	(平成27～令和元年度)
	同	山城 安生	(平成29年度)
	同	太田 菜摘美	(平成30～令和元年度)
	主事	太田 菜摘美	(平成29年度)
	派遣職員	土岐 耕司	(平成27～29年度)

資料整理作業員

- 平成26年度(囑託)北條真子
 平成27年度(囑託)北條真子、(臨時)比嘉一貴、平澤孝太
 平成28年度(囑託)北條真子、小渡直子、(臨時)上地 諒、米須久仁子
 平成29年度(囑託)許田栄美、照屋元子(臨時)、金城綾乃、徳本玲奈、與那覇和希
 (日々雇用)上地 諒、米須久仁子
 平成30年度(特定非常勤)上地千賀子、許田栄美、(一般職非常勤)又吉涼斗
 令和元年度(特定非常勤)上地千賀子、許田栄美、照屋元子、(一般職非常勤)又吉涼斗

調査指導及び助言(平成25年度～令和元年度間、敬称略・所属五十音順)

- 浦添市教育委員会 下地安広
 沖縄石の会 大城逸朗
 沖縄県教育庁文化財課 上地博、田場直樹、知念隆博、中山晋、羽方誠、宮城淳一、宮城仁
 沖縄県立博物館・美術館 田名真之、山本正昭
 沖縄県立埋蔵文化財センター 金城亀信、盛本勲
 沖縄国際大学 上原静、宮城弘樹
 沖縄生物倶楽部 佐藤寛之
 鹿児島国際大学 三木靖
 嘉手納町文化財調査審議会 島袋春美
 株式会社アーキジオパシフィック支店 宮平千春
 北中城村教育委員会 砂川正幸
 宜野湾市教育委員会 安次富尚金、金城りお、長濱健起、仲村健、仲村毅
 グスク研究会 當眞嗣一
 熊本大学 木下尚子、甲元眞之
 佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二
 千葉県立中央博物館 黒住耐二
 今帰仁村教育委員会 玉城靖
 文化庁 近江俊秀、綱宜田佳男、水之江和同、山下信一郎
 読谷村教育委員会 上地克哉
 琉球大学 赤嶺政信
 早稲田大学 樋泉岳二

基地立入・調査、地権者説明会等協力（平成25年度～令和元年度間、敬称略・所属五十音順）

沖縄総合事務局 金城裕子、棚原国一、照喜名朝、富澤誠、森田満、山口春樹、山崎恭平
 沖縄防衛局 伊賀上尚行、角剛志、戸田幸太郎、友利茂彦、根間丞二、花城清平、山内三智也
 株式会社バスコ沖縄支店 木村謙介、金城浩之
 玉野総合コンサルタント株式会社 千村正彦、比嘉一斗、屋宜宣晃
 在沖米海兵隊 杉山已次、與那覇政之
 内閣府 金城満、笹村典史、藤田雅史
 有限会社MUI景画 伊敷美里、大城かおる、大城貴志、新里栄太、山口洋子

開取り調査協力（平成29年度～令和元年度間、敬称略・五十音順）

伊禮喜市、伊禮喜正、嘉手納永周、久田友啓、末吉清信、末吉雪子、照屋征四郎、仲宗根光子

第3節 調査経過

1. 第1次調査以前

北谷町教育委員会による発掘調査は、1984（昭和59）年2月の第1次調査が最初となるが、北谷城の存在はそれ以前から広く認知されており、たびたびの考古的アプローチも行われていた。記録に残るものとして、以下が認められる。

1957（昭和32）年4月15日：丘陵上部のタンク施設造成中に、米人ワトソンが「貝塚」を発見。

1960（昭和35）年：多和田真淳が、上記経緯とともに「北谷城貝塚」として報告（『琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺』沖縄県文化財調査報告、1960）。

「アカジャンガー遺跡や野国貝塚で見られる平底土器と同様のものである由。」との高宮廣衛氏の見所とともに、砂丘遺跡出土する「くびれ平底」タイプの土器が採集された、との記載あり。

1979（昭和54）年：琉大考古学クラブOB（恩河尚・呉屋義勝・米田善治・照屋正賢）によるフィールド調査。

北谷城丘陵周辺において、遺物が採集できる地区が7ヶ所存在することが明らかになった。

1982（昭和57）年：北谷町教育委員会及び町史編集室による平板測量。

石垣による4つの区切りが存在し、3つの平場をもつ城郭であることが確認された。根石の保存状態は良く、城郭の規模や輪郭について把握ができた。

1983（昭和58）年：金城睦弘・中村愿によるフィールド調査。

丘陵周辺の崖下には新古の墓が82基あることを確認。戦時中の水雷艇施設も確認された。

上記の経緯を経て、グスク時代の城郭としてだけでなく、周辺の関連・付随遺跡を含めた「北谷城遺跡群」が設定されることになる。

2. 過去の調査

以下、北谷町教育委員会が関わった発掘調査・踏査について、時系列に則して記述する。

【第1次調査】

期間：1984（昭和59）年2月13～27日
担当：知念勇（調査指導）
目的：包含層の有無と広がり確認
所収：『北谷城－北谷城第一次調査－』（北谷町文化財調査報告書第1集、1984）
執筆：髙元政秀・知念勇・中村愿

【北谷城第7遺跡】

期間：1984（昭和59）年6月25日～7月14日
担当：北谷町教育委員会
目的：沖縄電力鉄塔建設に伴う緊急発掘調査
所収：『北谷城第7遺跡』（北谷町文化財調査報告書第2集、1985）
執筆：中村愿・川島由次他

【第2次調査】

期間：1984（昭和59）年10月22日～12月8日
担当：北谷町教育委員会
目的：三の曲輪における遺構確認
所収：『北谷町史第三巻下』（北谷町役場、1994）
執筆：中村愿他

【第3次調査】

期間：1985（昭和60）年5月20日～6月27日
担当：北谷町教育委員会
目的：二の曲輪における遺構の確認
所収：『北谷町史第三巻下』

【第4次調査】

期間：1987（昭和62）年2月20日～3月28日
担当：北谷町教育委員会
目的：四の曲輪の存在確認
所収：『北谷町史第三巻下』

【第5次調査】

期間：1988（昭和63）年2月1日～3月14日
担当：北谷町教育委員会
目的：舎殿南側の様相確認
所収：『北谷町史第三巻下』

【第6次調査】

期間：1990（平成2）年7月13～24日 箇所：二の曲輪出入口付近
 担当：北谷町教育委員会・熊本大学考古学研究室 面積：44㎡
 目的：出入口の有無と構造の確認
 所収：『北谷城—北谷城第六次調査—』（北谷町文化財調査報告書第11集、1991）
 執筆：大和優子・大田真由美・市川浩文・水上綾子・川俣恵・田中聡一・岩崎充宏

【第7次調査】

期間：1991（平成3）年7月8～21日 箇所：三の曲輪
 担当：北谷町教育委員会・熊本大学考古学研究室 面積：68㎡
 目的：「初期グスク」段階の遺構の把握
 所収：『北谷城—北谷城第七次調査—』（北谷町文化財調査報告書第12集、1992）
 執筆：園田淳美・秦憲二・松村真紀子・隈本直子・高橋誠・池田昌一郎・山下志保

【第8次調査】

期間：1992（平成4）年8月2日～9月30日 箇所：一の曲輪
 担当：北谷町教育委員会 面積：450㎡
 目的：最東の石垣の規模と性格の把握
 所収：『北谷町史第三巻下』

【第9次調査】

期間：1993（平成5）年8月2日～10月27日 箇所：東丘陵・一の曲輪
 担当：北谷町教育委員会・沖縄国際大学 面積：37.5㎡
 目的：東丘陵の堀切の有無確認・一の曲輪の石垣測量
 所収：『北谷城発掘調査概報—第9次発掘調査報告書—』（沖縄国際大学考古学研究室、1993）
 執筆：島袋綾野・久高健・新里貴之・大島美智子・大城多恵子・玉城美香・宮本陽一・大島誠・
 藤崎京・田場直樹

【石積み分布踏査】

期間：1993（平成5）年2月 箇所：丘陵全体
 担当：北谷町教育委員会
 所収：『北谷城史跡整備基本構想』（北谷町教委、1994）
 執筆：中村愿

【第10次調査】

期間：1994（平成6）年8月1日～10月2日 箇所：三の曲輪西端部
 担当：北谷町教育委員会・沖縄国際大学 面積：26.5㎡
 目的：三の曲輪西端部の利用の有無
 所収：『北谷城発掘調査概報—第10次発掘調査報告書—』（沖縄国際大学考古学研究室、1994）
 執筆：奥那覇政之他

【第11次調査】

期間：1995（平成7）年8月1日～9月25日
 調査担当：北谷町教育委員会・沖縄国際大学
 目的：城門の有無確認
 所収：『北谷城発掘調査概報－第11次発掘調査報告書－』（沖縄国際大学考古学研究室、1995）
 執筆：島袋かおり・宮城弘樹他

【第12次調査】

不明。

【第13次～第16次調査】

期間：1998（平成10）年2月26日～3月31日（第13次）
 1998（平成10）年4月1日～1999（平成11）年3月30日（第14次）
 1999（平成11）年7月19日～2000（平成12）年3月20日（第15次）
 2002（平成14）年3月1～20日（第16次）
 箇所：旧字伝道集落西隅 担当：北谷町教育委員会 面積：約400㎡
 目的：チンガールートの解明
 所収：『北谷城－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』（北谷町文化財調査報告書第32集、2010）
 執筆：東門研治・山城安生・松原哲志・島袋春美・上地千賀子・呉屋広江・松下孝幸・松下真実・
 黒住耐二・樋泉岳二・バリノ・サーヴェイ株式会社

【第17次調査】

期間：2018（平成30）年3月20日～2019（令和元）年12月31日の適時
 調査担当：北谷町教育委員会 箇所：丘陵全体
 目的：縄張図作成 面積：約60,000㎡

3. グリッド設定

第1次調査において、北谷城内で最初のグリッド設定が行われた。この段階では四の曲輪の存在がまだ明らかでなかったため、既知の一の曲輪～三の曲輪が平面図上に収まるように、任意の方向で2m×2mの調査区を設定した。西から東へ「1、2、3…」、北から南へ「A、B、C…」、と進むため、各グリッドの名称は北西隅の交点を基準としている。

このグリッドは第7次調査まで引き継がれたが、第8次調査から公共座標（日本測地系）に則ることとなる。調査区は5m×5mとなり、西から東へ「1、2、3…」、北から南へ「イ、ロ、ハ…」、とした。座標の基点は、X=33度850分、Y=26度800分とし、これをナ-70グリッドとした。

第13次調査では、地形に沿って南側平地から丘陵にかけ2本のトレンチを設定した。東側をno.1（5m×30m）、西側をno.2（5×18m）トレンチとし、便宜的に10m四方のグリッドを設け、南北軸にアルファベットを充て南から北へ「A、B、C…」、東西軸に算用数字を充て西から東へ「1、2、3…」とした。第13次調査で設定した調査区・グリッドにて、第16次まで調査を実施した。

本書作成に当たり、日本測地系に則って測量・図化した図面類は全て世界測地系（15系）で表した。



第15図 グリッド配置 (丘陵全体)



第16図 グリッド配置 (調査区拡大)

第4節 既往調査の成果と課題

1. 「初期グスク」ということ

15次調査以前の北谷城関連報告書を改めて通観すると、北谷城は「初期グスク」の1つとされており、その様相を解明することが、当時の考古学会においては非常に重要な命題となっていた。そこでは「グスク」の初現は12世紀前後と推定され、くびれ平底土器と野面積みの石垣が伴う可能性があると考えられていた。無論、このような学説は年々修正を重ねられていったものの、北谷城のあり方そのものについては、公式に見直すか、或いはそれを表明する機会はほとんど訪れず、時間が止まったままであったと言っても良い。

しかし第15次調査以後は、北谷城に近在する小堀原遺跡及び後兼久原遺跡の発掘調査から、間接的ではあるが、初期グスクとしての北谷城を捉え直す明確な成果が得られた。12～13世紀を盛期とする両遺跡から、石鍋としてもたらされた滑石、玉縁口縁の白磁碗、徳之島産のカムィヤキが豊富に出土し、大型の掘立柱建物や副葬品を伴う墓等も検出された。当該時期におけるこれらの明瞭な検出事例は、北谷城の過去の調査において全く確認できなかったものである。(第1章第3節参照)。北谷城のこれまでの出土遺物から、くびれ平底土器→舶来青磁という大掴みの変遷しか追えなかったが、この両者の間にはもう1つの明確な文化的画期があり、その様相がごく近くに所在する遺跡において認められたという事実は、初期グスクとは何かということに改めて大きな一石を投じたものと言えよう。

本書では、この経年による「初期グスク」に対しての概念変化を再確認・整理した上で、北谷城の解明に迫りたい。「下層から貝塚時代後期の土器が出土する＝初期グスクの可能性はある」というかつて立てられていた仮説と、それに基づいて述べられてきた調査の所見は、現時点で有意であるもの以外は排除した。従って、過去の北谷城の調査にて示された見解との齟齬が生じることは十分に考えられるが、現段階で把握し得る事象を取りまとめるように努めた。

2. 上下2枚の遺物包含層

『北谷城』(北谷町第1集、1984)において、以下のような所見が残されている。「(前略)下部のⅢ・Ⅳ・Ⅴ層はプライマリーな包含層で、安定した層序をなしていた。(中略)出土遺物は青磁が最も多く、陶器、グスク土器とつづき、第Ⅲ層を主体とするが、第Ⅳ層を挟んで第Ⅴ層にも同様なことがみとめられる。しかし、くびれ平底の底部をもつ、いわゆる後期砂丘系土器は第Ⅴ層に多く出土する傾向があり、前述のグループとは時間的差異が認められる。青磁は13世紀のものも数点あるが、14・15世紀のものが主体をなしており、本遺跡の盛行期はこの時期に位置づけることができる。16世紀ごろの遺物は皆無に等しいほど乏しく、また染付の出土もないことから、ある程度の時期を限定することができよう。(改行)丘陵上からのくびれ平底土器の出土例は今回の収獲であった。これまで中部の具志川城・勝連城や南部の具志頭城などに報告例がある。これらの遺跡には立地に類似性がみられ、グスクの成立過程を考えるうえで数少ない貴重な資料であり、生活址の把握を含めて今後の調査の課題としたい。」

ここでは、2枚の有望な遺物包含層が確認され、下層から貝塚後期土器が多く出土する傾向が認められた、ということが述べられている。しかしながら、同書の遺物の小結では、「今回の発掘をみるかぎり、第Ⅲ層と第Ⅴ層の時期差は区別がつけたい。」とも言っている。まとめて言い換えると、「時期差のつけ難い2枚の遺物包含層であるが、下層からは貝塚後期土器が多く出土する傾

向がある」とあり、これは遺物の出土状況として決して単純でなく、通常のあり方とも言えない。

これが数次の調査を経て、『北谷城』(1992、北谷町第12集)になると、「前回までの調査により、北谷城で検出された性格の明確な遺構については、その所属年代を14～15世紀ごろとする見解が得られている。また、最下層から12世紀前後のものとする「くびれ平底」の出土がある。この「くびれ平底土器」は、沖縄の先史時代(貝塚時代)から原史時代(グスク時代)への過渡期の標識となるもので、これにより本遺跡は「初期グスク」として位置付けられる。」「(第1次調査では)二の郭中央部で青磁などを出土する上層とフェンサ下層式土器を出土する下層の二枚の包含層が確認された。」「これまでの六回の調査によって、(中略)二の郭・三の郭には二枚の包含層が存在し、出土遺物から上層には14～15世紀、下層には12世紀前後との年代が与えられる。」といった見解が変わる。この変化が、未報告の調査成果に基づくものなのか、それとも単なる事実誤認かを確認することを、過去の調査を見直す上での基礎作業とした。

「後期砂丘系土器は第V層に多く出土する傾向」及び、「第III層と第V層の時期差は区別がつけがたい。」ことについて、『北谷城』(第1集)の捉え方とは異なる視点で検証を行ってみたい。III層(上層の包含層)、IV層(流入土としたもの)、V層(下層の包含層)において、①後期系土器、②グスク土器、③青磁の3種に限って、層ごとに集計した結果を下記に示す。

	後期系土器	グスク土器	青磁
III層	① 84点 (8%)	② 445点 (40%)	③ 585点 (52%)
IV層	① 5点 (12%)	② 36点 (86%)	③ 1点 (2%)
V層	① 13点 (9%)	② 120点 (81%)	③ 16点 (11%)

各層のいずれにおいても、①後期系土器はほぼ1割程度の出土であり、少なくとも集計上は、V層に偏在する傾向は認められない。後期系の土器がグスク期の層位から出土するのは、連郭グスクを作る際の大規模な切土・盛土行為により、前代の擾乱を受けたものと思われる。

②グスク土器、③青磁の出土比率でみると、III層とIV・V層との間には明瞭な違いが認められる。②の方が③よりも先行する遺物群として、これを明確な時代差とするか、或いは使用者集団の違いとするか、いずれにしてもグスクの変遷に大きく関わる事象であることは間違いない。

このグスク土器と青磁の比率変化を1つの典型として捉え、他の調査区でも同様のことが言えないか引き続き作業を行った(第3表)。これを見る限り、III層では青磁が、IV・V層では(グスク)土器が多数を占める傾向が看取できたため、この結果を踏まえて基本層序(第四章第1節参照)の大別を行った。

3. 遺構検出状況と平面・断面図

二の曲輪の調査では、石や礫を伴う何らかの痕跡(石列や礫密集箇所等)を検出したところで掘削を止めた箇所と、更に地山まで掘り進めた箇所が混在している。前者の場合はIII a層(第四章第1節参照)の掘削途中であることが多く、このIII a層を完掘する前で掘削を止め、トレンチの平面・断面図を作成することとなる。つまり、検出された痕跡の下部構造は把握されることがないまま、平面的な検出状況を基にして何らかの遺構としての意義付けを行ってきたことになる。後の本格調査を前提とした試掘の意味合いが強い調査であったため、この判断は寧ろ将来の再検証に耐え得るものとして評価できるが、今回の総括整理作業において、判断を迷わせる要因にもなった。

第3表 出土傾向比較

※この曲輪は、Ⅲ層から100点以上の遺物が出土しているグリッドに限って集計。

Ⅲ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
M93	3	4	151	2%	3%	08%
O98	1	9	317	0%	3%	93%
P100	15	123	18	10%	7%	12%
R99	0	0	114	0%	0%	100%
R100	0	0	113	0%	0%	100%
V101	7	34	158	4%	17%	79%

二の曲輪全体

Ⅲ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
	26	176	871	2%	16%	82%

※三の曲輪は、場所を小分けに設定。

T-レンチ(城内之殿附近)

Ⅲ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
T82	87	147	139	23%	3%	37%
T83	33	109	95	14%	46%	40%
T84	10	15	46	14%	21%	65%
計	130	271	280	19%	40%	41%

7次北区

Ⅲ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
W55	0	1	36	0%	2%	97%
W58	3	5	27	9%	14%	73%
X65	3	9	15	11%	33%	56%
X86	0	1	49	0%	7%	93%
Y85	2	5	31	5%	13%	82%
Y86	2	14	23	5%	36%	59%
Y87	1	10	15	4%	35%	59%
Z85	1	2	7	10%	20%	70%
Z86	0	0	8	0%	0%	100%
A85	3	1	18	14%	5%	81%
A86	1	3	11	7%	20%	73%
計	16	51	240	5%	17%	78%

7次南区

Ⅲ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
C85	0	0	4	0%	0%	100%
C86	0	1	8	0%	11%	89%
C87	0	2	16	0%	11%	89%
D85	3	0	3	50%	0%	50%
D86	0	0	1	0%	0%	100%
計	3	3	32	8%	8%	84%

B'81

Ⅲ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
	1	8	38	2%	17%	81%

W77(大規模整地)

1層

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
	8	38	13	14%	62%	23%

Ⅳ層(概ね基本層序のⅢb・Ⅲd層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
O98	2	0	0	100%	0%	0%
P100	2	8	0	20%	80%	0%

V101	0	3	0	0%	100%	0%
------	---	---	---	----	------	----

Ⅳ層(概ね基本層序のⅢb・Ⅲd層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
	4	11	0	27%	73%	0%

Ⅳ層(概ね基本層序のⅢb・Ⅲd層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
T82	0	0	0	0%	0%	0%
T83	43	23	16	52%	28%	20%
計	43	23	16	52%	28%	20%

Ⅴ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
O98	8	18	1	24%	72%	4%

V101	15	10	19	34%	23%	43%
------	----	----	----	-----	-----	-----

Ⅴ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
	21	28	20	30%	41%	29%

Ⅴ層(概ね基本層序のⅢa層)

	くびれ	グスク	青	くびれ	グスク	青
T82	1	2	0	33%	67%	0%

例えば、二の曲輪で検出された石列及び礫集中箇所は、「舎殿」の基壇部分とされた。このことについて『北谷城』（北谷町第12集、1992）では、「切石や石灰岩礫の石列と、その北東側に石を混ぜて突き固めた一段高い平場が検出され、舎殿址の存在が明らかになった。」¹¹²と記述されたが、当該トレンチの断面図を見る限りではⅢa層に礫が混じるばかりで、「石を混ぜて突き固めた」ような様相は看取できない。北谷城にとって中枢となる施設が二の曲輪にあったことは間違いないことと思われるが、このⅢa層途中で我々が目にするのは破却の結果であり、それと密接に関連するのがⅢa層と考えられる。つまり過去の知見は、「破却後」と「構築時」が混在した状況にあると言わざるを得ないのである。また、掘削が地山まで到達している場合は、掘削を止めるべき礫検出がなかったか、あっても有意ではないと判断された箇所となっている。

これらの区別が明確でないままに作成された壁面の土層図にも、また難解なものが多く含まれていた。実線で表現された最下の分層線が、実際の層離面ではなく、単に掘削を止めた線である箇所があり、その線の下部情報も欠落していることが多かった。

4. 「石積み」「積石」「石垣」

北谷グスク丘陵上に露出・残存する「石積み」「積石」の範囲は、これまで複数回にわたって図化され、報告書等に掲載されてきた。複数の郭を跨ぐ広範囲のものだけでも、以下が挙げられる。

① 第1集-第2図「北谷城遺跡群」(P3)

石積みらしきものが黒塗りで範囲が示されている。

② 第1集-第3図「北谷城平板測量図(1/1500)」(P7)

石積み縁辺らしきものが模式図で示されている。

③ 第1集-第4図「北谷城の一・二の曲輪とグリット設定図(1/800)」(P7)

「積石」範囲が手書きで示されている。

④ 第2集-第2図「北谷城遺跡群」(P4)

石積みらしきものが黒塗りで範囲が示されている。①と同様である。

⑤ 第2集-第3図「北谷城と発掘区(1/2000)」(P5)

石積みらしきものがドットで範囲が示されている。

⑥ 第11集-第2図「北谷グスク周辺の地形図」(P5)

石積みらしきものが黒塗りで範囲が示されている。

⑦ 第11集-第3図「地形測量図」(P6)

「石積み」がドットで範囲が示されている。

⑧ 第11集-図版

⑦を基にしながらも、「石積み」と「自然岩盤」が異なるドットで範囲が示され、根石は実際で示されている。

⑨ 第12集-第2図「地形測量図」(P6・7)

「石積み」がドットで範囲が示されている。⑦に類似するが、同様ではない。

⑩ 第12集-図版

⑨を基にしながらも、「石積み」と「自然岩盤」が同じドット範囲で示されている。

⑪ 『北谷城史跡整備基本構想』『現況測量図』他

「石積み」が3種の方法で表記される。これには発掘調査で地中から検出された「根石」や「石列」も含まれている。

これらの報告書における北谷城の「石垣」についての記述を見てみると、第1集では「野面積み」とし、第11集・第12集では「野面積みと切石積みを併用した石垣」としているものの、前者では石垣自体の調査は行われておらず、後者における発掘調査では切石の根石と、中込を検出したのみであった。他の調査でも、野面積みと切石積みが併用されている石垣、或いは単独で野面積みを呈する石垣の所在を明確に提示している図面類は認められなかった^{註1}。

これまでに作成された平面図では、「石積み」「積石」「石垣」が客観的且つ明確に区別できるものはない。しかも、野面積みに該当する石垣は、はっきりと特定しにくい状況である。

北谷城の石垣の破壊については、第1章第3節・第4節でも述べたように、1820年の池城橋等を木造から石造に建造する際に転用されたことが知られている。北谷城の切石が重用されたものと推察されるが、これらを撤去する際に、中込の中小礫はすぐ近くに廃棄されたと思われる。結果としてこの中込礫群は、緻密には当時の状況を保ってはいないものの、中込の位置として残存しているであろうし、石垣が高ければ高いほど、また厚ければ厚いほど、その量も多くなることは十分に予想できる。従って堤状の礫群の範囲を記録することは、元の石垣の方向や規模を推定することができるであろう。

註1. 第6次・第7次の調査を担当された熊本大学白木原和美教授（北谷城史跡基本構想策定審議会委員）の発言として、以下の記録が残されている。「三の郭から二の郭の石積みを見ると、石垣の面があるような、無いような、はじめから積まれていたような、後からじゃまになるから積みあげて整理したような、簡単にはわからない状況を示しております。（平成4年3月13日）」（『北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成4年12月17日）』『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教委、1994）。

第Ⅲ章 その他の調査

第Ⅱ章第1節で述べたように、近年北谷城で実施したのは現地踏査のみである。本章では、発掘調査以外の調査（踏査調査やその実施のために米軍から課せられた生物調査、聞き取り調査）の成果について記述する。

第1節 踏査調査

1. 縄張調査

基地立入りが可能となった平成30年3月から令和元年12月にかけて適宜実施した。調査の際は、地形図（第17図）を基に現在地を特定し、丘陵麓から丘陵上部（曲輪内）へ至る動線に留意しながら、崖や斜面、石垣などの位置をレーザー測距計（SNDWAY SW-1000A 3-1000 m）を用いて地形図に落とし込んだ（第18図）。現在地特定の測量を行っていないため図の精度は高くない。また、上記調査とは別に「北谷城調査審議委員会」の富真嗣一委員や「北谷町文化財調査審議委員会」の大城逸朗委員に現地確認を適宜依頼した。その際には、他の町職員またはコンサルタントが同行している。

調査では、これまで把握されている4つの曲輪以外に大小の平場を認めた。一の曲輪、二の曲輪の北側では、野面の石垣や岩盤によって囲まれた細長い2つの平場（第18図A・B）を認め、四の曲輪北側では、二の曲輪に匹敵する広さを持つ平場（C）を確認した。後者は、後述する状況から三の曲輪へと登る懸門の存在が想定される。その他、数m程度の小さな平場（D）が数か所見られた。

丘陵東側では人為的な加工痕（第18図内の写真1、2）が残る石灰岩の岩盤があり、同南側では不自然な割れ面（3）を持つ岩盤を確認した。

丘陵上部へ至るルートとして、南側では落石や岩盤がせり出した箇所（4）などの登り易い地形を数か所確認し、北側では樹根を利用して登れる崖地（5）を1か所で認めた。しかし、過去においても同様な状況であったと限らないため、時間の経過に左右されにくい地形や人工的な地形に着目しルートを推測した。その結果、曲輪内へ至る3つのルートが想定された。

（1）南側ルート、（2）東側ルート、（3）北側ルート

（1）は、丘陵南側の平坦地から四の曲輪（城門跡）へ至るルートである。地籍図では、麓の伝道集落から丘陵へ延びる里道が確認でき（第18図内の矢印①）、この里道は北谷ノロ殿内によって「ノロ道」と称されている。現況においても、麓から四の曲輪の城門跡を経て三の曲輪の拝所「殿」まで行くことが可能である。里道以外にも数か所登れる箇所があるが、いずれも丘陵中腹で東西に延びる通路状の平坦面に至り、同平坦面を西或いは東へ向かうと城門跡に至る。なお、現況と地籍図は若干のズレがあり、現況の里道や拝所が地籍図よりも全体的に西側に位置している。本書刊行時点でこれらの里道は利用されていないが、基地返還後には再びノロ道等が利用できることを北谷ノロ殿内は期待されている。

（2）は、北谷城の東側に延びる尾根伝いに一の曲輪へ至るルートである（②）。戦後米軍によって尾根は分断されたが、開削以前は尾根伝いに一の曲輪まで行くことが可能であったと推測される（巻首図版2）。

（3）は、懸門（けんもん）の存在が想定されるルートである（③）。懸門の存在を推測する根拠となった現況を列挙する。

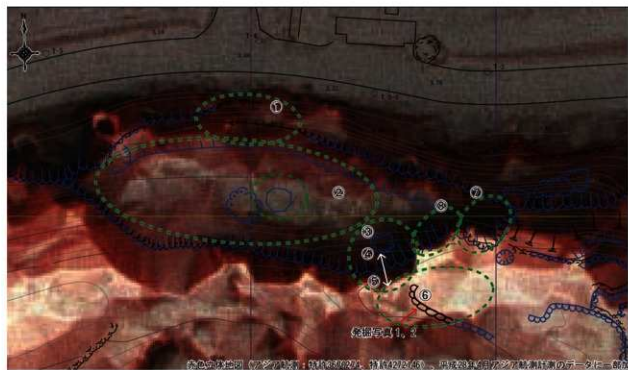
1. 北谷城の北側は、海への玄関口となる白比川の河口部に面している。



第 17 图 北谷城地形图



第18図 縄張り図と地形図の重ね図



凡例
 地影図コンター
 北谷町作成中編成り図
 背景：彩色立体地図
 番号：写真位置

0 50m

①小さい平場



②広い平場



⑤抉れ崖上



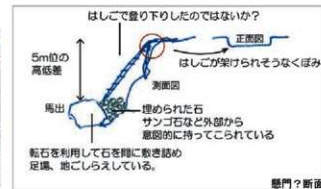
⑥三の曲輪北西部石積



③落石と崖の隙間



④崖線の抉れ



⑦金満控司の墓



⑧佐敷興道の墓



過去の発掘調査時の様子



発掘写真1
 墓体のマウンド縁辺部に切石が並ぶ

発掘写真2
 マウンド縁辺部の切石

2. 河口部から斜面を登り、小さな平場（第20図内の写真①）を経て二の曲輪に匹敵する広さを持つ平場へ出る（②）。
3. ②の広い平場に南面する崖に近接して2m大の落石がある。
4. 落石と崖の隙間には、サンゴ礫や石灰岩礫によって斜面を成している（③）。
5. 斜面を利用すると落石の上部に容易に登れる。
6. 落石上部にはサンゴ礫や石灰岩礫があり、平坦面を成す（④）。
7. 落石直上、比高差約5mの崖縁には抉れが認められる（④）。
8. 抉れの崖上は丘陵上で最も幅の狭い地形で、小さな平場と石積が見られる（⑤）。
9. 平場と石積に近接して三の曲輪北西部が広がる（⑥）。
10. 三の曲輪北西部からは、元染付や銭貨、鉄鏃、石弾、炭化穀物、被熱陶磁器等が出土している。これらの状況から、6、7に梯子を立て掛けることによって成立する、白比川から三の曲輪北西部へ物資を運搬するルート、更には、これらの物資を求めて侵攻する外敵を防ぐ施設の存在が推測される。

その他、梯子によって成立しうるルートとして、四の曲輪西端からのルートが挙げられる。当該地は、袋状に奥まり且つノッチ状を呈し（第18図内の矢印④）、懸門に適した地形と考えられる。崖下には、北谷城で唯一確認されている井戸「スーガー（塩川）」が位置している。

金満按司の墓（第20図 写真⑦）

北谷町文化財調査報告書第1集（1984年）の中で、北谷城遺跡群の一つとして紹介されており、北谷城の按司であった「金満按司」の墓であるとの伝承が残る。北谷城の所在する丘陵の北側斜面地に位置し、北に開口する自然洞穴を利用して、令和元年11月13日に「北谷城調査審議委員会」の當眞嗣一委員と町職員2名、コンサルタントが参加し、現地踏査を実施した。開口部の両側に土塁が残存しているが、互い違いになるように配置されており、墓口を塞ぐ目的ではなく、入口として利用するために築かれた可能性がある。

佐敷興道の墓（第20図 写真⑧）

前述の金満按司の墓と同じく、北谷町文化財調査報告書第1集（1984年）の中で、北谷城遺跡群の一つとして紹介している。『北谷村誌』（1961年）の中で、慶長14年（1609年）の薩摩による琉球侵攻の際、北谷城に派遣された佐敷興道という武将の墓であるとの伝承が記されている。北谷城の所在する丘陵の北側斜面地に所在し、金満按司の墓より西側に位置する。西に開口した自然洞穴を利用し、開口部下部を石垣で塞ぐ。金満按司の墓とあわせて令和元年11月13日に現地踏査を行った。開口部に設けられた穴は墓口としては狭小なため、墓口としての機能を形骸化、あるいは墓ではなく別の機能を持つ遺構である可能性にも留意する必要がある。

2. 宿道確認調査

地元の古老によって「シガイビラ」と呼ばれる古道の位置と現況確認を目的として、令和元年8月22日に実施した。調査対象地は、北谷城東側の分断された尾根より東側にある丘陵である。シガイビラの位置特定には、地籍図上の里道の座標値を割り出してGPSに入力し、当該座標値を目標に踏査する手法を取った。調査には、「北谷城調査審議委員会」の常員副一委員と町職員2名、コンサルタントが参加した。

現況は地形変化が著しく、かつて丘陵上部にあった採石場から排石されたと思われる大量の層石の他、廃タイヤやごみが捨てられており、シガイビラを確認することはできなかった。



第21図 踏査位置

※图中数字は下記写真番号に対応



①白比川の渡り口



②クワズイモ等が繁茂している



③石灰岩のがれきが多く転がっている



④廃タイヤ等のゴミが散乱している

図版29 踏査状況写真

第 2 節 宿道（道筋）の検討

第 3 章第 1 節 2 で述べた「シガイピラ」は、令和元年 5 月の「北谷城調査審議委員会」において旧地形等から推察する北谷城周辺の状況についての項目のひとつとして、歴史的道筋の想定・検討を行った道である。城周辺で白比川（方言名はシルヒージャー・シラヒージャー）を渡る方向に向く 4 本の道筋（第 22 図）のうちの③である。①は最も海側を通る道で北谷城の西端に位置する塩川（スーガー：湧水）近くを通る近世の宿道（西海道）²¹と考えられている。②は東御嶽の南側を経て丘陵上に至り急峻な地形を下る道、③は「シガイピラ」と称される道、④は最も東側の比較的緩やかな地形を通る道である。②の西側は米軍基地整備により丘陵が開削されている（第 1 章 2 節図版 10 参照）。

「シガイピラ」は、北谷城麓の伝道集落内から伸びる道筋で見ると集落南東側に位置したリンドーガーと殿内のあたりから湧水「ヤマガー」（現存しない）を経て丘陵北側斜面を下り白比川の川岸（左岸）に至る道筋の丘陵部の道を称しており、名称の「シガイ」の語源については不明である。

『北谷町の地名』による③「シガイピラ」の特徴²²

- 1) 「リンドー（伝道）からジャーガルヤードゥイ（謝荷屋取）へ行く時にも利用していた。」
- 2) 「ヒラ（筆者加筆：坂）の部分は石畳となっていた。」
- 3) 「馬は通れたが馬車は通れなかった。」
- 4) 「シライガーラを渡るところは石を積んで浅瀬にしてあった。」（筆者加筆：白比川の上流側で 2 つに分かれるあたりを称する「シライガーラ」についての話である。）
- 5) 「シガイピラを通り、シルヒージャーを渡っていった。シルヒージャーに橋はかかっていたが、浅いところは、30 cm ぐらいの深さしかなかったので渡ることができた。」

『沖縄県歴史の道調査報告書』で述べられている宿道の特徴には、橋の無い場所で川を渡る方法に「川底に石を積み上げて堰を造ったもので、浅い水の流れを渡るようになっている」²³、飛び石²⁴、「馬ごといかで渡る」²⁵などがあり、坂道には石が敷かれた石畳道の特徴がある。「シガイピラ」の特徴で述べた「石を積んで」や石畳が何時頃のものか定かでないが、宿道に見られる要素があり第 23 図に示した白比川を渡り丘陵谷間を進むと石畳道の「ジャーガルピラ」に至ることができる道である。

②・④の道筋に同様な話は無く①の道筋では、「現白比橋の下あたりに飛び石があり、橋が架かる前は、その飛び石を渡っていた。その中でも大きい石をナーカヌーグワーと言う。（後略）」²⁶、「（前略）1 m 四方ぐらいの飛び石がいくつかあり（後略）」²⁷の話があるが「橋が架かる前」が何時頃の話か定かでない、白比川には木橋を石橋へ改修した池城橋が 1821 年に架設されており、話者が言う飛び石が橋脚部分の可能性も考えられ性格は判然としない。

この「シガイピラ」につながる南北の道筋を検討した第 23 図は、以下の情報を重ねたものである。

- (1) 「大正 8 年陸地測量部作成地形図」を用い、同図に示されている小道を赤点線とした。
- (2) 水分補給ポイントの水源として、本町内の「湧水」と「川」、水の流れも示す情報でもある「水田」は田里修氏が「（前略）後に見る宿道の性格から山沿いのルートが古いものと考え、あるいは正保絵図のルートは、この道ではなかったかと現在考える。すなわち、海沿いのルートは、17 世紀後半から 18 世紀において開発された地帯であつたらうと考えられること（大山のターブクワ・北谷ターブクワ等）と、それ故、古い時代においては未だ一部は干潟の帯ではなかったかと思われるからである。」²⁸と述べられている干潟、または後背湿地の範囲を想定する要

素とした。

- (3) 『沖縄県歴史の道調査報告書』（註4・8）で図示された道筋、そのうちの普天間川（佐阿天川）以北の西海道を「大正8年陸地測量部作成地形図」の県道とする形で割愛している。
- (4) 『平成29年度：西普天間住宅地区 重要文化財保存実施計画更新業務』（2018）^{註9}で検討された道筋をトレースし加筆した。
- (5) 地形情報の追加として、玉代勢から普天間川の範囲に「昭和23年米軍作成地形図」の20フィートの等高線をトレースし加筆した。
- (6) 川については「昭和23年米軍作成地形図」、「北谷町の地名」に示された情報をトレースし合わせて加筆した。

以上の情報を宜野湾間切の安仁屋^{註10}を見下ろせる喜友名城と白比川上流の水田近くにあるヒニグスクを含めた北谷町城周辺までを検討範囲とした。赤点線で示した小道（三尺＝宿道の原道に該当する。）の道筋をもとに、湧水や川の給水ポイント、丘陵谷間、図示を割愛した遺跡（グスク時代）を考慮し想定ルートを設定した。



第22図 北谷城周辺の道筋^{註11}

※本図は（株）バスコのバスカルウェブのデータに加筆した。

註1：田名真之 第四章第五節「宿道と橋梁の整備」339頁『北谷町史』第1巻通史編 北谷町教育委員会 平成17年(2005年)。

註2：名嘉順一ほか『北谷町の地名』北谷町文化財調査報告書第24集 北谷町教育委員会 2006年。1)～4)は96頁、5)は95頁。

註3：『沖縄県歴史の道調査報告書IV－島尻方言海道－』沖縄県教育委員会 1987年の41・42頁。

註4：『沖縄県歴史の道調査報告書VI－国頭方東海道・他－』沖縄県教育委員会 1989年の28・24頁。

註5：註3に同じ。16頁。

註6：註2に同じ。170頁。

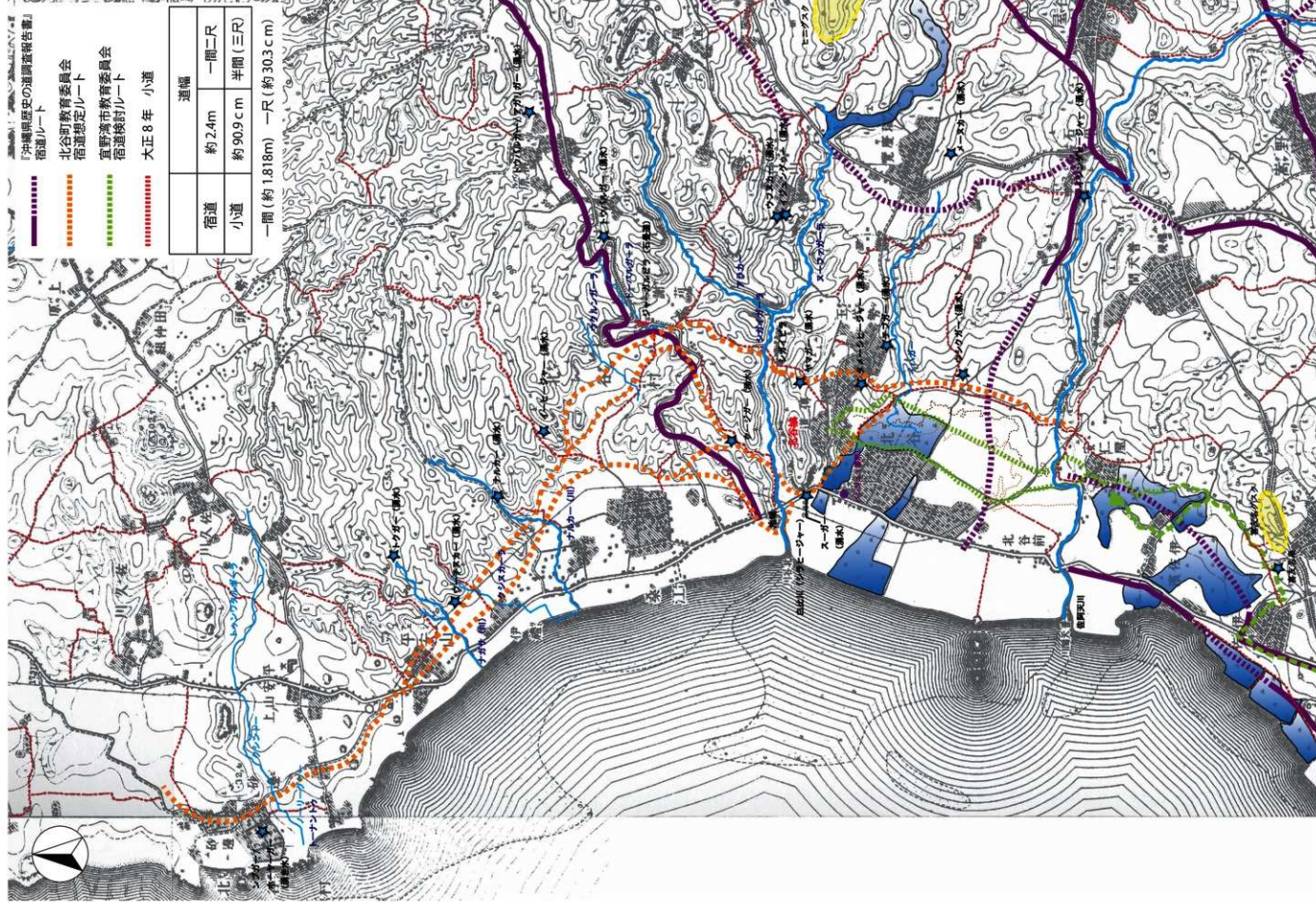
註7：註2。175頁。

註8：『沖縄県歴史の道調査報告書－国頭・中頭方西海道(1)・糸ガ岳参詣道－』沖縄県教育委員会 昭和60年(1985年)14頁。

註9：『平成29年度：西普天間住宅地区 重要文化財保存実施計画更新業務』平成30年(2018)31・35頁。

註10：『あきな(安仁屋)』1671年に宜野湾間切へ分割。『北谷町史』第1巻附録 北谷町教育委員会 平成17年(2005)76頁。

註11：令和元年度 第1回北谷城調査審議委員会 「現況航空写真と歴史情報重ね図」有限公司。MU1景画像作成資料を参照し作成。



第23図 宿道（道筋）の想定

第3節 聞き取り調査

本節では、戦前の三箇字出身の方やその子供を対象に行った聞き取り調査内容を紹介する。中には今後の発掘調査の際に参考になる話もあった。なお、話者の氏名は非掲載とし、本書への掲載が適切ではないと判断したものについては割愛した。聞き取り内容の文章中にある()については、記録者(松原哲志)による補足メモを示す。

【話者A】

調査日：平成29年8月16日(水)

○北谷城の石垣について

- ・石垣はきれいに残っていて、豚小屋に使われた。
- ・北谷城の石垣が池城橋に使われたかはわからない。

○金満按司の墓について

- ・旧墓(北谷城の北崖)に骨はなく、くず骨だけだった(厨子の有無には言及していない)。
- ・くず骨を拾い集めて、現在の墓(東角又原の丘陵)に収めた。
- ・現墓を移転するなら、旧墓の場所に戻したい。
- ・旧墓にあった骨は、那覇の安謝の人が、自分達に関係があるからと言って持っていった。その後、安謝の人の身内で良くないことが続いたので、10年か20年後に旧墓に返された。

○グスク周辺のこと

- ・伝道の由来は、北谷城からの伝達の道だからと聞いた。
- ・アマクガマ(場所不明)にフェーレーが隠れていた。
- ・鉄塔の下に、7つ墓と呼ばれる墓があった。
- ・グスクの北側に水を引くとき、陶器を重ねて管にしたものを使った。
- ・グスクの東側は、伝染病で死んだ人を葬った場所で、ドクロがたくさんあり怖い場所だった。

○戦前のある屋敷について

- ・屋敷は500坪位あった。
- ・戦前まで、瓦屋根の倉庫があった。
- ・瓦は庶民が使ってはいけないものだったので、首里から来た役人に取り壊された。
- ・「龍風飛来」の焼き版を大村御殿からもらった。
- ・焼き版を見せると首里からきた役人も納得し、倉庫を壊すことは無くなった。
- ・焼き版は沖繩戦で失われた。
- ・戦時中、北谷城にいた日本軍が屋敷地内に食糧を備蓄していたため、空撮で米軍に目をつけられたのか、屋敷内に爆弾を落とされた。

○厨子

- ・平成3(1991)年、一族の墓にある厨子の銘書の判読を北谷町の職員T氏に依頼した。
- ・1世から18世までの厨子が確認された(確認できた最古の銘書は康熙十六年(1677)であった)。

○その他

- ・大村御殿からもらった倉は三箇字に寄贈した。
- ・白比川兩岸にあったガマで、おぼあが旅人に芋とお茶をあげて白比川に石を運ばせ川幅を狭くし開墾した。その土地を(王府に)献上しようとしたが、あなたの土地だと言われた。

【話者B】

調査日：平成30年3月13日（火）

○ある家に伝わる系図について

- ・系図は2年に1度首里に収めていた。
- ・戦前は系図があったが、(戦争により)なくなった。
- ・現在の系図は林清国が戦後に作った。内容について真偽のほどは定かではない。

○金満按司の墓について

- ・北谷城にあった金満按司の墓は戦後米軍(の命)によって移動させられた。
- ・金満按司の墓をもとあった場所(北谷城)に戻せるなら戻したい。
- ・北谷城以外の場所に金満按司の墓が移転されたかは判らない。

○金満按司のトートーメーについて

- ・金満按司のトートーメー(位牌)が残っている(1～3代目が北谷金満按司、4代目が若按司、5代目が北谷大主、6代目が北谷親雲上、7代目が大桑江親雲上、8代目嘉手納親雲上)。

○墓について

- ・(当家の)墓は、伝道集落最西の家よりも西側(北谷城の南側)に3つ並んであった。
- ・向かって一番左側(西側)は崖崩れで墓の門が崩れていた。

【話者C】

調査日：平成30年7月31日（火）10:20～11:30

○金満按司の墓について

- ・按司墓は、北谷城のところからウフヤ山(現在の金満按司の墓がある丘陵)に遷した。
- ・シガイ(北谷城よりも東側にある丘陵)に金満按司の墓があるというのは聞いたことがない。

○チンガー(井戸)

- ・基地の造成により場所が判らなくなっていたが、北谷町の職員による開取りや地形図を基に行った発掘調査で発見された。
- ・発掘によって発見されたチンガーは埋め戻さず整備した。

○ヤマガマー

- ・集落内の地面が盛り上がったところにガマがあった。ガマの中には遺骨もあったようだ。
- ・戦後軍の撤去命令を受けたため(拝所)ヤマガマーを私有地に遷し、その後長老山に合祀した。
- ・シーサーモの下にもガマがあり、遺骨があったようだ。

○北谷城の東側丘陵について

- ・射撃場を作るため丘陵を削平した(排土で白比川の左岸を造成した)。
- ・シガイ(北谷城の東側にあたる丘陵)には首里へ至る道“シガイビラ”が(南北へ)通っていた。
- ・シガイビラの南側はヤマガマーバルと言い、ナーシルダー(苗代田)があった。
- ・ヤマガマーバルにはカー(井戸)があった。
- ・シガイビラの北側はシルヒージャーバルと言った。
- ・大雨時ヤマガマーバルではカーの水が濁ったが、シルヒージャーバルではヤマガマーバルから(シガイビラの麓から)綺麗な水が流れてきた。

○ヤマガマーバルの墓

- ・米軍が施設を作る際に町教育委員会が発掘調査をした(山川原古墓群)。

- ・(施設建設に伴い) 墓を基地外に移転することになったが、中には身寄りのない人の墓もあった。
- ・身寄りのない人の墓庭にはなぜか農具や食器が置かれていたので、それを売って得たお金で葬式を挙げた。
- ・遺骨は町の無縁墓に納骨した。

○白比川について

- ・200～300年前、ある家の先祖のおばあが白比川の南側(左岸)を開墾した。
- ・開墾時に出た石を、近くを通る人に白比川まで運ばせ(川を埋めて)土地を作った。
- ・おばあは、朝は山内から首里へ向かう人にウフヤ山でおかゆを提供して石を運んでもらい、夕は首里から山内に向かう人にシガイピラでおかゆを提供して石を運んでもらった。
- ・白比川を埋めてできた土地を琉球王府に献上しようとしたところ、おばあが作った土地だからと言ってそのまま自分のものとなった。

○その他

- ・山川原に米軍のDDT部隊というのがあった。
- ・DDT部隊の影響か、白比川沿いの田んぼの稲が枯れる被害があった。
- ・蚊を殺す薬を撒くセスナがハンビーにあった。

【話者D】

調査日：A平成31年1月21日(月)、B令和元年6月17日(月)、

○集落の井戸について

- ・旧歴の8月11日に拝む。
- ・カーシン※の隣に前城島のビジュルがあった。北谷のとは別。ビジュルは旧歴の8月8日に拝む。(※ニーガンガー・スーガー・ウスクガー【北谷】、タメーシヒージャー【玉代勢】、エーガー・ヤマガーガー・チンガー【伝導】の7つの井戸、いわゆる「ナナタキカーシン」)
- ・屋敷内の5つ並んだ香炉は、向かって一番右が「クンデーヒ(国大碑)」、その隣が「ウサチカニマン(御先金満)」、残りは「先ノロ・中ノロ・今ノロ(順不明)」

○クラシンガーについて

- ・(塩川のある場所の)一番奥まっている所にクラシンガーと呼ばれる井戸があった。
- ・クラシンガーとは、暗いところにある井戸という意味
- ・現在、クラシンガーがどこにあるかは分からないが、すくいあげをしてほしいと言っている
- ・グスクには井戸が無いからクラシンガーを使っていた。
- ・クラシンガーは、13世紀の井戸。移動して今のスーガーになった。

○西御嶽(イリウタキ)・十三香炉について

- ・(沖縄戦の時は)西御嶽に兵隊が登って周囲を監視していた。
- ・西御嶽の周辺を囲っている切石は、戦後長老山から移設するときに作った。
- ・十三香炉は、ニーウコーロと干支を足して13。
- ・昔は、グスク火又神は下の方(四の曲輪)にあり、西御嶽へ登る階段があった。

○東御嶽(アガリウタキ)について

- ・現在(三の曲輪)にある東御嶽は、戦前にもっと東側にあった。
- ・東御嶽の前にカガンガーがあった。戦前には水が出なくなっていた。

○ヌール（祝女）に関すること

- ・戦前は、ヌールヤーの側にヌールヒヌカンがあった。
- ・ヌールヒヌカンは1間に半間ぐらいで瓦葺だった。
- ・伝道集落から城へ登るノロ道は誰もが使っていた。
- ・ノロ道は馬で登ることができた。
- ・前の馬に先導者が乗り、後ろの馬に神様が乗って（乗り手無し）グスクに登った。
- ・グスクの東（樹昌院付近）と西（スーガー付近）にヌール墓があった。

【話者 E】

調査日：令和元年7月5日（金）

○丘陵（グスク）を縦断する道について

- ・白比川に掛かった（現コンクリートの）橋から川を渡り、畑を越えてグスクに登る道があった。
- ・道を下ると瑞慶覧の道（県道130号線）沿いにある憲兵隊事務所の東側に出た。
- ・道幅は人が通れる程度で馬車は通れなかった。
- ・道にイシグー（砂利）は無く、ただの土のようだった。

○その他

- ・樹昌院は戦災で失われた。
- ・屋号「大照屋小」に特攻隊が駐屯していた。
- ・壕は田んぼのようだった。
- ・スーガーの周辺を（石で）囲っていた。

【話者 F】

調査日：令和元年8月21日（水）

○北谷の海岸について

- ・米軍が海砂を取って（浚渫して）、玉代勢の水田を埋めた。
- ・（浚渫後）大型の船が停泊できるようになった。

【話者 G】

調査日：令和元年9月2日（月）

○北谷城周辺の様子について

- ・米軍が浚渫時の砂を畑に埋めて平坦にした。塩害があった。
- ・伊佐浜闘争に関わっていた瀬長亀次郎の仮事務所が北谷城の麓にあった。

第 4 節 植物相調査

佐藤寛之・藤 彰矩

はじめに

北谷町は沖縄島の中部、東シナ海を臨む西海岸沿いに位置し、面積およそ 13.93km³、人口は 2.8 万人程度の町である（第 24 図）。その南部、国道 58 号と県道 130 号線が交差する付近にある北谷城（以下グスク）は城時代より按司の住居や御嶽などに利用されてきた石灰岩主体の岩体である（北谷町教育委員会、2015）。

グスク周辺は終戦後アメリカ軍に接収され、現在では在沖アメリカ米軍海兵隊のキャンプ瑞慶覧の敷地となっており一般の立ち入りが制限されている。このため北谷町の都市化による開発の手を逃れ、都市化の進んだ北谷町の中で中心部にあるにもかかわらずまとまった規模の緑地として認識することの出来る場所となっている。

今回北谷町教育委員会より、北谷城の植物相に関し現地調査を行う機会を得た。そこでこの北谷城において 2018 年 6 月から 2019 年 1 月の期間中、計 14 回の現地踏査を行ない出現する維管束植物の記録を行なった。

方法

調査地の概要

調査を行った北谷城（以下、グスク）は東西方向におよそ 500m 程度の長軸、南北に 30-100m ほどの幅を持つ上部を琉球石灰岩、下部にクチャや沖積層といった岩石で出来た紡錘形の岩体である（第 24 図）。グスクの西側を国道 58 号、南側を県道 130 号線が走っている。北側には米軍の資材置き場（戦後埋め立てて造成）をはさんで白比川と呼ばれる河川が流れている。グスク南側、県道 130 号線との間には防衛施設局の建物と芝生草場が、北側の白比川との間には倉庫施設と芝生草場、数本の排水溝が認められる。

グスクは大きく西側と東側に別れており、最高標高は西側中央部の場所で 44.7m である（北谷町教育委員会、2015）。西側最上部は平坦な地形が広がっており、一の曲輪、二の曲輪、三の曲輪、四の曲輪と石垣で区切られており、三の曲輪に殿（とうん）と呼ばれる拝所、四の曲輪先端部には西の御嶽（いりのうたき）、グスクの火の神（ヒヌカン）と呼ばれる拝所がそれぞれおかれている。グスク東側には現在給水タンクが設置されておりそこにつながる舗装道路が接続されている。現在グスクへの参拝はこの給水タンク横から伸びる参道を通して西の御嶽までのアクセスをすることが可能となっている。

現地踏査は 2 人一組を基本とし、調査地をくまなく歩き、そこで確認出来る植物を全て記録していくという方法で 2018 年 6 月から 2019 年 1 月までに計 14 回実施した（第 4 表）。踏査はグスクをくまなく歩き、出現した植物を目視記録するとともに、現地では同定の難しい個体や生育の証拠用などに適宜標本を採集した。また、標本の同定や分布記録の補完を目的として各調査で得られた出現種を可能な限り生育地状況と共にデジタルカメラで撮影した。科の分類体系は、シダ植物については Tagwa and Iwatsuki (1972)、種子植物については新 Engler (Melchior and Werdermann, 1964) に原則基づく日本野生植物草本編 I-III (佐竹ら, 1989) に従った。種の取り扱いと学名については、BG Plants (米倉・梶田, 2003) に基本的に従ったが、最近の取り扱いなど検討を経て一部これと異なる見解を採用したのものもある。

結果と考察

1. 植生の概要

[城周への参道沿い]

北谷グスクは、一部を除けば、地表を琉球石灰岩覆われた島状の岩体である。グスクの中央を縦断するように整備された小道沿いは人の行き来を反映し、シロノセンダングサやノカラムシといった市街地に氾濫する草本類が多く見られる。その小道の両脇には植栽されたと思われるクロツグが並んでいる。クロツグは他にもグスクに何本も残っている集落からのアクセス用の小道跡沿いにも並んで生育しているため、現在は使われなくなっているものの、集落-グスク間の通路を確認する一つの目安とすることが出来る。

[一の曲輪、二の曲輪、三の曲輪、四の曲輪]

西側のグスク上部に広がるこの比較的平坦な地域はガジュマルやハマイヌビワ、クスノハガシワなどの陽樹のあまり太くない個体が多く見られる比較的若い林環境が広がっている。ヤブニッケイやタブノキといった陰樹傾向のある樹種は実生や低木層においてよく観察されるが径の大きな株はあまり観察されなかった。この地域は過去から現在にかけて古くはグスクや押所としての利用、戦前から続いた畑作、さらにその後の発掘作業などで何度も遷移がリセットされているように見える。こうした改変を受けたことを反映してか、鳥散布様式の種子を有するゲッキツやシマグワ、アカギといった樹種が多く見られる。四の曲輪周辺では、殿付近にピロウやクロツグの他サキシマスオウやバンジロウ、シークワサーなど植栽された樹種が、突き当たりやその南側斜面地の一部には戦後作付けされていた農作物の名残と考えられるキャッサバなどが認められるほか、平坦地にカジノキが高密度で生育している。

[給水タンク周辺、東側斜面]

タンク周辺はガジュマルやハマイヌビワの陽樹が多く見られる比較的若い林環境が広がっている。この地域も戦前から戦後にかけて畑として利用されていたようで上部平坦地から南川斜面にかけて段々畑的に斜面を階段状にした地形が認められる。畑地形の畦（外枠）部分に緑肥用に植えられていたと思われるソテツがかるうじて残っている。畑地だったと思われる平坦地にはクスノハガシワやゲッキツ、ハマイヌビワなどの陽樹が密生している。東端上部は石灰岩のむき出しの地形でサルカメキンの様な石灰岩崖地に優先する様な樹種が確認出来る。タンクの周辺は芝刈りが高頻度で行なわれており、都市部でもよく見かけるシロノセンダングサなどのほか、コトブキギク、ツルセンダングサ、ソバガラウリクサなどの外来種が多く確認出来る。

[南側斜面地]

南側斜面地の真ん中付近にピロウの大きな株が列状に生育している。その周囲にクロツグが上部にある四の曲輪にかけて点々と生育が認められることからここが接収前には集落から押所への入り口の一つとされていたことが伺える。岩体の一番下側は沖積層の砂岩が露頭として確認出来、砂岩を彫り込むようにして作成された墓地や塚のような構造物が複数確認出来る。斜面下側はガジュマルやハマイヌビワが高木層を形成しているところにノアサガオやツルヒヨドリ、タイワンクズ、エビヅルなどの蔓性植物が樹冠を覆い、林床部は一面ボトスによって埋め尽くされている。この辺りもガジュマルやハマイヌビワ、クスノハガシワ、オオバギのような陽樹が林の高木層を占めている。

[北側崖地]

北側の崖地は、かつては白比川の右岸から続く湿地敵環境だったと考えられる草地と隣接している。グスクの中でも一番急峻な地形である。崖の最下部（現在の草地との際のあたり）には旧軍の特攻艇の艇庫が沖積層砂岩を彫り込んで複数構築されているのを見ることができ、その前面をノカラムシヤススキ、シロノセンダングサ、クワズイモなどが藪を形成している。崖地はかなり急峻な地形を形成しており、ガジュマル、ハマイヌビワ、ショウベンノキ、クスノハガシワなどが斜面に張り出すように樹冠を形成している。下部に近い場所ではベンガルヤハズカズラ、ツルヒヨドリ、ボトス、モミジヒルガオなどの蔓生植物が密生し樹冠部を覆っている。崖部は石灰岩の切れ目が高度に沿って何段か確認出来、そのうち崖最上部より一段下の切れ目に按司の墓とされる洞穴が確認出来る。この墓を始めとして石灰岩の切れ目状に幾つかの洞穴が存在し、墓として利用されていたようである。石灰岩のむき出しの洞穴周辺部にはホウピカンジュ、オオイワヒトデ、ホラカグマなどのシダ類が確認出来る。崖に沿ってこうした洞穴や墓にアクセス出来る小道が存在し、その周辺にはクロツグ、フクギが植えられている。小道沿いはグスクの他の場所より薄暗く、リュウキュウガキやリュウキュウモクセイ、ヤブニッケイなどの樹種が低木層によく出現している。この崖沿いにはほかに個体数は少ないもののシマフジバカマ、ヤナギバモクマオ、ハマオモト、キダチハマグルマのような河川や海岸の周辺で確認出来る樹種が生育しているのを確認出来る。また、石灰岩のむき出しの露頭にはアマミツタが繁茂している場所も確認出来る。

[周辺草地]

グスク周辺は現在平坦な草地となっており、防衛施設局や海兵隊倉庫群などが隣接している。草地は頻りに草刈り作業が行われているため遷移は進むこと無く、イヌシバを中心としたイネ科草本草地が維持されている。イヌシバ以外にも北側-東側の草地にはオキナワミチシバの高密度な生育が認められる。こうした背丈の低い草地にトゲミトゲキツネノボタン、コケセンボンギクモドキ、ツルセンダングサといった園芸からの逸出種や外来種の多くを確認することが出来る。北側草地に何本か設置されている排水路にはイソヤマテンツキやクグテンツキといった湿地性の植物が認められる。

2. 航空写真との比較

1945年撮影の米軍の偵察用の航空写真（沖縄公文書館所蔵）を図版30に示す。現在の一の曲輪、二の曲輪、三の曲輪、四の曲輪周辺から南側斜面直にかけては裸地、もしくは畑地のように古くから利用が続いていたことが伺える。このことは今回の植生調査からも畑地作物や緑肥植物の生き残りと考えられるキャッサバやツツの存在や植生が比較的若い陽樹環境であることと矛盾しない。

四の曲輪の先端部分から北側の崖地、東側斜面先端部にかけての白比川に面した急峻な地形の部分がこの時代からすでに林環境の確認出来る地域として存在していたことが分かる。開発などで失われやすい森林環境であるが崖地形という利用しにくい環境だったため、現在まで長く継続して存続した理由であろう。こちらも今回の調査で多くのシダ植物やヤナギバモクマオやハマオモトの様な河川、海岸沿いの植物など湿度環境が安定していることが必要な種の多くがこの地域から記録されていることもこうした長い間の林環境が維持されていたことと無関係ではないであろう。

3. 植物相

現地踏査の際の目視記録と採集した標本の同定の結果、85科214属256種の野生維管束植物が確認された。植物相の詳細は植物目録として第5表にまとめた。種数256種という確認種数は水納島(0.47km²)で確認された植物相(258種)(立石ら、1996;佐藤ら、2017)と沖繩島周辺の小規模島嶼で確認されるのと同程度の多様性を示している。

グスクの植物相に関しては既存の資料がないためほとんど全ての植物種が初記録となるが、北側崖地で確認されたアマミツタ、シマフジバカマ、ヤナギバモクマオ、周辺草地のイソヤマテンツキなどの湿生植物は現在の北谷町では生育条件に合う環境が都市化の影響で激減しており、本町において希少な環境が残されていることを示しているといえる。ほかにもツルヒヨドリ、ツルセンダン、グサ、ソバガラウリクサ、トゲミトゲキツネノボタン、コケセンボンギクモドキのような近年急速に沖繩周辺で分布を拡大させている草本類も周辺草地を中心に確認することが出来た。

4. グスクの植物相について

北谷町の自然植生は、町内公園数ヶ所および新川、白比川の左岸崖地に点在している。グスクはその河口部に位置し、周囲は米軍基地や住宅地に囲まれ街中に残された貴重な緑地となっている。調査の結果いわゆる希少種は確認できなかったが、特にグスク北部に見られる崖地形では湿度環境も安定しており、かつて中南部にあった植生環境を残しているといえる。

グスク上部や南側斜面に広がっていたかつての畑地や裸地であった場所も奇しくも米軍による採取ということでその後大きな改変を受けないうまま70年以上が経過したことで、陽樹林へ遷移の進行が確認出来る貴重な場所となっている。佐藤ら(2013)は中部の石灰岩地の環境下では表土を造成などのために切削してしまうことで生育出来る樹種が限定されてしまい、遷移の進行が大幅に遅れることを指摘しているが、このグスクに残されたこうした遷移の途中の環境では今後時間の経過と共に植生が豊かになっていくことが期待される。このように履歴のはっきりした回復植生をモニタリング出来る場所は少なく、今後も定期的に経過を観察することが地域の自然を啓蒙していく上でも重要となると思われる。

またこのグスクは城としての機能だけでなく、古くから按司の住居や拝所、御嶽などの地域の聖域として維持されてきた。こうした歴史的な位置づけなども合わせて考慮すれば、今後この地域の保存活用法としては1.整備などを行なう場合でも皆伐のような植生をリセットしてしまう様な大規模改変は避け表土を維持すること、2.植栽として新たな外来植物を導入することの制限など、現在回復中、醸成中の植生環境を必要以上に伐開すること無く次世代に受け継いでいくことが植生的には重要で、250種を超える様な植物種を一ヶ所で確認出来る様な種多様性の高い場所は今後さらに減少していくと予想される中、将来的に周辺の市町村にも誇れる北谷町のかげがえの無い財産となると思われる。

(引用文献)

北谷町教育委員会。2015。北谷城2015年度版。北谷町教育委員会。14pp。

初島住彦・天野鉄夫、1958。沖繩植物目録。琉球大学研究普及部、那覇、191pp。

初島住彦・宮城康一、1974。伊江島の植物。沖繩自然研究会、沖繩海岸国定公園拡張候補地学術調査報告 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島、沖繩県、p.57-76。

- 池原直樹, 2010. 沖縄編, 日本帰化植物写真図鑑第 2 巻, 植村修二ら (編), 全国農村教育協会, 東京, p. 391-469.
- 岩槻邦男, 1992. 日本の野生植物シダ篇. 平凡社, 東京, 311 pp.
- Melchior, H. and E. Werdermann (eds.), 1964. A. Engler's Syllabus der Pflanzenfamilien. 2Bd., 12. Aufl. Verlag Gebrüder Borntraeger, Berlin.
- 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 2006. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編-レッドデータおきなわ-. 沖縄県文化環境部自然保護課, 510 pp.
- 佐藤寛之・天野正晴・中村元紀・宮城直樹・立石庸一, 2013. 琉球大学千原キャンパスに於ける維管束植物相の現状. 琉球大学教育学部紀要 (82): 211-227.
- 佐藤寛之, 立石庸一, 齋藤由紀子, 天野正晴, 中村元紀, 杉山巳次, 2017. 沖縄県の離島へき地における自然教育のための基礎資料の充実 IX: うるま市蔵地島の植物相. 琉球大学教育学部紀要 (91): 53-73.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・互理俊次・富成忠夫, 1981-82. 日本の野生植物草本篇 I-III. 平凡社, 東京, 305 pp., 318 pp., 259 pp.
- 佐竹義輔・原寛・互理俊次・富成忠夫, 1989. 日本の野生植物木本篇 I-II. 平凡社, 東京, 321 pp., 305 pp.
- Tagawa, M. and K. Iwatsuki, 1972. Families and genera of the pteridophytes known from Thailand. Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ. Biol., 5: 67-88.
- 立石庸一・宮城直樹・脇田悟寿, 2011. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実 IV 本部町水納島の植物相と注目すべき植物. 琉球大学教育学部紀要 (78): 139-156.
- 多和田真淳, 1966. 琉球植物見聞録 (IV). 沖縄生物学会誌, 3: 27-35.
- 寺崎留吉, 1938. 続日本植物図譜. 春陽堂, 東京, figs. 2101-4000.
- Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159 pp.
- 山田守, 2015. ヨシススキ (*Saccharum arundinaceum* Retz.). 日本緑化学会誌, 41(2): 352.
- 米倉倉司・梶田忠, 2003-17. BG Plants 和名-学名インデックス (Ylist). http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html (2017.1.28 ~ 4.6 参照).

第 4 表 調査実施日

2018.06.15, 2018.08.07, 2018.08.14, 2018.08.15, 2018.08.17, 2018.08.22, 2018.09.03,
2018.09.04, 2018.09.19, 2018.11.16, 2018.11.22, 2018.12.04, 2019.01.10, 2019.01.18

第 5 表. 北谷城植物目録

今回の現地調査で確認した維管束植物を以下のリストに挙げる。

科以上の分類と科の配列は、日本の野生植物シダ篇 (岩槻, 1992)、同草本篇 I-III (佐竹ら, 1981-82)、同木本篇 I-II (佐竹ら, 1989) に依った。種の取り扱いと学名については GB Plants (米倉・梶田, 2003-) に基本的に従ったが、一部これとは異なる見解を採用したものもある。



第 24 图 北谷町地形图



图版 30 北谷城周边航空写真 (1945年)

第5表 北谷城植生リスト-1

		科名	属名	学名
シダ植物 Monophytes		タマシダ科	<i>Nephrolepidaceae</i>	ホウビカンシダ <i>Nephrolepis biserrata</i>
		ゼンマイ科	<i>Osmundaceae</i>	シロヤマゼンマイ <i>Osmunda banksiiifolia</i>
		カニクサ科	<i>Lygodiaceae</i>	カニクサ <i>Lygodium japonicum</i>
		イノモトソウ科	<i>Pteridaceae</i>	ホウライシダ <i>Adiantum capillus</i>
		イノモトソウ科	<i>Pteridaceae</i>	ホコシダ <i>Pteris ensiformis</i>
		イノモトソウ科	<i>Pteridaceae</i>	モエシダ <i>Pteris vittata</i>
		イノモトソウ科	<i>Pteridaceae</i>	リュウキュウイノモトソウ <i>Pteris ryukyuensis</i>
		チャセンシダ科	<i>Asplenaceae</i>	シマオオタニワタリ <i>Asplenium nidus</i>
		ヒメシダ科	<i>Thelypteridaceae</i>	ホシダ <i>Thelypteris acuminata</i>
		シシジマ科	<i>Blechnaceae</i>	ハチジョウカグマ <i>Woodwardia prolifera</i>
		オシダ科	<i>Dryopteridaceae</i>	オニヤブソテツ <i>Cyatium falcatum</i>
		オシダ科	<i>Dryopteridaceae</i>	ホウカグマ <i>Ctenitis eatonii</i>
		ウラボシ科	<i>Polypodiaceae</i>	オオイワヒトデ <i>Leptochilus neopothifolius</i>
		ウラボシ科	<i>Polypodiaceae</i>	オキナクウラボシ <i>Microrum scolopendria</i>
	ウラボシ科	<i>Polypodiaceae</i>	ヤリノコクリハラン <i>Leptochilus wrightii</i>	
	ウラボシ科	<i>Polypodiaceae</i>	リュウキュウマメヅタ <i>Lemmaphyllum microphyllum</i>	
裸子植物 Gymnosperms		ソテツ科	<i>Cycadaceae</i>	ソテツ <i>Cycas revoluta</i>
		ヤブキ科	<i>Podocarpaceae</i>	イヌマキ <i>Podocarpus macrophyllus</i>
基部被子植物群 Basal Angiosperms	基部被子植物群 Basal Angiosperms	マツブサ科	<i>Schizandraceae</i>	リュウキュウサネカズラ <i>Kadsura matsudae</i>
		コショウ科	<i>Piperaceae</i>	サダシウ <i>peperomia japonica</i>
		コショウ科	<i>Piperaceae</i>	フクウカズラ <i>Piper kadsura</i>
		ウマズスグサ科	<i>Aristolochiaceae</i>	リュウキュウウマノズサ <i>Aristolochia lukuiensis</i>
		クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	クスノキ <i>Cinnamomum camphora</i>
		クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	シロダモ <i>Neolitsea sericea</i>
		クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	タブノキ <i>Macclisia thunbergii</i>
		クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	ハマビワ <i>Litsea japonica</i>
		クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	ヤブニッケイ <i>Cinnamomum yabunikkei</i>
		クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	アメリカサトイモ <i>Xanthosoma sagittifolium</i>
	サトイモ科	<i>Araceae</i>	クワズイモ <i>Alocasia odora</i>	
	サトイモ科	<i>Araceae</i>	ボトス (オウゴンカズラ) <i>Epipremnum aureum</i>	
	サトイモ科	<i>Araceae</i>	リュウキュウハンダ <i>Typhonium blumei</i>	
	サルトリイバラ科	<i>Smilacaceae</i>	カラスキバヤンキライ <i>Heterosmilax japonica</i>	
	サルトリイバラ科	<i>Smilacaceae</i>	サツサンクラライ <i>Smilax bracteata</i>	
	サルトリイバラ科	<i>Smilacaceae</i>	ハマサルトリイバラ <i>Smilax sebouana</i>	
	アヤメ科	<i>Iridaceae</i>	ニワゼキショウ <i>Sisyrinchium rosulatum</i>	
	ムフボラン科 (田ススキノキ科含む)	<i>Asphodelaceae</i> (旧 <i>Xanthorrhoeaceae</i> 群)	キキョウラン <i>Dianella ensifolia</i>	
	ヒガンバナ科	<i>Amaryllidaceae</i>	ハマオモト <i>Crinum asiaticum</i>	
	キジカクシ科	<i>Asparagaceae</i>	ツルハセシネンシボク <i>Cordyline fruticosa</i>	
	キジカクシ科	<i>Asparagaceae</i>	ノシラン <i>Ophiopogon jaburan</i>	
	ヤシ科	<i>Arecaceae</i>	クロツグ <i>Arenga ryukyuensis</i>	
	ヤシ科	<i>Arecaceae</i>	ビロウ <i>Livistona chinensis</i>	
	ツクシ科	<i>Commelinaceae</i>	シマツクシ <i>Commelina diffusa</i>	
	ツクシ科	<i>Commelinaceae</i>	ハカタカウサコ <i>Tradescantia zebrina</i>	
	ツクシ科	<i>Commelinaceae</i>	ホウライツクシ <i>Commelina auriculata</i>	
	ショウワ科	<i>Zingiberaceae</i>	ゲッコウ <i>Alpinia zerumbet</i>	
単子葉類 Monocots	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	イボヤツリ <i>Cyperus polystachyos</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	イソヤマトンツキ <i>Fimbristylis sinibidii</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	オホヒメグサ <i>Cyperus kyllinga</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	クダヤツリ <i>Cyperus compressus</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	クダシラツキ <i>Fimbristylis dichotoma</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	コゴメグサ <i>Carex brunea</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	シュロガヤツリ <i>Cyperus alternifolius</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	テンツキ <i>Fimbristylis dichotoma</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	ヒザグサ <i>Carex wahuensis</i>	
	カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	ヒメグサ <i>Cyperus brevifolius</i>	
	トウワルモドキ科	<i>Flagellariaceae</i>	トウワルモドキ <i>Flagellaria indica</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	アキメヒシバ <i>Digitaria violascens</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	アメリカスズメノヒエ <i>Paspalum notatum</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	イタキガヤ <i>Pogonatherum crinitum</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	イトアザガヤ <i>Leptochloa panicosa</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	イヌビエ <i>Echinochloa crus-galli</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	イヌメヒシバ <i>Digitaria setigera</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	エダウチチヂミザ <i>Oplismenus compositus</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	エノコログサ <i>Setaria viridis</i>	
	イネ科	<i>Poaceae</i>	オガサワラスズメノヒエ <i>Paspalum conjugatum</i>	
イネ科	<i>Poaceae</i>	オキナクミシバ <i>Chrysopogon aciculatus</i>		

第5表 北谷城植生リスト-2

		科名	種名	学名
単子葉類 Monocots	イネ科	Poaceae	オニササガヤ	<i>Dichanthum aristatum</i>
	イネ科	Poaceae	オヒシバ	<i>Eleusine indica</i>
	イネ科	Poaceae	カモノハシガヤ	<i>Bothriochloa lichenum</i>
	イネ科	Poaceae	コブナグサ	<i>Arthraxon hispidus</i>
	イネ科	Poaceae	シバ	<i>Zizania japonica</i>
	イネ科	Poaceae	シマズメノヒユ	<i>Paspalum dilatatum</i>
	イネ科	Poaceae	スズメノカタビラ	<i>Poa annua</i>
	イネ科	Poaceae	スズメノヒユ	<i>Paspalum thunbergii</i>
	イネ科	Poaceae	セイユノヨシ (セイタカヨシ)	<i>Phragmites karka</i>
	イネ科	Poaceae	セイバンモロコシ	<i>Sorghum prostratum</i>
	イネ科	Poaceae	タケモ (モウソウチク?)	<i>Phyllostachys edulis?</i>
	イネ科	Poaceae	タツノツメガヤ	<i>Dactyloctenium aegyptium</i>
	イネ科	Poaceae	ダンチク	<i>Arundo donax</i>
	イネ科	Poaceae	チガヤ	<i>Imperata cylindrica</i>
	イネ科	Poaceae	ニクキモドキ	<i>Urochloa paspaloides</i>
	イネ科	Poaceae	ヌカゼクサ	<i>Eragrostis amabilis</i>
	イネ科	Poaceae	ネズミノオ	<i>Sporobolus fertilis</i>
	イネ科	Poaceae	ハイキビ	<i>Panicum repens</i>
	イネ科	Poaceae	ハマエノコロ	<i>Setaria verticillata</i>
	イネ科	Poaceae	ヒメアザミ	<i>Microstegium vimineum</i>
	イネ科	Poaceae	ヒメアザミ	<i>Capillipedium parviflorum</i>
	イネ科	Poaceae	ムラサキノキ	<i>Eriochloa procerca</i>
	イネ科	Poaceae	ムラサキヒゲシバ	<i>Chloris barbata</i>
	イネ科	Poaceae	モンツクガヤ	<i>Bothriochloa bladii</i>
	イネ科	Poaceae	リュウキュウチク	<i>Pleioloblastus linearis</i>
	ツツラフジ科	Menispermaceae	コウシュウケヤク	<i>Cocculus laurifolius</i>
	ツツラフジ科	Menispermaceae	ハスノハカズラ	<i>Stephania japonica</i>
キンボウグサ科	Ranunculaceae	オキナウセンシソウ	<i>Clematis anconata</i>	
キンボウグサ科	Ranunculaceae	シマクツネノボタン	<i>Ranunculus sieboldii</i>	
キンボウグサ科	Ranunculaceae	トゲミノクツネノボタン	<i>Ranunculus muricatus</i>	
キンボウグサ科	Ranunculaceae	リュウキュウボタンヅル	<i>Clematis javana</i>	
マンサナグサ科	Hamamelidaceae	イスノキ	<i>Distylium racemosum</i>	
ブドウ科	Vitaceae	アマミヅタ	<i>Parthenocissus heterophylla</i>	
ブドウ科	Vitaceae	チリノハブドウ	<i>Ampelopsis glandulosa</i>	
ブドウ科	Vitaceae	ミツバビンボウカズラ	<i>Tetrasigma formosanum</i>	
ブドウ科	Vitaceae	ヤブガラシ	<i>Cayratia japonica</i>	
マメ科	Fabaceae	オカミズオジギソウ	<i>Neptunia triquetra</i>	
マメ科	Fabaceae	オジギソウ	<i>Mimosa pudica</i>	
マメ科	Fabaceae	クロヨナ	<i>Pongamia pinnata</i>	
マメ科	Fabaceae	ササハギ	<i>Alysicarpus vaginalis</i>	
マメ科	Fabaceae	シナノクズ	<i>Pueraria lobata</i>	
マメ科	Fabaceae	タイワンクズ	<i>Pueraria montana</i>	
マメ科	Fabaceae	タカナタマメ	<i>Canavalia cathartica</i>	
マメ科	Fabaceae	タチバナハハギ	<i>Desmodium incanum</i>	
マメ科	Fabaceae	タンキリマメ	<i>Rhynchosia volubilis</i>	
マメ科	Fabaceae	ハイマキエハギ	<i>Desmodium triflorum</i>	
マメ科	Fabaceae	ハカマズラ	<i>Bauhinia japonica</i>	
バラ科	Rosaceae	(オキナグサ) シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis indica</i>	
バラ科	Rosaceae	カンヒザクラ	<i>Cercos campanulata</i>	
バラ科	Rosaceae	ナラシロイチゴ	<i>Rubus parviflorus</i>	
バラ科	Rosaceae	ヘビイチゴ	<i>Potentilla hebligho</i>	
グミ科	Elaeagnaceae	ツルグミ	<i>Elaeagnus glabra</i>	
クロウメモドキ科	Rhamnaceae	ヒメタマセナギ	<i>Berchemia linata</i>	
クロウメモドキ科	Rhamnaceae	リュウキュウクロウメモドキ	<i>Rhamnus likuensis</i>	
アザミ科	Campanulaceae	クワノハエノキ	<i>Celtis birmensis</i>	
クワ科	Moraceae	アコウ	<i>Ficus superba</i>	
クワ科	Moraceae	イスビワ	<i>Ficus erecta</i>	
クワ科	Moraceae	オオイタビ	<i>Ficus pumila</i>	
クワ科	Moraceae	オオハイヌビワ	<i>Ficus septica</i>	
クワ科	Moraceae	カジノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i>	
クワ科	Moraceae	ガジュマル	<i>Ficus microcarpa</i>	
クワ科	Moraceae	シマダウ	<i>Morus australis</i>	
クワ科	Moraceae	ハマイヌビワ	<i>Ficus virgata</i>	
クワ科	Moraceae	ホソバムクイヌビワ	<i>Ficus ampelae</i>	
イラクサ科	Urticaceae	ノカラムシ	<i>Boehmeria nivea</i>	
イラクサ科	Urticaceae	ヤナギハモクマオ	<i>Boehmeria densiflora</i>	
イラクサ科	Urticaceae	ヤンバルワルマオ	<i>Pouzolzia zeylanica</i>	

第5表 北谷城植生リスト-3

		科名	種名	学名
		Cucurbitaceae	オキナワズメウリ	<i>Diplocyclos palmatus</i>
		Celastraceae	テリハツルメドキ	<i>Celastrus punctatus</i>
		Celastraceae	ハリツルマサキ	<i>Gymnosporia diversifolia</i>
		Celastraceae	マサキ	<i>Euonymus japonicus</i>
		Oxalidaceae	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>
		Oxalidaceae	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis debilis</i>
		Elaeocarpaceae	ホルトノキ	<i>Elaeocarpus zollingeri</i>
		Cuscutaceae	ツゲド	<i>Garcinia subelliptica</i>
		Cuscutaceae	テリハボク	<i>Calophyllum inophyllum</i>
		Putranjivaceae	ツゲドキ	<i>Putranjiva matumurae</i>
		Violaceae	リュウキュウコスミレ	<i>Viola yedoensis</i>
		Euphorbiaceae	ヒマ	<i>Ricinus communis L.</i>
		Euphorbiaceae	オオバギ	<i>Macaranga tanarius</i>
		Euphorbiaceae	キャッサバ	<i>Manihot esculenta</i>
		Euphorbiaceae	クスノハシソウ	<i>Mallotus philippensis</i>
		Euphorbiaceae	グミドキ	<i>Croton casarilloides</i>
		Euphorbiaceae	クロトン	<i>Codiaeum variegatum</i>
		Euphorbiaceae	シマニシキソウ	<i>Chamaesyce hita</i>
		Euphorbiaceae	ハイニンキソウ	<i>Chamaesyce prostrata</i>
		Phyllanthaceae	アカギ	<i>Bischofia javanica</i>
		Phyllanthaceae	オオシマコパンノキ	<i>Breynia officinalis</i>
		Phyllanthaceae	キダチコミカンソウ	<i>Phyllanthus amarus</i>
		Phyllanthaceae	コミカンソウ	<i>Phyllanthus lepidocarpus</i>
		Phyllanthaceae	シマヤマヒハツ (コウトウヤマヒハツ)	<i>Antidesma pentandrum</i>
		Geraniaceae	アメリカワフロ	<i>Geranium carolinianum</i>
		Onagraceae	コマゴイダサ	<i>Oenothera laciniata</i>
		Myrtaceae	ハンジロウ	<i>Psidium guajava</i>
		Staphyleaceae	シラベンノキ	<i>Turpinia formosana</i>
		Anacardiaceae	ハゼノキ	<i>Toxicodendron succedaneum</i>
		Sapindaceae	クスノハエデ	<i>Acer itanum</i>
		Rutaceae	サルカサミカン	<i>Toddalia asiatica</i>
		Rutaceae	アワダン	<i>Melicope triphylla</i>
		Rutaceae	グッキツ	<i>Murraya paniculata</i>
		Rutaceae	シークワーサー (ヒラミレモン)	<i>Citrus depressa</i>
		Simarubaceae	ニガキ	<i>Picrasma quassioides</i>
		Maliaceae	アオギリ	<i>Firmiana simplex</i>
		Maliaceae	エノキアオイ	<i>Malvestrum coromandelianum</i>
		Maliaceae	サネシマスオウノキ	<i>Hibertia littoralis</i>
		Maliaceae	オオハマボク	<i>Hibiscus bilaceus</i>
		Casparaceae	ギョウキ	<i>Crateva formosensis</i>
		Brassicaceae	イズガラシ	<i>Rorippa indica</i>
		Polygonaceae	イヌタデ	<i>Persicaria longiseta</i>
		Polygonaceae	ツルソバ	<i>Persicaria chinensis</i>
		Caryophyllaceae	ウシハコバ	<i>Stellaria aquatica</i>
		Amaranthaceae	ホナグイスイユ	<i>Amaranthus vividus</i>
		Amaranthaceae	ムラサキイノゴチ	<i>Achyranthes aspera</i>
		Portulacaceae	クワメクサ (ヒメマツバボタン)	<i>Portulaca pilosa</i>
		Cactaceae	サンカクサボテン	
		Sapotaceae	アカネツ	<i>Planchonella obovata</i>
		Sapotaceae	カニステル	<i>Planchonella campechiana</i>
		Ebenaceae	リュウキュウガキ	<i>Diospyros maritima</i>
		Ebenaceae	リュウキュウコクタン	<i>Diospyros egberti-walkerii</i>
		Primulaceae	シマズゼンリュウ	<i>Mussaenda perianis</i>
		Primulaceae	モクダチバナ	<i>Andisia sieboldii</i>
		Rubiaceae	ギョウキンカ	<i>Tarenna kotoensis</i>
		Rubiaceae	クチナン	<i>Gardenia jasminoides</i>
		Rubiaceae	コロンカ	<i>Mussaenda parviflora</i>
		Rubiaceae	ナガバハリフタバムグラ	<i>Borreria laevis</i>
		Rubiaceae	ナガミボチウジ	<i>Psychotria maritima</i>
		Rubiaceae	ヘクソカズラ	<i>Paedenia foetida</i>
		Apocynaceae	キジュラン	<i>Marsdenia tomentosa</i>
		Apocynaceae	サカキカズラ	<i>Anodendron affine</i>
		Apocynaceae	サクララン	<i>Hoya carnosia</i>
		Apocynaceae	ソメモノカズラ	<i>Marsdenia tinctoria</i>
		Apocynaceae	ホウライカガミ	<i>Parsonsia albiflorescens</i>

被子植物
Angiosperms真正双子葉類
Eudicots

第5表 北谷城植生リスト-4

		科名	種名	学名	
		キョウチクトウ科	Apocynaceae	リュウキュウチイカカズク (オキナワチイカカズク)	<i>Trachospermum gracilipes</i>
		ムラサキ科	Boraginaceae	チシノキ	<i>Ehretia acuminata</i>
		ムラサキ科	Boraginaceae	フクマンゴ	<i>Ehretia microphylla</i>
		ヒルガオ科	Convolvulaceae	アオイゴケ	<i>Dichondra micrantha</i>
		ヒルガオ科	Convolvulaceae	ノアサガオ	<i>Ipomoea indica</i>
		ヒルガオ科	Convolvulaceae	モミジヒルガオ	<i>Ipomoea cairica</i>
		ナス科	Solanaceae	キダキイヌホオズキ	<i>Solanum spirale</i>
		ナス科	Solanaceae	セイパンナスビ	<i>Solanum macdonense</i>
		ナス科	Solanaceae	センナリホオズキ (ヒロハウリンホオズキ)	<i>Physalis angulata</i>
		ナス科	Solanaceae	ヤコウカ	<i>Cestrum nocturnum</i>
		モクセイ科	Oleaceae	シマタゴ	<i>Fraxinus insularis</i>
		モクセイ科	Oleaceae	ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i>
		モクセイ科	Oleaceae	リュウキュウモクセイ	<i>Osmanthus marginatus</i>
		オオバコ科	Plantaginaceae	オオバコ	<i>Plantago asiatica</i>
		オオバコ科	Plantaginaceae	オトメアザテ	<i>Racopa monnieri</i>
		オオバコ科	Plantaginaceae	キバナオトメアザテ	<i>Mecardonia procumbens</i>
		オオバコ科	Plantaginaceae	ハマクワダ	<i>Veronica javanica</i>
		アゼナ科	Linderniaceae	ソバクラウリクサ	<i>Legasipia polygonoides</i>
		キツネノマゴ科	Acanthaceae	キツネノヒマゴ	<i>Justicia procumbens</i>
		キツネノマゴ科	Acanthaceae	ヤチギハルイラウ	<i>Ruellia simplex</i>
		キツネノマゴ科	Acanthaceae	ギンバルハダロウ	<i>Dicliptera chinensis</i>
		クマツャク科	Verbenaceae	イワダレソウ	<i>Phyla nodiflora</i>
		クマツャク科	Verbenaceae	ヒメクマツャク (ハマクマツャク)	<i>Verberia litoralis</i>
		クマツャク科	Verbenaceae	ランタナ	<i>Lantana camara</i>
		シソ科	Lamiaceae	オオムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i>
		シソ科	Lamiaceae	シロウロククサギ	<i>Clerodendrum trichotomum</i>
		シソ科	Lamiaceae	タイウロククサギ	<i>Premna serratifolia</i>
		シソ科	Lamiaceae	トウバナ	<i>Clinopodium gracile</i>
		シソ科	Lamiaceae	ギンバルツルハッカ	<i>Leucas mollissima</i>
		サザン科	Maraceae	トキワハズ	<i>Marus pumilus</i>
		キク科	Asteraceae	アキノノゲシ	<i>Lactuca indica</i>
		キク科	Asteraceae	アワユキセンダングサ	<i>Bolens pilosa</i>
		キク科	Asteraceae	インドヨメナ	<i>Aster indicus</i>
		キク科	Asteraceae	ウスベニガサ	<i>Emilia sonchifolia</i>
		キク科	Asteraceae	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i>
		キク科	Asteraceae	オニノゲシ	<i>Sonchus asper</i>
		キク科	Asteraceae	キダチハマダマ	<i>Melanthera biflora</i>
		キク科	Asteraceae	クマノギク	<i>Sphagneticola calendulacea</i>
		キク科	Asteraceae	コケセンボンギクモドキ	
		キク科	Asteraceae	コトバキギク	<i>Trides procumbens</i>
		キク科	Asteraceae	シマフジバカマ	<i>Eupatorium lachense</i>
		キク科	Asteraceae	セイヨウタンポポ属	<i>Taraxacum officinale</i>
		キク科	Asteraceae	タカサブロウ	<i>Eclipta thermalis</i>
		キク科	Asteraceae	ツルセンダングサ	<i>Calyptocarpus vialis</i>
		キク科	Asteraceae	ツルヒヨドリ	<i>Mikania micrantha</i>
		キク科	Asteraceae	ツワブキ	<i>Farfugium japonicum</i>
		キク科	Asteraceae	ノゲシ	<i>Sonchus oleraceus</i>
		キク科	Asteraceae	ハルノノゲシ	<i>Sonchus oleraceus</i>
		キク科	Asteraceae	ヒメジョオン	<i>Erigeron annuus</i>
		キク科	Asteraceae	ホウキギク	<i>Symphoricarum subulatum</i>
		レンブクツウ科	Adoxaceae	ソダズ	<i>Sambucus chinensis</i> Lindl.
		レンブクツウ科	Adoxaceae	ゴモジュ	<i>Viburnum suspensum</i>
		スイカズラ科	Caprifoliaceae	ハマニンドク	<i>Lonicera affinis</i>
		トベウ科	Pittosporaceae	トベウ	<i>Pittosporum tobira</i>
		ウコギ科	Araliaceae	ホドメグサ	<i>Hydrocotyle sibthorpioides</i>
		ウコギ科	Araliaceae	フクノキ	<i>Schefflera heptaphylla</i>
		ウコギ科	Araliaceae	リュウキュウハリギリ	<i>Kalopanax septemlobus</i>
		セリ科	Apiaceae	ナンゴクハマウド	<i>Angelica hisutiflora</i>

85科

256種

第IV章 発掘調査

第1節 基本層序

本書における基本層序の大別・細分については、土層のもつ性格や城郭形成過程を重視して行った。そのため、同じ層名の土層の土質が必ずしも一致しないことになる。

基本層序決定に先立ち遺構面の整理を行った結果、曲輪内においては3面の遺構面が確認できた。このうち少なくとも下2面については、グスク時代に帰属する。最も新しい遺構面の帰属時期は不明であるが近世まで下る可能性がある。

I層：近現代の耕作・攪乱層

郭内平坦部は、少なくとも戦後しばらくは耕作地として利用されていたため、各区において上位層の大部分は旧耕作土となっている。

I a層：地表面の腐植土等（第1・2・11・12集・32集-I層に対応）

耕作放棄後に生じた地表面の黒色腐植土層である。一部に米軍による攪乱を含めた。

I b層：旧耕作土層（第1・11集-II層、第12集-I層に対応）

基本的には旧耕作土として捉えているが、曲輪縁辺においては混雑率が非常に高まる傾向が看取される。これは城壁（石垣）破壊の際の、中込石放置の結果であることが想像される。

I c層：戦前居住区周辺の生活層（第2集-II層、第32集-II・III層に対応）

旧宇伝道集落周辺の上位に堆積している。

II層：近世ごろの土層

少ないながらも近世ごろの土層が散見されており、城郭の内側と外側で大別した。

II a層：曲輪内（第12集-II層に対応）

二の曲輪・三の曲輪で確認されており、三の曲輪では面的に広がっている可能性がある。

II b層：グスク丘陵南麓（第2集-III～V層、第32集-IV・V層に対応）

第32集においてはグスク期の土層とされていたが、再検討の結果、近世以降に帰属するものと捉え直した。

III層：グスク時代の土層

III a層：グスク破却時の造成土（第1・11・12集-III層、第2集-VI・IX層に対応）

概して黒～黒褐色を呈し、曲輪内平坦部に広く分布している。本層上面が第1遺構面（廃城後）、下面が第2遺構面（グスク機能時）となっている。曲輪内施設廃絶直後の平坦化によって生じた土壌も含まれるが、グスク機能時のものと考えられる青磁・褐釉陶器等の遺物が突出して多い。近世の遺物を含む上層と含まない下層に細分が可能と考えられる。

Ⅲ b 層：石垣据え付けに伴う郭内の充填土（第11集-V層に対応）

二の曲輪南の石垣コーナー内側では、掘り込みを伴う黒色の充填土が確認されており、この範囲の上面には混雑・砂利面も検出されている。また、三の曲輪西側では大規模な整地痕跡が確認されており、これも石垣による三の曲輪範囲決定後の充填・平坦化の痕跡と考えられる。

Ⅲ c 層：部分的盛り土に伴う客土（第11集-IV・VI層に対応）

二の曲輪出入口付近で確認されている。出入口のスロープ状を呈する部分は褐色土で構成され、それに隣接する張り出し部の土質はⅢ a 層に類似している。両者が同時存在したかどうかの判断材料に欠けるが、ともにⅢ c 層として一括した。本層そのものの掘削は行っていないため、出土遺物はない。

Ⅲ d 層：Ⅲ a・Ⅲ e 層間の赤土（第1集-IV層に対応）

二の曲輪東側に認められる赤土で、第1集では高所から流入した二次堆積とされた。しかし、次のⅢ e 層と互層状を呈する場所もあり、全てが二次堆積であるとは言えない。三の曲輪 B'-81でもⅢ a・Ⅲ e 層（黒色土）に間在する赤味の強い層が認められ、この層位を当てた。

Ⅲ e 層：下位の遺物包含層（第1集-V層に対応）

深掘りした箇所のみでの確認であるが、分布域がⅢ a 層に類似すると考えられる黒色土層である。二の曲輪では炭を多量に含んでおり、このことをもって火災があった可能性が指摘されているようである^{註1}。場所によっては混雑率が高く、出土遺物については総じてグスク土器の比率が高い。層下の地山面で土坑やピットが検出されており、これらを第3遺構面（グスク古段階或いは石組城郭建造以前）と見なした。

IV層：グスク丘陵南麓の湿地堆積（第2集-X層以下、第32集-VI・VII層に対応）

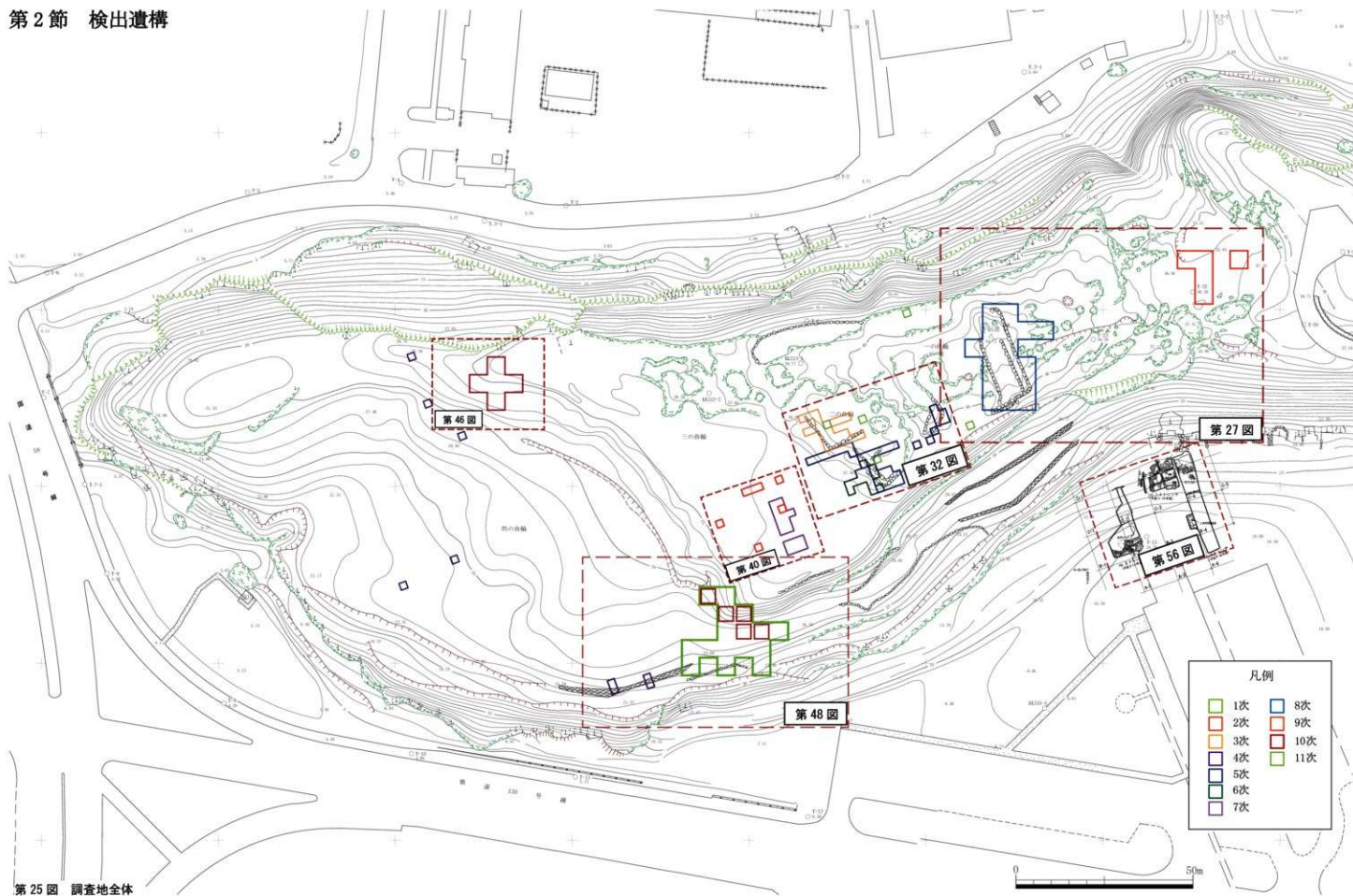
グスク丘陵南麓の南縁を取り巻くように堆積する湿地堆積である。層下に不透水層となるクチャ（泥岩）があり、チンガー等の井戸の立地に密接な関係がある。数少ない出土遺物からの推定となるが、12世紀頃までに形成されていたと考えられる。

V層：地山

いわゆる島尻マージと呼ばれる地山で赤色を呈する。二の曲輪 0-94 や三の曲輪 X-86 では、同層上面にてピットが検出されている。

註1. 「建物跡の下面に多量の炭や灰、焼けた石や土塊が見られることから建築以前にもなんらかの施設があり、焼失したのではないかと判断された。」（『北谷町史第一巻 通史編』北谷町教育委員会、2005、P217）。

第2節 検出遺構



第25圖 調査地全体

1. 一の曲輪

一の曲輪の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第1次	D-112, V-115	$2\text{m} \times 2\text{m} \times 2 = 8\text{m}^2$
第8次	ソ-71・72, ツ-71～74, ネ-70～72, ナ-71～73, ラ-71～73, ム-71～73	$5\text{m} \times 5\text{m} \times 18 = 450\text{m}^2$
第9次	(第8次調査の測量)	-

合計面積：約 458 m²



第 26 図 一の曲輪選構配置 (略図)

1) 石垣

第8次調査において、一の曲輪の東・南縁となる石垣が検出された。細長く伸びるグスク丘陵の最高地（標高42～44m）を横断するように構築されている。南北は約25mを測り、端部両隅は曲線的なコーナーを描く。

1982年の平板測量によると、この付近の石積みは東向きに開口しており、門があったことを窺わせていたが、「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成5年7月2日）」^{註1}においては、以下のような説明がなされている。「（前略）東から正面につき当たると広場があって、奥の方にもコの字形になった石が見える。それはもしかすると、元々からあるものではないかという指摘がありましたが、最初の頃で性格が分からなかったのです。とりあえず残っている石垣を書いて行こう、という事で作図したものです。この部分は去年、はずしましたので現在はありませんが、丁度この白い所に米軍が立てた電柱の跡があり、おそらくそのために壊されたのだらうと考えています。」この記述だけでは事の詳細が十分には分からないが、1982年に測量された「石垣」の形状には、米軍による作業の影響が大きく反映されていた可能性が高い。

内面の石積みは野面積みで、この内面から6m及び9m外側（東面）に布積みの外面石垣が認められた。二辺の東面石垣のうち、西側のものは石灰岩やサンゴ礫を用いており、粗い打ち欠きで成形される。東側のものは石灰岩のみを用い、70×40cmほどの角切礫が並ぶ。この周辺から骨製織が出土している。また、南面においても二辺の外面石垣が検出されているが、こちらは6,7段ほどが積み重ねられた状態で残存していた。

外面に二辺の石垣が存在する理由として、①外側に犬走りがあった、②拡張・増築があった、③力学的な工法、といったことが挙げられる。それぞれの積み方が異なることから考えると、拡張があった可能性が最も妥当なように感じられるが、補強の意味を兼ねた「化粧積み」といった可能性も想起されている^{註1}。いずれにせよ、下部幅が6～9mあったということは、石垣自体が相当な高さを有していたことが考えられる。

ここに門が存在したかどうかについても、前述の審議会にて議論とはなったものの、いずれにしても根石より上部の構造であったであろうことが予想され、今のところ不明のままである。

今回は検出作業に留まったため、具体的な構築時期は不明であるが、作業を通じて得られた遺物の殆どが14～15世紀のもので、石垣南西隅からはイルカの骨の出土が目立った。

また、一の曲輪と二の曲輪の境でも石灰岩切石の根石が検出されている。

註1、石垣を実見された青山学院大学教授田村晃一氏（前述審議会委員）のご感想、及び同じく石垣を実見された金武正紀氏からのご教示による。（『北谷城史跡基本構想策定審議会議事録（平成4年12月17日）』『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教委、1994）。



第 28 図 一の曲輪遺構平面



図版 31 東壁石垣（内側）北向けに撮影



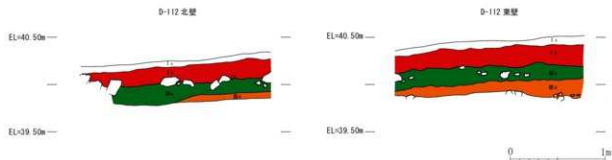
図版 32 遺物出土状況（東壁付近）

2) 中央の平場

一の曲輪の中央部には石灰岩の露頭があり、これを削平して平場を形成している。このため殆ど土壌が残っていなかったが、その南北にも一段下がった細長い平場があり、それぞれにて1箇所ずつのトレンチを設けて掘削した。

遺物の出土が確認されたのは基本層序 I a 層、I b 層で、I b 層からの出土が主体である。青磁・白磁・褐釉陶器等の貿易陶磁器の出土が目立つが、2cm以下の小破片が多く、これは耕作の影響によるものとみられる。沖縄産陶器や明朝系瓦などが含まれていることから、グスク時代のオリジナルな層序は残存せず、近現代の耕作土層と想定される。

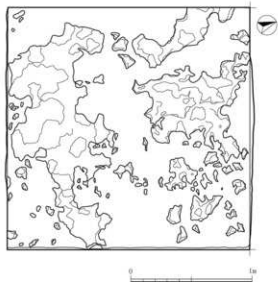
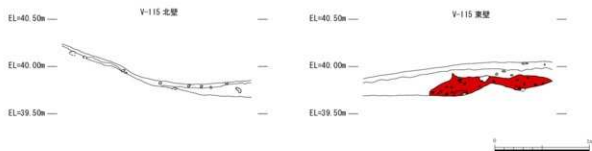
グスク最奥部・最高位にあたるこの空間が、どのような役割を果たしていたか、今後の調査で確認が必要である。



第 29 図 D-112 断面



図版 33 D-112 壁面 (左:北壁、右:東壁)



図版 34 V-115 壁面（東より）

第 30 図 V-115 平面・断面

3) 水溜状遺構

『北谷町史』によると、径約 1.5m、深さ約 1.5m を測る円筒状の遺構が、曲輪東側の岩盤窪みに形成されており、これが水溜めであった可能性があるとしている^{註1}。詳細は不明。



図版 35 水溜状遺構（左：近景、右：遠景）

註1. 知念勇氏の記述より。『北谷町史 第一巻 通史編』北谷町教育委員会、2005、P215)

2. 東側の丘陵

東側の丘陵の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第9次	ヨ-82・83・85、タ-83、ヅ-83	合計面積：約37.5㎡

一の曲輪から50mほど東側の丘陵岩盤に、人為と考えられるL字状の抉りが認められていた。これが「堀切」である可能性を視野に入れ、第9次調査においてトレンチ掘削による確認作業を実施した。5グリッドにおいて幅1.5m×長さ5mのトレンチを設定したが、このうち有意な成果を得られたのは3グリッド（ヨ-82・83・85）であり、残りでは浅いところで岩盤を検出している。

以下、連結したヨ-82・83グリッドとヨ-85グリッドの2箇所について述べる。

1) ヨ-82・83グリッド

2グリッド分を連結したため、トレンチ規模は幅1.5m×長さ10mとなる。深さ1m強まで掘削した結果、窪み状の地形を呈していることが分かった。

Ⅲ層（調査時）下で、東に偏在する混貝層とピットを検出した。いずれもグスク時代のもと考えられる。窪みの底面近くからは、更に別の混貝層（同Ⅹ層）が確認された。当該区の下層では陶磁器の出土が皆無であり、現場所見ではこの混貝層はくびれ平底土器期の単純層としている。上の混貝層からは貝札が出土しているため、このくびれ平底土器は古手の可能性がある。

2) ヨ-85グリッド

前述のヨ-82・83トレンチとは5mしか離れていないにも関わらず、当該区での様相は前者と全く異なるものであった。深さ2.7mで岩盤に至ったが、遺物は皆無であったため、表層以外は自然堆積層と捉えることができる。

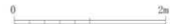
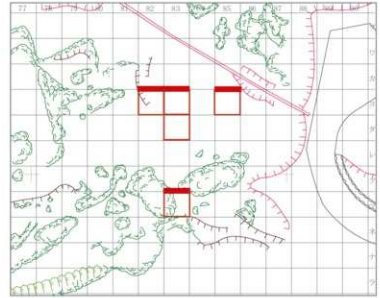
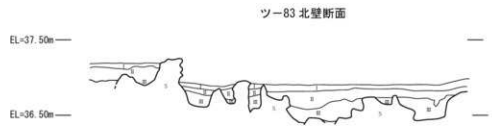
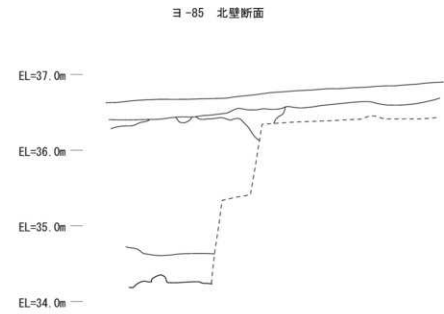
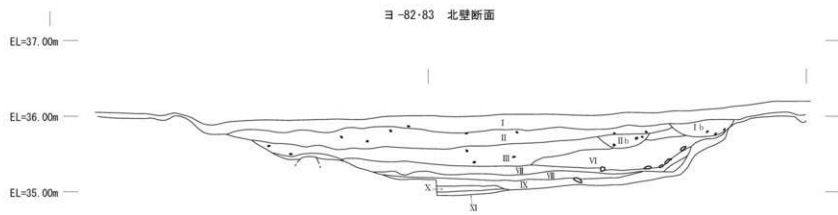
かなり深いレベルで岩盤を検出したということは、旧地形においてかつてここが窪んでいたことを示すものの遺物が全く認められないことから、城郭機能時には、ヨ-85グリッドは堀切状ではなかったと言える。

小結

ヨ-82～83にて尾根を分断する形で検出された溝状遺構は、調査時に堀切とは捉えられていない。本報告では、次の理由から何らかの防御機能を有していた遺構、堀切と捉えた。

- 1、ヨ-82Ⅸ層（調査時）集石下採取の炭化物が14世紀前半から15世紀前半の年代値を示した。
- 2、ヨ-82・83間の畔Ⅵ層（同）採取の炭化物が12世紀半ばから13世紀半ばの年代値を示した。
- 3、Ⅲ層までに含まれる遺物は16世紀代以前のものであった。
- 4、1～3から、本遺構はグスク時代に開溝しており、16世紀には埋没していた。
- 5、一の曲輪の殿舎の埋没状況や尚真王による16世紀前半の中央集権等から、本遺構は何らかの防御機能を有していたため廃城時に埋められた可能性がある。いずれにせよ、同遺構の性格は今後の調査で明らかにする必要がある。

これとは別に、当該区においてはくびれ平底土器を多数検出した。共存する可能性のある貝札は、種子島広田遺跡の「上層タイプ」にあたるため、フェンサ下層式よりも古くなる可能性が高い。北谷城東側丘陵で得られるくびれ平底土器の年代観を見直す必要もあろうかと思われる。



第31図 東側丘陵断面

3. 二の曲輪及び出入口

二の曲輪・出入口の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第1次	K-90～92、L-91・93、O-96、P-100、V-101	2m × 2m × 8 = 32 m ²
第3次	M-93～95、N-95、O-93～95・97～99、P-95・96、Q-95～98、R-95～100	2m × 2m × 22 = 88 m ²
第5次西側	S-92～98、T-98、U-99～104、V-99・100、W-100、X-100～102、Y-100～103、Z-102・103	2m × 2m × 26 = 104 m ²
第5次東側	R-111・112、S-111・112、T-110～112、U-110、V-107・109	2m × 2m × 10 = 40 m ²
第6次	W-98・99、X-96～99、Y-96・99、Z-99～101	2m × 2m × 11 = 44 m ²

※第5次東側は測量のみの面積も含む。第6次は第5次と重複する部分を除外した。

合計面積：約308 m²

A群 I b層及び礫堤除去後に検出された遺構

A-1 石垣

二の曲輪南東・南西辺の一部にて、曲線を描く石垣コーナー部分を検出した。上位には多量の礫が残存しており、これらの除去後に切石の根石列を検出した。従って、少なくとも基礎構造は切石であったということ、及びこの根石上にはある程度の石造構造があったということが言える。W-99とX-99付近では、内外壁の根石間が摩滅した礫で平坦面を成していた。調査時の所見として、時期は定かではないとしつつも、同平坦面が通路として利用されていたと断定している。また、W-100付近の根石は精緻に加工されたサンゴ石が用いられており他の根石と趣を異にする。当該地は後述するスロープ状遺構との関連等から、ある時期における出入口であったと考えられる。石垣内側の様相から、このコーナー部分はIII b層と連動して建造されたことが分かっている。

S-95、96では精緻に加工された根石列が検出された。外壁面のみ確認されており、先述の根石列と平行するも西へ約3mのズレがある。

A-2 出入口に伴うスロープ或いは階段

二の曲輪外となるW-98、X-97～99グリッドにおいて、根石列に対して直角方向に伸びるスロープ状の盛土が検出された。この傾斜を下ると三の曲輪平場に至る。スロープ面には等高線に平行する礫の配置が認められるため、階段痕跡あるいは土留め目的のものと考えられる。

A-3 張り出し状遺構

二の曲輪外となるY-99、Z-99グリッドにおいて、根石列に対して直角方向に伸びる石灰岩の石列がIII c層上で検出された。石灰岩は未加工で並びも不規則であるが、先述の石垣及びスロープとの位置関係から、何らかの関連遺構と考えられる。

A-4 北の石敷

二の曲輪北側K・L-91・92グリッドにて検出された。戦時空襲の着弾坑によって欠失する部分もあるが、概ね北西～南東方向に伸びているように見える。礫は破碎されたものであるため、角張っているものが殆どで、掘削用具では突き刺せぬほどの密集具合となっている。

この石敷以下は掘削していないため、この混雑土層がどのくらいの厚さをもって堆積しているかは不明である。しかし、北側のすぐ近くまで露出石灰岩が迫っており、石敷のない東側にも大きな

石灰岩の岩盤が検出されているため、それほど厚くないことは十分に予想される。グスク機能時の屋外地面をなしていたものと考えられる。

A-5 南の石敷

石垣の南コーナー部分内側、W-100、X-100～102、Y-101 グリッドにおいて検出された。この礎面は、石垣南西隅付近に充填された基本層序Ⅲ b 層上面に分布している。北の石敷同様に、グスク機能時の屋外地面であったと考えられる。

B 群 Ⅲ a 層掘削中に検出された遺構

B-1 石列

V-100 から U-101 グリッドにかけて、長さ 3.3m ほどの南面する切石列を検出した。当時の調査でヒンブ状遺構と仮称されたものであるが、後述する建物基壇の方向には平行せず、石垣（根石列）に対して直角方向に延びているスロープの延長上に配置されていることから、出入口に関連した構造物である可能性もある。

B-2 建物基壇

R-95～100 グリッドにかけて、長さ 9.8m ほどの南面する切石列と、その北東側に広がる礎範囲を検出した。石列と石垣は直角平行の関係にないが、二の曲輪内で主要施設建物が存在可能な区域は他に認められないこと、当該範囲からの遺物出土が多いことから、何らかの建物の基壇であることが考えられる。南辺以外の石列は認められないが、地形的に低くなる南西側を充填するように礎群が検出されていることも、基壇であることの傍証となろう。この礎群の下方に多量の炭・灰・焼石・焼けた土壌が認められたとのことで^{註1}、出土遺物にも被熱痕跡の残るものが多かった。これらは火災があった可能性を示している。

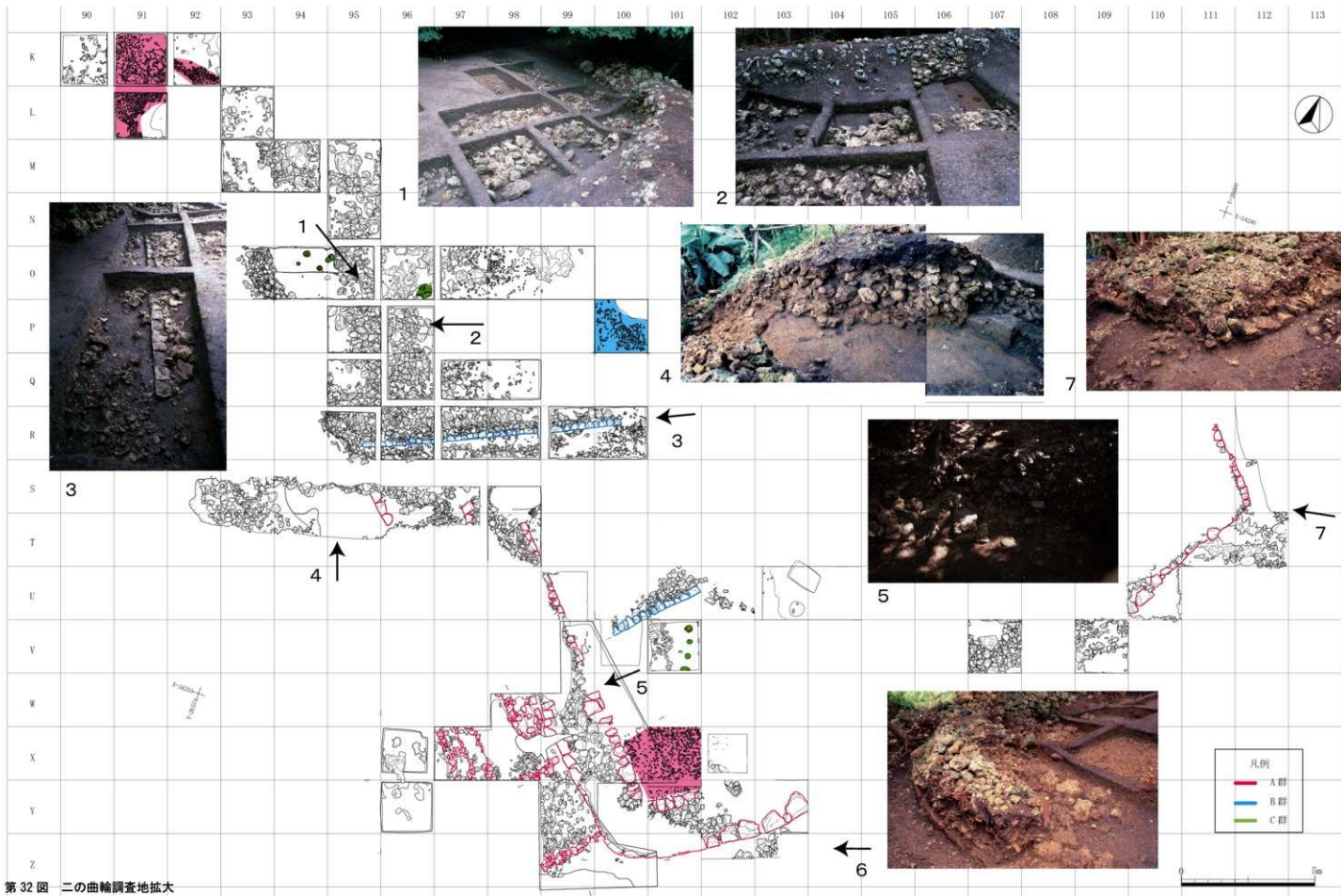
また、二の曲輪西辺にあった城壁破却の結果と考えられる礎堤が、本遺構と重複した格好となっているが、言い換えればこのことが、本来の城壁が礎堤よりやや西側にあったことを暗示しているとも思える。

註1. 『北谷町史 第一巻 通史編』（北谷町教委、2005、P217）。

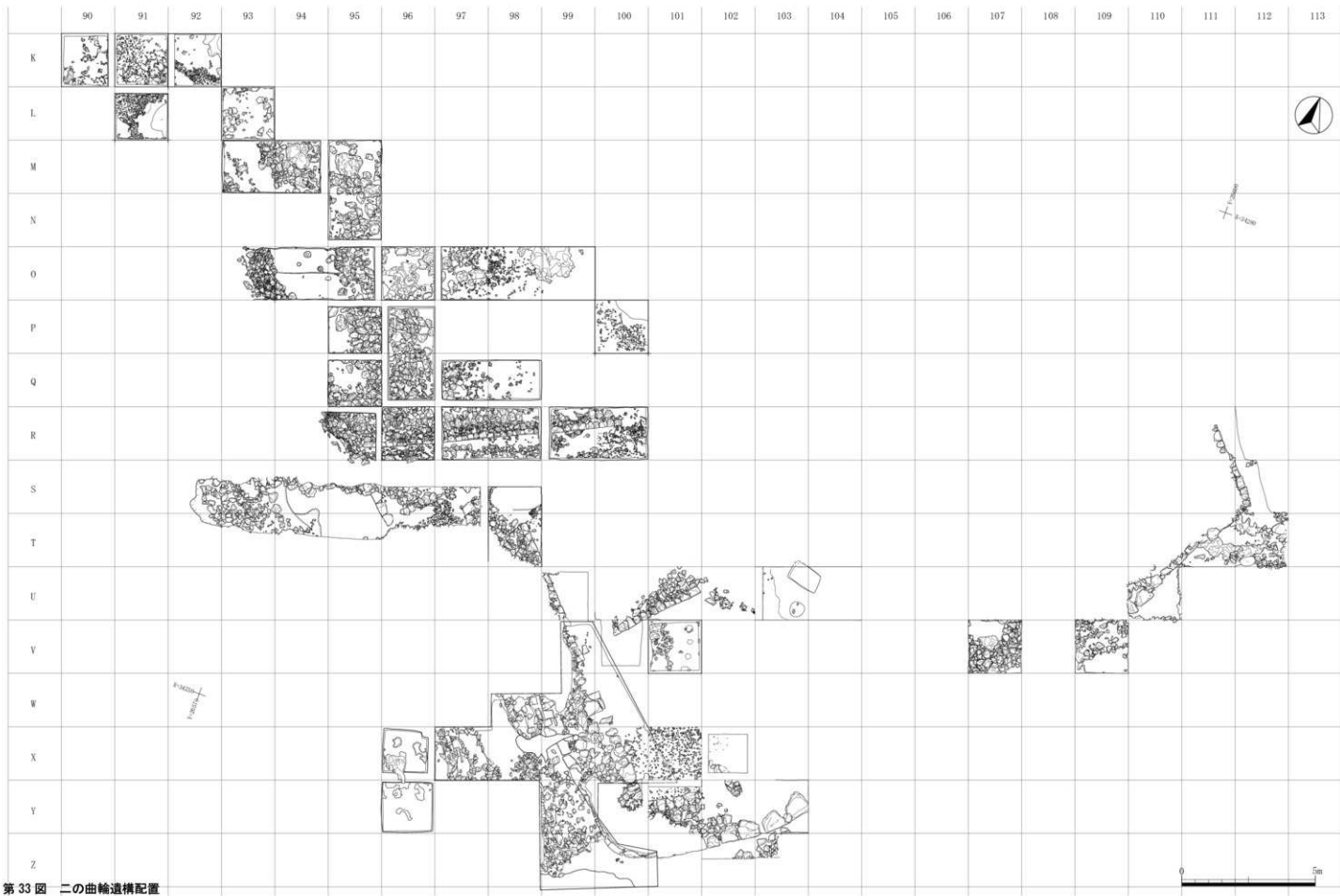
C 群 Ⅲ層除去後に検出された遺構

C-1 柱穴

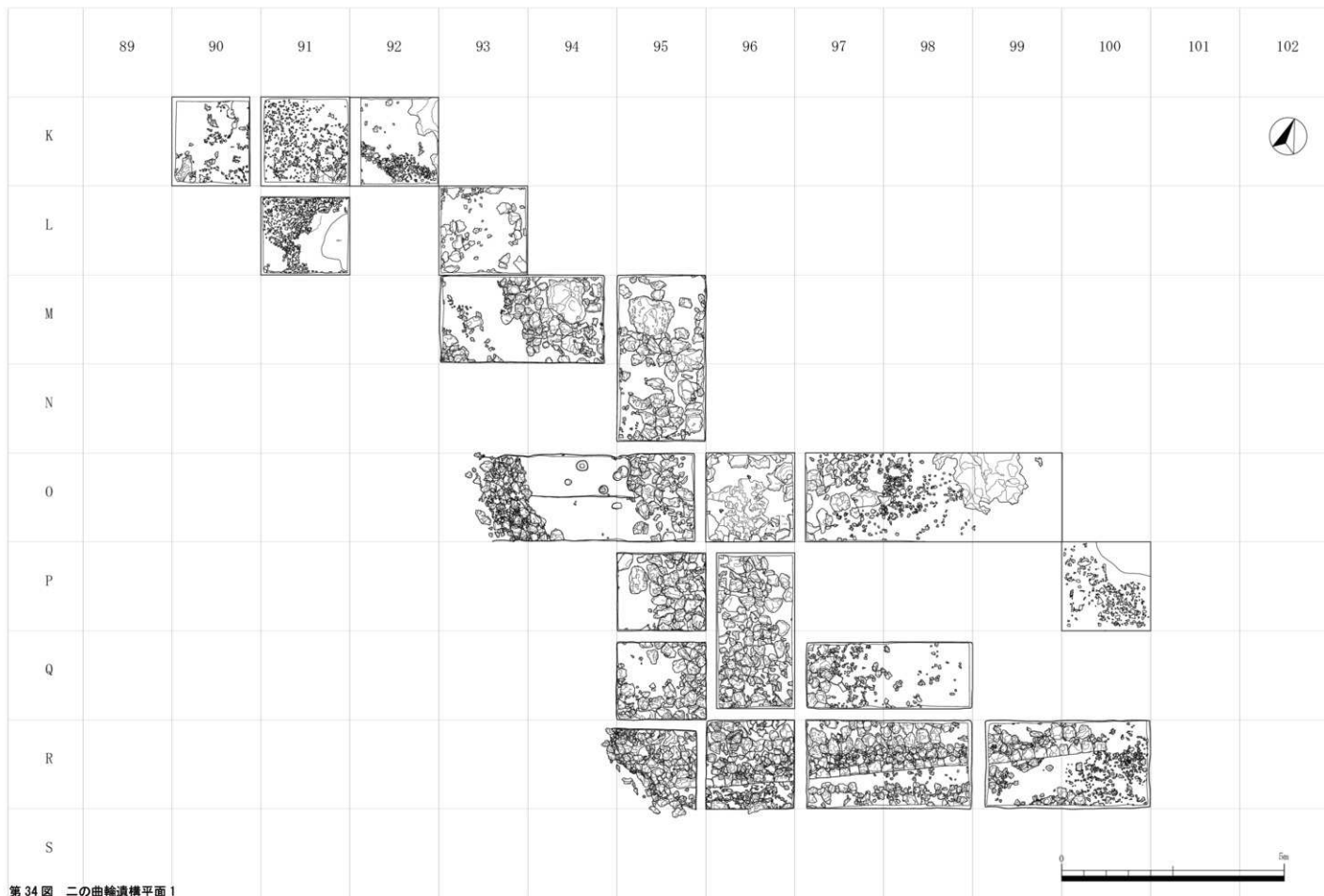
地山面に構築される柱穴を複数個所で確認した。多くの場合、Ⅲ e 層除去後の検出となったが、上位遺構面で何らかの遺構を検出できた箇所においてはそこで掘削を止めているため、調査区全体での分布域は把握できていない。



第32図 二の曲輪調査地拡大



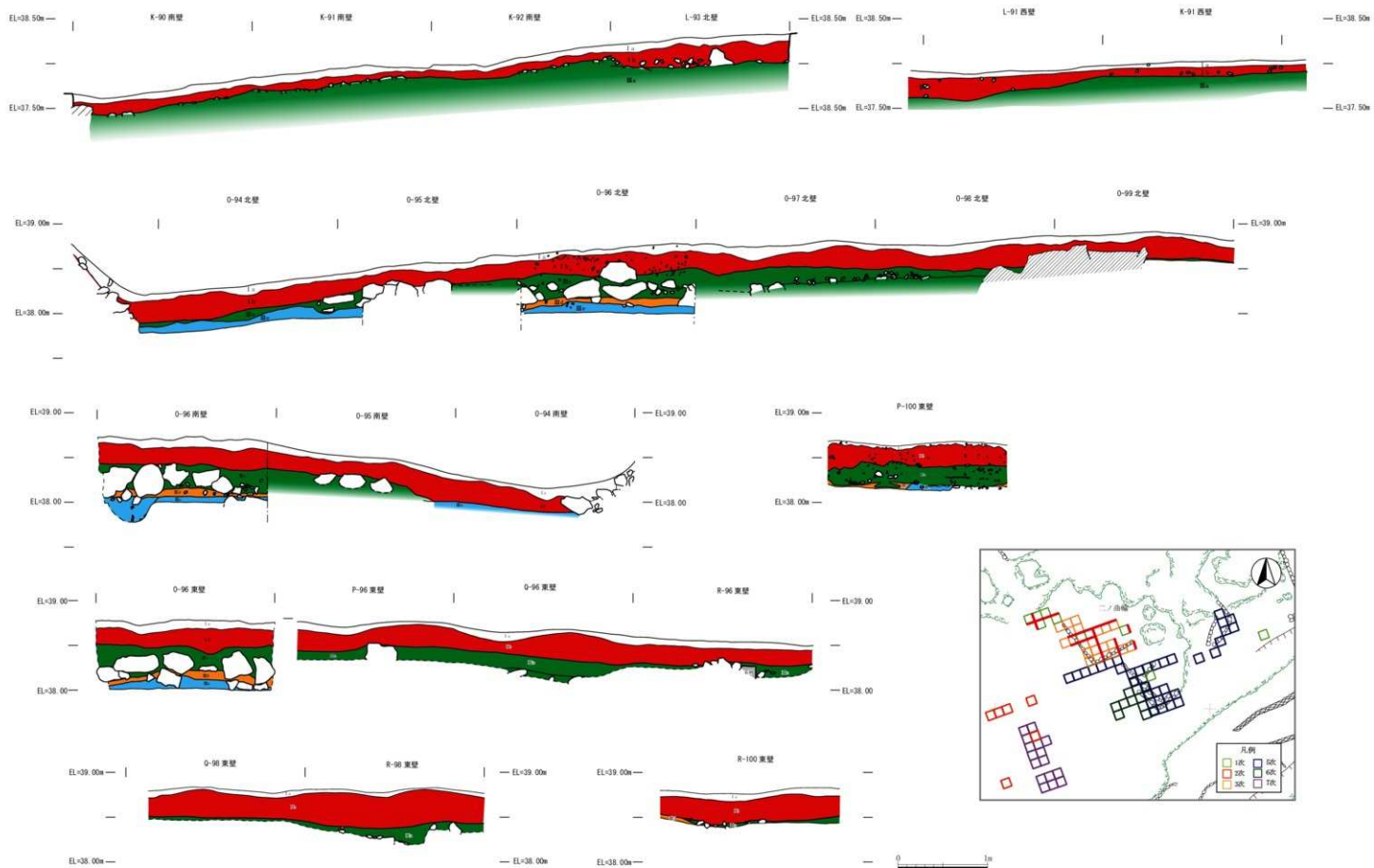
第33図 二の曲輪遺構配置



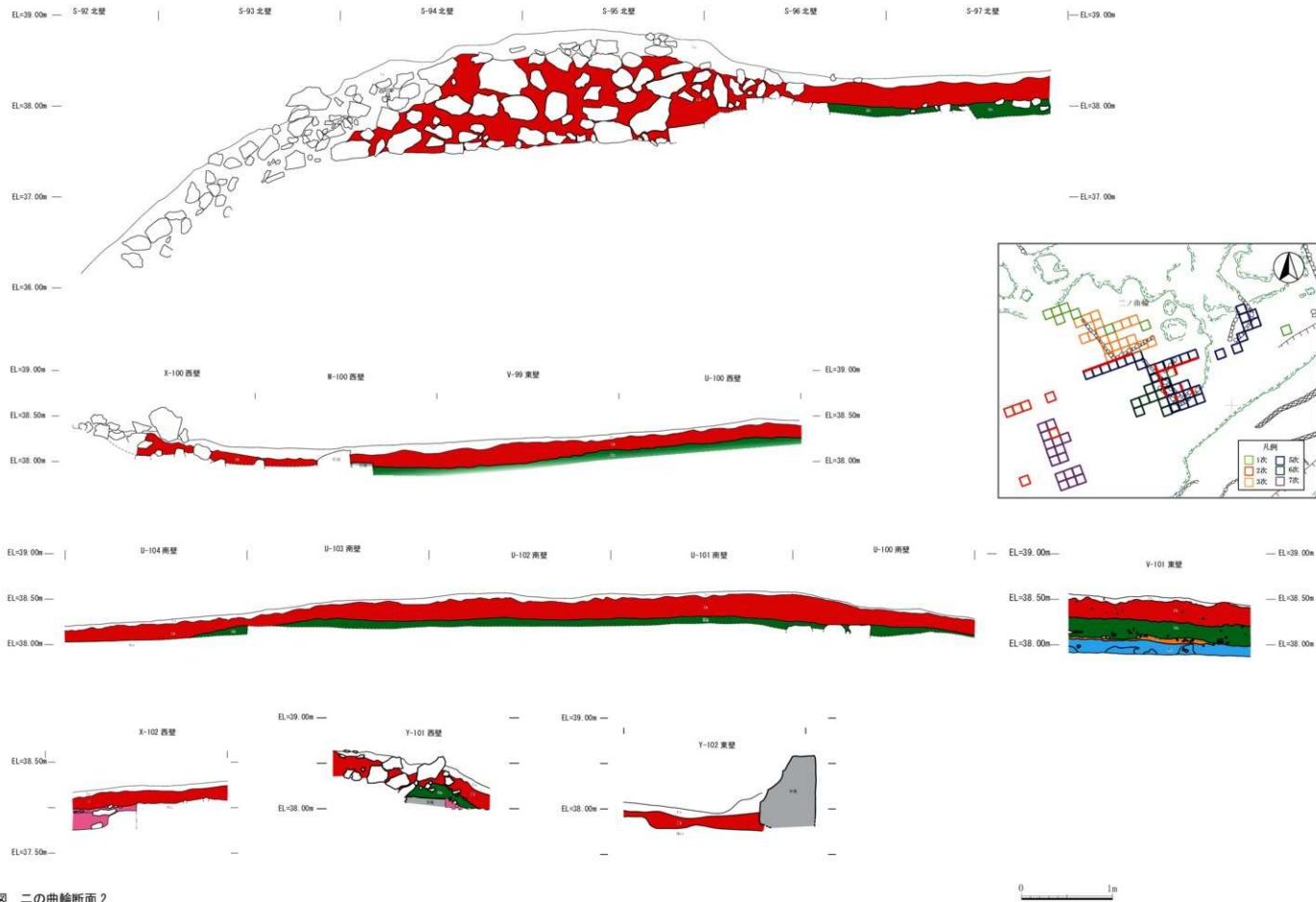
第34図 二の曲輪遺構平面1



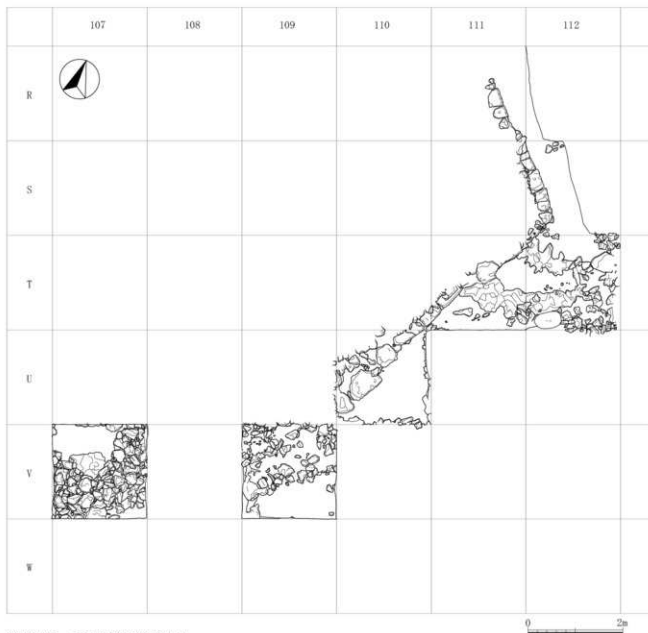
第35図 二の曲輪遺構平面2



第 36 図 二の曲輪断面 I



第 37 図 二の曲輪断面 2



第38図 二の曲輪遺構平面3

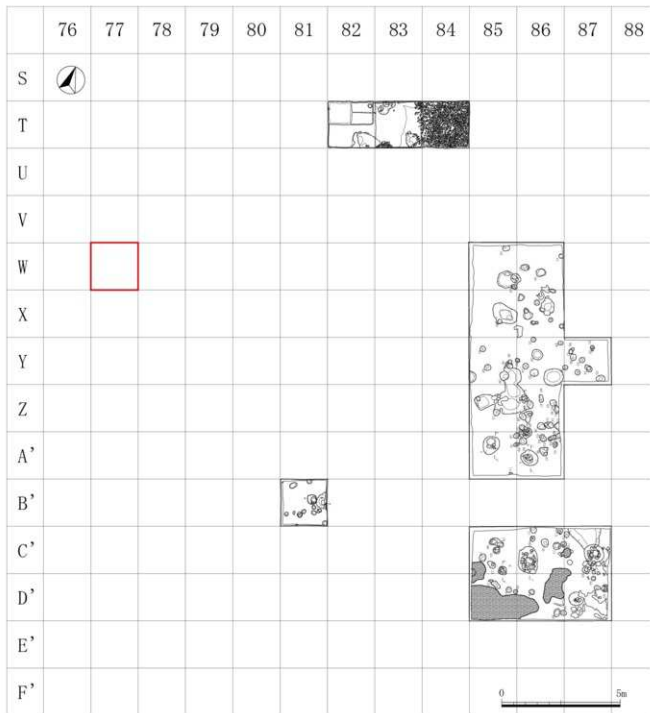
4. 三の曲輪

三の曲輪の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第2次	T-82～84、W-77、X-86、B'-81	$2m \times 2m \times 6 = 24 m^2$
第7次	W-85・86、X-85、Y-85～87、Z-85・86、A'・85・86、C'・D'・85・86	$2m \times 2m \times 14 = 56 m^2$

※第7次は第2次と重複する部分を除外した。

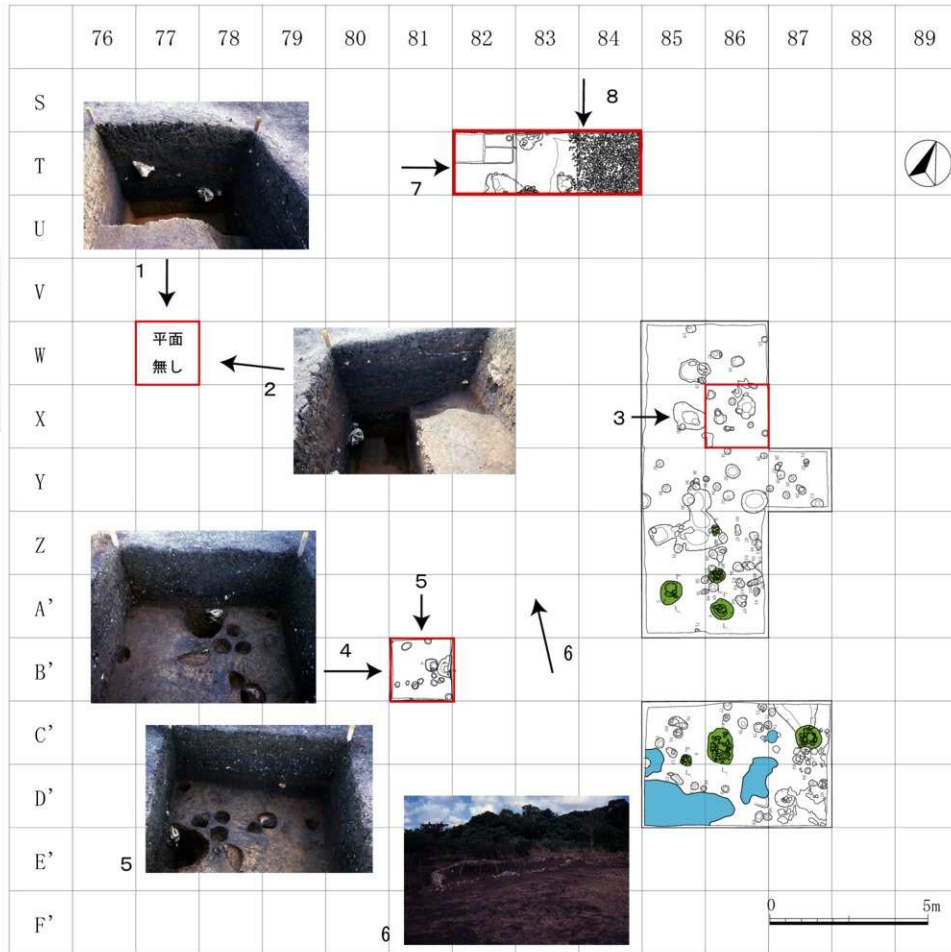
合計面積：約80㎡



第39図 三の曲輪遺構配置



3



7



8



6

第40図 三の曲輪調査地拡大

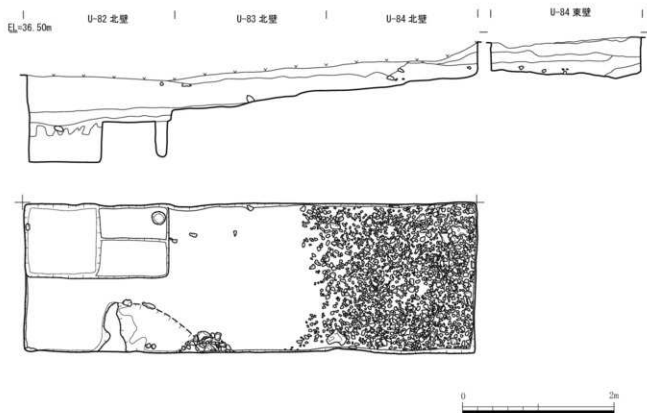
1) 北の石敷

調査以前から三の曲輪には拝所があるとされており、中央部には方形にめぐらせた石積みが露呈していた。第2次調査でこの部分を掘削した結果、拳大の石灰岩を用いた石敷面と香炉・酒器類が見つかったため、前代の拝所、即ち『琉球国由来記』が示す「城内之殿」に比定した。石敷面には直線的な「辺」が認められた。

この拝所がいつからこの場所にあったのかは詳細には分らない。しかし、石敷を覆う土層にはⅢa層期に相当するものが認められないこと、二の曲輪に正殿があるならばこの三の曲輪は「御庭(うなー)」に相当したであろうこと^{註1)}、「城内之殿」に関わる祭祀である「稲二祭」は第二尚氏王府以降に広がった可能性があること^{註2)}等から、廃城後の施設と考えるのが妥当と思われる。

註1. 「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録(平成5年7月2日)」『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教委、1994。

註2. 「北谷城史跡基本構想策定審議会議事録(平成4年12月17日)」『北谷城史跡整備基本構想』北谷町教委、1994。



第41図 U-82～84平面・断面



図版36 U-82東壁

2) 南の石敷及び「礫を伴う柱穴群」

第7次調査において、親指大のサンゴ礫と貝殻で構成される石敷範囲、及び礫を伴う柱穴群を検出した。いずれも地山であるマージ上面に構築されていた。石敷はその直上まで攪乱されていたため、分断されて検出された範囲は、本来ひと続きであった可能性がある。

礫を伴う柱穴は7基あり、中～上位に礫を外周させている。また、上位に一回り大きな掘り込みをもつものが多い。覆土はⅢa層に類似する。平面図上、これらはほぼ直角・平行方向に規則性をもって配置されているように見える。

この柱穴のうち最南の2穴の間に向かって、石敷がL字状に折れているとするならば、この石敷は柱穴が構成する施設に対応する通路状のものと考えることができる。そしてこの石敷の西側には、後述する城門が存在することは注目される。

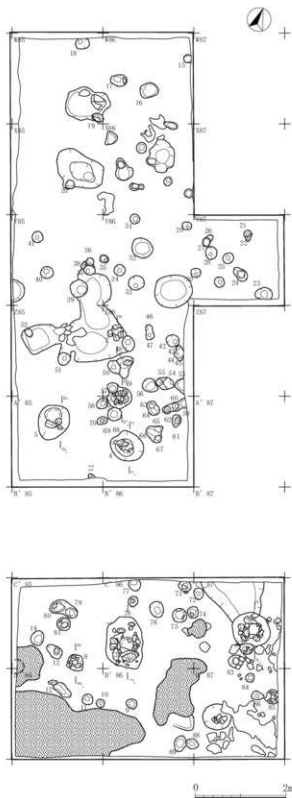
3) 南の小穴群

前述の石敷・柱穴が検出された第7次調査区にて、礫を伴わない小穴が74基検出された。中にはⅡ層起源の覆土をもつものもみられることから、新しい時期のものも混じっているようである。

全体を見渡した場合、平面上斜め方向に配置されているようにも感じられ、もしこの方向軸に沿った建物配置があったのであれば、石敷・柱穴とは異なる軸で展開されていることになり、当該地区における空間利用の変遷が窺われる。新しい時期の小穴がどれであるのかの報告がなされていないため、両者の新旧は断言しがたいものの、切り合い関係から小穴群の方が新しいのではないかとと思われる。

4) 南の土坑群

第7次調査区にて、用途不明の土坑が12基検出された。覆土はⅢa層に類似する。

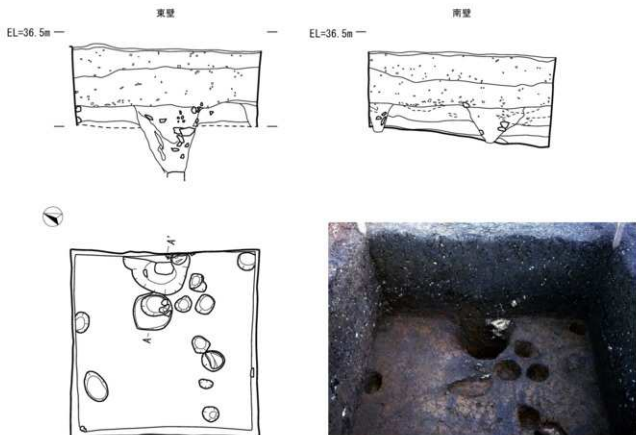


第42図 三の曲輪遺構平面

5) 西の柱穴・小穴群

第2次調査区B'-81グリッドにおいて、大小計12基の素掘穴を検出した。狭い範囲での調査であったため、各々の配置や関係性については不明である。III a層相当層直下からの掘り込みであるため、いずれもグスク時代の遺構と考えられる。

二の曲輪における素掘穴は基本的にIII e層期にものに限られるが、三の曲輪においてはIII a層期にも素掘穴が構築されていることは特記される。



図版 37 B'-81 東壁

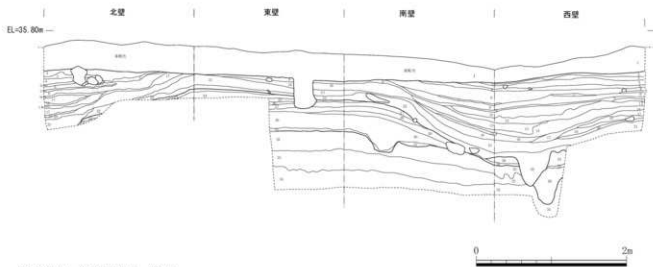
第 43 図 B'-81 平面・断面



6) 大規模な整地痕跡

第2次調査区 W-77 グリッドにおいて、幾重にも重なる整地の痕跡が認められた。整地層は厚いところで1.8mを測る。本グリッドは三の曲輪・四の曲輪の境界に近く、その石垣構築に伴う大掛かりな盛土作業があったことが窺える。壁面に複数みられる掘り込みからこれら層群を大別することは可能であるが、整地の過程における一時的な作業痕跡と考えた。

この人為堆積からは多くの土器が出土したのに対し、青磁等の陶磁器類は僅少であったことは特記される。つまり、この整地作業の後になって、按司等の富裕層の居住・活動が始まったことを暗示している。



第44図 W-77 平面・断面



図版 38 W-77 壁面 (左: 南壁、右: 東壁)

5. 三の曲輪北西端部

三の曲輪西端部の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第10次	ナ-43、ラ-42～44、ム-43	

合計面積：約16.5㎡

第10次調査は、舌状に延びる三の曲輪北西端部を対象とした。崖に面した北壁は野面積みの石垣が弧状に巡らされ^{註1}、丘陵北崖に掘られた金満按司の墓に近い。この調査は1994年に沖縄国際大学考古学研究室の実習の一環として実施され、同年中に発掘調査概報が刊行された^{註2}。引き続き本報告のための整理作業が行われたようであるが、トレンチ名や方角の間違ひの発覚、基本層名の変更等により混乱^{註3}したようである。丘陵全体を覆うグリッドに調査区を載せると丘陵斜面地に調査区が来てしまうため、本報告(第46図)においては1グリッド分(5m)北側にずらし図示した。具体的には、第10次調査ではラ-43グリッドに十字状の調査区の交点位置しているが、本報告ではその交点を5m北のナ-43に配置した。第10次調査区全体を5m北側にずらすのは、地形図と調査区の併合図である第46図のみで行い、平面・断面図や出土遺物については調査当時のグリッド名をそのまま用いている。

当該調査区からは、①元～明初の染付(酒会壺・梅瓶)が得られた、②多くの中国銭貨(五銖銭を含む)が得られた、③火災の可能性を示す被熱遺物が多く得られた、といった特記すべき成果が挙げられている。北谷城の中でも、このエリアがやや特殊な空間であったことが窺える。グスク時代の遺物包含層も複数確認できたが、他のエリアとの整合が難しかったため、Ⅲ1層・Ⅲ2層という上下2枚に大別した。

1) 石列

Ⅲ1層掘削中に検出した。北壁の弧に対して弦となるような、南面する石垣内面の根石列と考えられる。大型の石を用いていることから、高さのある施設(物見台等)が想定されている^{註4}。

2) ビット群

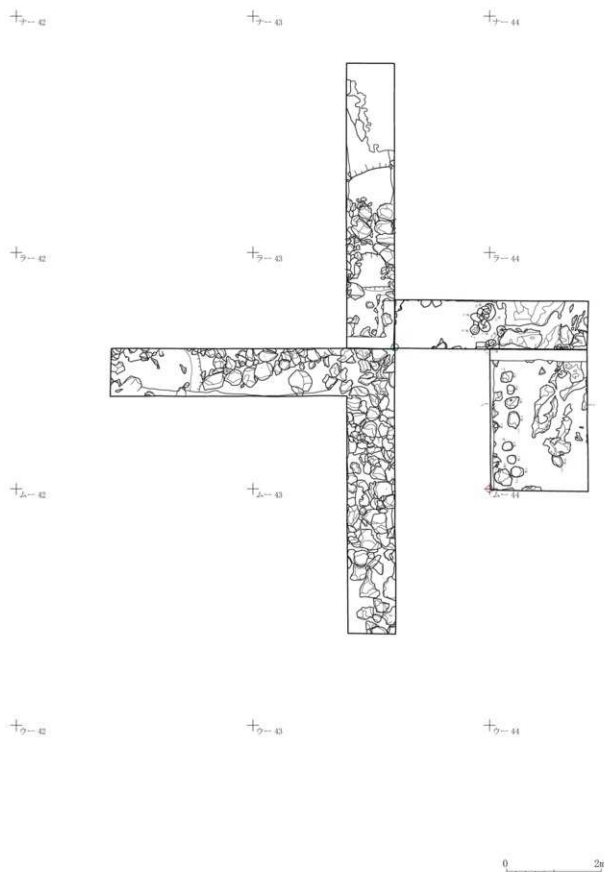
地山面において、並んで配される数基のビットを検出した。石垣以前の遺構と考えられるが、出土遺物の帰属年代は14～15世紀とあまり古くはならない。

註1. 知念勇氏の記述より『北谷町史 第一巻 通史編』北谷町教育委員会、2005、P218。

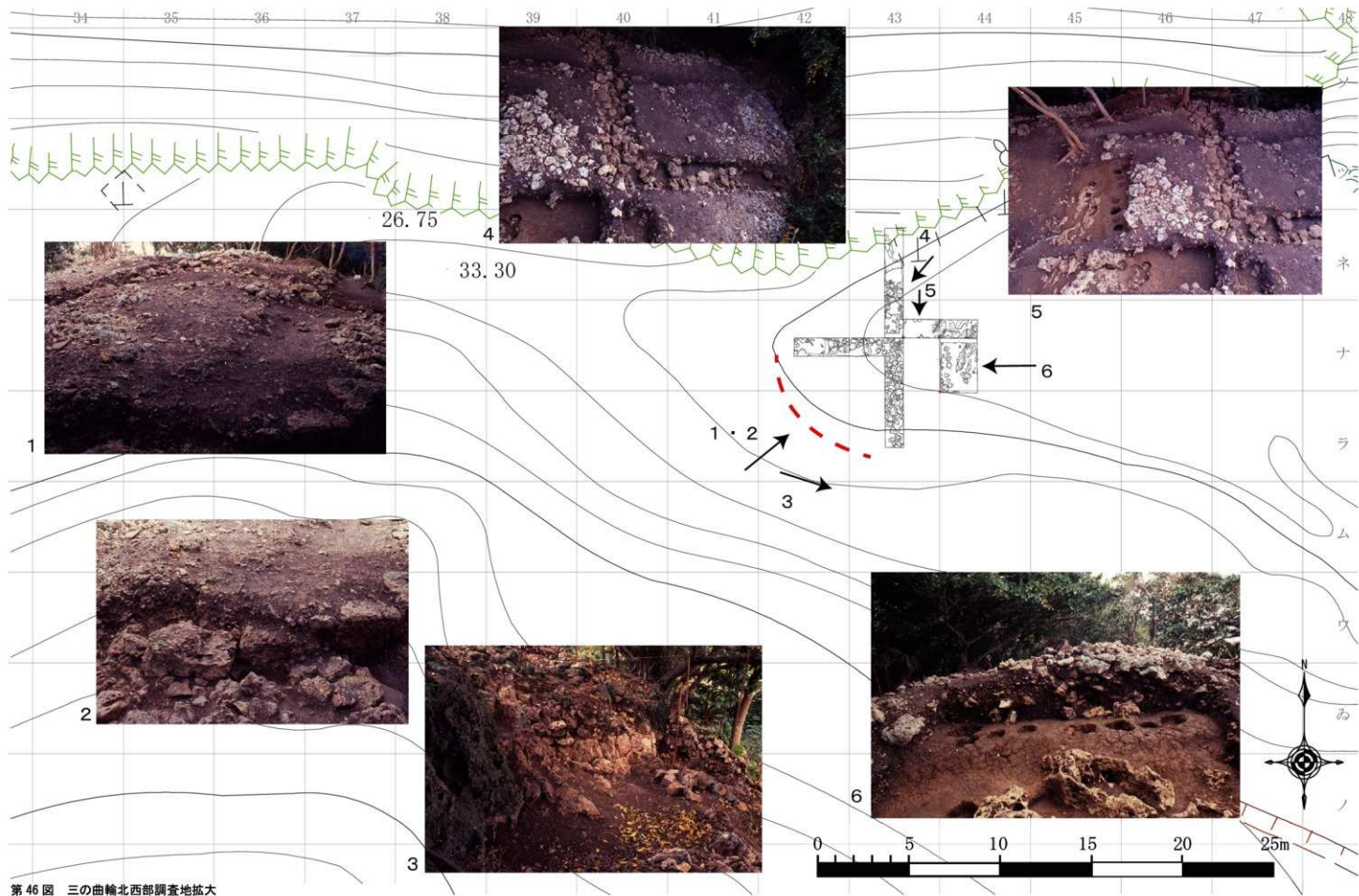
註2. 『北谷城発掘調査概報-第10次発掘調査報告書-』(沖縄国際大学考古学研究室、1994)。

註3. 当時従事していた学生達が残した作業ノート等より。

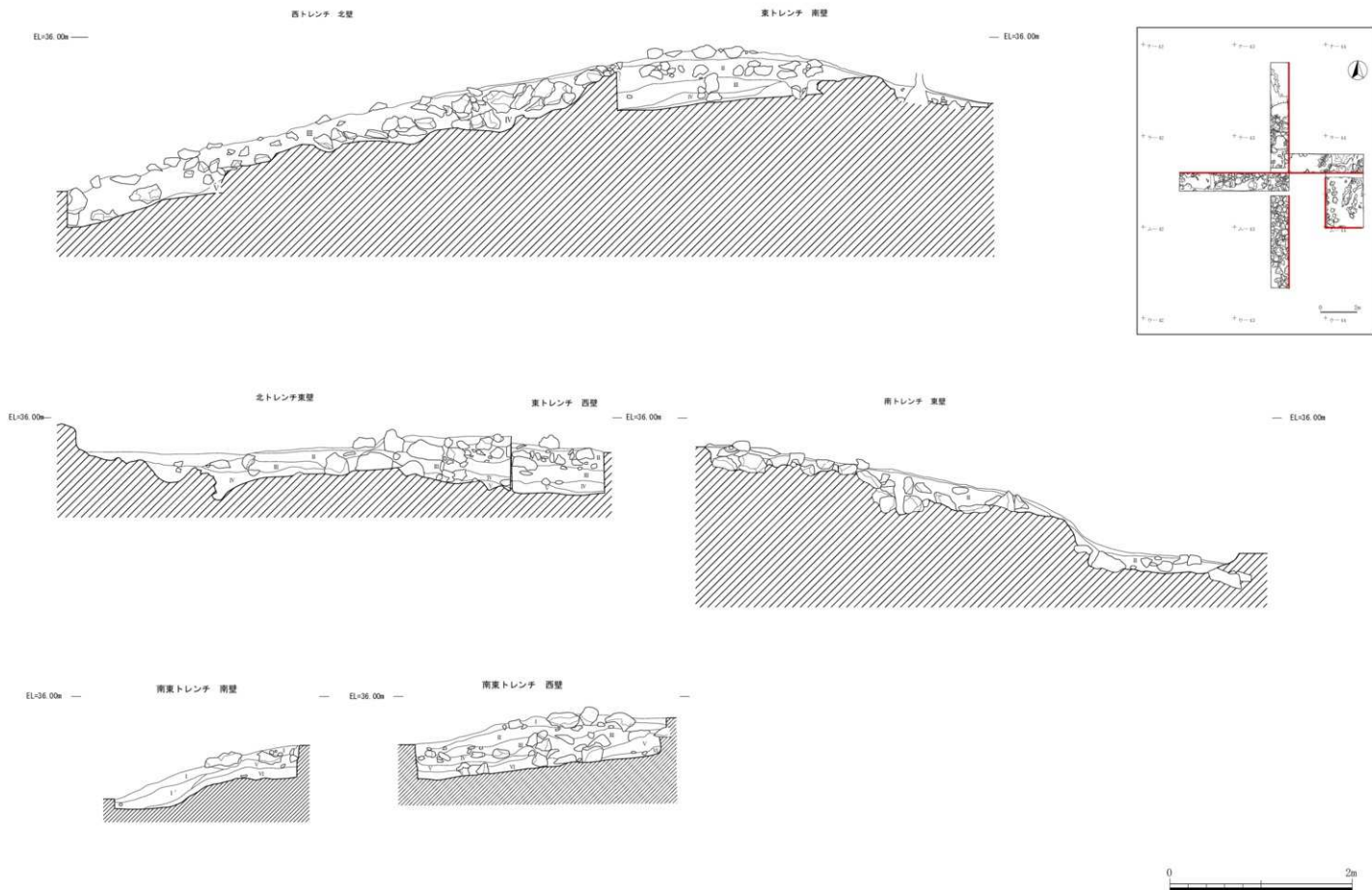
註4. 註1に同じ。



第 45 図 三の曲輪西北部遺構平面



第46図 三の曲輪北西部調査地拡大



第 47 図 三の曲輪北西部断面

6. 四の曲輪

四の曲輪の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第4次	L''-44、S''-44、Y''-47、M'・N'-55、M'・N'-60、O-40、P-32	2m × 2m × 9 = 36 m ²
第11次	サ-54・55	5m × 5m × 2 = 50 m ²

合計面積：約 86 m²

第4次調査においては、9グリッド分の調査を行い、そのうち1箇所からピット群が、2箇所（4グリッド分）から南縁城壁の痕跡が検出された。第11次調査でも南縁城壁が見つかっており、城門から連なっているものであることが分かった。

1) 城壁

城門左側（122頁参照）の城壁内面から直角方向に折れる形で、西へ延びる約10mの布積み石垣を検出した。この石垣検出は、第11次調査期間を過ぎてからのことと思われ、そのためか図面記録が残っていない^{註1}。第4次調査で検出された礎群は、平面図上この延長線上にあるため、一連のものと考えられる。ここから空色ガラス製勾玉が2点出土している。

丘陵南腹の通路からは、城門を通らないと直接この四の曲輪に入れないような構造であったと考えられる。そうであれば、塩川方面に懸門があった方が自然なあり方であるようにも思われる。

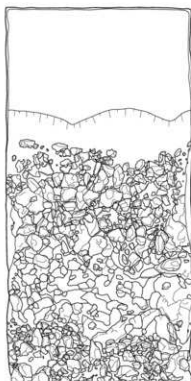
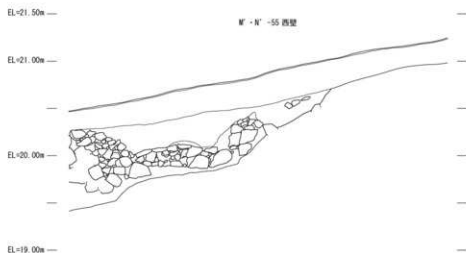
註1. ネガフィルムの順番等からの推察である。



図版 39 四の曲輪南側城壁（南向きに撮影）

2) 礫群

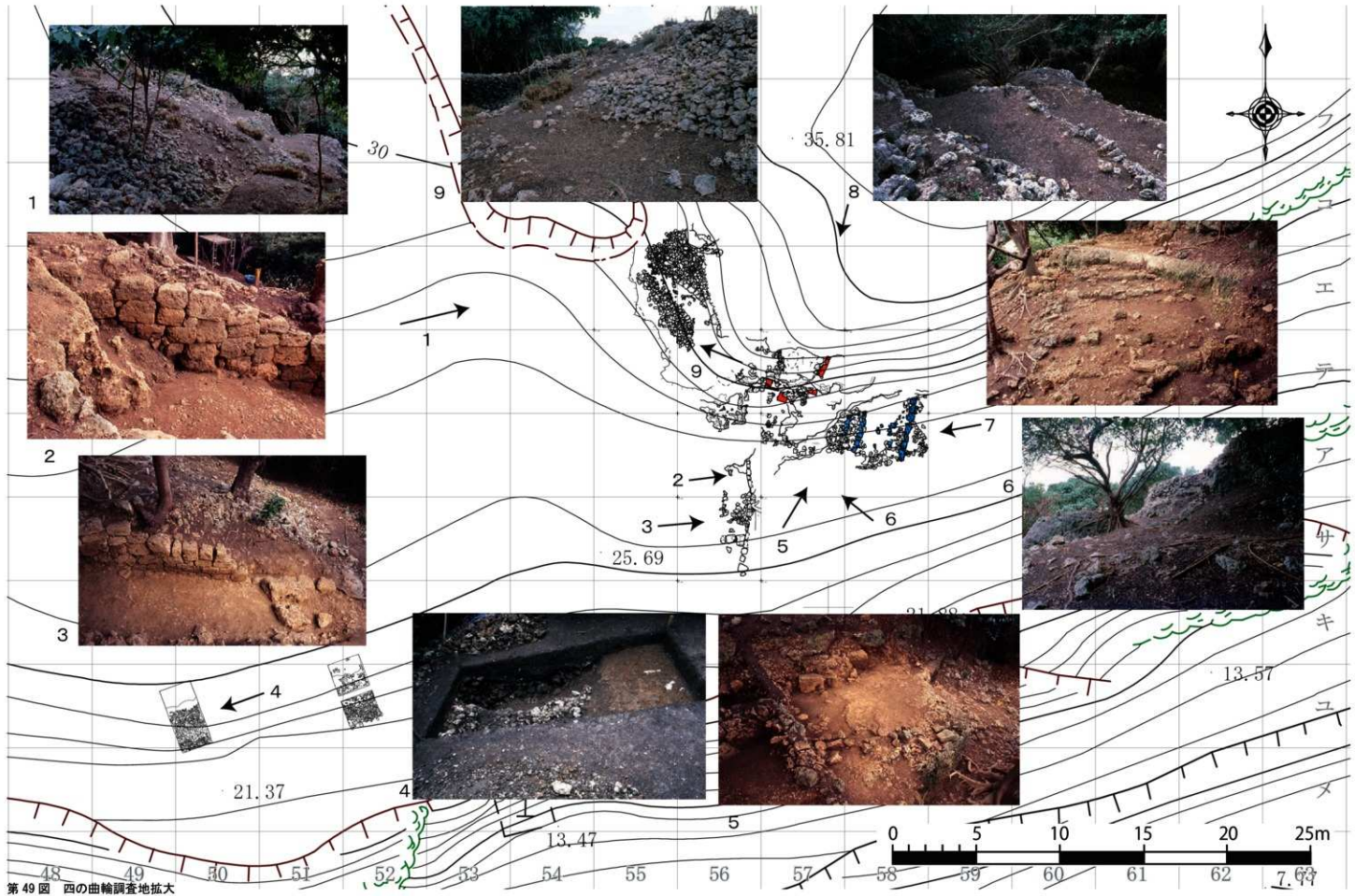
四の曲輪の南側斜面に設定した調査区 (M'・N'-55) から曲輪南縁の石垣と考えられる礫群を検出した。礫群は地山に似た赤～褐色土の上面に広がり、斜面下方にかけて量を増している。礫を覆う黒色土からは中国産陶磁器を主体に沖縄産陶器が数点出土した。同黒色土は基本層序のⅢ a 層に相当するものと考えられる。礫群の上部は後世の耕作によって削平されており、周辺から切石は認められない。



図版 40 M'・N'-55 平面



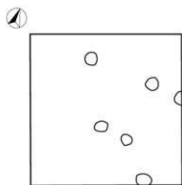
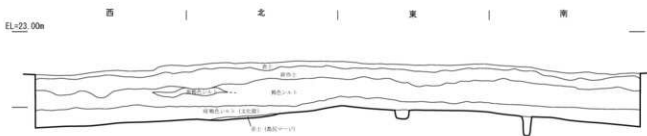
第 48 図 M'・N'-55 平面・断面



第49図 西の曲輪調査地拡大

3) ビット群

掘削を伴う発掘調査では最西となるP-32グリッドの地山面にて、6基のビットを検出した。径は20cm程度、深さは10～25cmの小型を呈する。配置の規則性や帰属時期については不明である。



第50図 P-32平面・断面



図版41 P-32平面



7. 城門付近

城門付近の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第11次	エ-55・56、テ-56・57、ア-56～58、サ-56	5m × 5m × 8 = 200 m ²

※測量のみの面積も含む。

第11次調査区にて、城門跡及び城門に通じる階段状の通路を検出した。城門には門扉があったと考えられ、それを境に東（外）→西（内）という構造になっていた。構造の説明をしやすいするために、門外から見て、①城門右側、②城門左側、③城門外側の通路、④城門内側の通路と分けて記述する。

① 城門右側

テ-57グリッドにおいて、直角の2辺（南面・東面）をなす切石を検出した。南面する2つの切石の間にはL字形の空白があり、門扉のほぞ穴であることが推定された。L字形の向きからすると、門扉は主に外側に開くことも想像される。東面する根石は1つであるが、その延長線上の岩盤上方にも切石列が認められている。これらは城門壁の外面をなすものと考えられる。城門右側は自然岩盤をうまく取り込んだ格好となっている。

② 城門左側

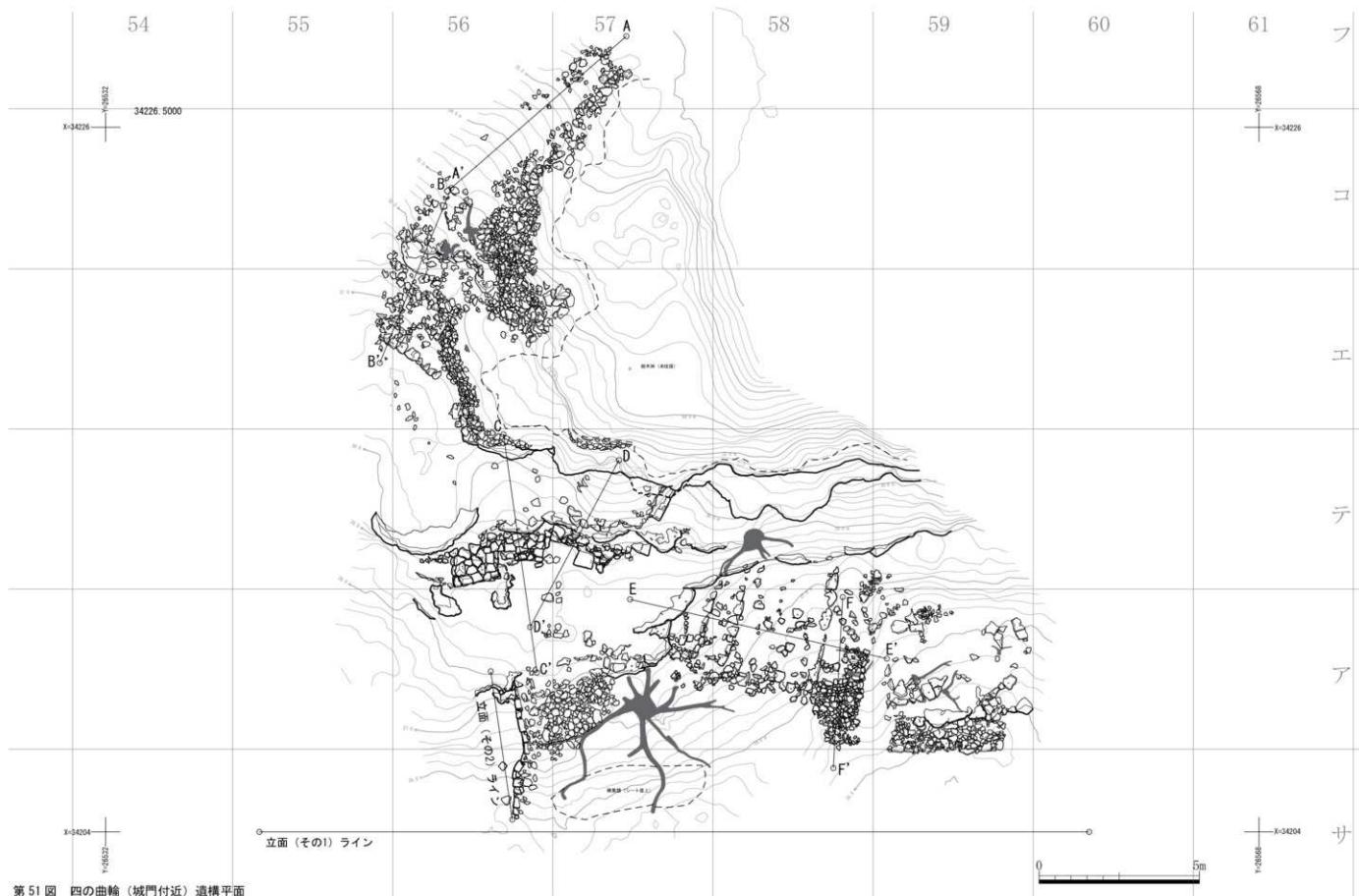
城門右側で見つかった「ほぞ穴」と対になると考えられる襷の空白が、ア-57グリッドにて見つかった。これが妥当であれば、門の内幅は約2mとなる。門は平場に設けられているが、左側はすぐに傾斜地となる。この傾斜地に沿うように、城門の内壁面をなす約7mの布積み石垣が検出された。城門の両側で見つかった城壁の外側・内側から考えると、城門壁は約3mの厚みがあったことになる。

③ 城門外側の通路

ア-57・58グリッドにて、城門に真っ直ぐ登る階段を検出した。城門に最も近い段は自然岩盤を利用しているが、その他は石灰岩やサンゴ石の切石を用いて段を形成している。5段確認された階段は登るにつれて横幅を減じ、最下段は約3.7m、最上段では約2mを測る。中位の段は石灰岩やサンゴ襷の残りが悪く、上位及び下位の段は比較的残りが良い。1段当たりの比高差は15～25cmとなっている。

④ 城門内側の通路

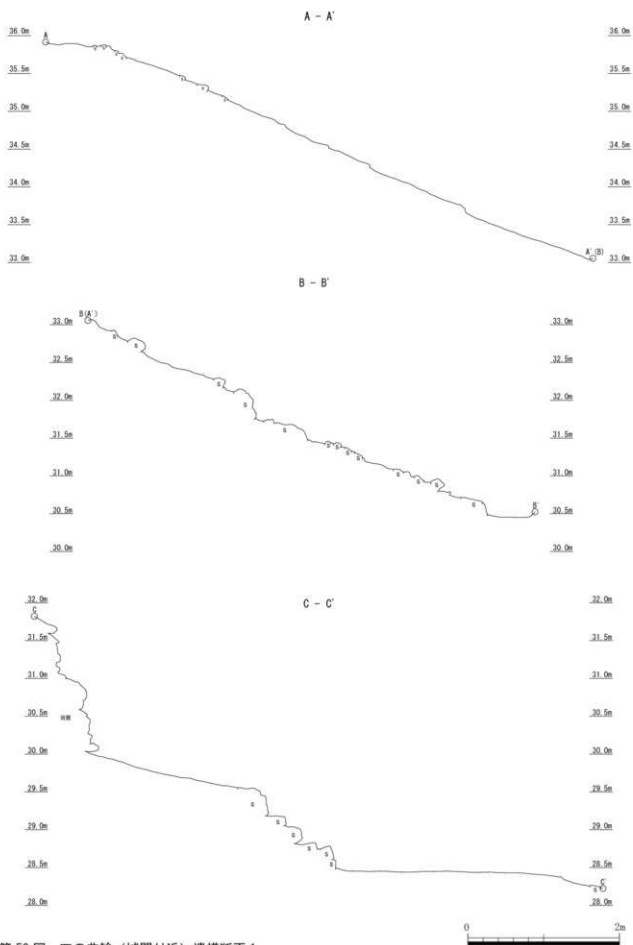
城門から少し離れたエ-55・56グリッドにて、右手方向、つまり三の曲輪方向に登る階段と考えられる石列を検出した。この石列は階段の段部分をなし、平坦面には小礫が敷かれている。一段上にあたる場所は平坦面をなす岩盤であったが、この平坦面の磨減が激しいことから、一連の階段であったことが考えられる。なお、テ-56で整然と積まれている石の下にはブルーシートが確認できることから、近年積まれたものと判断される。



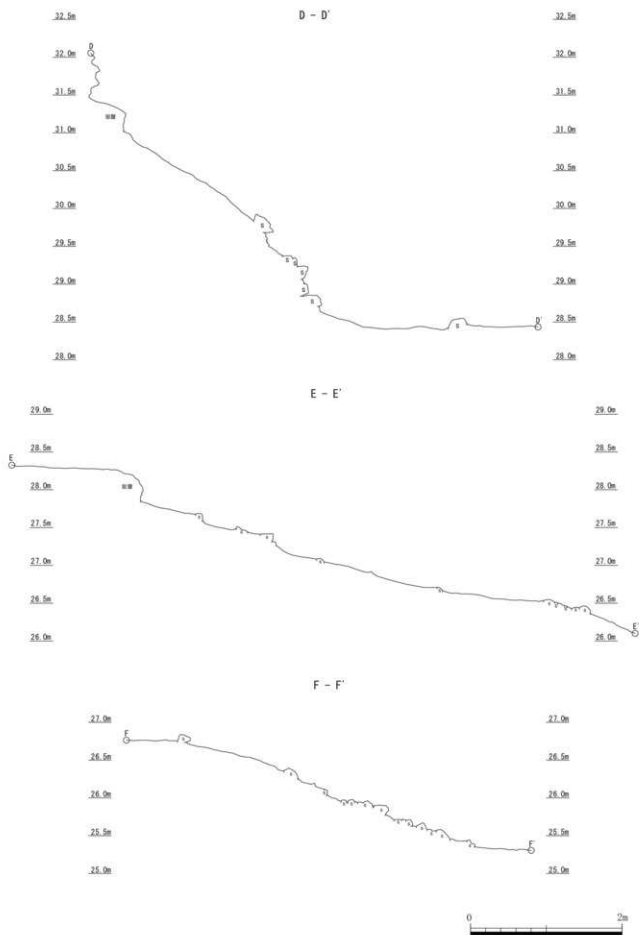
第 51 図 四の曲輪（城門付近）遺構平面



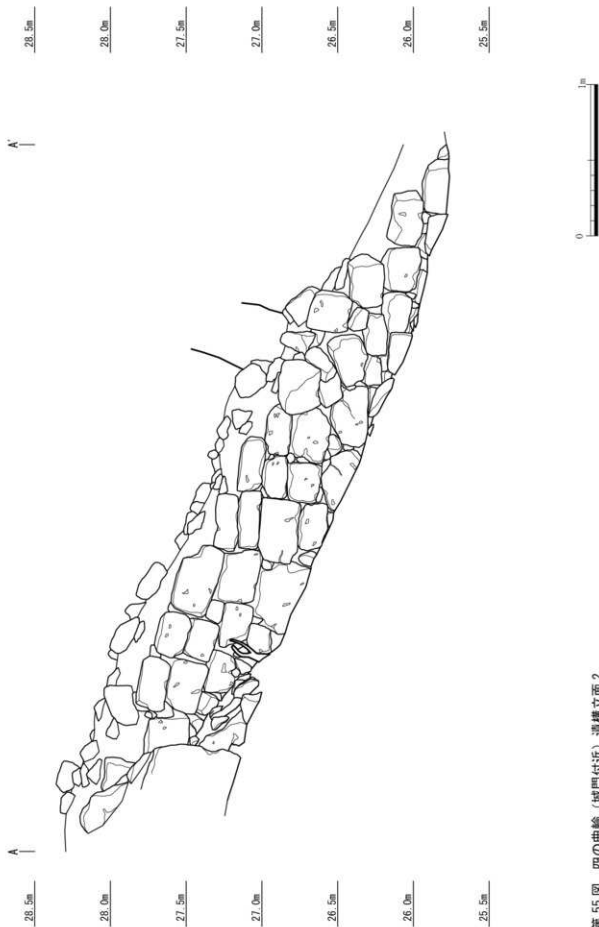
第 52 図 四の曲輪（城門付近）遺構立面 1



第 53 図 四の曲輪（城門付近）遺構断面 1



第 54 図 四の曲輪（城門付近）遺構断面 2



第55図 西の曲輪（城門付近）遺構立面2

8. グスク丘陵南麓（伝道村周辺）

グスク丘陵南麓（伝道村周辺）の調査

調査次	調査実施グリッド	面積
第7遺跡	北区グリッド（N区）、南区グリッド（S区）	5m × 5m × 2 = 50 m ²
第13～16次	no.1～4トレンチ	no.1(5 × 30m)=150 m ² no.2(5 × 18m)=90 m ² no.3・4 約100 m ²

※第13～16次は測量のみの面積も含む。

合計面積：13,830 m²

北谷城第7遺跡と伝道村周辺（第13～16次調査）は、グスクの所在する丘陵南側麓に調査区を設定し、調査を実施した。どちらも報告書は刊行済みであるが、丘陵上で検出された遺構や層序との関連性や、グスクへの登城ルート等の検討のため、北谷城第7遺跡、伝道村周辺の調査において検出された遺構について改めて報告する。

第7遺跡

当該調査区は、1979年、1983年の調査により北谷城遺跡群の第7地区として報告された地域にあたる。調査区はグスクの所在する丘陵のほぼ中央部、南側斜面下部に設定され、戦前の伝道集落にあった「モーグラーヌメー」という広場付近である。

Ⅱ層（調査時、以下同じ）にて屋敷跡の配石が認められた。Ⅴ層以上が近世とされるが、大規模な土砂流入の様相を呈しており、この土砂の上に集落が展開する以前はあまり利用されていなかった場所であることが予想される。Ⅵ・Ⅸ層が文化層とされており、15～16世紀の年代が与えられている。Ⅹ層以下はクチャ（島尻層群の泥岩）層である。

伝道村周辺（第13～16次調査）

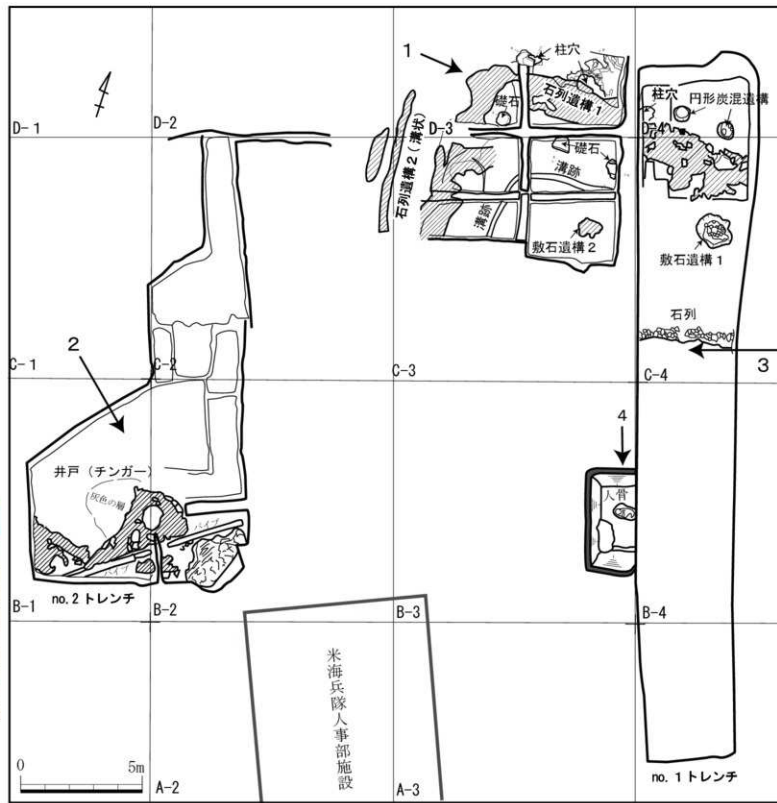
当該調査区は、グスク丘陵の南東麓に位置していた古集落である伝道村の所在していた場所にあたる。伝道は玉代勢、北谷とあわせて「三箇字」と呼称される古集落のうちのひとつである。当地には村割譲以前から集落が存在し、それは北谷城を支える「城下の村」であったと想像される。そしてこの村からグスクに至る「道」が複数あったと伝えられており、当該調査ではこの「道」の存在を確認することが主要な目的となった。

以下、第13～16次調査において確認された遺構について概略を述べる。詳細については、平成22年に刊行された『北谷城』（北谷町教育委員会）を参照されたい。

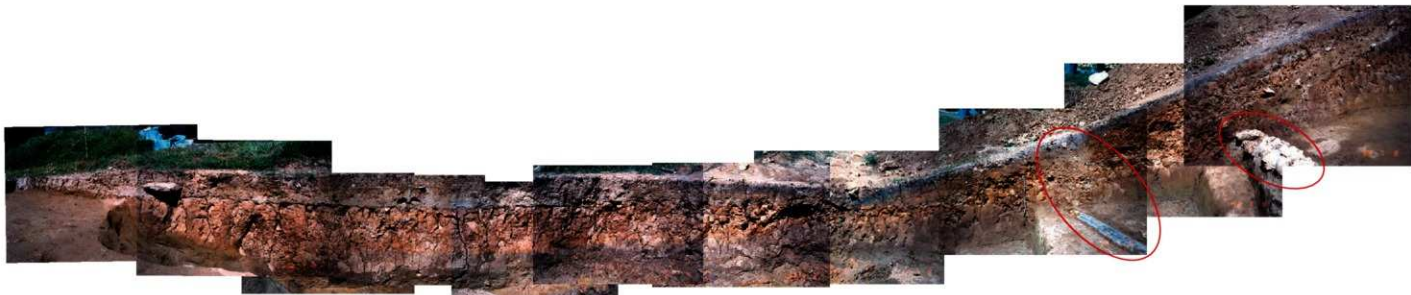
①建物跡遺構

C・D-3グリッド、C-4グリッドにかけて、柱穴及び礎石の配列が確認された（第56図参照）。6本柱の建物跡と想定されるが、C-3グリッド南東側で検出された敷石遺構2が礎石と同時期の遺構とみられ、この遺構が建物跡に伴うものとすれば9本柱の建物であった可能性がある。本来傾斜面であった場所を削平し、平坦面を形成している。

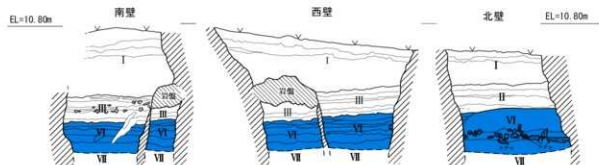
建物の性格は不明であるが、検出された位置等を考慮すると城門に上がる際に使用する施設や、祭祀に関連する施設などが想定される。



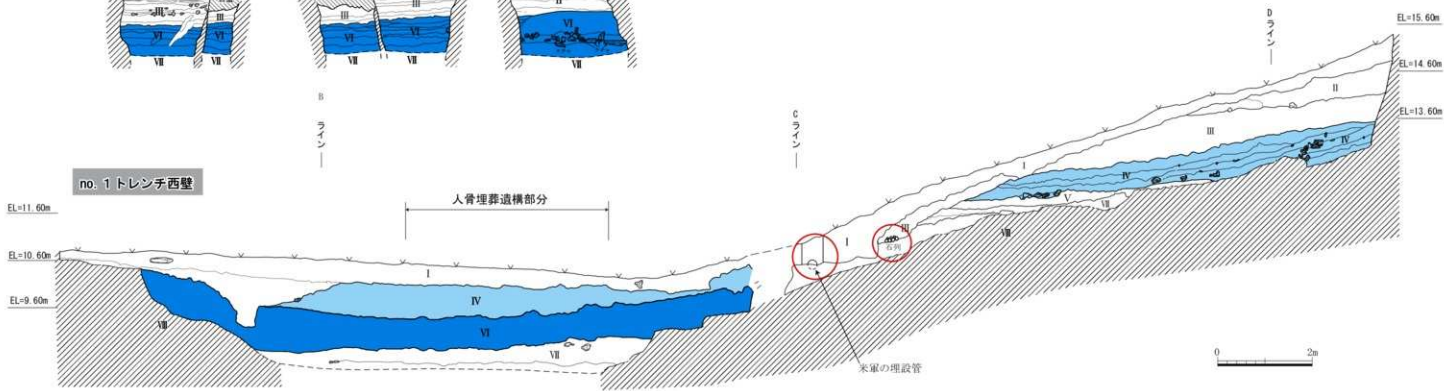
第 56 図 グスク丘陵南麓調査地拡大



人骨埋葬遺構 (南・西・北壁)

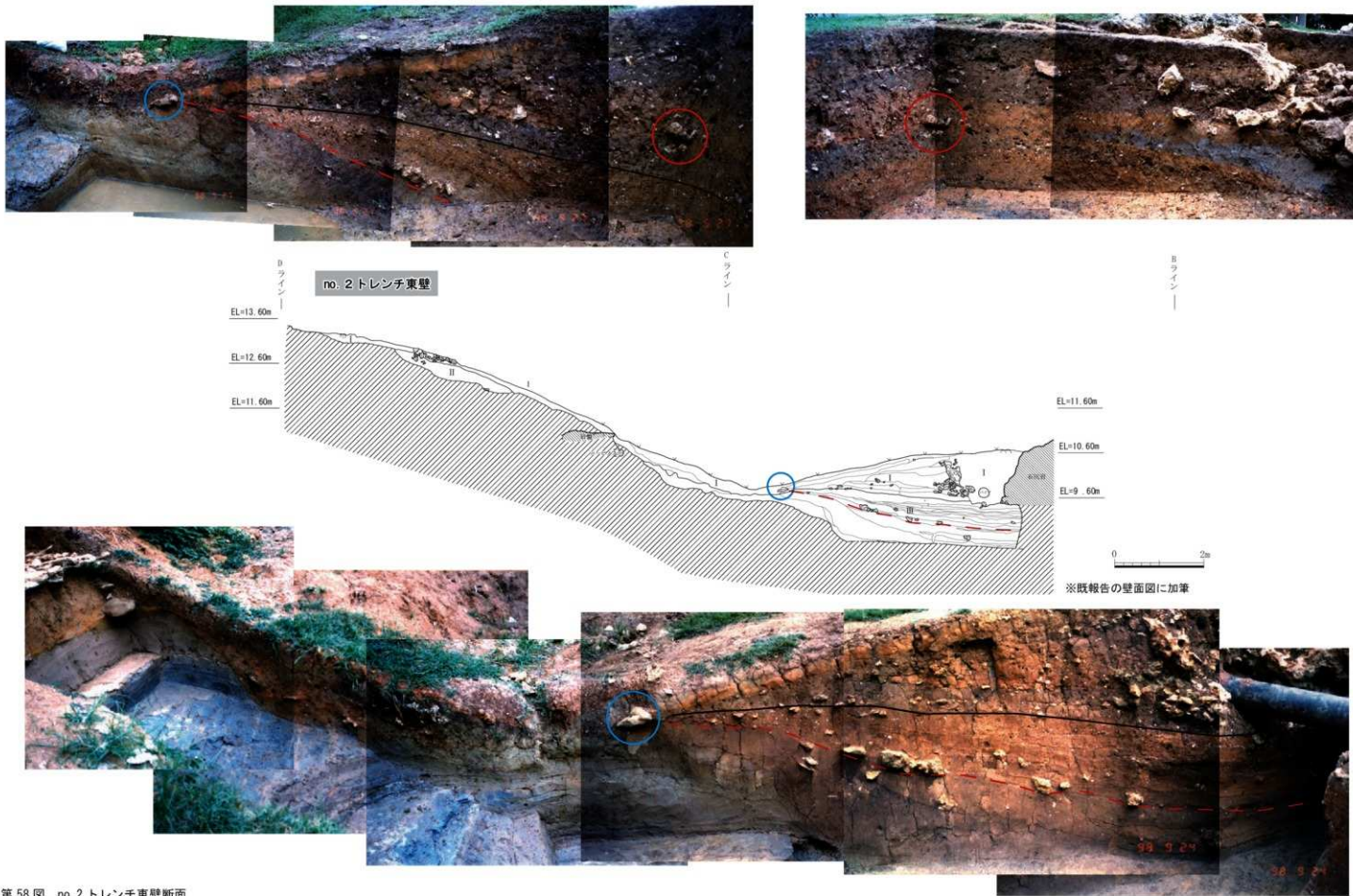


no. 1 トレンチ西壁



第57図 no. 1 トレンチ西壁・人骨埋葬遺構断面

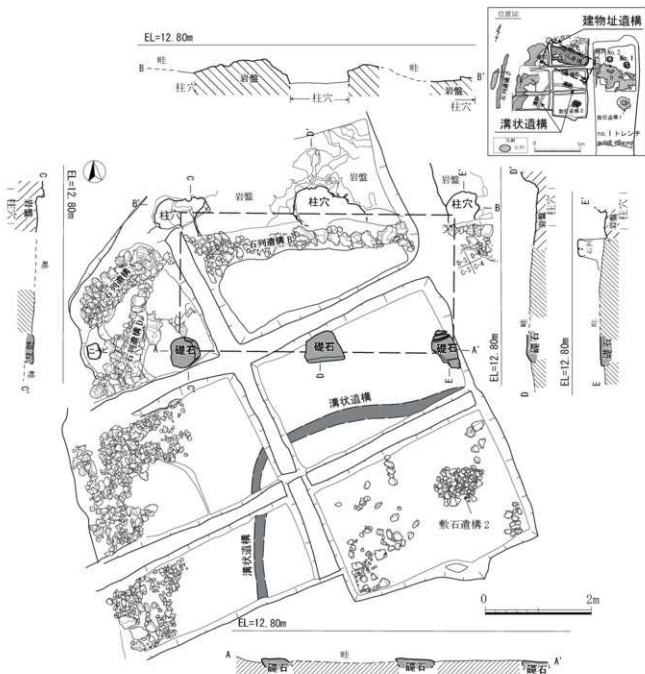
※既報告の壁面図に加筆



第 58 図 no. 2 トレンチ東壁断面

②石列遺構

石列遺構1はC-3グリッド(南)からD-3グリッド(北)へ直進し、そこから直角に折れ、D-4グリッド(東)に延びている(第59図)。検出状況から、前述の建物跡が利用されなくなった後に造られたものとみられる。石列は幅約0.8cm、地山(赤土)より積まれ、少なくとも2段有する。切石は利用されず、琉球石灰岩の礫を積み上げている。

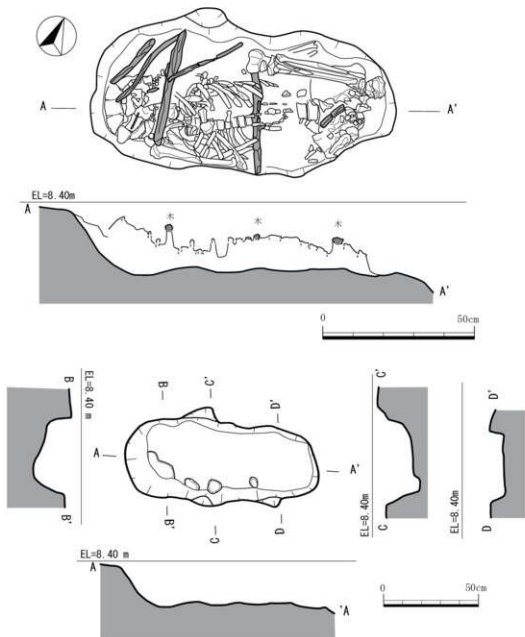


第59図 建物址遺構と溝状遺構平面・断面

③土墳墓

no. 1 トレンチ B-3・4 グリッドの境中央部で1基検出された。遺構は東西方向に溝状を呈する地形上であり、伝道集落の東側に位置している。平面は楕円形状を呈し、長軸1m、短軸0.45m、深さは約0.15～0.2mを測る。頭部は北西を向き、仰臥屈葬で埋葬されている。埋葬人骨には木

片（棒）が伴っており、肩部に1本、左腕側に1本、腰部に1本配置されていた。出土状況から両肩や足の屈伸を固定するためのものと想定される。

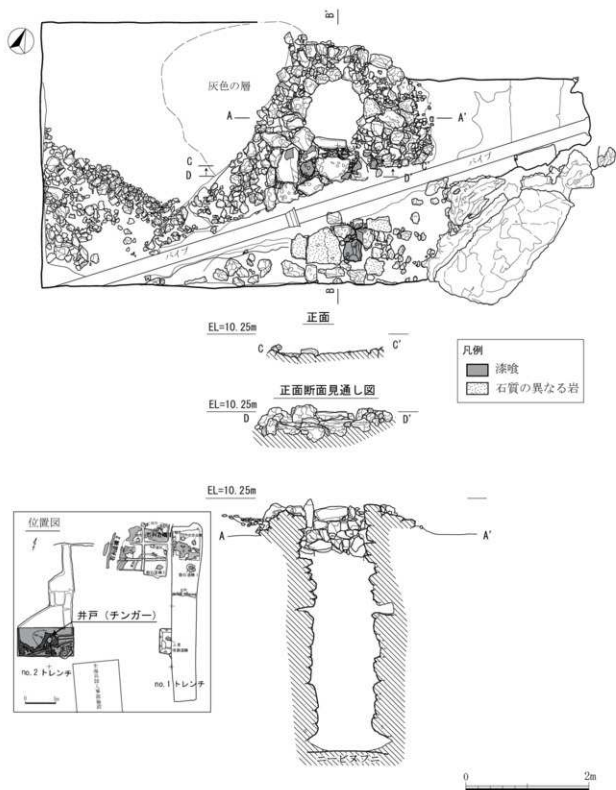


第60図 土墳墓平面・断面（検出及び完掘）

④井戸（チンガー）

no. 2 トレンチ (B-1・2) の南側で検出された。井戸南側の洗い場とみられる平場などは米軍の埋設管設置によって破壊されている部分もあったが、井戸の縁石等は残存しており、井戸の原形が確認できる状況であった。井戸縁の平面形は円形を呈し、直径約1mを測る。井戸の深さは約4mで、内部は上部より1.8m下までは切石（琉球石灰岩）、1.8m以下から床面0.2m上までは大きめのサンゴ石灰岩が積まれていた。床面はクチャ（島尻層群の泥岩）層である。

井戸周辺や内部から出土した遺物から、主として戦前に利用されていた井戸と推測される。調査後は、伝道郷友会と在沖海兵隊施設技術部の協力を得て現地に復元された。



第61図 井戸 (チンガー) 平面・断面

1 土器

土器は総数 14,457 点出土した。近現代の耕作の影響によるものが全体的に小破片が多く、第 65 図 58 以外に全形を窺える資料は得られていない。器形や胎土、混入物、文様等により 1～3 類に分類した。1 類は貝塚時代前期の土器、2 類は貝塚時代後期の土器、3 類はグスク土器にあたる。小破片及び 1～3 類に分類できない資料は不明とした。器形や文様構成、製作技法等が窺える特徴的な資料を第 62～65 図に、集計及び観察表を表 7・8 に示す。

1 類 (第 62 図 1～図 4)

77 点出土した。胎土は砂質で粒子の大きい混入物を多く含む。口縁部には刻目突帯や肥厚口縁に連続刺突を施すものが見られる。

図 1 は外傾する口縁部に刻目を持つ突帯が貼付され、胎土に 1mm 大の砂や石英粒を含み器色は赤褐色を呈する。器壁は 5mm と薄手である。面縄前庭式の口縁部資料で、北谷城からの確認は初めてとなる。三の曲輪北西ナ-43 出土。

図 2 は外傾する肥厚口縁に連続刺突文を施す。口唇部は平坦。胎土に 1～5mm 大の砂粒を含み器色は赤褐色を呈する。室川式の口縁部である。出土地不明。

図 3 は三角形に肥厚し、口唇部に連続刺突文を施す。口縁下に不明瞭な窪みが認められる。胎土に 1～3mm 大の砂粒を含み器色は褐色を呈する。室川式の口縁部である。出土地不明。

図 4 は平底の底部資料で底径 9.8cm を測る。胎土に 1～3mm 大のチャートや石英、黒色粒を密に含み、焼成が良く堅緻である。器色は赤褐色を呈する。室川式の底部か。三の曲輪 W-77 III b 層出土。

2 類 (第 62 図 5～第 63 図 42)

4,264 点出土した。胎土は泥質が多く細砂や赤色粒を含む。1 類に比して混入物は小さく、量も少ない。器種には甕と壺が確認され、口唇部や口縁部(外器面)に沈線文や突帯文が施される。口縁部の形状は、外反、外傾、直口、内傾、内湾がある。底部形状は、胴下部から底部にかけてすぼまり底部で外へ開く「くびれ平底」と呼ばれる底部が主体で、その他尖底に近い平底が僅かに認められる。近年では、器種、文様、底部形態に着目してくびれ平底土器群の編年を整理した研究が注目される(與嶺 2015)。本項では與嶺分類を参考に、口縁部の形状、文様の種類、底部の形状(底径、内底における平坦面の広さ、底厚)に着目し、特徴的な資料を第 62 図 5 から 42 に図示した。

図 5 は外傾する口縁部で口唇部に刻目文が施される。刻目間は 7～8mm。胎土は砂質で器色は外面が橙色を内面が灰色を呈する。三の曲輪 Z-86 I 層出土。

図 6 はやや内傾する口縁部で口唇部は平坦。直線的な沈線文を縦横に施す。胎土は砂質で、白色の微細鉱物を含む。器色は明赤褐を呈する。東丘陵ヨ-82 III a? 層出土。

図 7 は内傾する口縁部で三角形に肥厚する。口唇部は平坦。直線的な沈線文を施す。胎土は泥質でナデ調整が丁寧である。器色は明赤褐を呈する。東丘陵ヨ-83 III a? 層出土。

第 7 表 土器 出土量

器種	1 類	2 類	3 類	不明	小計
一の曲輪	1.1	2	10	36	49
1.1b	1	31	29	189	250
器壁	7	9	86	114	
胎土	1	13	10	43	
小計	1,272	201	279	2,354	
二の曲輪	1.1	26	61	69	156
1.1b	7	87	86	77	237
器壁	1	63	295	261	621
胎土	39	4	1	23	
小計	1,457	267	1,468	2,639	
三の曲輪	1	25	76	2	118
1.1	9	36	36	67	
1.1b	6	132	286	636	1,260
器壁	11	58	28	190	
胎土	25	69	27	121	
小計	4	88	412	267	866
器壁	69	662	127	2,148	
胎土	12	37	43	110	
小計	9	28	33	132	
小計	10	272	1,134	1,459	2,905
三の曲輪	1.1		2	6	8
1.1b	2	3	3	2	10
胎土			1		1
小計			6	2	8
北西	小計	1	8	11	20
小計	2	14	16	27	59
四の曲輪	1.1	14	43	32	129
1.1b	95	1,122	102	1,319	
器壁		14		41	
胎土		36		36	
小計	13	126	10	306	
小計	0	122	1,321	164	1,607
東丘陵	1.1	8	234	7	249
1.1b		33	33	20	96
器壁	11	655		236	872
胎土	3	4913	2	213	6187
小計	352	3	912	1,264	
小計	22	1,677	12	1,843	3,554
小計	39	290	131	650	1,150
器壁	77	1,264	1,186	5,936	11,457

図8は直口の口縁部で鞍上突帯を2条添付する。突帯貼付後に横位のナデ調整が施され、内面が比較的明瞭で突帯が潰れ気味である。胎土は砂質で1mm大の赤色粒の他、ガラス光沢を持つ無色、黒色の微細粒(角閃石か?)を含む。器色は明赤褐色を呈する。三の曲輪表採。

図9は外傾する口縁部で山形突起が施される。胎土は泥質。ナデ調整が丁寧に施され、器色は明赤褐色を呈する。二の曲輪Y-99表採。

図10は外反する口縁部で口唇部は平坦。平坦時に粘土が押しつぶされ内壁で陵が生じている。胎土は泥質で1mm前後の赤色粒の他、ガラス光沢を持つ微細な黒色粒(角閃石か?)を含む。器色は外面が橙色を内面が黄褐色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図11は内傾する口縁部で口唇部は舌状。焼成不良の為か断面と内面の一部は暗灰黄色となり、1~2mm大の白色粒の混入が明瞭となる。胎土は砂質で器色は橙色を呈する。三の曲輪T-82 I b層出土。

図12は直口の口縁部で胴部へストレートに移行する。直径5mmの補修孔が口縁付近に1つ見られる。胎土は泥質で器壁は薄い。器色は外面が明赤褐色を内面にぶい黄褐色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図13は外傾する口縁部で外器面の頸部は横位のナデ、胴部は縦位のハケ目調整痕が残る。内器面は横位のハケ目がナデ消されるも徹底していない。胎土は泥質で焼成が良く硬質である。器色はにぶい黄褐色を呈する。出土地不明。

図14は外反する口縁部である。胎土は砂泥質で1mm大の赤色粒を含む。器色は橙色を呈する。東丘陵ヨ-83 III a ?層出土。

図15は外反する口縁部で口径26.6cm。外器面はハケ目調整後ナデ消し。胎土は泥質で1mm大の白色、赤色粒を含む。焼成が良く硬質。器色は褐色を呈する。東丘陵ヨ-82 III a ?層出土。

図16は外反する口縁部でハ字状の沈線文が僅かに認められる。口径は12.8cm。器色は褐色を呈し、ナデが丁寧に施され光沢を帯びる。一の曲輪ム-71出土。

図17は外反する口縁部で口唇部は平坦。胎土は泥質で器色は明赤褐色を呈する。三の曲輪W-77 III b層。

図18は外反気味の壺の口縁部で口径は5.8cm。胎土は泥質で1mm程度の赤色粒を含む。器色は橙を呈する。東丘陵ヨ-83 III a ?層出土。

図19は外反する壺の口縁部で口径は10.0cm。胎土は泥質でガラス光沢を持つ無色、黒色の微細粒(角閃石か?)を含む。器色はにぶい黄褐色を呈する。東丘陵ヨ-83 III a ?層出土。

図20は外傾する壺の口縁部で口径は7.8cm。横位に2条、斜位に1条の沈線を施したのち、横位の沈線を2条施す。横位の沈線間は9mm幅を測る。ナデ調整が丁寧に施される。胎土は泥質で器色は黄褐色を呈する。東丘陵ヨ-83 III a ?層出土。

図21はくびれの強い底部で底径は5.6cm。内底面は平坦をなし、最薄部の底厚は1.0cm。外器面の一部には磨きが施されやや光沢を持つ。胎土は泥質。器色は外面がにぶい黄褐色を内面が明赤褐色を呈する。一の曲輪ウ-71出土。

図22はくびれの強い底部で底径は6.9cm。内底面は平坦になると想定される。最薄部の底厚は0.7cm。全体的に薄手である。胎土は砂質で器色はにぶい黄褐色を呈する。一の曲輪V-115 I b層出土。

図23はくびれの強い底部で底径は6.4cm。内底面は平坦をなし、最薄部の底厚は0.7cm。外器面には成形時の指頭痕が未徹底にナデ消される。胎土は砂泥質で、ガラス光沢を持つ黒色の微細粒(角閃石か?)や赤色粒を多く含む。器色は明褐色を呈する。一の曲輪ウ-71出土。

図24はくびれの強い底部で底径は6.4 cm。内底面は平坦をなし、最薄部の底厚は0.4 cm。外底面は磨きが施される。胎土は泥質で1~2 mm大の赤色粒の他、白色粒を僅かに含む。器色は外面がにぶい黄褐色を内面が橙色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図25はくびれの強い底部で底径は4.5 cm。内底面は平坦をなし、最薄部の底厚は0.3 cm。非常に薄手である。胎土は泥質。器色は橙色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図26はくびれの弱い底部で底径は8.0 cmと広い。内底面は平坦をなし、最薄部の底厚は1.0 cm。胎土は泥質で1~2 mm大の白色粒を僅かに含む。器色は外面がにぶい黄褐色を内面が橙色を呈する。二の曲輪R-97~98 I b層出土。

図27はくびれの弱い底部で底径は8.4 cmと広い。内底面は平坦をなし、最薄部の底厚は0.7 cm。胎土は泥質で器色は明赤褐色を呈する。三の曲輪T-84 I b層出土。

図28はくびれの弱い底部で底径は5.2 cm。内底面は平坦で最薄部の底厚は1.0 cm。外底面端部に指頭痕が明瞭に残る。胎土は泥質で1~2 mm大の赤色粒を含む。器色は橙色を呈する。二の曲輪0-97~99 I a層出土。

図29はくびれの弱い底部で底径は5.4 cm。内底面は中央部がやや盛り上がる。最薄部の底厚は1.1 cm。外器面には胴下部と底部の接着痕が明瞭に残る。胎土は砂質で1 mm大の白色、灰色粒を多く含む。器色は明赤褐色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図30はくびれの弱い底部で底径は6.2 cm。内底面は中央部がやや盛り上がる。最薄部の底厚は1.1 cm。外底面に直径2 cm大の粘土塊を2か所に貼付する。胎土は砂泥質で、微細な白色、赤色粒を含む。器色はにぶい黄褐色を呈する。三の曲輪T-84 I b層出土。

図31はくびれの弱い底部で底径は6.3 cm。内底面は中央部がやや窪む。最薄部の底厚は1.5 cmと厚手である。胎土は砂質で、1~3 mm大の白色、赤色粒の他、ガラス光沢を持つ微細な無色、黒色粒（角閃石か？）等を多く含む他とは様相が異なる。器色は外面が赤褐色を内面が褐色を呈する。一の曲輪ラ-71出土。

図32はくびれの強い底部で底径は6.0 cm。内底面は中央部がやや窪む。最薄部の底厚は1.1 cmである。胴部内面にはハケ目調整痕が明瞭に残り、調整後に内底面へ粘土を継ぎ足してナデ調整を行っている。胎土は砂泥質で、1~2 mm大の白色、赤色粒の他、ガラス光沢を持つ微細な無色粒を含む。器色は外面が明赤褐色を内面が赤黒色を呈する。三の曲輪T-82 I b層出土。

図33はくびれの強い底部で底径は6.4 cm。内底面は中央部が窪む。最薄部の底厚は1.0 cmである。本資料は踏査調査時に岩陰内で表採したものである。表面は石灰で薄くコーティングされており、オリジナルな器表面の観察はほとんどできない。ワ-96岩陰内表採。

図34はくびれの強い底部で底径は5.4 cm。内底面は中央部が窪む。最薄部の底厚は1.3 cmである。外器面には成形時の指頭痕が未徹底にナデ消されている。胎土は泥質で1~2 mm大の白色、赤色、黒色粒を含む。器色は橙色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図35はくびれの弱い底部で底径は5.2 cm。内底面は中央部が窪む。最薄部の底厚は1.4 cmと厚手である。胎土は泥質で1 mm大の白色、赤色粒を含む。器色は外面が明赤褐色を内面が灰黄色を呈する。三の曲輪A'-85 II a層出土。

図36はくびれの弱い底部で底径は6.0 cm。内底面は中央部がやや窪む。最薄部の底厚は1.5 cm。断面から製作過程が推測でき、外底面→胴下部→内底（1段目）→内底（2段目）の順に粘土を重ねている。胎土は泥質で1~4 mm大の白色粒を含む。器色は赤褐色を呈する。出土地不明。

図37はくびれの強い底部で底径は5.3 cm。内底面は中央部が著しく盛り上がる。最薄部の底厚

は0.9 cmである。外器面には5 mm程の窪みを持つ指頭痕が見られる。胎土は泥質で1 mm大の赤色粒を含む。器色は外面が橙色を内面ににぶい黄橙色を呈する。一の曲輪ム-72出土。

図38はくびれの弱い底部で底径は4.6 cm。内底面は中央部が盛り上がる。最薄部の底厚は1.2 cmである。胎土は泥質で1 mm大の白色、赤色粒を含む。器色はにぶい黄橙色を呈する。一の曲輪ウ-71出土。

図39はくびれの強い底部で底径は2.8 cm。内底面は中央部がやや窪む。最薄部の底厚は1.3 cmと底径に比して厚手である。胎土は泥質で1 mm大の赤色粒を含む。器色はにぶい黄橙色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図40はくびれの弱い底部で底径は3.0 cm。内底面は中央部がやや窪む。最薄部の底厚は0.8 cmである。内器面にはハケ目調整痕が明瞭に残る。胎土は泥質で1 mm大の白色、赤色粒を含む。器色は外面がにぶい黄褐色を内面が褐灰色を呈する。出土地不明。

図41はくびれない平底で底径は3.4 cm。内底面は平坦面をなすと推測される。最薄部の底厚は1.0 cmである。内器面にはハケ目調整痕が未徹底にナデ消されている。胎土は砂質で1 mm大の白色、赤色粒の他、ガラス光沢を持つ微細な無色粒を含む。器色は外面が明赤褐色を内面が橙色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図42は尖底に近い平底で底径は2.8 cm。内底面は中央部が窪む。最薄部の底厚は1.2 cmである。胎土は砂泥質で、1 mm大の白色、赤色粒の他、ガラス光沢を持つ微細な黒色粒（角閃石か？）を含む。器色は外面が明赤褐色を内面が明黄褐色を呈する。一の曲輪ム-72出土。

3類

4,186点出土した。器種には甕、碗のほか小型の鍋（？）が認められた。本類は、混入物に砂粒を多く含むものや砂粒が欠落し器表面がアバタ状となる特徴を有する。北谷城から出土したグスク土器は全体的に粗造で、把手や鐳付き資料は無い。古手のグスク土器には滑石を混入するものや器面調整が丁寧に施される傾向があるが、これら古手の様相を有する土器はほとんど見られない（滑石混入の胴部片は3点確認される）。器形と器面調整による分類（具志堅2014）を参考に、特徴的な資料を第64図43から63に図示した。

図43は内湾する口縁部で口唇部は舌状、口径は10.6 cmを測る。胎土は泥質で器面調整時に混和材が引きずられた痕が外器面に認められる。微細な白色、赤色粒の他、ガラス光沢を持つ無色粒（角閃石か？）を含む。器色はにぶい黄褐色を呈する。三の曲輪W-77 III b層出土。

図44は頸部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部から口唇部までが長い口縁部である。口唇部は丸く口径は27.6 cm。胴部の張りは弱い。内器面ではハケ目調整後ナデ消すも未徹底である。胎土は泥質で1～5 mm大の砂粒を含む。器色は橙色を呈する。三の曲輪B'-81 III e層出土。

図45は頸部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部から口唇部までが短い口縁部である。口唇部はやや平たく口径は12.0 cm。胴部の張りは弱い。胎土は泥質で1 mm大の砂粒や赤色粒を含む。器色は橙色を呈する。三の曲輪B'-81 I b層出土。

図46は頸部から外反して屈曲し、屈曲部から口唇部までが短い口縁部である。口唇部は丸く口径は22.4 cm。胴部の張りは弱い。胎土は泥質で、器面調整時に混和材が引きずられた痕が外器面で顕著である。混入物の多くは欠落し1～2 mm大のアバタが目立つ。器色は灰色を呈する。三の曲輪T-82 I b層出土。

図47は頸部から直口して屈曲し、屈曲部から口唇部までが短い口縁部である。口唇部は舌状で

口径は17.2 cm。胴部の張りは強い。胎土は泥質。混入物の多くは欠落し1～2 mm大のアバタが目立つ。器色は外面がにぶい黄褐色を内面が明赤褐色を呈する。三の曲輪 T-82 I b 層出土。

図48は頸部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部から口唇部までが長い口縁部である。口唇部は丸く口径は20.6 cm。胴部の張りは強い。器表面はナデ調整が施されている。胎土は泥質で1 mm大の砂粒を含み、アバタ状である。器色は橙色を呈する。三の曲輪 B'-81 III e 層出土。

図49は頸部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部から口唇部までが長い口縁部である。口唇部は丸く口径は15.8 cm。胴部の張りは強い。内器面ではハケ目調整後ナデ消すも未徹底である。胎土は泥質で1 mm大の砂粒を含み、アバタ状である。器色は外面が橙色を内面が明黄褐色を呈する。三の曲輪 W-77 III b 層出土。

図50は頸部から外反気味に屈曲し、屈曲部から口唇部までが長い口縁部である。口唇部は丸く口径は18.2 cm。胴部の張りは強い。内器面はナデが未徹底で指頭痕が残る。胎土は泥質で1～2 mm大の砂粒を含む。器色は外面が橙色を内面がにぶい黄褐色を呈する。四の曲輪 N'-60 I b 層出土。

図51は頸部から直口気味に屈曲し、屈曲部から口唇部までが長い口縁部である。口唇部は舌状で口径は19.1 cm。胴部の張りは強い。内器面ではハケ目調整後ナデ消すも未徹底である。胎土は砂質で1 mm大の白色、赤色粒の他、ガラス光沢を持つ微細な黒色粒（角閃石か？）を含む。2類の胎土に類似し締りが良く硬質である。器色は橙色を呈する。三の曲輪 W-77 III b 層出土。

図52は頸部から外反気味に屈曲し、屈曲部から口唇部までが長い口縁部である。口唇部は丸く口径は22.4 cm。胎土は砂質で1 mm大の砂粒、赤色粒の他、ガラス光沢を持つ微細な黒色粒（角閃石か？）を含む。2類に類似する胎土があり締りが良く硬質である。器色は橙色を呈する。三の曲輪 W-77 III b 層出土。

図53は頸部が「く」の字状に弱く屈曲し、屈曲部から口唇部までが短い口縁部である。口唇部はやや平たく口径は15.0 cm。ナデ調整が丁寧に施されている。胎土は泥質で1 mm大の砂粒を多く含む。器色は黒褐色を呈する。四の曲輪 N'-60 I b 層出土。

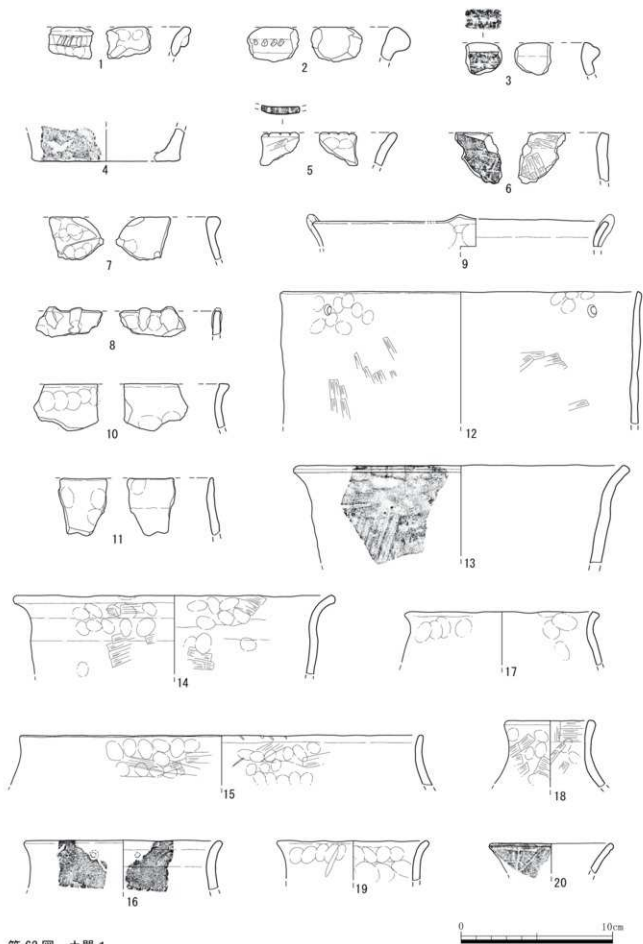
図54は頸部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部から口唇部までが極端に短い口縁部である。口唇部は舌状で口径は7.4 cm。胎土は砂泥質で1 mm大の砂粒や赤色粒の他、ガラス光沢を持つ微細な無色粒を含む。器色は橙色を呈する。四の曲輪 M'-55 I a 層出土。

図55は底径11.5 cmを測る平底で最薄部の底厚は1.0 cmである。胴部の張りは強い。外器面は工具調整痕が丁寧にナデ消され平滑であるが、内器面はナデが未徹底である。外底面には砂粒がびっしり付着している。胎土は泥質で1 mm大の砂粒や、ガラス光沢を持つ微細な無色粒を含む。器色は橙色を呈する。三の曲輪 W-77 III b 層出土。

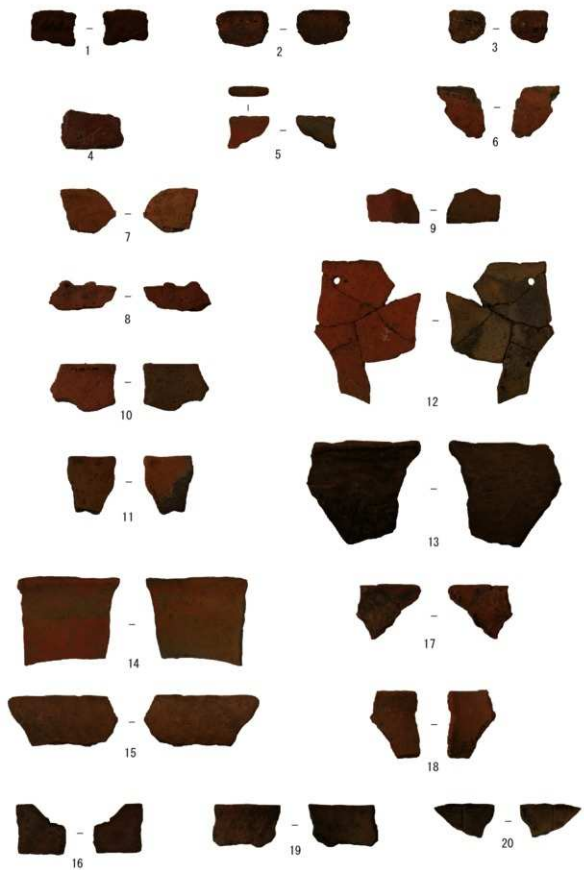
図56は底径10.9 cmを測る平底で最薄部の底厚は0.6 cmである。胴部の張りは弱い。内外器面は工具調整痕が未徹底にナデ消される。外器面では調整時に混和材が引きずられた痕が顕著に残る。外底面には砂粒がびっしり付着している。胎土は泥質で1～2 mm大の砂粒や赤色粒を含む。器色は外器面がにぶい黄褐色を内器面がにぶい黄褐色を呈する。三の曲輪 B'-81 III d 層出土。

図57は底径12.0 cmを測る平底で最薄部の底厚は0.9 cmである。胴部の張りは強い。内外器面ともやや摩耗している。胎土は砂泥質で1 mm大の砂粒や赤色粒の他、石英を僅かに含む。器色は外面が黒褐色を内面が明赤褐色を呈する。三の曲輪 W-77 III b 層出土。

図58は底部から口縁付近まで接合できた唯一の資料である。底径は11.0 cmを測り最薄部の底厚は0.8 cmである。胴部の張りは強く球状を呈する。器表面は工具調整痕がナデ消されるも外器面の上部以外では未徹底である。胎土は泥質で1～4 mmの砂粒や赤色粒が密に含まれ、内器面ではこ

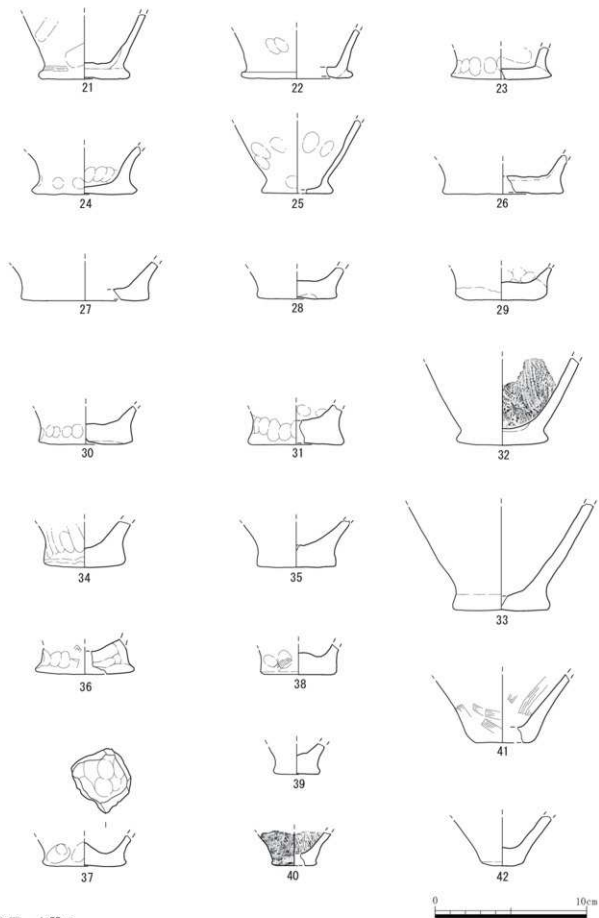


第 62 图 土器 1

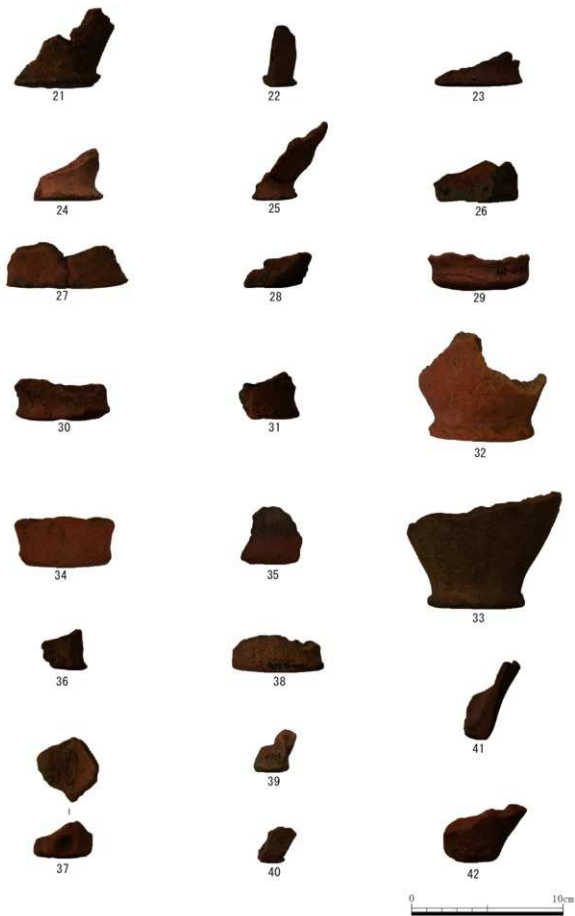


图版 42 土器 1

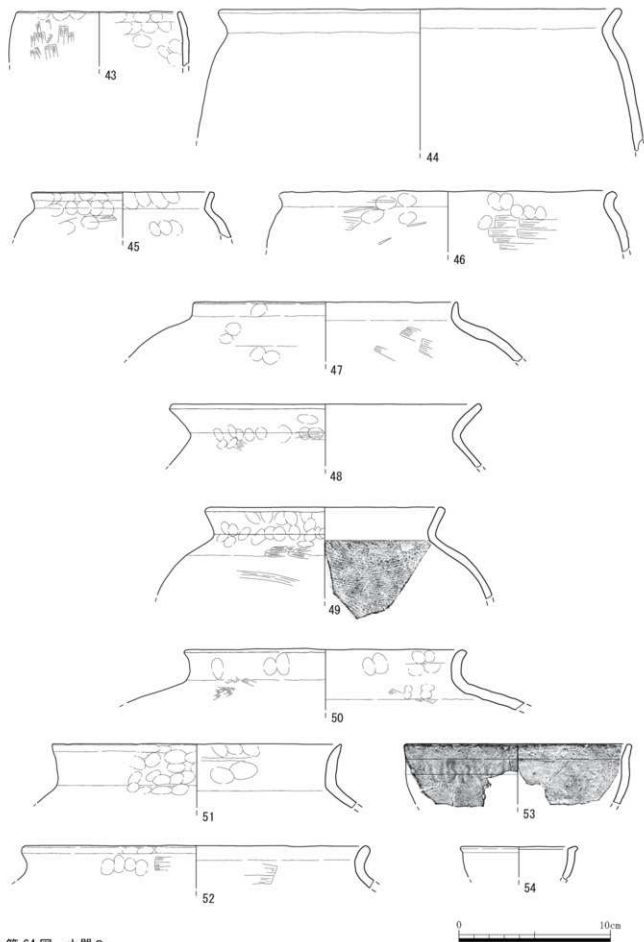
0 10cm



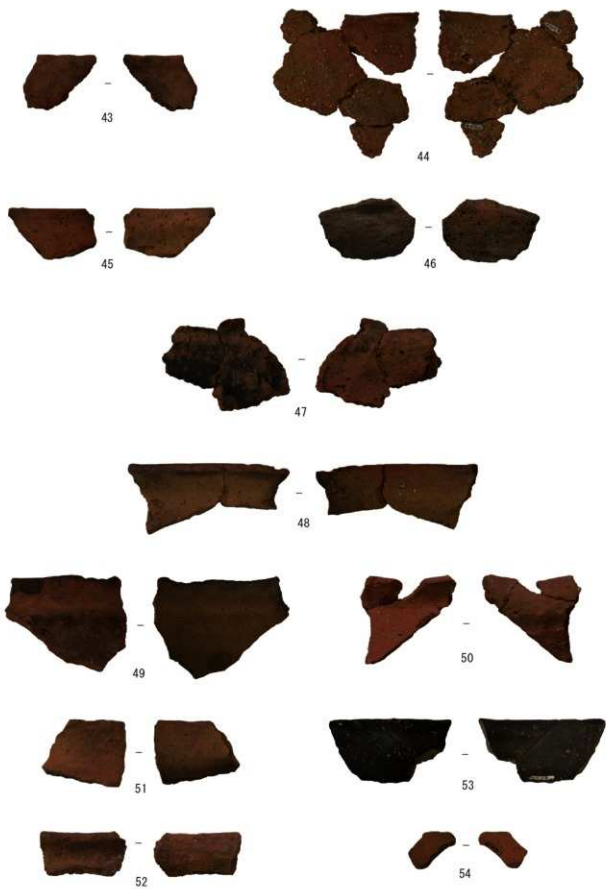
第 63 图 土器 2



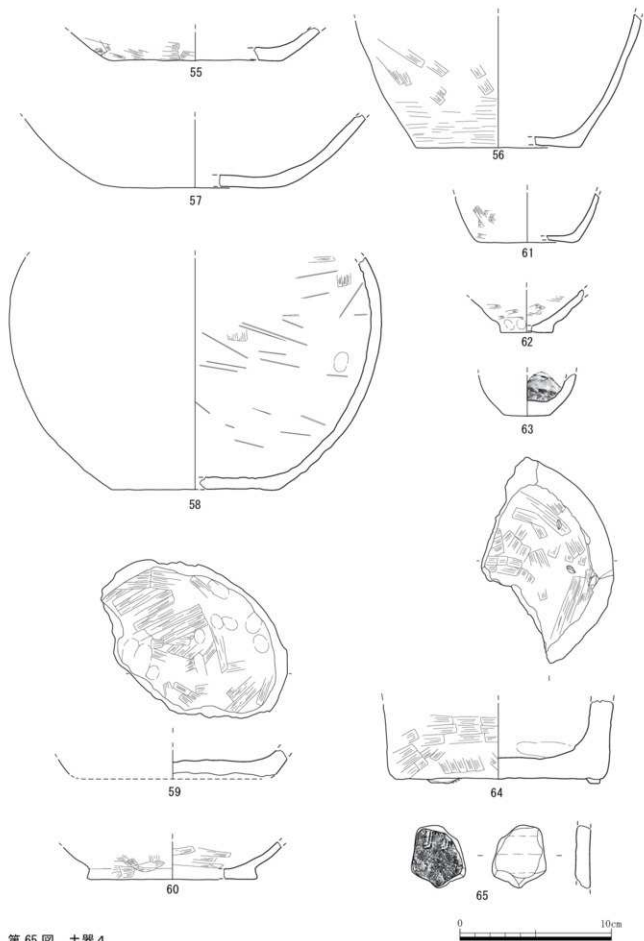
图版 43 土器 2



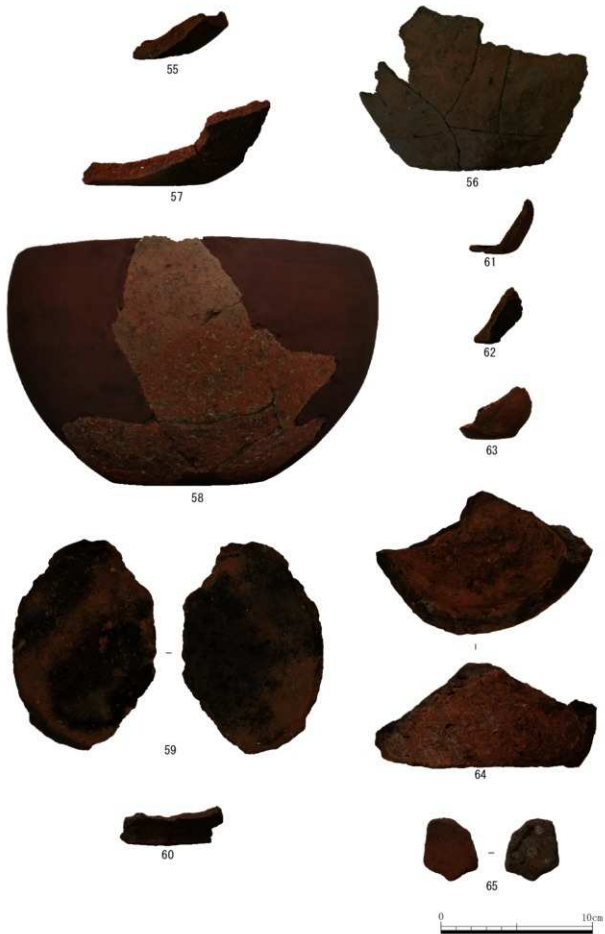
第 64 图 土器 3



图版 44 土器 3



第65图 土器4



图版 45 土器 4

れらが欠落しており粗造な印象を受ける。また、ガラス光沢を持つ微細な黒色粒（角閃石か？）が僅かに認められる。器色は橙色を呈する。一の曲輪ム-71出土。

図59は底径13.6cmを測る平底で、残存部における最薄部の底厚は0.7cmである。外底面は欠損し、内底面には煤が付着している。本資料採取の炭を年代測定にかけている（第V章第3節参照）。内底面にはナデ調整痕が残る。胎土は泥質で1～2mm大の砂粒や赤色粒を含む。器色は外面が褐灰色を内面がにぶい黄橙色を呈する。三の曲輪W-77Ⅲb層出土。

図60は底径11.2cmを測る平底で最薄部の底厚は0.7cmである。高台を有する。外器面は指頭痕や工具調整痕がナデ消されるが未徹底である。胎土は泥質で1mm大の砂粒や赤色粒を含む。器色は外面が暗灰黄橙色を内面が橙色を呈する。三の曲輪W-77Ⅲb層出土。

図61は底径6.8cmを測る平底で最薄部の底厚は0.3cmと薄い。底部から直線的に外傾する。胎土は泥質で1～2mm大の砂粒の他、赤色粒を含む。器色は橙色を呈する。三の曲輪W-77Ⅲb層出土。

図62は底径3.4cmを測る平底で高台を有する。最薄部の底厚は0.5cmと薄い。外器面は混入物の欠落の為か凹凸が目立ち粗造である。胎土は泥質で1mm大の砂粒を少量含む。器色は外面が黒褐色を内面が明黄褐色を呈する。四の曲輪キ-53？出土。

図63は底径3.0cmを測る平底で最薄部の底厚は1.0cmである。外面はナデ調整が丁寧に施され平滑、内器面は工具調整後ナデ消しが未徹底である。胎土は泥質で1mm大の赤色粒を含む。器色は橙色を呈する。一の曲輪ラ-70出土。

不明

5,930点出土しほとんどは小破片である。1～3類へ分類が困難な資料を第65図に示した。

図64は形式不明の底部資料。底径は13.8cmで器壁は1.2～1.5cmと厚い。底部からは胴部へかけてはL字状に直立する。平底の外底面には長軸1.5cm、短軸0.7cm程の突出部があり、脚の可能性はある。脚であれば3脚が想定される。内外器面及び断面には3～9mm大の窪みが見られ、内底面に靱殻痕が明瞭に残ることから混入した靱殻が欠落した痕と考えられる。内外面ともナデ調整が施される。胎土は泥質で白色・赤色粒を含む。器色は橙色を呈する。8次調査時に確認（一の曲輪周辺）。出土地不明。

図65は形式不明の胴部（？）資料。器壁は0.9cm。器表面はやや摩耗している。表面には、「三」の字の下2本が折れ曲がったような形をしたスタンプ文様が2か所に認められる。胎土は砂泥質。1mm大の赤色や黒色粒の他、石英のような白色粒、光沢を持つ微粒子が含まれる。半練の胎土に近い印象を受ける。器色は外面が明赤褐色を内面が灰色を呈する。二の曲輪S-94～95出土。

小結

北谷城出土の土器は、2類のくびれ平底土器と3類のグスク土器が大半を占める。2類では、與嶺分類の第Ⅲ段階に比定されるB類の底部（底径が小型でかつ底厚が厚い。くびれ平底土器の新段階で11世紀前半まで存続したと推定されている）が見られない。また、グスク土器では具志堅分類の第1段階（11世紀後半～12世紀前半）の資料がほとんど見られない。換言すると、くびれ平底土器の新段階からグスク土器の古段階にあたる11世紀前半～12世紀前半の土器資料は僅少である。

第8表-1 土器 観察一覧

神代 図版	番号	分類	器種	部位	口径/口径/胴/底	口径 (cm)	底径 (cm)	文様	粘土/混入物/サイズ/量	土色(外→内)	出土地	調査
第 62 図・ 図版 42	1	1類	深鉢?	口縁	丸/外縁//	—	—	刻目突部	砂質/砂・石莖/~/1/多	2.00R赤褐色4/8	三の曲輪 北西 ナ-53	10次
	2		深鉢?	口縁	平/外縁//	—	—	連続刻突	泥質/砂・赤・チャート/~/5/多	2.00R赤褐色4/8	不明 シ-2	3次
	3		深鉢?	口縁	肥/直口//	—	—	連続刻突	泥質/砂/~/1/多	7.00R褐色4/4	不明	5次
	4		深鉢?	底	///平底	—	9.8	—	—	泥質/砂・赤・石莖・チャート/~/2/多	2.00R赤褐色4/8	三の曲輪 北西 ナ-53
	5	2類	浅?	口縁	丸/外縁//	—	—	刻目	砂質/砂・赤/~/1/少	2.00R褐色6/8→ 10YR6/7	三の曲輪 乙-96 I	7次
	6		浅?	口縁	平/外縁//	—	—	沈線	泥質/白・赤・黒/~/1/少	2.00R明赤褐色5/8	東丘段 ヨ-82 Ⅱ a ♀	9次
	7		浅?	口縁	平/内縁//	—	—	沈線	泥質/白・赤・黒/~/1/少	2.00R明赤褐色5/8	東丘段 ヨ-83 Ⅱ a ♀	9次
	8		浅?	口縁	平/直口//	—	—	板状突部	泥質/砂・赤・黒・透/~/1/多	5YR明赤褐色5/6	三の曲輪 不明	5次
	9		浅	口縁	丸/外縁//	19.8	—	山形突部	泥質/白・赤/~/1/	2.00R明赤褐色5/8	二の曲輪 Y-99	6次
	10		浅?	口縁	平/直口//	—	—	—	泥質/赤・黒・透/~/1/少	5YR 褐色6/8 → 2.00R黄褐色5/4	一の曲輪 ム-71	8次
	11		浅?	口縁	舌/内縁//	—	—	—	砂質/白・黒/~/2/少	7.00R 褐色6/6 2.00R 黄褐色4/2	三の曲輪 T-82 I b	2次
	12		浅	口縁	舌/直口//	23.4	—	有孔	泥質/砂・赤・黒/~/1/少	2.00R明赤褐色5/8 → 2.00R 紅・黄褐色6/3	一の曲輪 ム-71	8次
	13		浅	口縁	丸/外縁//	21.4	—	—	泥質/砂・赤・黒・透/~/1/少	10YR 紅・黄褐色4/3	不明	11次
	14		浅	口縁	丸/外縁//	20.8	—	—	砂質/砂・赤・黒/~/1/少	5YR 褐色6/8	東丘段 ヨ-82 Ⅱ a ♀	9次
	15		浅	口縁	丸/外縁//	26.6	—	—	泥質/白・赤/~/1/少	7.00R 褐色4/6	東丘段 ヨ-82 Ⅱ a ♀	9次
	16		浅?	口縁	丸/外縁//	12.8	—	沈線	泥質/砂・赤・透/~/1/少	7.00R 褐色4/4	一の曲輪 ム-71	8次
	17	浅?	口縁	平/外縁//	—	—	—	泥質/黒/~/1/少	5YR 明赤褐色5/8	三の曲輪 北西 ナ-53	5次	
	18	2類	浅	口縁	丸/外縁//	5.8	—	—	泥質/白・黒/~/1/少	7.00R 褐色6/6	東丘段 ヨ-83 Ⅱ a ♀	9次
	19		浅	口縁	丸/外縁//	10.0	—	—	泥質/白・黒/~/1/少	10YR 紅・黄褐色5/4	東丘段 ヨ-83 Ⅱ a ♀	9次
	20		浅	口縁	平/外縁//	2.8	—	沈線	泥質/赤/~/1/少	2.00R 黄褐色5/4	東丘段 ヨ-83 Ⅱ a ♀	9次
21	—		底	///くびれ平底	—	5.6	—	泥質/白・赤・黒/~/1/少	10YR 紅・黄褐色6/4 → 5YR 明赤褐色5/8	一の曲輪 ウ-71	8次	
22	—	底	///くびれ平底	—	6.9	—	砂質/白・赤・黒/~/1/少	10YR 紅・黄褐色6/4	一の曲輪 V-115 I b	1次		
23	—	底	///くびれ平底	—	6.4	—	砂泥質/白・赤・黒・透/~/1/多	7.00R 明赤褐色5/8	一の曲輪 ウ-71	8次		
24	—	底	///くびれ平底	—	6.4	—	泥質/白・赤・黒/~/1/少	10YR 紅・黄褐色6/4 → 5YR 褐色6/8	一の曲輪 ム-71	8次		
25	—	底	///くびれ平底	—	4.5	—	泥質/白・赤・黒/~/1/少	7.00R 褐色6/6	一の曲輪 ム-71	8次		
26	—	底	///くびれ平底	—	8.0	—	泥質/白・赤・黒・透/~/2/少	10YR 紅・黄褐色6/3 → 5YR 褐色6/8	二の曲輪 E-97 ~ 98 I b	3次		
27	—	底	///くびれ平底	—	8.4	—	泥質/赤・黒/~/1/少	5YR 明赤褐色5/8	三の曲輪 T-84 I b	2次		
28	—	底	///くびれ平底	—	5.2	—	泥質/砂・赤・黒/~/2/多	7.00R 褐色6/6 → 5YR 褐色6/8	二の曲輪 0-97 ~ 99 I a	1次		
29	—	底	///くびれ平底	—	5.4	—	砂質/白・赤・黒・透/~/1/多	5YR 明赤褐色5/6	一の曲輪 ム-71	8次		
30	—	底	///くびれ平底	—	6.2	—	砂泥質/白・赤・黒/~/1/少	10YR 紅・黄褐色6/4	三の曲輪 T-84 I b	2次		
31	—	底	///くびれ平底	—	6.3	—	砂質/白・赤・黒・透/~/1/多	5YR 赤褐色4/6 → 7.00R 褐色4/3	一の曲輪 ウ-71	8次		
32	—	底	///くびれ平底	—	6.0	—	砂泥質/白・黒・透/~/1/少	2.00R明赤褐色5/8 → 2.00R赤褐色2/3	三の曲輪 T-82 I b	2次		

第8表-2 土器 観察一覧

神国 図説	番号	分類	器種	部位	口径/口縁/胴/底	口径 (cm)	底径 (cm)	文様	粘土/混入物/サイズ/量	土色(外-内)	出土地	調査		
第63 国・ 図説 43	33	2類	—	底	///くびれ平底	—	6.4	///		2.宮に5.5・黄6/4	不明 ウ-96	17次		
	34		—	底	///くびれ平底	—	5.4	泥質/白・赤・黒//		2.宮Ⅱ層6/8	一の曲輪 ム-71	8次		
	35		—	底	///くびれ平底	—	5.2	泥質/白・赤・黒/~/1/多		2.宮Ⅱ層明赤焼5/8→ 2.宮Ⅱ層黄6/2	三の曲輪 R-63 Ⅱ a	7次		
	36		—	底	///くびれ平底	—	6.0	泥質/白・赤・黒/~/4/少		5Ⅱ層6/8	不明	2次		
	37		—	底	///くびれ平底	—	5.3	泥質/赤・黒/~/1/少		2.宮Ⅱ層6/8→ 10Ⅱ層に5.5・黄焼6/4	一の曲輪 ム-72	8次		
	38		—	底	///くびれ平底	—	4.6	泥質/白・赤/~/1/少		10Ⅱ層に5.5・黄焼6/4	一の曲輪 ウ-71	8次		
	39		—	底	///くびれ平底	—	2.8	泥質/赤/~/1/少		10Ⅱ層に5.5・黄焼6/4	一の曲輪 ム-71	8次		
	40		—	底	///くびれ平底	—	3.0	泥質/白・赤/~/1/少		10Ⅱ層に5.5・黄焼6/4→ 10Ⅱ層焼灰5/1	不明	2次		
	41		—	底	///くびれ平底	—	3.4	砂質/白・赤・透/~/1/少		5Ⅱ層明赤焼5/8→ 5Ⅱ層6/6	一の曲輪 ム-71	8次		
	42		—	底	///尖底	—	2.8	泥質/白・赤・黒/~/1/少		2.宮Ⅱ層明赤焼5/8→ 10Ⅱ層明黄焼6/6	一の曲輪 ム-72	8次		
	第64 国・ 図説 44		43	3類	罎	口縁	舌/内溝//	19.6	—	泥質/白・赤・透/~/1/		10Ⅱ層に5.5・黄焼5/4	三の曲輪 R-77 Ⅱ b	2次
			44		壺	口縁	舌/外横/長//	22.6	—	泥質/砂/~/5/多		2.宮Ⅱ層6/8	三の曲輪 R-61 Ⅱ a	2次
45		壺	口縁		平/外反/短//	12.0	—	泥質/砂・赤/~/1/少		2.宮Ⅱ層6/8→ 7.宮Ⅱ層6/6	三の曲輪 R-61 Ⅱ b	2次		
46		壺	口縁		丸/外反/短//	22.4	—	泥質/砂・赤・透/~/2/多		5Ⅱ層5/1	三の曲輪 T-82 Ⅱ b	2次		
47		壺	口縁		舌/直口/短//	17.2	—	泥質/砂/~/2/少		10Ⅱ層に5.5・黄焼6/4→ 2.宮Ⅱ層明赤焼5/6	三の曲輪 T-82 Ⅱ b	2次		
48		甗	口縁		丸/外横/長//	20.6	—	泥質/貝・砂・赤・透/~/1/少		7.宮Ⅱ層6/6	三の曲輪 R-61 Ⅱ a	2次		
49		甗	口縁		丸/外横/長//	15.8	—	泥質/砂・透/~/1/少		2.宮Ⅱ層6/8→ 10Ⅱ層明黄焼6/6	三の曲輪 R-77 Ⅱ b	2次		
50		甗	口縁		丸/外反/長//	18.2	—	泥質/砂・赤・黒/~/2/多		2.宮Ⅱ層7/8→ 10Ⅱ層に5.5・黄焼6/4	四の曲輪 N-60 Ⅱ b	4次		
51		甗	口縁		舌/直口/長//	19.1	—	泥質/白・赤・黒・透/~/1/多		5Ⅱ層6/6→ 7.宮Ⅱ層6/6	三の曲輪 R-77 Ⅱ b	2次		
52		甗 or 甗	口縁		丸/外反/長//	—	—	砂質/砂・赤・黒/~/1/少		2.宮Ⅱ層6/8	三の曲輪 R-77 Ⅱ b	2次		
53		3類	甗		口~胴	平/外反/短//	15.0	—	泥質/砂/~/1/多		5Ⅱ層黒焼2/1	四の曲輪 N-60 Ⅱ b	4次	
54			甗		口縁	舌/外横/短//	7.4	—	砂泥質/砂・赤・黒/~/1/多		2.宮Ⅱ層6/8	四の曲輪 R-65 Ⅱ a	4次	
第65 国・ 図説 45	55	本類	不明	底	///平底	—	11.5	/砂・透/~/1/多		7.宮Ⅱ層6/6→ 2.宮Ⅱ層6/8	三の曲輪 R-77 Ⅱ b	2次		
	56		罎?	底	///平底	—	10.9	泥質/砂・赤/~/2/多		10Ⅱ層に5.5・黄焼6/4→ 10Ⅱ層焼灰5/1に5.5・黄焼5/3	三の曲輪 R-61 Ⅱ 4	2次		
	57		不明	底	///平底	—	12.0	砂泥質/砂・赤・石莖/~/1/多		10Ⅱ層黒焼2/2→ 2.宮Ⅱ層明赤焼5/8	三の曲輪 R-77 Ⅱ b	2次		
	58		甗?	胴~底	///平底	—	11.0	泥質/砂・赤・黒/~/4/多		2.宮Ⅱ層6/8	一の曲輪 ム-71	8次		
	59		不明	底	///平底	—	13.6	泥質/砂・赤/~/2/多		7.宮Ⅱ層焼灰5/1→ 10Ⅱ層に5.5・黄焼6/3	三の曲輪 R77 Ⅱ b	2次		
	60		不明	底	///平底	—	11.2	泥質/砂・赤/~/1/多		2.Ⅱ層焼灰4/2→ 5Ⅱ層6/6	三の曲輪 R-77 Ⅱ b	2次		
	61		甗	底	///平底	—	6.8	泥質/砂・赤/~/2/少		5Ⅱ層6/6	三の曲輪 R-77 Ⅱ b	2次		
	62		不明	底	///平底	—	3.4	泥質/砂/~/1/少		5Ⅱ層黒焼2/1→ 10Ⅱ層明黄焼6/6	四の曲輪 ホ-53 Ⅱ	11次		
	63		不明	底	///平底	—	3.0	泥質/赤/~/1/少		5Ⅱ層6/6	一の曲輪 ウ-70	8次		
	64		不明	底	///平底	—	13.8	泥質/白・赤/~/1/少		5Ⅱ層6/8	不明	8次		
	65		不明	胴	///	—	—	砂泥質/赤・黒・白・透/~/1/多		2.宮Ⅱ層明赤焼5/8→ 7.宮Ⅱ層6/1	二の曲輪 S-98-95	5次		

2 カムイヤキ

カムイヤキは120点出土している。出土品総数の約0.4%である。小破片であるため器種の詳細は不明であるが概ね壺型と思われる。口縁部は10点見られ全て壺型で直口と外反が得られた。肩部6点で波状沈線文を三条有する。胴部が99点、底部5点となっている。

得られたカムイヤキは概ね灰黒色で、微砂粒、石英等が胎土に見られる。断面の心は褐色を呈する。

第9表 カムイヤキ 出土量

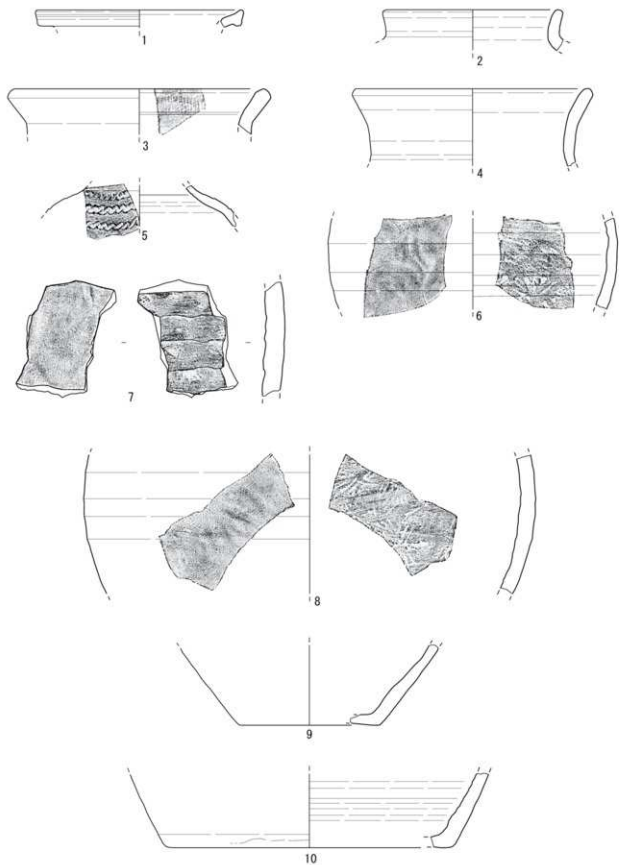
層	地区	一の曲輪	二の曲輪	三の曲輪	三の曲輪北西	四の曲輪	東丘陵	地区不明	合計
I a			10	5	3	1	1		20
I b			14	14		8	3		39
II a				3	3				6
II a ?						2	3		5
III a			7	8					15
III a ?							5		5
III b				1					1
III d				1					1
不明		3	4	2		9		10	28
合計		3	35	34	6	20	12	10	120

第66図1から4は壺型の口縁部である。短頸と長頸の2種類みられ、図1から3は前者で図4は後者である。図1、図5の胴部上部に3条の波状文を有するものは口縁部を大きく屈曲する薄手のA群の壺と思われる。他の口縁部は直立又は外傾する。また、図3の口縁内部に縦に数条の沈線が刻まれている。

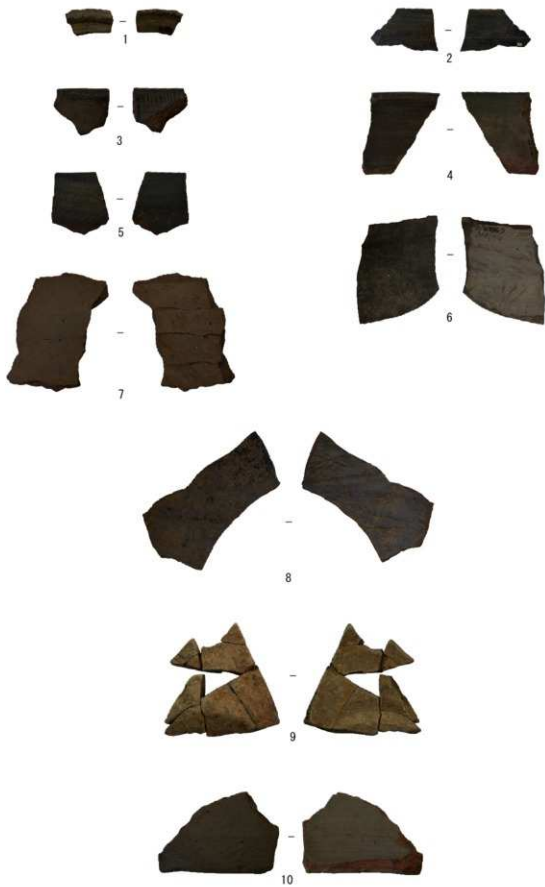
図6から8は胴部片である。外面の叩き痕はナデ調整及び削りによって消されている。内面は図6・8には平行線文の当て具痕が見られる。図7は輪積み状となっている。

図9・10は底部片である。底部より緩やかに立ち上がり胴部へ移行する。図9は全体的に灰色で軟質である。

出土地を見てみると図1は不明、一の曲輪が図9、二の曲輪が図3・5、三の曲輪が図2・4・6から図8・10となっており第8表のとおり主体は三の曲輪となっている。



第 66 図 カムイヤキ



図版 46 カムイヤキ

3 白磁

白磁は総数1,027点出土している。出土遺物総数の約3.4%である。器種は碗(304点)、皿(594点)、杯(58点)、鉢(2点)、盤、香炉、水注、瓶、袋物?(各1点)が得られた。他は小破片で器種は不明である。

器種別に紹介する。

(1) 碗

第67図1、2は玉縁口縁碗である。図1は薄手で素地が白色で軸は淡灰色である。図2は口径15.8cm。厚手の口縁で、内端部は明瞭な稜を呈する。素地は白色で軸は白濁色で貫入は細かい。図3、図5はピロースクタイプIで、図3は内面胴下部に沈線の文様と見込みとの境となる沈線が巡ると思われる。素地は灰色で軸は淡灰色である。図5は口径15cm。口縁部内面下部に一条の横線が巡らされている。素地、軸ともに灰色である。図6は口径15.4cm。ピロースクタイプIIである。素地は淡灰白色で軸は灰色で貫入が細かい。軸は外面腰部まで施軸する。図4は今帰仁城跡出土のI類(金武:2009)に類似すると思われる。薄手で口唇部は丸みを帯び、口唇部内端は面取により平坦で稜を呈する。素地は白濁色で軸は灰茶色、貫入は細かい。図7から図11は外反碗である。図7から図9は口縁部下部で窄めて外反する。図7は口径16cm。口縁部下部で外面より指で窄ませ薄く外反する。素地は灰白色で軸は淡灰色。貫入は細かい。図8は口径17cm。図7の口縁部の成形同様で口縁部は仕上げる。胴部には素地に幅約1mm、長さ6・7mmの斜線が見られ鉋による削り痕かと思われる。素地、軸ともに灰色である。外面に口縁部から胴部にかけて軸垂れが見られる。外面腰部まで施軸する。図9は口径17.4cm。口縁部の仕上げは図7、8と同様で口縁部内面下部に稜を有する。素地は淡灰白色で軸は淡灰色、貫入は内外面の口縁部分は少々見られ胴部はやや細かい。図10は口径17.6cm。胴部から口縁部にかけて薄くなり外反する。胴部はやや張る。素地は白色で、軸は乳白色である。図11は口径16.5cm、底径6cm、器高7.2cm。今帰仁城跡出土の外反碗に類似するが胴部の張りが弱い。厚手で外面腰部まで施軸し、腰部から外底まで無軸である。高台はやや「ハ」の字に広がる。畳付は平坦である。素地は淡灰色で軸は艶が無く濁った灰色で外面に細かい貫入が見られる。図12、13は直口口縁碗である。両資料とも逆「ハ」字状に開く、図12は口径14cm。口唇部はやや丸く内端部は稜を有する。外面胴部に器面調整のための鉋削り等で2条の横線が巡らされている。内面は轆轤痕が残る。素地は茶白色で軸は淡茶色で細かい貫入が見られる。外面腰部まで施軸する。

図13は底径5.2cm。碗の底部で高台や外底の浅く仕上げていることまた、内面の蓮弁文と見込みの印花文がみられることからピロースクタイプ碗の底部と思われる。素地、軸ともに灰色で貫入が細かい。外面腰部まで施軸し外底まで露呈である。図14は底径5.6cm。高台内端がやや深く中心部が盛り上がるように削り取る。畳付は平坦である。見込みに砂粒痕がありその上から軸掛けを施している。腰部まで施軸し外底まで露呈する。素地は淡灰白色で軸は淡灰色である。

(2) 皿

第68図15は袂の入った高台皿である。高台内削りが深いことから、袂入高台皿との特徴は異なる資料である。皿以外の可能性もある。高台は三角形状を呈し、畳付は平坦である。素地は白色で、軸は外面高台まで施軸し、内底は無軸である。軸は淡青白色である。図16は口径9cm、底径4.6cm、

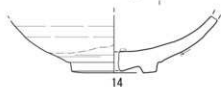
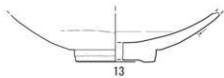
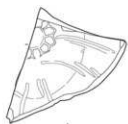
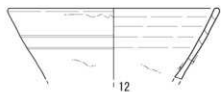
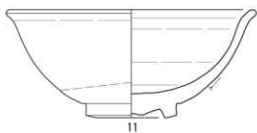
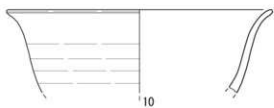
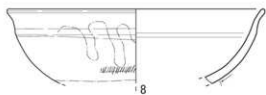
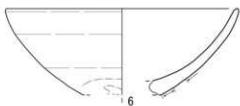
器高2.5 cm。挟入り高台皿である。見込みに重ね焼き痕が見られる。釉は外面胴部まで施釉し、外底までは無釉である。素地は白色で釉は淡黄白色で貫入は細かい。図17、18は口禿皿で、図17は口径10 cm、底径15 cm、器高2.5 cmである。口縁部から底部の一部まで器形が窺える資料である。ベタ底で逆「ハ」の字状に開き直口する。口唇部から口縁部直下までは無釉である。素地は白色で釉は白色である。貫入は若干見られる。図18は底径7.4 cm。ベタ底で若干外底中心部はやや浮く。腰部から外底は無釉である。内面は見込みと胴部の境に円形に沈線を巡らす。素地、釉ともに白色である。図19は底径3.8 cm。底部で高台径の小さいこと、見込みが広いことから直口の浅皿と思われる。外面腰部より外底まで無釉。素地は白色で釉は乳白色である。貫入は細かい。図20は底径4.5 cm。底部の径が広く底部から腰部までの器壁の厚さがほぼ同様であることから口縁部の広い直口口縁を呈するものと思われる。腰部から外底は無釉。見込みの釉は白色で細かい貫入が見られる。素地は白色です。図21は底径3.3 cm。底部及び底径が小さいこと、腰部に角ばった痕跡が見られ無いことから小型の直口口縁と思われる。図22は口縁部は10.8 cm。直口口縁を呈している。挟入り高台皿の口縁部の可能性もある。外面腰部下は無釉である。素地は白色で釉は淡黄白色で細かい貫入が見られる。

(3) 瓶

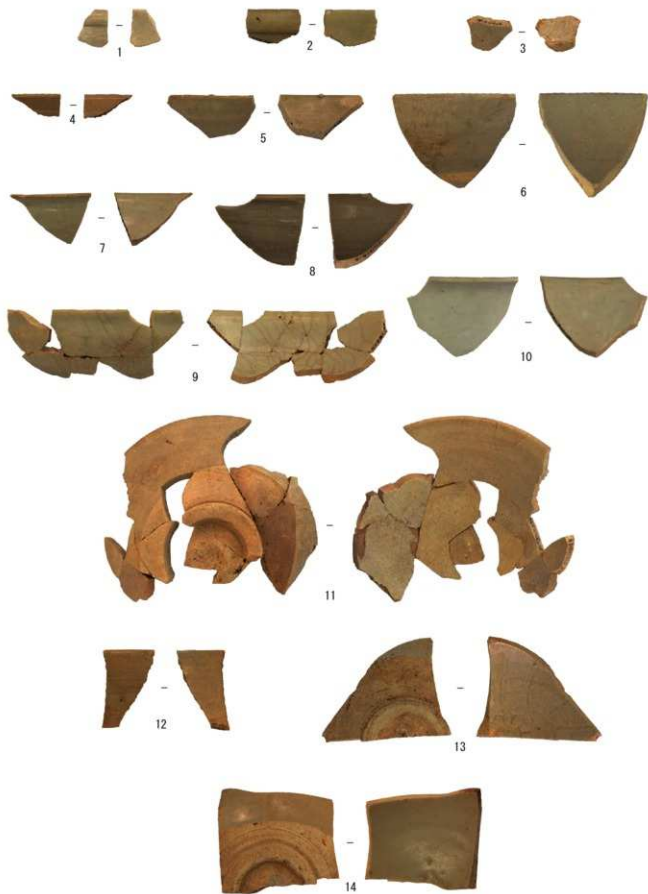
図23は瓶の胴上部から頸部かけての資料である。内外面ともに施釉され、内面は白色、外面は淡黄白色で貫入は見られ無い。素地は白色である。内面は軸轆痕が残る。

(4) 壺

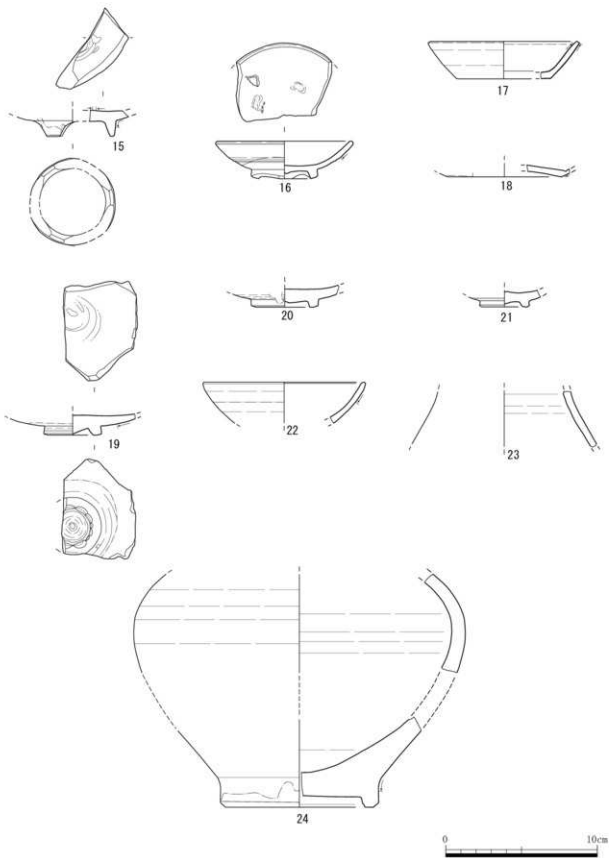
図24は壺である。底径10.4 cm。口縁部と胴部が欠損しているが、胴上部と底部で図上復元を試みるところ、胴上部で最大径を持ち、口縁部へ移行するようである。底部は腰部より高台にかけて器壁が厚く重量感をます。高台は内外端面取りされている。外底は一定に削られ直線的である。内面及び外面の高台外面まで施釉する。素地は白色で釉は淡乳白色で貫入は細かい。



第 67 图 白磁 1



图版 47 白磁 1



第 68 圖 白磁 2



图版 48 白磁 2

4 青磁

青磁は遺物層出土数の内24.3%である。得られた器種は碗、皿、盤、酒会壺及び蓋、小壺、香炉、播鉢、鉢など約20種類程の器種が得られている。総数7,534点、その内碗が主体で次いで皿、盤となっている。

(1) 碗

① 刺花文碗 (第69図1~4)

図1、2、4はへら彫りによる花文を描く。図1は口唇部に刻みを加える輪花を呈する。我謝遺跡に出土例がある。口径14.6cm。素地は淡灰色で軸は透明釉を施す。外面に轆轤痕が残る。図2は腰部片で内面に花文が描かれている。外面の腰部は高台脇より屈曲して立ち上がる。素地は淡灰色で軸は透明釉で内外面腰部に貫入が見られる。図3は底部片で底径は6.3cm。高台内削りは浅く高台は方形、畳付内外端は面取りする。腰部で屈曲して立ち上がる。高台外面又は畳付、外底の一部に釉が施される。素地は灰色で軸は透明釉である。図4は胴部で内面に花文を描く。素地は灰色で軸は透明釉である。

② 櫛描文碗 (図5)

櫛描文碗の胴部片である。外面に縦に細かい櫛目文を施す。内面はへら彫りによる花文が施されている。素地は灰色で軸は透明釉を施す。

③ 鑄蓮弁文碗 (図6~10、第73図50)

図6、7はへら彫りによる蓮弁文で間弁を有し、蓮弁に明瞭な鑄が見られる。口縁部は舌状を呈する。図6は口径17cm。素地は淡灰白色で軸は淡緑色である。図7の素地は灰色で軸は淡灰色である。図8は口径19.6cm。へら彫りによる蓮弁文で鑄は明瞭である。素地は灰色で軸は淡灰青色である。図9は口径17cm。幅の細いへら彫りによる蓮弁であるが間弁を持たず、蓮弁の幅が細く鑄を有する砵系の可能性も考えられる。口縁部は舌状でやや内傾気味である。素地は灰色で軸は淡青色で貫入は荒い。図10は底部片で底径4.8cm。高台内削りは浅く、高台の畳付は内端から外端にかけて面取りする。外面胴部はへら彫りによる蓮弁で間弁を有する鑄蓮弁である。見込みに印花文で縁には陰圏線を巡らす。素地は灰色で軸は淡緑色である。畳付に一部釉が掛かるが外底は無釉である。図50は底径5cm。高台内削りは浅く、高台は台形状を呈し、高台際より立ち上がる。見込みに窪み(陰圏線)があり胴部へと立ち上がる鑄蓮弁文碗の特徴を有する。素地は淡灰白色で軸は灰緑色。

④ 蓮弁文碗 (図11~15・第70図16、第71図31)

図11は蓮弁文碗の底部で底径4.4cm。外面に弁尻が見られるが鑄蓮弁かは判別できない。高台はやや舌状で畳付は無釉。素地は淡灰色で軸は淡緑色である。図12は胴部片である。外面のへら彫りによる蓮弁文で細い。蓮弁はやや稜を有する。内面もへら彫りによる花文を施すと思われるが構図は不明。図13は底部片で高台内削りは深く平坦に削る。高台は方形で畳付から外底は無釉。底径5.8cm。外面にへら彫りによる細い蓮弁文で鑄を有する。見込みに陰圏線と染付に見られる八宝文に類似する文様が施される。首里城京ノ内出土資料に類似すると思われる。素地は淡灰色で軸は淡緑色である。細かい貫入が見られる。図14は図11に類似するが高台に差異が見られる。畳付幅が細くやや舌状気味の高台である。畳付のみ無釉。高台内削りは深い。外面に弁尻が見られるが鑄か無鑄蓮弁文かは不明。素地は淡灰色で軸は淡緑色である。外面に貫入が見られる。底径は4.4cm。

図15は高台内端を深く抉り外底はヘソ状になる。高台は方形で疊付は平坦で無軸である。底径4.9cm。外面はヘラ彫りによる幅の細い鑷蓮弁の弁尻である。見込みに陰圏線と印花文を施す。素地は白色で軸は淡緑色である。貫入は全面に見られやや荒い。図16は無鑷蓮弁文碗の底部片で底径は5.8cmである。見込みに印花文、内面胴部に花文が施されている。外面はヘラ彫りによる弁尻が残り、状況から弁先の尖った幅広の蓮弁文が施されていたと思われる。素地は灰色で軸は淡緑色。外底は蛇の目軸刺ぎである。図31はヘラ彫りによる草花文か蓮弁文が施されていると思われる。見込みは陰圏線と印花文が施されている。底径5.6cm。外底半分まで施軸する。素地は淡灰色で軸は緑色である。

⑤弦文帯碗（第70図17）

図17は外面口縁下部に約2mm幅の横線と更にその下部に約1mmの横線が巡らされ、下部の横線に短斜線を4本程施していることから弦文帯碗と思われる。口径は18.4cmと大振りである素地は灰色で軸は淡灰緑色である。

⑥無文碗（図18・21・22～26、第71図30・34・35～37、第72図38・42・44、第73図49・52）

図18は無文直口口縁碗で口径13.4cm。口唇部は舌状を呈している。素地は灰色で軸は淡緑色である。外面に荒い貫入が見られる。図21は口縁部が玉縁状を呈する外反碗で無文である。口径16cm。素地は灰色で軸は淡緑色で、内外面ともに貫入が細かい。図22から図25は器壁が薄い外反口縁碗で泉州窯系と思われる。また、図38・49・52はその底部片である。胴部まで施軸し、素地は灰色で細かい黒粒の混入が見られるのが特徴である。図22は口径15.6cm。軸は茶色である。図23は口径17cm。軸は濁った茶灰色である。図24は口径17.4cm。特に素地の混入する黒粒が顕著に見られる。軸は濁った茶灰色である。図25は口径17cm。軸は濁った茶灰色である。図38は底径5cm。素地に含まれる黒粒が顕著に見られる。外面高台際は丸彫りされ、高台内は斜位に削られている。図49は底径4.9cm。高台は台形状で外底は高台内を丸い窪みを造りヘソ残す。素地は灰色で黒粒を含む。軸は灰緑色である。見込みに2筋の鉄軸が見られるが自然か文様かは不明。図52は底径5.1cm。高台の造り図49と同様である。高台際はやや平坦に削り腰部より立ち上がる。外面は無軸。素地は灰色で黒粒が含まれる。軸は淡緑色で発色が悪い。図26は泉州窯系に非常に似るが、素地は淡灰色で黒粒の混入も見られる。軸は薄い透明軸でやや茶色を帯びる。図36は口径15.2cm。口縁部は玉縁を呈し外反する。内体面に印花文を施す。人形手の可能性もある。素地は灰色で、軸は淡いオリーブ軸である。図37は口縁部17.6cm。口縁部は口縁下部で窄まり肥厚させ外反する。素地は淡灰色で、軸は淡緑色である貫入は細かい。図42は口径14.6cm。底径5.6cm。器高5.5cm。口縁部は外反する。疊付から外底は無軸である。内面腰部に陰圏線、見込みに印花文を施すが構図は判然としない。素地は淡灰色で軸は透明軸であるがやや淡い緑色を帯びる。貫入は細かい。図44は口径20cm。大振りの碗で口縁部はやや肥厚し外反する。高台は欠損する。外底は無軸。見込みは印花文で目跡となっている。本資料も佐敷タイプの可能性がある。素地は灰色で軸は焼成不良である。

⑦有文碗（図19・20）

図19は外面にヘラ彫りによるラマ式蓮弁文に草花文が施されていると思われる底部片である。見込みに印花文、内面腰部に陰圏線？が巡らされている。底径は5.6cm。高台内は基本無軸であるが重ね焼きの為か軸が見られる。素地は灰色で、軸は深緑色である。図20は外面胴部にヘラ彫りによる草花文が施されている外反碗である。口径17cm。素地は灰色で軸は緑色である。内外面ともに荒い貫入が見られる。

⑧雷文帯碗（第71図27～29・33）

図27は外面にヘラ彫りと思われる施文にて雷文帯とその下に花文を施す。内面口縁部も雷文帯若しくは草花文を施している。素地は灰色で軸は緑色である。図28は器形が分かる資料である。口径17cm。底径6.6cm。器高9.3cm。直口口縁碗で外面に雷文帯を連続して巡らす。内面口縁は雷文帯を巡らすと連続しているか判別できない。内体面前面に草花文を、見込みに圈線と印花文が施されている。外底は蛇の目釉剥ぎである。素地は白色で軸は淡緑色。貫入は細かい。図29は口径13cm。直口口縁碗である。ヘラ描きによる雷文帯と思われる。その下にラマズ運弁若しくは花文が施されている。内体面は草花文が施されている。素地は灰色で軸は淡緑色である。図32は口径15.2cm、底径6.4cm、器高6.7cm。口縁部外面にヘラ彫りによるやや崩れ掛けの雷文帯が巡る。胴部はヘラ彫りによる縦位のヘラ彫りにより間の開いた運弁を表現か。素地は淡灰色で軸はオリブ釉である。外底のみ無釉である。高台は方形を呈する。図33は口径14.6cm。直口口縁碗である。口縁部外面はヘラ彫りによる雑な雷文帯を巡らし胴部に花文を施す。内体面も花文を施す。素地は白色で軸は焼成不良である。

⑨碗底部（第71図30・34・35、第72図39～41・43・45・46、第73図47・48・51・53）

図30は底径7.8cm。現況では内外面に文様は見られ無い。見込みに陰圈線と印花文が施されている。素地は白色で、軸は緑色である。図34は底部片で外面腰部に釉垂れが顕著である。底径6.7cm。外底及び高台内面は無釉。見込みは印花文を施すがその部分は目跡となっている。素地は茶色で軸は焼成不良である。図35は底径5.8cm。外面は無文。内面は印花文が見られるが人形手の可能性もある。素地は灰色で内面は目跡、外底は無釉となり、断面の素地は茶色を呈する。軸は淡灰緑色で細かい貫入が見られる。図39は底径5.4cm。畳付から外底は無釉。高台の半分は方形で残りは外端の面取りによりやや舌状を呈する。見込みに陰圈線と印花文が施される。素地は淡灰色で、軸は淡灰緑色である。図40は底径6.4cm。底部の器壁は厚みがある。高台は方形で畳付外端部を面取りする。高台内面まで施釉されている。内外面体にヘラ彫りによる唐草文が施されている。素地は灰色で軸は淡緑色。図41は底径6.1cm。外面に草花文、見込みに陰圈線と印花文を施す。高台は方形を呈するほば外底まで施釉する。素地は灰色で軸は淡緑色。貫入は荒い。図43は底径6.6cm。畳付から外底は無釉。見込みは印花文で目跡となっている。底部の器壁の厚みや胴部の立上り、見込みなどから佐敷タイプ碗の可能性があるとと思われる。素地は淡茶色で軸は発色が良くない。貫入は細かい。図45は外底5.8cm。畳付から外底は無釉。見込みに陰圈線と印花文を施すが、印花文の構図は判然としない。素地は灰色で軸は淡緑色。貫入は細かい。図46は底径5cm。高台は方形、畳付より外底は無釉。見込みに印花文を施す。素地は淡灰色。軸は淡灰緑色。図47は外底5.4cm。高台は畳付外端部を斜位に面取りし、軸もそこまで施され畳付から外底は無釉である。見込みは印花文を施すが構図は判然としない。素地は灰色で軸は淡灰緑色。細かい貫入が見られる。図48は底径5.8cm。高台は方形を呈するが、畳付外端部は面取りする高台内面より外底まで無釉。見込みに梵字がスタンプされている。素地は淡灰白色で軸は淡緑色。貫入は細かい。図51は底径6.4cm。高台は方形を呈するが畳付外端部は面取りする。畳付から外底は無釉である。見込みは陰圈線と印花文が施される。素地は白色で軸は茶色で発色が悪い。貫入は細かい。図53は底径6.4cm。高台は高台内面を斜めに削り台形状に呈する。底部は器壁が厚い。高台内は蛇の目釉剥ぎ。見込みは印花文を施す。素地は淡灰白色で軸は淡緑色である。貫入は細かい。

(2) 皿

①櫛描文皿 (第73図54～57)

櫛描文皿は、底部はベタ底で、見込みにジグザグ文などを施す。内面見込みに際しに窪みを造り立ち上がる。口縁部は逆「ハ」の字状に広がり口唇部外端は丸みを帯び内端に稜を有する。図54は口径10.3cm。素地は淡灰白色で軸は淡灰色である。図55は口径10.1cm。素地は淡灰白色で軸は淡茶色である。図56は底部で底径5cm。外底は無軸。見込みにジグザグ文の一部が見られる。素地は淡灰白色で軸は淡灰緑色である。

②口折皿 (第73図58～63)

図58は口径13cm。底径6.2cm。器高3.4cm。口縁部は鐙を持ち内端にやや稜が見られる。鐙上面は僅かに窪みを有する。外面はヘラ彫りによる蓮弁文が施される。見込みは印花文と思われるが構図は不明。全体的に薄手で高台内削りも深く底部の器壁は薄い。高台は疊付外端を大きく面取りするためやや舌状気味になる。疊付より外底は無軸。素地は淡灰色で軸は淡灰色で発色はやや悪い。図59は口径13.2cm。底径6.2cm。器高4.9cm。口縁部の鐙の内端は丸みを帯び、鐙上面もやや軸が厚く丸みを帯びる。外面はヘラ彫りによる鐙を有する蓮弁文が施される。見込みは印花文である。高台は方形で軸は高台内面まで施軸する外底の削りは深く平坦で無軸である。素地は淡灰色で軸は緑色である。図60は底径5.2cm。見込みに僅かな印花文が見られるが構図が判別できない。外面ヘラ彫りによる鐙を有する蓮弁文が施される。高台は疊付内外端を面取りされ、その部分は無軸である。外底は無軸である。素地は白色で軸は淡緑色で貫入は細かい。図61は口径12.8cm。鐙内端はやや丸みを帯びる。鐙上面は平坦である。外面はヘラ彫りによる明瞭な鐙蓮弁文が施されている。素地は白色で軸は淡緑色である。図62は口径9.8cm。鐙内端面はやや稜が明瞭である。鐙上面は平坦。口縁部下は軸が施されていない。素地は白色で軸は緑色である。図63は口径12cm。鐙内端部、鐙上面は丸みを帯びる。外面はヘラ彫りによる蓮弁文を施す。素地は白色で軸は淡緑色である。

③腰折皿 (第74図64・65)

図64は底径5cm。腰折皿の特徴である腰部から屈曲、特に見込みから腰部が窄まって外反する口縁部である。見込みは目跡である。高台は外面の面取りにより三角形を呈する。高台内面から外底は無軸である。素地は灰色で軸は淡灰緑色、貫入は細かい。図65は底径4.6cm。本資料は腰折皿の重厚さとサイズが小さいことから別器形を有する可能性があるが、一応、腰部の屈曲部が類似していることから紹介する。底部から胴部にかけては薄く腰部より屈曲する。見込みは印花文で目跡となっている。高台は、疊付外端部を面取りしするが方形である。疊付から外底は無軸である。素地は淡灰色で軸は透明軸でやや茶色を帯びる。

④その他皿 (第74図66～71)

図66は底径4.7cm。見込みに双魚文を施す。口折皿によく見られるが、器形は不明。高台は台形状で疊付から外底は無軸である。素地は暗灰色で、軸は淡灰緑色である。貫入は細かい。図67は底径7cm。高台の広い直口縁を呈すると思われる。外面腰部にヘラ彫りによる唐草文が施されている。素地は白色で、軸は淡いオリーブ軸で前面施軸。図68は底径5.9cm。高台は方形で外底は中心部にヘソを残し掻き取る。疊付より外底は無軸である。見込みが広いことから胴部が緩やかに立ち上がり口縁部は直口すると思われる。素地は淡灰色で軸は淡緑色である。図69は底径6.8cm。見込みは蛇の目軸割ぎである。胴部は底部より屈曲して立ち上がり口縁部は直口すると思われる。高台はやや台形状を呈し、高台内面から外底は無軸である。素地は淡灰色で軸は淡灰緑色で発色は

悪い。図70は底径6.6cm。碁笥底皿である。見込み際に陰圏線が素地は白色で軸は淡灰緑色で貫入は荒い。図71は底径7.6cm。腰部から屈曲する外反皿の器形かと思われる。高台は三角形を呈する。高台内面まで施軸し、外底は無軸である。見込みに印花文を施すが構図は判然としない。内面腰部にヘラ彫りによる草花文と思われる文様が施されている。外面腰部は指で押し付けたような窪みがあり、その上部にヘラ彫りによる文様が施されているようであるが、構図は不明である。素地は茶色で軸はやや褐色を帯びる。貫入は細かい。

(3) 盤 (第74図72～第75図80)

図72は口縁部を折り曲げる罇縁口縁で平坦を成す。器壁は厚く重量感のある盤である。口径28.2cm。罇上面は平坦に仕上げ、ヘラ彫りによる花文を施す。内面は波濤文が施され、波濤文内に4～5条の横沈線が施されている。外面は胴部中央よりヘラ彫りによる蓮弁文を施す。素地は白色で軸は淡緑色で貫入は細かい。図73は口径26cm。口縁部の罇を外へ折り曲げ更に先端をやや摘みあげる。口縁部下より約1.5cm前後の幅のヘラ彫りによる蓮弁文を等間隔で成している。外面は無文である。素地は白色で軸は淡緑色で部分的に貫入が見られる。図74は口径22.2cm。口縁部の罇を外へ折り曲げ更に先端を上端に摘みあげる盤である。3mm程のヘラを4から5本単位として口縁部から腰部まで蓮弁文を密に施す。素地は白色。軸は淡緑、貫入は荒い。図75は口径29.2cm。底径11cm。器高7.7cm。

口縁部の罇を外へ折り曲げ更に先端を摘みあげる。口折部の内面の稜が明瞭である。幅約7～8mmのヘラ彫りによる蓮弁文を巡らす。高台は台形状で畳付外端を面取りする。高台内際まで施軸する。外底は蛇の目か目跡かは不明。素地は淡灰白色で軸は淡緑色で貫入は細かい。図76は口径24.4cm。口縁部の罇を外へ折り曲げ更に先端をやや摘みあげる。口縁部直下より幅1mmで7本から9本単位で櫛歯による濃密な蓮弁文を施す。外面は無文。素地は淡灰色で軸は淡灰緑色でやや発色は悪い。図77は盤底部である。底径12.5cm。腰部に丸彫りによる蓮弁文が見られる。陰圏線内に牡丹の印花文が施される。高台は畳付外端部を面取りしたい形状を呈する。高台内は浅く蛇の目軸割ぎである。外面は無文。素地は淡灰色で軸は淡緑色である。図78は底径18cm。器壁が厚く底径も広いことから大型で重量感のある盤である。外面は無文で、内面は残存状況からは文様は向うことは出来ない。見込みは腰部にやや深い凹を巡らし、更に内側に1mm程の陰圏線が2条巡らされ見込み部にはヘラ彫りによる十字花文が施されている。高台は「ハ」の字状で台形を呈する。外底は蛇の目軸割ぎである。素地は白色で軸は淡灰緑色。貫入はやや見られる。図79も図78同様重量感のある盤である。底径11.8cm。見込みに印花文が施されている。高台は三角形で外底は基本蛇の目軸割ぎであるが、中心部の残存する軸に掛かっている部分が見られる。素地は白色で、軸は茶色である。貫入は見られ無い。図80は口径28cm。底径15.6cm。器高15.6cm。直口口縁の盤で、口縁部はやや外傾する。口唇部は丸みを帯びる。内面は丸彫りによる蓮弁文を陰圏線まで施す。外面は無文である。高台は高台内側を扶るよう削り、外底はやや浅い。畳付は外端部が面取りされている。素地は淡灰色で軸は淡緑色である。貫入は荒い。図81は口径24cm。直口口縁を呈する盤で口縁部は丸みを帯び外反する。内面口縁部下より幅2mm程の施文具による丸彫りで蓮弁文を密に施す。外面は無文で、器面調整による面取りで稜が見られる。素地は灰白色で軸は淡緑色で発色はよくない。

(5) 酒会壺 (第75図82～第76図91)

図82は酒会壺の蓋である。器壁が厚く重量感のある蓋である。内径(見受け突起部)22.3cm。蓋の甲の端部欠損しているが上部へ反りかえるとと思われる。甲に見られる文様は格子状の線彫りを地文にその上からヘラ彫りによる唐草文又は牡丹文を施す。蓋の鏝の内面は身受け外面まで無軸である。素地は白色で軸は緑色である。貫入は見られ無い。図83は蓋の甲の端部である。器壁が薄いことから小型の蓋と思われる。甲面にヘラ彫りによる文様が施されている。内面は端部の直下より無軸である。素地は白色で軸は淡オリーブ軸である。図84は内径18cm。器壁はやや厚めで中型の蓋と思われる。甲面にはヘラ彫りによる草花文を施す。蓋の端部内面から身受け外面の一部まで無軸である。素地は淡灰色で軸は灰緑色である。図85は中型の蓋と思われる。甲面から端部まで屈曲は強く反り返ることから、端部は波状を呈する蓋と思われる。蓋端部内面下より身受けの外面まで無軸である。素地は灰色で軸は灰緑色である。図86はやや大型の蓋と思われる。甲面にヘラ彫りによる草花文が施されている。軸は蓋端部の内面一部まで施軸され見受けまで無軸である。素地は白色で軸は緑色である。図87・88は蓋の端部である。図87は小型の蓋と思われる。蓋径は7.6cm。素地は白色で軸は淡緑色である。図88は蓋の甲端部に陰圏線が施される。素地は白色で軸は緑色である。図89は酒会壺の胴下部片で重量感のある大型の壺である。外面にヘラ彫りによるやや幅広の蓮弁文を施し、器壁が厚い。素地は白色で、軸は、外面は淡緑色で内面は淡青色である。図90は底径19.4cm。内面は落とし蓋の痕跡が残る。外面はヘラ彫りによる蓮弁文が施され、蓮弁は器壁が厚い。高台は外底を浅く掻き取る。高台は無軸である。外面は淡灰緑色で内面は更に淡い。外面に貫入が見られる。図91は底部片で高台部分である。底径17cm。内外面は施軸、外面は緑色で内面は淡青色である。素地は淡灰色である。

(6) 小壺 (第76図92)

図92は把手を有する小壺である。口径4.6cm。外面に文様と思われる痕跡が見られるが詳細は不明。内面は轆轤痕が明瞭である。素地は淡灰白色で軸は外面が淡緑色で内面は淡灰緑色。

(7) 鉢 (第76図93)

図93は口径9.6cm。口縁部が内傾する。口唇部は無軸で、蓋付きの可能性も考えられる。口縁部外面下はヘラ描きによる雷文帯を巡らし、胴部にはやや幅広の蓮弁文を施す。素地は白色で軸は淡緑色である。外面にヘラ彫りによる文様が描かれているが構図は不明。内面は轆轤痕が明瞭に残る。素地は淡灰色で、軸は淡緑色である。

(8) 撞鉢 (第76図94～第77図96)

図94は口径13.8cm。口縁部を外側へ折り曲げる口折型を呈している。口縁部上面は平坦で口唇部はやや舌状を呈する。内面口縁部下より無軸で数条単位の櫛目を施すが溝は浅い。外面は無文である。素地は白色で軸は淡緑色で貫入は荒い。図95は口径14.3cm。口縁先端部はやや下方へ傾く。外面胴部に2条の陰圏線が巡る。内面は口縁下部より図94より櫛目はやや太めで深い。素地は淡灰白色で軸は淡いオリーブ軸、内面の櫛目状端部まで軸は施されている。図96は口径14.8cm。口縁部は図94に類似するが器壁はやや厚い。外面は無文。内面の櫛目は口縁部下より施され溝は深い。外面は無軸。素地は淡灰色で素地は淡緑色で腰部まで施軸するが、軸垂れの合間に淡緑白色の軸が見られ、2度掛けられた可能性がある。

(9) 香炉 (第77図97・98・101・102)

図97は口径13.2cm。三足器の香炉と思われる。口縁部は内側に口折し、素地では口唇部は窪みを呈しているが軸で平坦に仕上げている。足は型成形で先が欠損している。円筒状で軸は内面口縁部下まで施す。素地は淡灰色で軸は灰緑色である。貫入が細かい。図98は口径7.2cm。口縁部の造りは図97に類似する。外面には三木文を上下の圏線で囲い巡らす。内面口縁下まで施軸する。内面は無軸で轆轤痕が残る。素地は灰色で軸は淡灰緑色。図101は口径8cm。胴下部は張り胴上部より垂直に立上り口縁部は外反する。口唇部は舌状を呈する。素地は白色で軸は淡青緑色で内面口縁部下まで施軸する。貫入は細かい。図102は底部片でベタ底である。底径3cm。底部の器壁は厚いが胴部への立上り部の器壁は薄い。胴部より口縁部にかけての形状は不明である。見込み及び外底は無軸である。素地は淡灰白色で軸は淡緑色。

(10) 杯 (第77図99・103・104)

図99は口径7.3cm。口縁部は「S」字状を呈する。肩部の稜は明瞭で、その直下に微細な圏線が巡る。器壁は薄い。素地は灰白色で軸は淡緑色である。図103は口径12.4cm。口縁部は「S」字状に屈曲し内傾し、肩部は丸みを帯び張る。胴部にヘラ描きによる蓮弁文が施される。素地は淡灰白色で軸は緑色。図104は口径7.1cm。底径4cm。器高3.3cm。碁筭底を呈し口縁部は直口口縁である。口唇部は外端が尖る。見込みは陽圏線が巡る外底は無軸。素地は淡灰白色で軸は淡緑色。貫入は細かい。

(11) 大鉢 (第77図105～107)

図105は口径17.4cm。口縁部は輪花である。器壁はやや厚い。内面にヘラ彫りによる花文[?]を施す。素地は淡灰白色で軸は淡緑色。貫入は荒い。図106は底径7.4cm。碁筭底で胴部は逆「ハ」の字状に開く。外面腰下部に2本の陰圏線が巡る。素地は白色で軸は淡青緑色で貫入は細かい。図107は口径22.8cm。

(12) 水注 (第77図108・109)

図108は水注又は瓶の可能性もある。肩部及び胴部に貼り付けによる把手を有する。頸部は立ち上がり、器壁が薄くなる。胴部の器壁はやや厚いため中型の水注と思われる。内面は轆轤痕が残る。素地は灰色で軸は外面が緑色で内面は淡灰緑色。図109は胴部片で注口の付け根[?]胴部にヘラ彫りによる蓮弁文尻、その下部に花文[?]が施される。素地は白色で軸は淡緑色であるが被熱で発色が悪い。内面は轆轤痕が残る。

(13) 托台(臺) (第77図111)

図111は托台(臺)の受皿の部位と思われる。皿内側の欠損部は茶台になるのではないかと思われる。皿の端部はやや上部方向へ移行するようである。下部の形状は不明。素地は白色で軸は淡緑色。

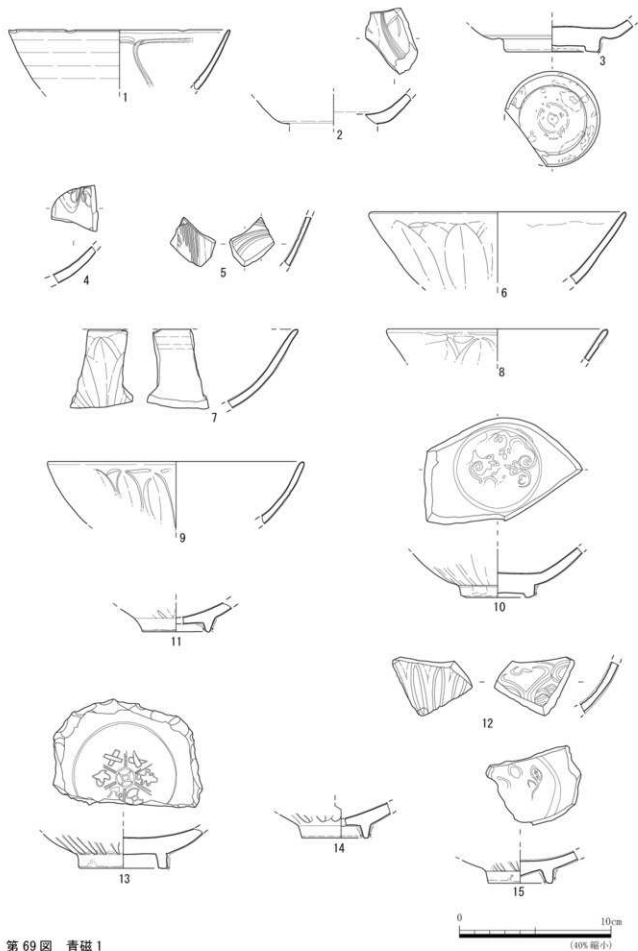
(14) 不明 (第77図110・112)

図110は形状が不明で一部に鉄軸が掛けられている。区画が見られることから、首里城京の内出土の染付で大合子の中蓋の形状を想起させる。又は、人形などを載せる台も考えられる。素地は白

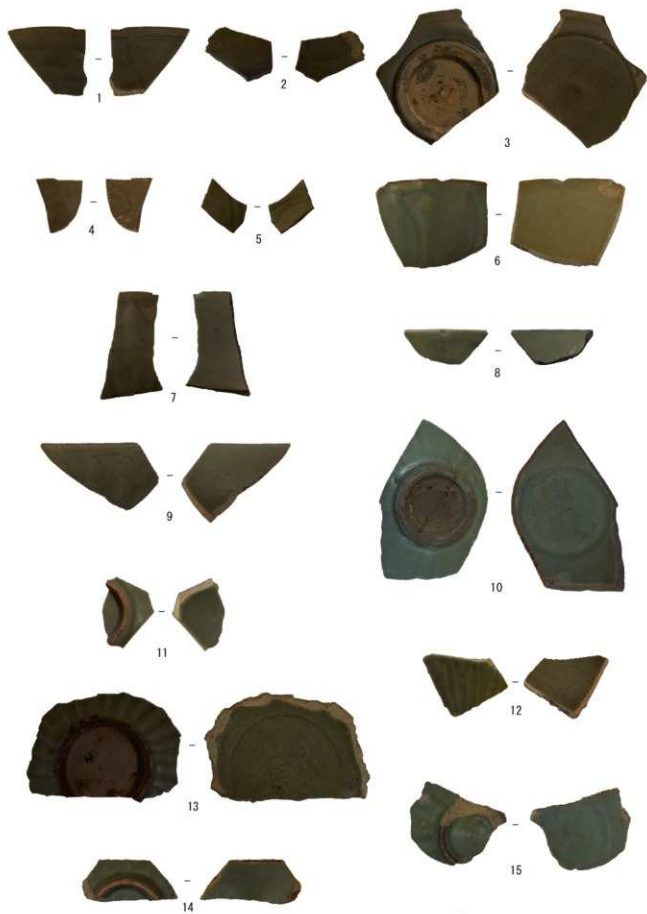
色で釉は淡緑色と一部鉄釉が掛かる。図 112 は遊具と思われる。円形を呈するようで前面施釉である。側面は丸みを帯びる部分と直角に成形する部分がある。上下の詳細は不明であるが図面では丸みを帯びる部分を底面としている。素地は淡灰白色で釉は濃灰緑色。

(15) 高麗青磁 (第 77 図 113)

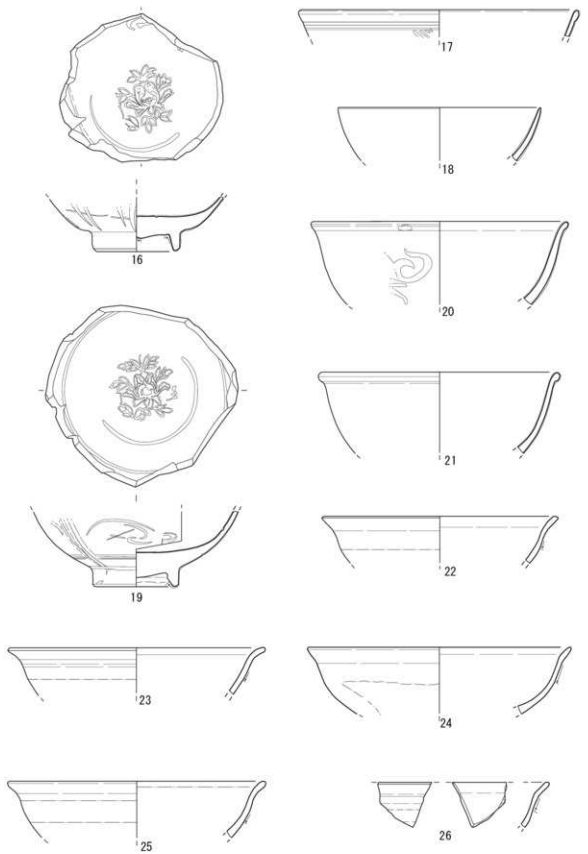
高麗青磁で象嵌による文様が施される。小破片が多く唯一形状が判別できる資料が 1 点のみであることから本項で取扱い紹介する。図 113 は碗の胴部資料で外面腰下部にラマ式の蓮弁文を巡らす。内面胴部は如意頭文と 2 条の圏線が施される。素地は灰色で、文様の象嵌部が白色。釉は透明釉で外面はやや白っぽさが目立つ。



第 69 图 青磁 1



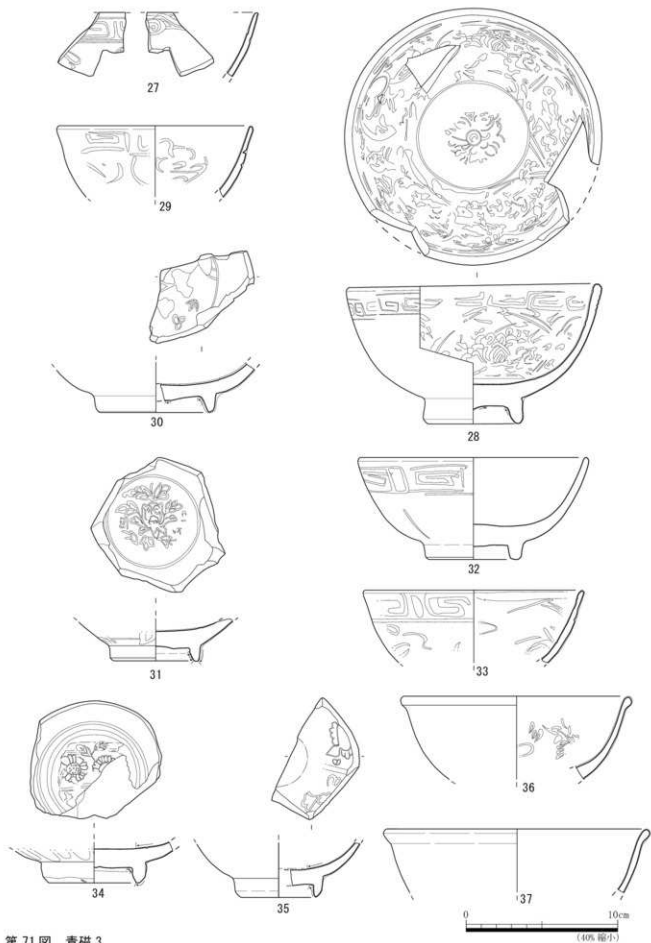
图版 49 青磁 1



第70図 青磁2



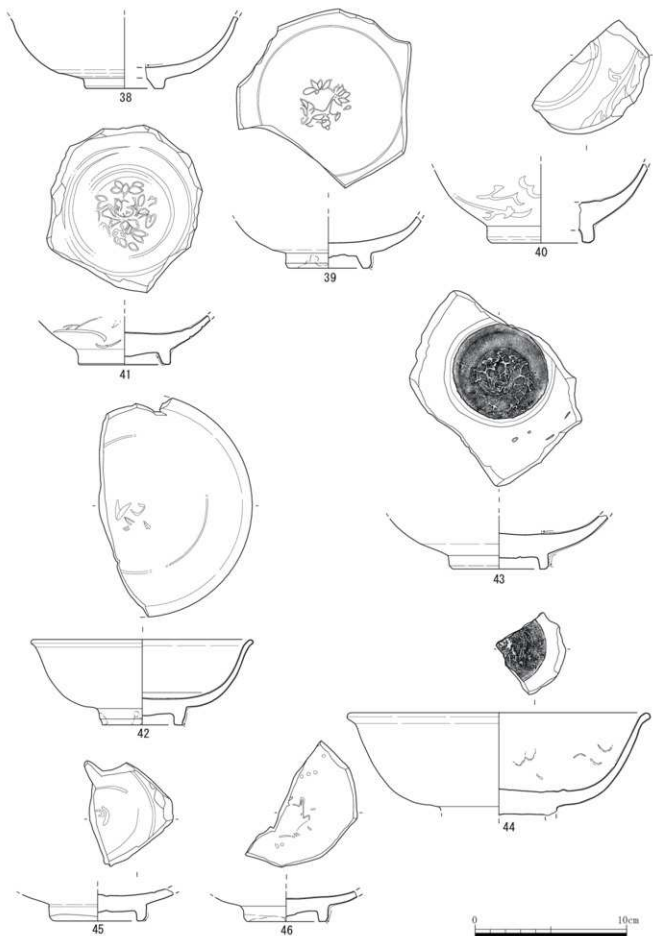
图版 50 青磁 2



第 71 図 青磁 3



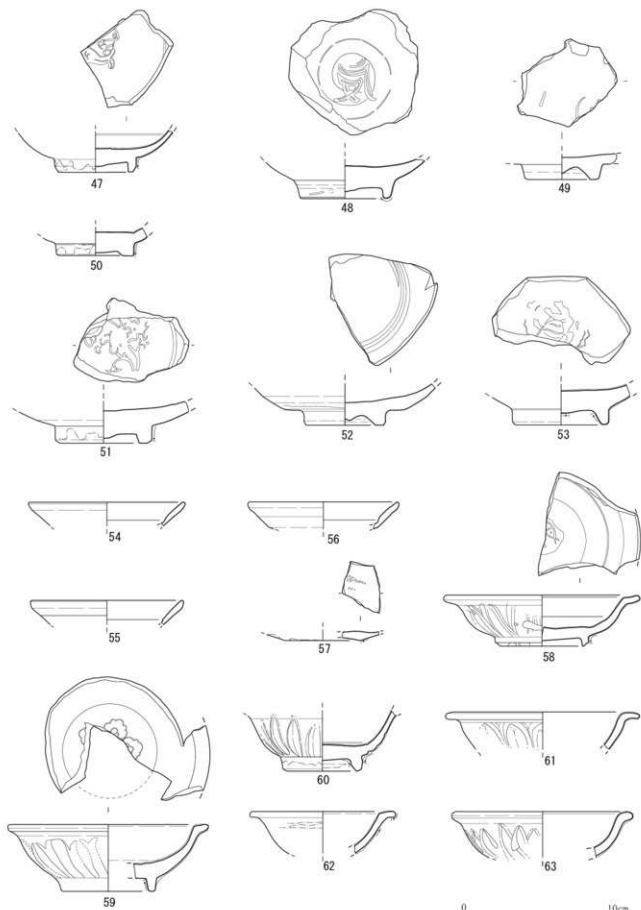
图版 51 青磁 3



第 72 图 青磁 4



图版 52 青磁 4

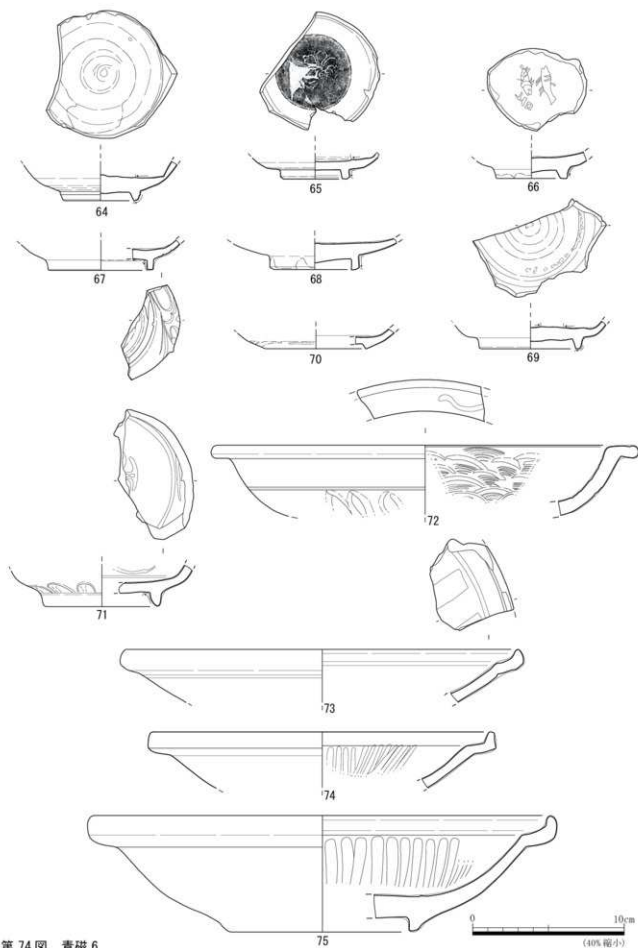


第73图 青磁5

0 10cm
(10%縮小)



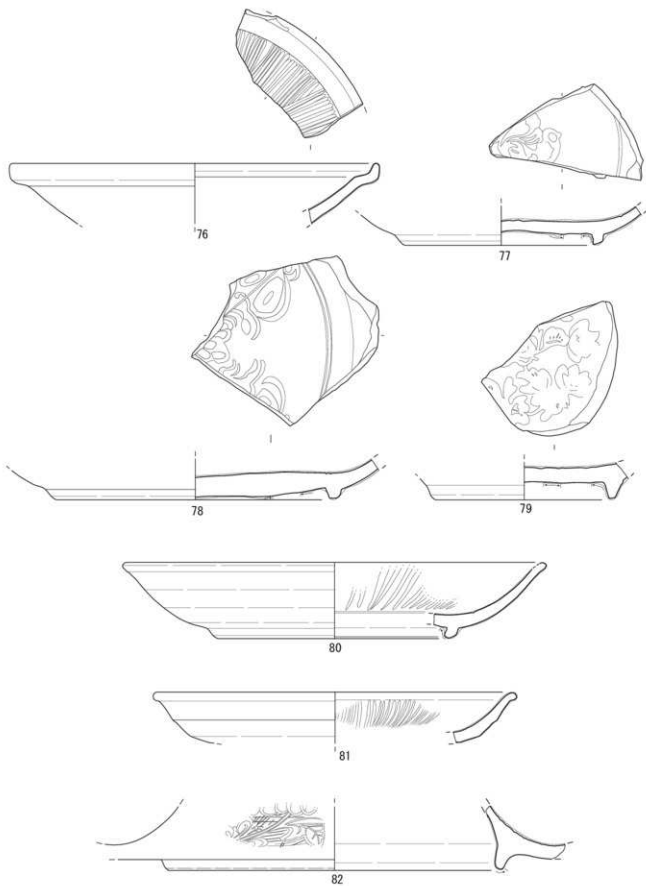
图版 53 青磁 5



第 74 图 青磁 6



图版 54 青磁 6



第 75 圖 青磁 7



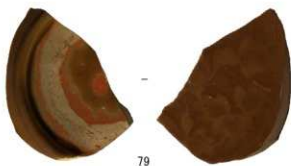
76



77



78



79



80



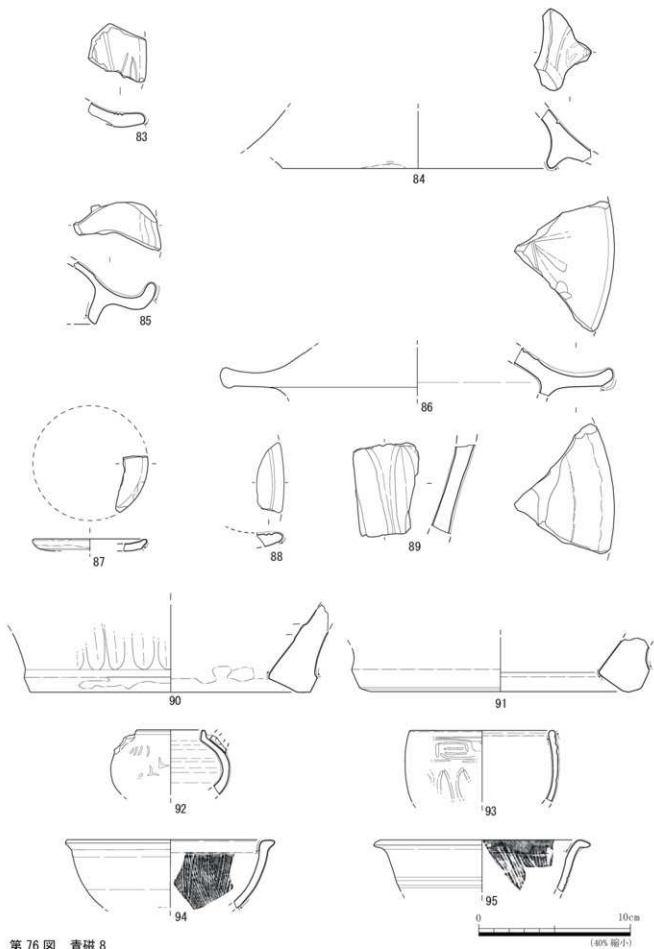
81



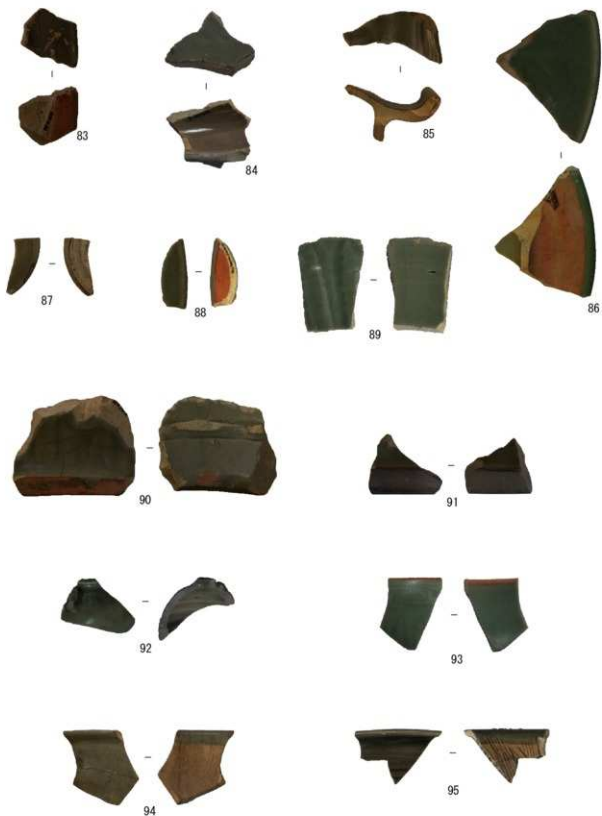
82



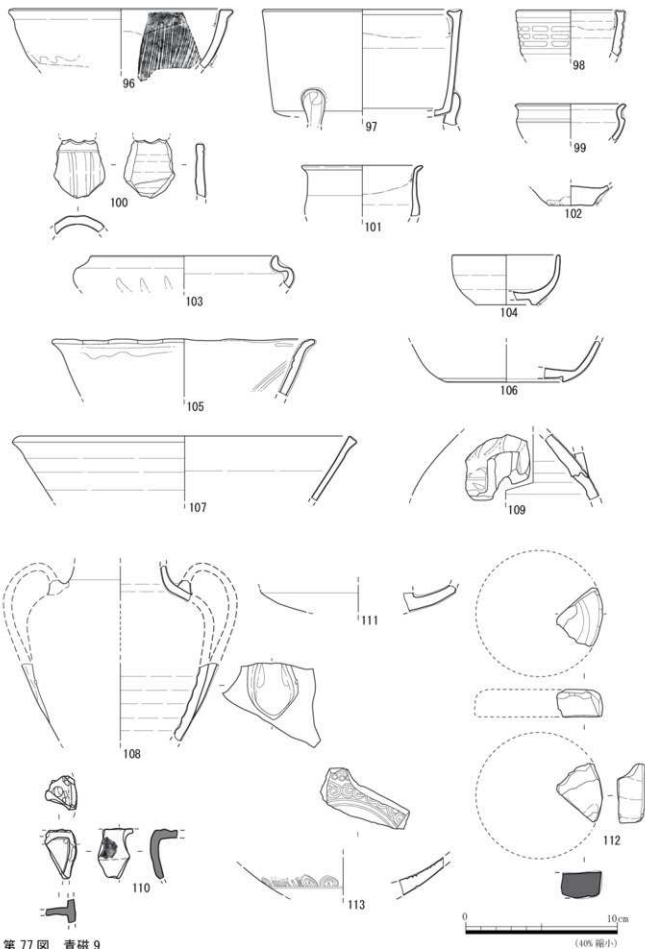
图版 55 青磁 7



第76图 青磁8



图版 56 青磁 8



第 77 図 青磁 9



图版 57 青磁 9

5 染付

染付は188点得られた。主に中国産で、少量ではあるがベトナム産が認められた。年代では元末期、元～明初頭の手手から清代18c～19cのものまで年代幅が広い。生産地は景德鎮、福建/広東産などで、僅かに徳化窯タイプがみられる。生産年代で量的に多い資料は元～明初の年代と明代が37点と同数で認められ、次いで元末の年代、明～清代、清代がこれに続く。

器種に限定せず出土量全体で時代(ベトナム産含む)をみると14c頃(元末・元末～明初含む)とみられる資料が69点と多くを占め、15c～16c(15c後～16c初含む)の26点と17c～18cの資料がこれに次いで多い。15c頃のもの18c頃の資料は次点でやや少ない。16c～17c(16c前～中/16c後～17c初含む)、14c～15c頃(14c後～15c初/14c後～15c前/14c後～15c中含む)、17c頃、18c～19cは数量が少なく10点未満で他、年代不明が多い。

生産地だけに限って言えば全ての器種含め景德鎮産が104点と最も多く、次いで福建/広東産が34点、他、徳化窯タイプ、広義の中国産などが認められた。

(1) 中国産(第78図1・2、第79図3・4)

中国産の染付は143点得られ、器種は碗、皿、壺、梅瓶、瓶、杯、袋物で、碗に次いで梅瓶、壺の順に多い。全て破片の為、個体数は推し量れない。碗は86点で幅広い年代の資料が認められ明代・景德鎮産の碗が他の年代と比較し僅かに多いが、明～清代の福建/広東産、清代の福建/広東産も見受けられる。皿はごく僅かで明代の景德鎮産、福建/広東産、明～清代の景德鎮産、清代の福建/広東産が各々少量ずつ見られる。壺は手手の元末・景德鎮産が確認された。他、明代・景德鎮産が見られる。口縁資料が少なく形態分類まで至っていない。

器形

器種全体でみると口縁形態が(1). 外反タイプ17点、(2). 直行タイプは17点で他は殆ど胴部で器形判断不可が多い。又、口唇部の形状が(ア). 舌状タイプが17点、(イ). 角がたつものが10点、(ウ)丸みをもつものが4点みられる。他は形状不明である。

器形に関しては纏った量のある明代・景德鎮産の碗と明～清代・福建/広東産の碗に限定し略述する。明代・景德鎮産の碗は24点中、口縁部が7点で、器形の状態は(1). 外反タイプ、(2). 直口タイプの二通りが認められ、前者は3点、後者4点である。又、口唇が(ア). 舌状タイプ4点、(イ). 角がたつもの3点が認められた。口縁部の出土量が少なく口縁形態の傾向が掴めなかった。

明～清代・福建/広東産の碗は口縁部10点のうち器形の(1)外反タイプ3点、(2)直口タイプは6点が認められた。口唇が(ア)舌状タイプ3点、(イ)角がたつもの4点、(ウ)丸みをもつもの3点が認められた。その他、胴部などで口縁形態の詳細が把握困難であった。

文様

文様は量的に多い碗から列挙するが、86点と量が多く年代別で記述する。明代の文様では29点中、唐草文と草花(菊花)文が同数で5点認められた。次いで、圏線のみが3点、ラマ蓮弁2点、他、渦文、唐文、圏線のみ、圏線+唐文、圏線+草花文、圏線+波濤文、圏線+唐草文、圏線+草花文+蓮弁文、草花(渦文)、鳳凰など各々1点ずつ認められ、無文が3点みられた。

明～清代は21点中、草花文が8点、印青花6点、圏線+草花文2点、他、唐文のみ、圏線のみ、圏線+唐草文、鉄軸覆輪草花文、無文が各々1点ずつ認められた。

清代では、11点中草花文と丸文が同数で2点、他、圏線のみ、圏線(高台脇)、圏線+蓮弁文、圏線+半梅、寿文のみ、唐文のみ、無文が各々1点ずつみられた。

壺(酒会壺)の文様では31点中で最も多い文様は牡丹唐草文で27点認められた。他、4点は文

様がみられない。壺（酒会壺以外）の文様では、5点中、ラマ蓮弁文、草花文、唐草（龍文）、圏線+花唐草（牡丹）、無文が各々1点認められた。梅瓶では、図に掲載のとおり41点中、牡丹唐草文は31点、他、肩部：唐草文、胴：牡丹唐草文・窓線、底部：七宝繋ぎ+ラマ式蓮弁文が4点、無文の破片が6点みられた。皿は、9点中、無文破片6点、圏線のみ2点、草花文1点が認められた。

杯は5点中、圏線+博+マツバ文が2点、唐文、無文（芝垣）、圏線のみが各1点である。瓶は2点中、唐草文と圏線+草花文が各々1点である。瓶か壺（袋物）は、5点中、無文2点、他、圏線+草花文、唐草文、草花文+帯文が各1点である。

袋物では、2点中、圏線+花唐草（牡丹）と無文が各々1点認められた。壺か袋物では、1点中、圏線+唐草文1点（明代15c頃のベトナム産）である。年代不明の資料は、25点中、圏線+草花文、草花文が各1点と、文様は認められるが、詳細不明9点、無文14点である。器種不明では、2点中、文様不明2点である。

被熱資料の認められる器種

梅瓶は、41点のうち37点が被熱しており又、酒会壺は31点全てが被熱している。他、碗6点、壺と、瓶又は壺が同数で3点、袋物2点以下、壺又は袋物、瓶又は壺（袋物）、碗又は鉢が各々1点である。

被熱資料の出土地区

被熱資料は79点確認された。多くの地区に点在し、ム-43が31点と最も多い。他、ラ-42、43、44グリッドは10次調査が行われ遺物が集中するが、ラ-43で7点、ラ-44は5点、ラ-42は1点の被熱資料が認められた。その他、P-100、W-85、Y-85、Y-86、Y-99、Z-85などから各々1点被熱資料が出土している。東丘陵から出土した染付からは被熱資料はみられない。

集計表の出土曲輪、グリッド、層不明とした資料の中には1次、2次、3次、5次、7次、8次、9次、10次調査の資料が含まれる。層序が明確でないことから不明資料としたが酒会壺、梅瓶の破片が多く、被熱を受けていることから、三の曲輪北西出土の可能性が高い。

層序

層序ではⅡa層の出土が最も多く全体の20.2%を占め、Ⅰb層、Ⅰa層が次いで多い。Ⅲa層、Ⅲ1層は量的に少なく、上層に遺物が集中する。曲輪別にみると三の曲輪北西で31.9%と染付の三分の一の量が出土し、次いで二の曲輪が27.6%と多い。集計では2cm以下の破片を除外しており総出土量のうち三分の一が火を受けている。染付だけでなく陶磁器類全般（青磁/白磁/褐釉陶器/本土産磁器等）、石類も火を受けた資料が出土している。

集計表では朱元璋が明を興した1368年から清に滅ぼされる1644年の間、明の時代が長いため生産年代の下に時代ごとに分類を行った。その結果、元末、元・明初頭の資料に景德鎮産の壺、梅瓶の出土はみられるが、碗が出土せず、なおかつ三の曲輪北西に集中している。

明代の資料については元末、元・明初頭とほぼ同数にもかかわらず器種が多いことと碗の数が約半数以上を占め、生産地についてもほぼ景德鎮産が群を抜く。明～清代の資料は若干数を減らし器種も碗、皿のみに限るが福建/広東産が多い。

清代になるとさらに数は減少、遺物は景德鎮産がみられなくなり、ほぼ福建/広東産が占める。僅かだが、徳化窯タイプの資料が混在する。今後の調査で染付の量が増加すればさらに傾向が把握できるものと考えられる。当時の時代的流れか、検討の余地がある。年代、産地不明の資料にも器種は碗が多くみられる。

中国産以外ではベトナム産が少量出土するが生産地についてはほぼ不明、碗の年代は14c後～15c初と明代のものが多く、ベトナム産も生産年代が中国産とほぼ同時期である。以下、図示した資料を略述する。

第10表 染付出土量

高麗	アゾール	器種	年代	単位量																			
				Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		Ⅷ		Ⅸ			
				10		10		10		10		10		10		10		10		10			
				口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底		
一の表層	ア-01	土器	1																				
	ア-02	土器																					
	ア-03	土器																					
	ア-04	土器																					
	ア-05	土器																					
	ア-06	土器																					
	ア-07	土器																					
	ア-08	土器																					
	ア-09	土器																					
	ア-10	土器																					
二の表層	ア-11	土器																					
	ア-12	土器																					
	ア-13	土器																					
	ア-14	土器																					
	ア-15	土器																					
	ア-16	土器																					
	ア-17	土器																					
	ア-18	土器																					
	ア-19	土器																					
	ア-20	土器																					
三の表層	ア-21	土器																					
	ア-22	土器																					
	ア-23	土器																					
	ア-24	土器																					
	ア-25	土器																					
	ア-26	土器																					
	ア-27	土器																					
	ア-28	土器																					
	ア-29	土器																					
	ア-30	土器																					
四の表層	ア-31	土器																					
	ア-32	土器																					
	ア-33	土器																					
	ア-34	土器																					
	ア-35	土器																					
	ア-36	土器																					
	ア-37	土器																					
	ア-38	土器																					
	ア-39	土器																					
	ア-40	土器																					
五の表層	ア-41	土器																					
	ア-42	土器																					
	ア-43	土器																					
	ア-44	土器																					
	ア-45	土器																					
	ア-46	土器																					
	ア-47	土器																					
	ア-48	土器																					
	ア-49	土器																					
	ア-50	土器																					
合計																							
合計																							
合計																							

図1は壺の破片31点のうち同一個体と思われる資料10点を絵付けの図柄から判断可能な破片を抽出し図上復元を行った。口縁2点、底部2点、他胴部片である。外面の文様は口縁付近の第一文様帯で界線文と推測、頸部から肩部にかけて第二文様帯は宝相唐草文を配す。第三文様帯は牡丹唐草文、胴下部には第四文様帯の蔓唐草文、第五文様帯は腰部から底部にかけてラマ式蓮弁文を施す。生産地は景德鎮で元末の14c頃と推測される。出土地は殆ど三の曲輪、東トレンチ、南トレンチのム-43/ラ-43/ラ-44のI a、II a、III a層からの出土である。同一個体と考えられる破片は全て火を受けた痕跡があると同定され被熱しており、同類の壺と推測される他の破片も同様に被熱している。類似資料が首里城(第34集)、勝連城跡(第6集)でも出土している。図2は梅瓶で41点得られた。そのうち同一個体と思われる資料4点を図上復元した。文様は頸部から肩部にかけて唐草文を配し胴下部に牡丹唐草文が確認できる。底部近くは蓮弁文を圖案化した文様が見られ、蓮弁中心部の飾文様は明瞭でない。破片の中には鳳凰の絵付けが確認できる資料もあるが図に配置できず外した。図1同様、別個体の梅瓶と考えられる破片も全て被熱資料である。又、作図以外の資料でも肩部に唐草、胴部に牡丹唐草、底部に七宝繫ぎとラマ式蓮弁文を配す資料が数例認められた。梅瓶とは中国で「口径小さく立ち上がり短く肩部が張り、脚部がすばまる形の瓶」を呼称し、今帰仁城跡(第26集)で玉壺春瓶、明染付の梅瓶が3個体分(2006までの資料)出土している。図3は碗底部で明代の景德鎮産の資料である。底部の残存部から類推すると華奢な器形で内底の厚みや高台部分、畳付けの箇所ともつくりが細い。文様は高台に2条の園線と外面に草花文、蓮弁文を施し、内底には園線2条を巡らし蓮華文を描く。呉須の発色は鮮明である。図4は瓶又は壺の胴部で生産地は明代の景德鎮窯、14c後半～15c前半の時代と思われる。文様は胴下部に草花文と帯文を施し、呉須の状態は鮮明である。被熱資料で火を受けている。

(2) ベトナム産(第79図5～12)

ベトナム産染付は10点得られ、器種は碗、壺、瓶、袋物などである。生産年代は碗が14c後半～15c初と14c後半～15c、15cなどの年代が当てられ、壺は15c頃のもので、袋物が14c後半～15c中と推測される。全体量が少なく胴部片が僅かに多い程度で、生産された窯などは判っていない。図5は碗で口縁部がやや外反し口唇の形状は丸みを帯びる。器厚は全体に薄手を成す。文様は外面が園線と唐草文を施し、内面には帯文が見られ呉須の状態は鮮明である。明代の14c後半～15c初頭とみられる。図6は碗の胴下部で、文様は外面にラマ式蓮弁文を施し、内面の園線は明瞭でなく呉須の状態は悪い。明代15c頃の資料である。この資料も被熱を受けている。図7も碗の底部で図6の胴部より若干器厚があり底径も多少大きくなる。文様は外面にラマ蓮弁文を施し、内底には菊花文が見られ呉須の状態は鮮明である。外底は鉄銹を塗布するチョコレートボトムと呼称される黒い着色(首里城 第29集/2005)がなされる。明代・14c後半～15c初頭の年代が当てられている。図8は瓶又は壺の胴部で残存部の厚みは薄手の為それ程大型にならないと推測される。文様は外面に唐草文を施し、呉須は鮮明。この資料も被熱している。明代・15c頃の資料。図9は壺の胴下部あたりで若干厚みをもつ。文様は外面に草花文を描く。図10も壺の胴部で外面の文様は一部分のため唐草文か龍文か明確でない。明代・15c頃の資料。図11は壺又は袋物の胴部で図10同様それ程厚みをもたず小型の資料と推測される。外面の文様は園線に唐草を施す。明代・15c頃ののものと思われる。図12は壺の胴部で前者に比較し、やや厚手を成し大型資料と考えられる。外面にラマ式蓮弁文を施す。

不明資料(第79図13)

図13は瓶又は壺の胴部で外面に文様は描かれるが不明。産地/年代もはっきりせず被熱する。一の曲輪、東石積I a層から出土した。

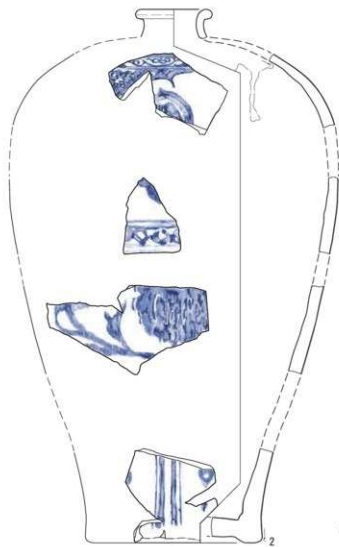
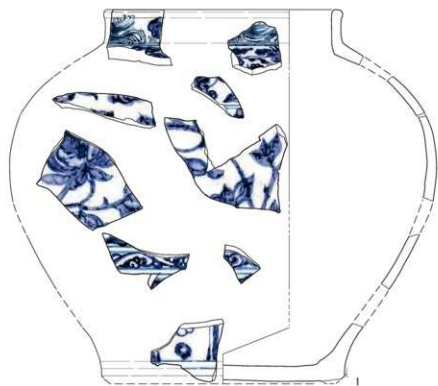
第 11 表 染付曲輪別層序 出土量

層序 (比率)	曲輪	東丘陵	一の曲輪	二の曲輪	三の曲輪	三の曲輪 北西	四の曲輪	不明	合計
I a 層		2		8	4	11	2		27
I b 層		2		24	2		4		32
II a 層						38			38
III a 層				12	2				14
III b 層						1			1
不明		1	5	8	1	10	10	41	76
合計		5	5	52	9	60	16	41	188

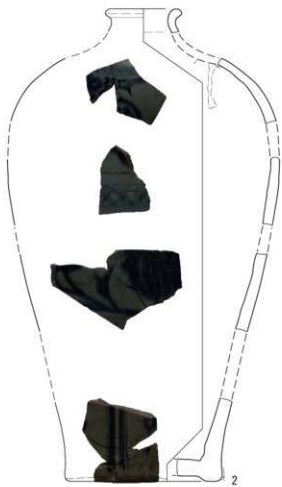
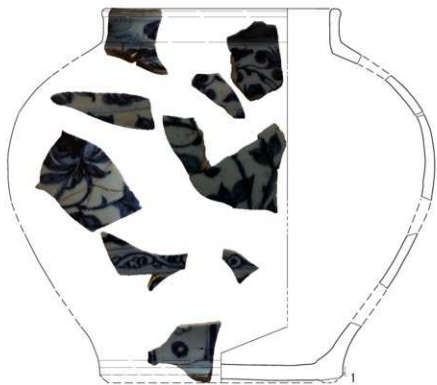
第 12 表 染付観察一覧

数量単位: bag

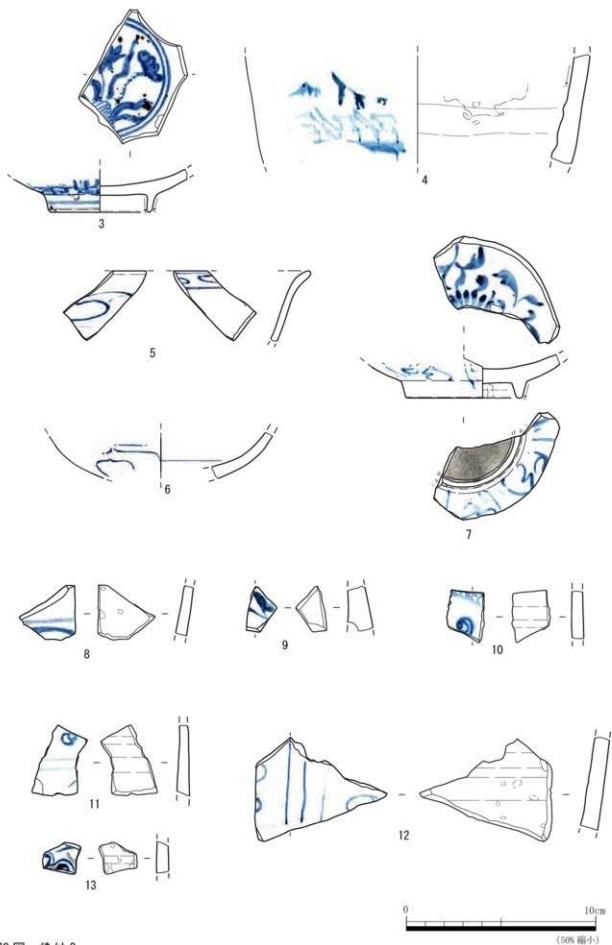
国別 調査	調査 番号	器種	部位	産地	年代	文様: 外面 / 状態	文様: 内面 / 状態	口径 胴径 底径 重量	出土地/地区/グリッド トレンチ/層序/レベル
第 76 国・ 調査 58	1	酒金盃	口縁部 / 胴部 9点 同一個体	景徳鎮	文様元末 /14c	牡丹青草 口縁部厚: 0.8 胴部厚: 1.0	破片/ 全て 被熱	(推定) 口径: 18.0 胴径: 18.2 底径: 28.3	三の曲輪 北西/ ; ラ-43 東トレンチ II a-1点 ; ラ-44 南西地区 I a-1点 / II 1-1点 ; ム-43 南トレンチ II a-4点 ; 西臨 南側斜面 (グリッド下) I a-1点 ; 地区 層序不明-2点
	2	梅瓶	胴部-4点 底部-1点 同一個体	景徳鎮	元末~明初 14c	胴部: 牡丹青草 底部: ラウ式・七宝繋ぎ 口縁部厚: 0.8	破片/ 全て 被熱	(推定) 口径: 5.9 底径: 13.4 器高: 約 40	; 三の曲輪 北西 ラ-43 南トレンチ II a-1点 ; 西臨 南側斜面 (グリッド下) I a-1点 ; 地区不明 I a-2点
第 79 国・ 調査 59	3	碗	底面	景徳鎮	明代/ 16c 前~中	腰部文様: 外面 / 脚線・草花・蓮弁 内底: 鮮明 無文 景付?: 無し	脚線/蓮弁等 内底: 絵柄素	5.5 36.9	地区、層序不明
	4	瓶/壺	胴部	景徳鎮	明代/ 14後~15c 前	草花・菊文 内底: 鮮明	無/被熱	- 36.6	地区、層序不明
	5	碗	口縁部	ベトナム	明代/ 14後~15c 初	器形: 口縁外反 口唇形態: 丸み 脚線・唐草 内底: 鮮明	唐文	- 6.2	二の曲輪 75-96・97 層序不明
	6	碗	胴部	ベトナム	明代/ 15c	フ蓮弁 内底: 悪い	不明 脚線/被熱	- 8.7	二の曲輪 7P-100 / 皿 a/0 ~ 10 c m
	7	碗	底面	ベトナム	明代/ 14後~15c 初	フ (蓮弁) 内底: 鮮明 高台内: フリソコト	不明 菊花文 内底: 絵柄素	6.2 40.5	三の曲輪 75-96 層序不明
	8	瓶/壺 (袋物)	胴部	ベトナム	明代/ 15c	唐草 内底: 鮮明	無/被熱	- 6.3	三の曲輪 72-85 I 層
	9	壺カ	胴部	ベトナム	明代/ 15c	草花文 内底: 鮮明	無/被熱	- 4.9	三の曲輪 72-85 II a
	10	壺カ	胴部	ベトナム	明代/ 15c	唐草 (龍文カ) 内底: 鮮明	無/被熱	- 5.2	三の曲輪 7P-85 II a
	11	壺/袋物	胴部	ベトナム	明代/ 15c	脚線・唐草 内底: 鮮明	無/被熱	- 7.5	三の曲輪 72-86 I 層
	12	壺カ?	胴部	ベトナム	明代/ 15c	フ蓮弁 内底: 鮮明	無/被熱	- 37.2	二の曲輪 72-99 層序不明
	13	瓶/壺	胴部	不明	不明	文様: 不明 内底: 鮮明	被熱	- 2.9	一の曲輪 東石積 / I a



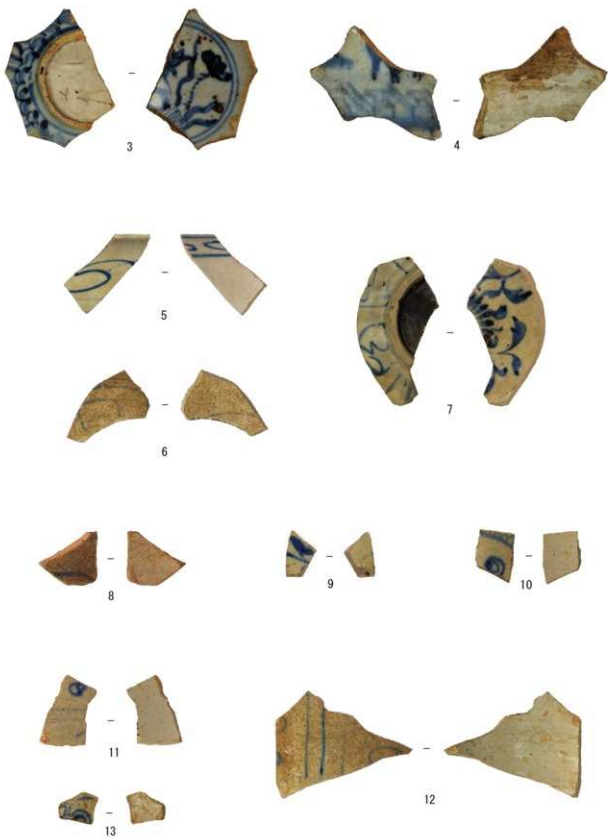
第78図 染付1



図版 58 染付 1



第79図 染付2



图版 59 染付 2

6 褐釉陶器

褐釉陶器は5,640点得られ輸入陶磁器類では青磁の次に多い。器種は壺(大・中・小)、甕、鉢、罌、鉢、小壺、茶入、皿、瓶、袋物、蓋、水注等がみられる。産地別では広義の中国産1,099点、地域が判別できたものは福建/広東系9点、龍泉窯1点他、中国産以外では、タイ産137点が若干多く、ベトナム産、東南アジア産と推測されるものが得られた。又、生産地、年代も不明の壺又は甕の胴部は3,447点と器種別では最も多く、同様に生産地、年代不明の壺、胴部は846点となった。

A. 中国産

壺は164点出土、壺以外の器種では壺又は甕としたものが524点となった。破片が多く器種の判断できないものが多い。中国産と判断できた褐釉陶器のうち生産地域、年代は不明だが、器種で甕又は壺の胴部は641点得られている。

出土地別の状況を見ると、二の曲輪の資料が3,677点と最も多く65%を占め、次いで三の曲輪の560点、四の曲輪の447点が多い傾向を示す。三の曲輪北西の235点、一の曲輪の221点は若干数を減らし、東丘陵では62点と僅か、出土地不明の資料は408点である。

1. 壺

図1は口縁部で器形は碇屑、口縁より大きく張るが丸みを帯びる。釉葉は暗褐色、外面は全面に施釉され、内面は口縁部以下露胎する。素地は灰色に明橙色の粘土が斑に混じり白、黒色、石英粒が混入する。茶入かと考えられる。図2は小型の口縁部で頸部から屈曲するような形状を呈し肩が張る器形と想定される。釉葉は褐色、外面には部分的に釉葉が残るが剥がれ掛かった状態、内面は無釉を呈す。素地は黄灰色、褐色、白、石英粒を混入する。図3は中型の壺、口縁部、釉葉は鉛色、口唇部は露胎する。頸部に圈線を2条巡らせる。内面は口縁部近くに部分的に施釉する。素地は橙白色、黒、褐色、石英粒を混入する。

図4は福建/広東産の口縁部で釉葉は暗緑褐色、外面叩き目、内面はへら削りを施し、粘土継ぎ目、素地は灰色で部分的に明橙色がサンドイッチ状にみられる。黒、白色粒を混入する。叩きの技法は他の破片にはみられない。器壁は厚手。叩き成形で器面調整を行うが叩きの強度が激しく外面は丸みが崩れ凹凸が極端に有り角張る。内面のへら調整痕も凹凸が激しい。図5の口縁形態は丸みを帯びる。既報告(第32集)でも類似資料が認められ当資料の方が、より頸が張る。横型の把手の一部が残存する。図6は前者に比較し口唇部が平たく潰れる。肩部の形状は図11.12とも、なだらかな肩を呈す。図7は口~底部を復元したもので上げ底を成し、釉葉は黒褐色、外面付近と底面が露胎する。内面は全面施釉を施す。素地は橙白色で黒、白色粒を混入する。底部は上げ底で首里城京の内(1998)分類の中型Ⅲ類に近い。

図8は胴部で器厚は薄手、釉葉は黄褐色、外面は施釉され沈線で文様を施し、明瞭だが図柄は不明。内面は無釉である。素地は淡橙色で赤、白、褐色、石英粒を混入する。器壁は厚い部分で6mmと薄手。図9は大型壺胴部で器壁は5mmと薄手、外面に浮文で龍の胴体部分が確認できる。釉葉は殆ど剥がれている。内面に調整痕の後にユビナデ状の痕跡が確認できる。図10も胴部で器壁5mmと薄手、外面は鉄釉(掻き落とし)、釉葉は薄く剥がれている。内面に調整痕が窺える。

図11は大型壺の口縁部で「ルソン壺」と呼ばれる類の壺である。口唇部の内側が断面の形状で判るように方形に張り出す。頸部の下、肩から胴部にかけて大きく張る器形を呈す。図12も口縁部で口唇部の形状は図11と同様に平坦で若干外側に緩く下がる。頸部は図5・6と異なり口唇直下からなだらかな肩部ではなく、頸が立ち気味の器形で、頸下から肩が張り出す器形となる。器

壁は1cmを測り厚手、施軸は口唇直下に9mm～1.1cmの幅で帯状に釉葉が剥ぎ取られ素地が露胎する。

図13は壺の耳で被熱の状態は耳の内側が明瞭にみられ釉葉が溶けた状態が明瞭に確認できる。(京の内I.P207) 図14も壺の耳で、頸部の耳を張り付けた根元部分に2mm幅の茶色い細線を3条横に巡らす。頸部の器壁は7mm程度で薄い。耳の断面、形状から図13より小型の壺と想定される。

図15は福建/広東系の壺、肩部で頸部の一部が残存し、頸が立ち上がる。肩はかなり張り出す形状である。図16も福建/広東系的大型壺の胴部で器厚は9mm～1cm程度で厚手、外面の叩き目は明瞭で叩きの圧で平坦且つ面をつくる。叩きの凹凸に釉葉がのり縞模様を成す。図6と同様の叩き目痕と推測される。

図17は壺の底部で胴下部まで膨らむ器形を呈す。高台の高さは6mmと低く、底径11cm、高台脇から腰部にかけて輪郭が不明瞭である。内面には泥混手が認められる。畳付けまで軸垂れがみられ、見込みの轆轤痕は不規則、色調は外面が暗赤褐色、底面を除いて施軸される。素地は紫灰色に白色粒がみられる。図18も底部で底面中心部は軽く上げ底になる。器壁は平均8mm前後、底部近くで1.3cmを測り、底面は1.4cmとなる。図19は頸部直下、肩部で耳は雑なつくりを呈し、孔の大きさは左右で非対称を成す。器壁は9mm～1.0cm、混入物の粒の状態が表面に浮き出てみえ釉葉を掛けた上からも良く判る。内側は平たく、胴が大きく張る。

2. 鉢

図20は口縁破片だが頸の部分の部分が極端に短く、口縁部から直で胴部へ向かう。釉葉は黒褐色、外面/内面共に部分的に露胎する。素地は暗灰色を呈し、黒、白色粒を混入する。口径が25cmと大きくなる。図21は福建/広東系の鉢、口縁部で口唇部が外側に口折れする。断面の傾き具合から器高はそれ程高くならない。釉葉は外面が黒色、内面も同様に施軸され、口唇の一部は釉葉が露胎する。素地は灰色を呈し黒/白色粒が混入する。空気の膨張で釉葉に気泡の弾けた痕跡が認められる。

3. 器種不明

図22は底部から立ち上がりだけが僅かで胴部のどの位置まで施軸されていたか判断不可、残存部の外面は施軸無し、底部内面は全面施軸有り。器壁は4～8mm、底面は6～9mmで均一ではない。

B. タイ産

タイ産の器種は137点のうち壺又は甕が87点、壺(大・中・小)46点、鉢は少なく他、器種不明がみられた。

1. 壺

図23は甕又は壺の口縁部で頸部の部分から屈曲するが角が明瞭になるよう仕上げている。頸は短くなだらかに下部へ向かう。釉葉は緑褐色で口唇部は露胎、内面は無釉を呈す。素地は紫褐色を呈し黒、白、褐色、石英粒を混入する。図24も口縁で形態は大きく倒れ気味に外反シラップ状を呈す。口縁部の内外共に轆轤痕が明瞭である。断面の傾きから頸部は窄まる形状を呈し、くびれのある器形が想定される。図25は壺の底部で平底を呈す。底径は25cmを測り胴部から斜めに真っ直ぐ降りる器形が想定される。全体に赤みの強い色調を成し、外面立ち上がり部分に微かに釉葉の痕跡がみられる。混入物は粒が大きく多い。

2. 鉢

タイ産の鉢は僅かに2点得られた。年代/時代とも不明、どちらも口縁部で小片である。2点とも二の曲輪から出土している。

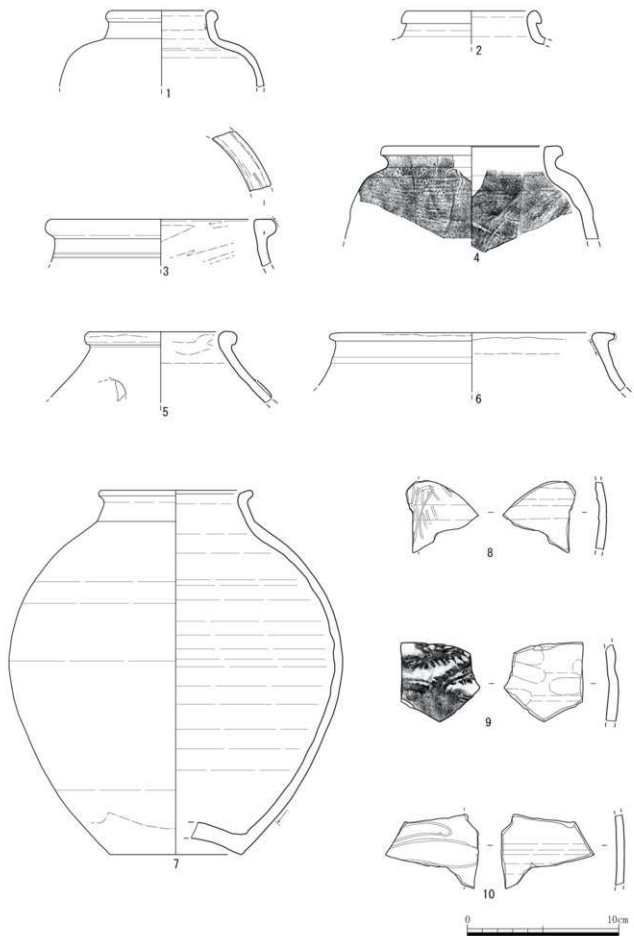
第13表-1 褐釉陶器 出土量

福・広-福建・広東系

出土地	基本層序	産地	中国														
			地域	福・広				不明						不明			
				不明				明代			清代		不明				
			時代	器種	皿	壺	鉢	不明	壺か甕	鉢	不明	壺	皿	壺	皿	壺	皿
年代																	
一の曲輪	I a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
一の曲輪	I b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
一の曲輪	不明	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2	0		
小計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2	0		
東丘陵	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
二の曲輪	I a	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0		
二の曲輪	I b	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0		
二の曲輪	II	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
二の曲輪	III a	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0		
二の曲輪	III b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
二の曲輪	III d	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
二の曲輪	III e	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
二の曲輪	不明	0	0	1	0	0	1	0	1	3	0	6	3	0	0		
小計		1	5	1	1	1	1	0	1	3	1	15	3	0	0		
三の曲輪	I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0		
三の曲輪	I a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
三の曲輪	I b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0		
三の曲輪	II a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
三の曲輪	III a	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0		
三の曲輪	III d	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
三の曲輪	III e	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
三の曲輪	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
小計		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0		
三の曲輪北西	I a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
三の曲輪北西	II a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0		
三の曲輪北西	III 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0		
三の曲輪北西	III 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
三の曲輪北西	池山直上土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
三の曲輪北西	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0		
四の曲輪	I a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
四の曲輪	I b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
四の曲輪	III	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
四の曲輪	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
不明	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1		
縦計		1	6	1	1	1	1	1	1	3	1	24	3	3	1		

第13表-2 褐釉陶器 出土量

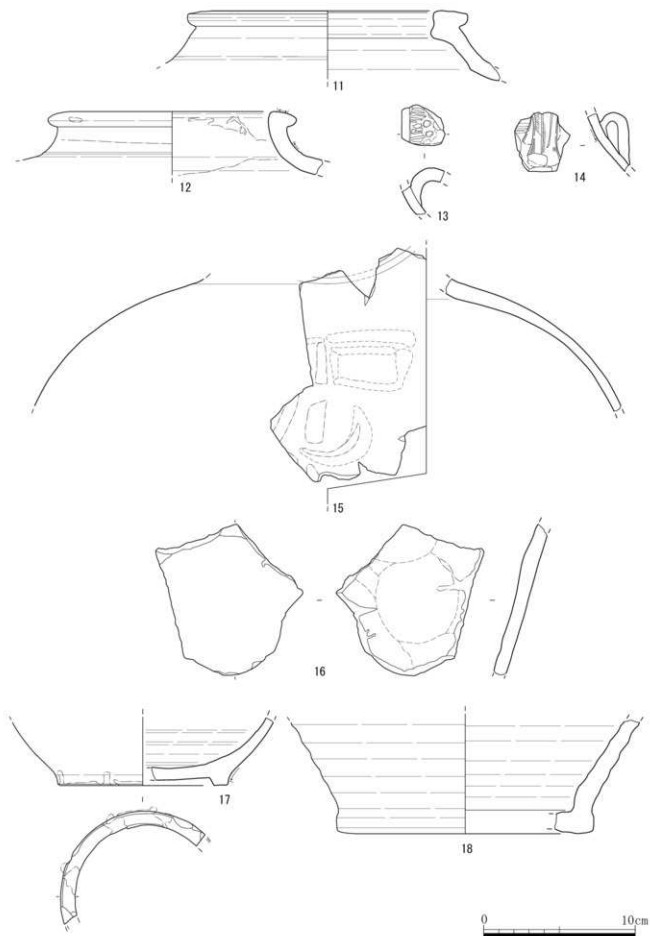
中国								タイ			不明				横計	
不明								不明			不明					
不明								不明			不明					
壺	壺?	壺か甕	壺か甕	鉢	鉢	その他	不明	壺	その他	不明	壺	壺か甕	その他	不明		
不明	不明	14～15c	不明	14～15c	16?17c	不明	不明	不明	不明	不明	14～15c	不明	不明	不明	不明	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
1	0	1	12	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	21
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	76	101	3	11	190
4	0	1	12	0	0	0	0	0	0	0	1	77	108	3	11	212
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	33	4	10	52	
13	1	0	83	0	0	0	0	6	7	1	1	125	578	1	5	821
27	1	0	75	0	0	1	1	2	7	1	1	130	862	1	18	1116
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	1	12
5	0	0	50	1	0	3	1	2	7	0	6	123	476	5	11	685
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	10	0	0	23
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
26	5	0	45	0	0	3	1	19	14	0	0	380	501	6	20	1015
71	7	0	254	1	0	7	3	29	35	2	8	772	2442	13	55	3677
6	0	0	42	0	0	2	1	0	4	0	0	4	31	2	0	93
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	0	0	9
1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	11	197	1	1	212
4	0	0	26	0	0	1	0	0	1	0	0	1	23	0	0	56
8	0	0	96	0	0	0	0	2	4	0	0	3	60	0	0	174
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6	0	0	8
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
2	0	0	9	0	0	1	0	0	0	0	0	1	7	1	0	21
21	0	0	173	0	0	4	1	2	10	0	0	23	332	5	1	574
0	0	0	8	0	0	0	0	3	4	0	0	3	23	0	0	41
1	0	0	55	0	0	0	0	7	5	0	0	7	62	0	0	138
1	0	0	8	0	0	0	0	0	1	0	0	1	8	0	0	20
0	0	0	14	0	0	0	0	0	4	0	0	4	17	0	0	39
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	5
2	0	0	86	0	0	0	0	10	14	0	0	17	114	0	0	245
0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	1	0	14
0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	37	1	0	43
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9	0	0	10
2	0	0	94	0	0	0	0	1	28	0	0	61	220	2	10	408
2	0	0	96	0	1	0	0	1	28	0	0	66	277	4	10	475
15	0	0	38	0	0	0	1	4	2	0	1	30	205	2	16	302
115	7	1	659	1	1	11	5	46	89	2	10	1000	3511	31	103	5640



第 80 图 褐釉陶器 1



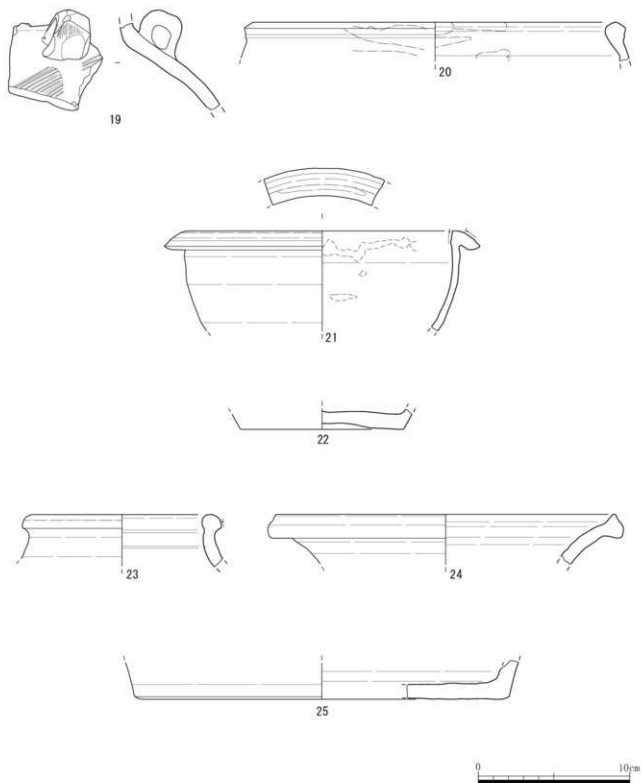
图版 60 褐釉陶器 1



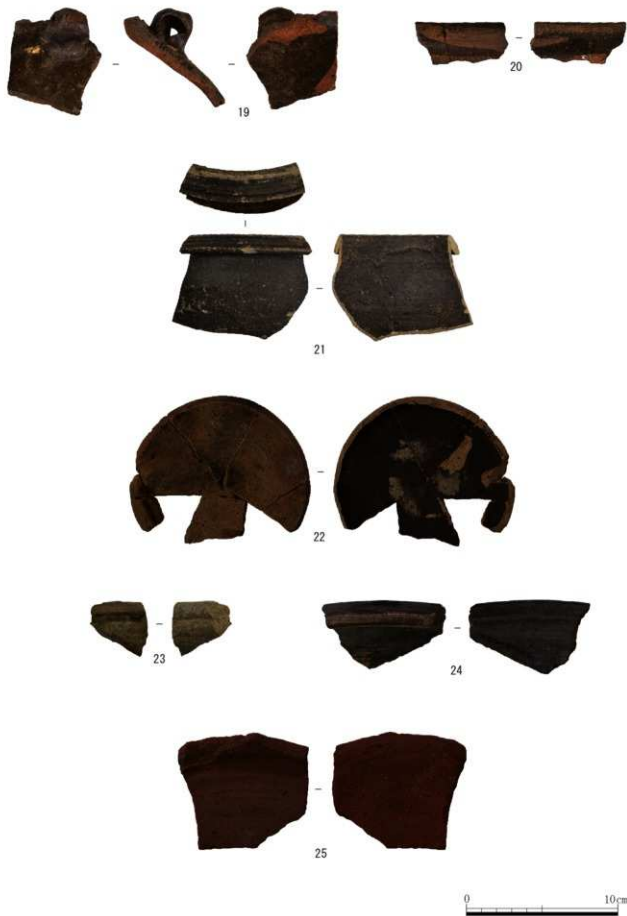
第 81 图 褐釉陶器 2



图版 61 褐釉陶器 2



第 82 图 褐釉陶器 3



图版 62 褐釉陶器 3

第14表 褐釉陶器 観察一覧

計量単位: (cm/g)

所収 図版	図 番 号	器種	部位	産地	時代	釉薬: 色調	技法・特長		施地 (色・器入物・質)	口径	底径	重量	地区/トレンチ /グリッド/層序
							外面	内面					
第80 図 版 60	1	壺	口縁部	中国産	明代/ 14~15	暗褐色	旋輪、破片。某人 彫部:丸み	口縁以下 磨蝕	灰色/白・褐色 絞5~4	6.6	-	47	二の曲輪 S-96/97石組
	2	壺/ 小壺	口縁部	中国産	14~15c	褐色	部分的磨蝕存	無釉	黄灰色/褐色。白 石英粒混入	9.2	-	16	一の曲輪 東石組ナ-71
	3	壺	口縁部	中国産	16~17c	棕色	口唇部磨蝕 /磨蝕2本	口縁付足: 部分的磨蝕	橙白色/ 黒・褐色・石英粒	15.2	-	21	一の曲輪 東石組ム-71
	4	壺	口縁部	福建・ 広東	16~17c	暗褐色	外面:口縁一部 磨蝕/叩き成形	へず削り/ 粘土磨ぎ目	灰色/黒・白色粒	12.0	-	81	二の曲輪Y-98 /石組。表皮
	5	壺	口縁部	中国産	14~15c	黒褐色 /焼熟	口唇部磨蝕	口縁下磨蝕	褐色/ 黒・褐色・褐色 ・石英粒混入	10.0	-	18.7	三の曲輪北西 北トレンチ ナ-43/目a
	6	壺	口縁部	中国産	14~15c	黄褐色 /磨蝕	口縁:磨蝕2条 /口唇部:磨蝕	口縁下磨蝕	灰色/ 黒・白色粒混入	18.8	-	33.2	二の曲輪 9-94/1b
	7	壺/ 甕元	口~底	中国産	14~15c	黒色	底面:底面磨蝕 底面:上げ底	底内:旋輪 器高:24.1	橙白色/ 黒・白・石英粒	10.0	8.8	-	三の曲輪/ グリッド/不明
	8	壺	胴部	中国産	明代	黄褐色	旋輪/ 沈着で文様	無釉	褐色/赤・白。褐色 石英粒混入	-	-	12.8	三の曲輪 C-87/目a
	9	壺/ (大)	胴部	中国産	14~15c	黄褐色	唇部:器耳小 旋輪:黄味釉部 文様:龍を駆付	釉薬無し 非磨蝕。磨蝕	黄灰色/褐色 粒混入	-	-	24.9	四の曲輪/ グリッド/不明/押所
	10	壺	胴部	中国産	14~15c	黄灰- 灰褐色	沈線文/ 縁き部とし様	旋輪:磨蝕	灰色/黒・白色粒	-	-	18.7	二の曲輪 F・9-96/1b
第81 図 版 61	11	壺/ (大)	口縁部	中国産	明代	暗褐色 茶褐色	旋輪/ 口唇部:方形	旋輪	褐色~橙色/ 黒・白・褐色・ 石英粒混入	18.4	-	130	三の曲輪北西 東トレンチ ラ-43/目a
	12	壺	口縁部	中国産	明代	暗褐色	口唇部下1cm~ 唇部/口唇旋輪	口縁~唇部 磨蝕	灰色/ 黒・白色粒混入	16.4	-	101	三の曲輪 T-82/1b
	13	壺	耳	中国産	14~15c	暗褐色 /焼熟	文様あり/ 図柄不明	一部に磨蝕	黄灰色/褐色 石英粒混入	-	-	11.9	二の曲輪0-96 石群下部/目a
	14	壺	耳	中国産	14~15c	緑褐色	耳:2条線沈線	頸部磨蝕/ 胴部磨蝕	黄灰色/褐色・ 褐色。白・石英粒	-	-	23.7	一の曲輪 東石組ナ-70
	15	壺	胴部	福建・ 広東系	14~15c	緑褐色	縁き部とし様?	旋輪有り	灰色/ 褐色。黒・白色粒	-	-	100	一の曲輪 東石組ム-71
	16	壺/ 大型	胴部	福建・ 広東系	14~16c	茶褐色	旋輪/ 叩き目明瞭	旋輪有り/ 内:窪み	黄灰色/白色粒。 石英混入	-	-	112	二の曲輪 2-101/不明
	17	壺	底部	中国/ 明末・清	17~18c	赤褐色	底面を除き旋輪	鉄虎手	黄灰色/白色粒	-	11	235	地区不明/ 表皮
	18	壺/ (大)	底部	中国産	15~17c	暗褐色 灰褐色	旋輪:ロクロ痕 底面:磨蝕	旋輪有り /ロクロ痕	黄灰色/褐色・ 石英粒混入	-	16.8	192	二の曲輪/ 8-94/95 石組内
第82 図 版 62	19	壺	胴部	中国産	清	黒褐色	旋輪/一部磨蝕 /器付金	部分的磨蝕	褐色/黒・白。褐色 石英粒混入	-	-	91.8	一の曲輪 東石組ム-71
	20	鉢	口縁部	中国産	明代	黒褐色	部分的に磨蝕	部分的磨蝕	暗灰色/ 黒・白色粒混入	25.2	-	25.3	三の曲輪 X-86/目a
	21	鉢	口縁部	福建・ 広東系	14~15c	黒色	口唇部磨蝕	磨蝕	灰色/ 黒・白色粒混入	20.8	-	62.9	二の曲輪 L-91/1b
	22	器種 不明	底部	中国産	明代	暗褐色	磨蝕/ロクロ痕 底面:上げ底	旋輪有り /ロクロ痕	明褐色/褐色 絞5~4	-	10.8	125	二の曲輪 S-98/1b。目a
	23	壺/ 壺	口縁部	タイ産	15~16c	緑褐色	口唇部磨蝕	無釉	黄褐色/ 黒・白・褐色 ・石英粒混入	13.0	-	15	三の曲輪北西 東トレンチ ラ-43/目a
	24	壺	口縁部	タイ産	15~16c	茶褐色	口唇部磨蝕 断面:三角形状	磨蝕	灰色。磨蝕サンド 白・黒粒絞5~4	22.3	-	45.5	二の曲輪 石組
	25	壺	底部	タイ産	15c?	底面/ 無釉	底面:ベタ底	内:ロクロ痕	赤褐色/白・黒・ 褐色。石英/絞2~4	-	24.8	101	二の曲輪/ T-100

7 半練土器

半練土器は36点得られ器種は、蓋10点、壺8点、摺り鉢1点、器種不明14点が認められたが、全形を窺える資料はない。部位は胴部が最も多く22点、底12点、蓋1点の順に多い。産地はタイ産と判断できる資料12点、中国産3点、それ以外の資料30点は細片の為、産地不明である。年代は大きな括りで明代と判別されるもの1点、15c頃の資料1点が確認された。半練は一般的に袋物が多く蓋を備前の水差に合わせ用いることもある。首里城跡(第73集/2014)でも出土しており、器形でⅦ類に分類している。北谷町では平安山原A遺跡で7点出土した。

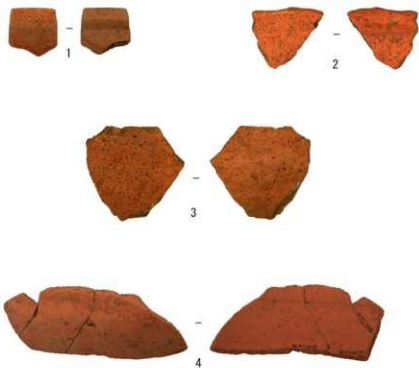
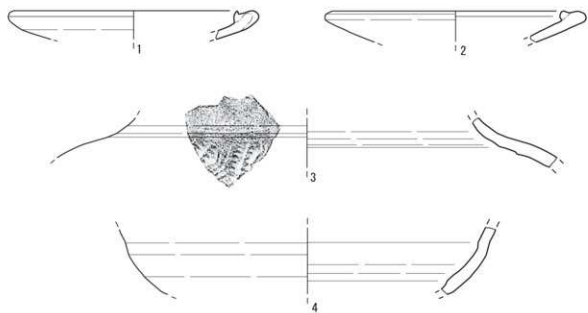
曲輪別では二の曲輪(27)が最も多く三の曲輪5点、一の曲輪1点、四の曲輪2点、地区不明表採1点である。層序はⅢa層12点、I b層9点、I a層6点、Ⅱa層1点、層不明8点である。図1は首里城(第73集/2014)の分類ではⅡ類に属すと考えられる。図2は図1より径が若干大きくなるものと推測される。図3は壺の頸下肩部あたりの部位で器形は肩が大きく張る、胴径およそ40cmを超すと推測される。図4は内面の器面調整は丁寧に仕上げる。

第15表 半練土器 出土量

地区	アフリカ	部位	壺		摺り鉢		蓋		器種不明				合計		
			タイ産	不明	不明	不明	タイ産	不明	中国	タイ産	不明	不明			
			15c	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	明代	不詳		不詳	
一の曲輪	M-71	不明											1	1	
	M-93	Ⅲa					1								
	M-94	I b			1		1								
	N-95	I b			1										
	O-93~95	I a					1						1		
	O-96	Ⅲa					1				1		4		
	O-97,98,99	I a					2								
	O-97,98,99	I b					1								
	P-99-100	Ⅲa						1							
	二の曲輪	Q-95	I b			1									1
		Q-96	I a						1						
		Q-97・98	I a							1					
		R-97・98	I b			2									
		S-98	I b											1	
		S-112	不明				1								
		T-99	不明											1	
		T-111	不明											1	
U-96		不明				1									
W-100		Ⅲa				1									
三の曲輪	T-82	I b		1											
	Y-85	Ⅲa								1					
	A'-86	Ⅲa											1		
	B'-81	Ⅲa					1								
	C'-86	Ⅲa								1					
四の曲輪	サ-55	不明			1									2	
	キ-55	不明	1												
地区不明										1				1	
合計				8		3	1		10		1		14	30	

第16表 半練土器 観察一覧

第16表	図番	種別	器種	部位	産地	時代	表径	重量	器色	胎土/裏人物	出土地/曲輪/ グリッド/層序
第83図、 図版43	1	半練	蓋	底	タイ産	15c	13.2	6	橙白色	黒・褐色・石英粒を多量に含む	四の曲輪/キ-55/I a
	2	半練	蓋	底	タイ産	-	13.8	9	褐色	黒・褐色・石英粒を多く含む	二の曲輪/O-96/Ⅲa
	3	半練	蓋	胴部	不明	-	-	18	橙白色	赤・黒・石英を多量に含む	四の曲輪/サ-55/I a
	4	半練	蓋	胴部	タイ産	-	-	35	明褐色	赤・白・黒・石英含む	三の曲輪/T-82/I b



第 83 圖・圖版 63 半練土器

8 天目

天目は83点得られた。器種は碗、急須(注口)、茶入壺、壺、鉢、甕などである。碗が大半を占め全体の84.3%を占める。急須や茶入壺は各々1点の出土である。部位の内訳は殆どが胴部で口縁部は僅か9点、底部も7点と器形を窺える資料は少ない。主な遺物を以下に図示した。曲輪別では二の曲輪が34点と最も多い。他、三の曲輪北西地区と三の曲輪がこれに次ぐ。グリッド別では1~7次調査までのグリッド設定が2m×2mと小規模なこともありグリッド毎では1~5点と少量な出土となった。層序は全体を通して二の曲輪のI b層20点とIII a層8点が多く、それ以外は殆ど層不明と表採資料が主である。

図1は碗で口縁上部の屈曲部分から軽く外に開く器形を呈す。図2に比べ口唇、器壁など全体的にやや厚手を成し口唇部の立ち上がりも若干内湾気味になる。口縁部から胴下部にかけてはややシャープに窄まる。図2は前者に比較し全体にカーブの緩い碗型である。口縁部の屈曲具合が浅く直行気味で、口唇部の先端を薄く仕上げる。器壁の厚さは図1と同じだが見た目の印象は薄手に感じる。釉薬は前者よりやや滑沢である。首里城で分類されている丸碗に似る。図3の器形は逆への字状に緩く外側に開く。図示した底部のうち底径が最も小さく、高台の高さも約6mm程度と低い。しかし、畳付けから見込みまでの厚さは1.7cmと厚手を成す。軸は4や5に比べ厚手に掛けられている。

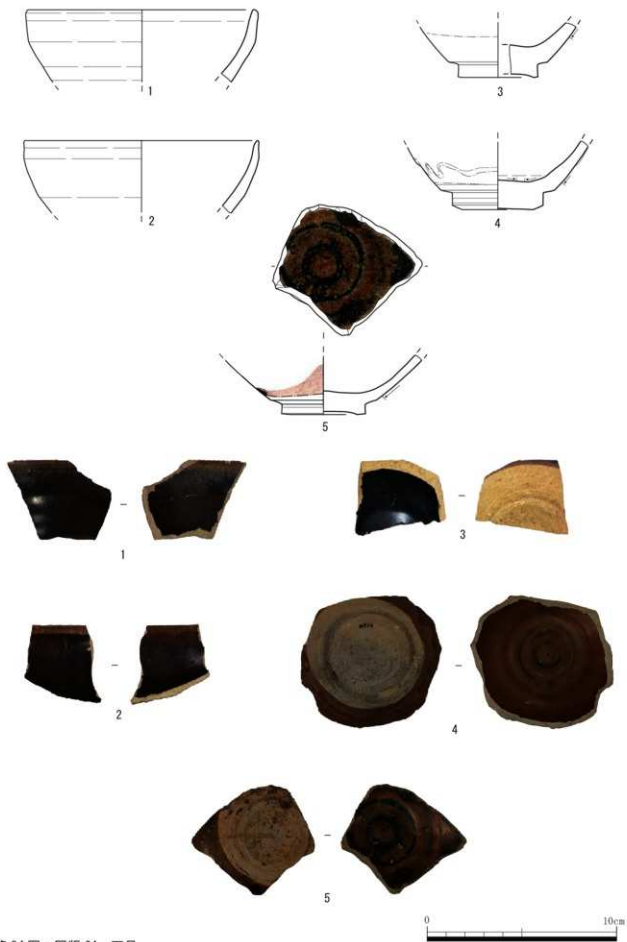
図4は高台脇を水平に切るような底部のつくりで前者に比べあまり広からず腰部からやや内気味に立ち上がる器形を呈す。おそらく口径のサイズもそれ程大きくならないと推測される。高台の高さは9mmと高く、底径も図に示したもので大きい。畳付けから見込みまでの厚さは1.6cm、内面の施軸は暗赤褐色を呈し見込み部分は黒褐色と斑になる。焼成温度による発色の違いかと想定される。図5は底部から口縁部に向かい直線的に大きく開く平茶碗の底部に思える。底径4.4cmで図3と図5の中間タイプかと思われ、高台の高さは低く5mmである。又、見込み部分は削りの窪み箇所が黒褐色、他は暗茶褐色を呈す。畳付けから見込みまでの厚さは1.2cmである。

産地は中国/福建産が25点確認された。福建以外の大きい範疇での中国産のみられ又、産地不明とした胴部の中に日本産の可能性が高い資料が僅かに含まれる。年代は14~15c、14~16cの資料で15cと判断できた資料もある。又、15~16c代のもも確認された。大きい括りでは言えば明代資料も出土している。窯跡では建窯の可能性が高いと考えられるものが4点得られた。天目でも火を受けたと考えられる被熱資料が2点確認されている。

天目の碗類は首里城(第73集/2014)でIX類に分類されており図2はIX類に、5はI類に類似する。

第17表 天目 観察一覧

国 別 区 ・ 域	図 番 号	器種	部位	産地	素地	源入物	年代	特徴	口径	底径	器厚	重さ	出土地/曲輪 グリッド/層序
第 84 区 ・ 域	1	碗	口縁部	中国/福建	素地: 灰色味を帯びる	黒、白粒含む	14~15c	器形: 口縁下1cmで緩曲	12.3	-	0.4 3 0.7	18.2	一の曲輪/A-71
	2	碗	口縁部	中国/福建	素地:白色	黒粒含む	14~15c	口縁部のくびれ: 小さい	12.4	-	0.6	12	二の曲輪 O94・95/目録
	3	碗	底部	中国/福建以外	素地:黄褐色	黒粒含む	15c	:福建以外	-	4.2	0.6	30.5	三の曲輪 Y-66/ III a層
	4	碗	底部	中国/福建	素地: 灰色味を帯びる	白粒含む	14~15c	:酸化還元による変色: 煎茶け飯から施軸	-	4.8	0.5	143	二の曲輪 表採
	5	碗	底部	中国/福建	素地: 灰色に黒味を帯びる	黒粒含む	14~15c	:建窯の可能性高い: 土が黒っぽい	-	4.4	0.4	98	四の曲輪 サ-96



第84图·图版64 天目

9 タイ産無軸陶器

その他の無軸陶器として13点、タイ産の無軸陶器は4点得られ3点を図示した。破片が僅かな為、種類は不明、詳細な分類には至らない。以下、略記のみ行う。

図1は無軸陶器片の頸部から肩部にかけてかなり張り出す器形を呈す。頸部の傾きから口縁に向かい立ち上がる器形と想定される。器厚は1.4～1.5mmとかなり厚みをもち残存部に関しては均一である。頸部から肩部にかけて4条の沈線が確認できる。素地は黄白色を成すが、外面/内面は焼成のため黒焼けがみられ混和材に石英と雲母が多く含まれる。生産地はタイ産で年代は14末～15c前頃と考えられる。図2は肩部の上部付近と思われる器形は壺で傾きは倒れ気味な形状から大型の壺類と想定される。器面外側上部に木の葉状の文様が施され直下に明瞭な沈線が一周する。内面は器面調整の擦痕が確認され、器厚は1.6～1.8mmと厚手を呈す。素地は黄白色を呈し、この資料は器面が黒色を呈すが内面の黒焼けはみられない。混入物が多く石英、白色、赤色、黒色粒が含まれる。

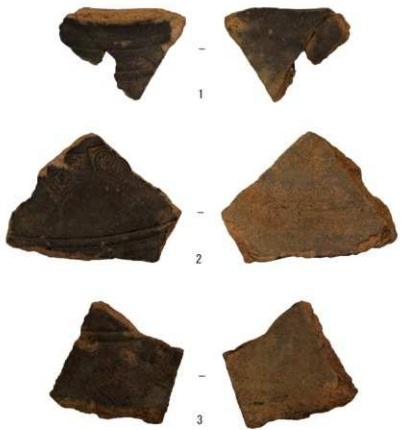
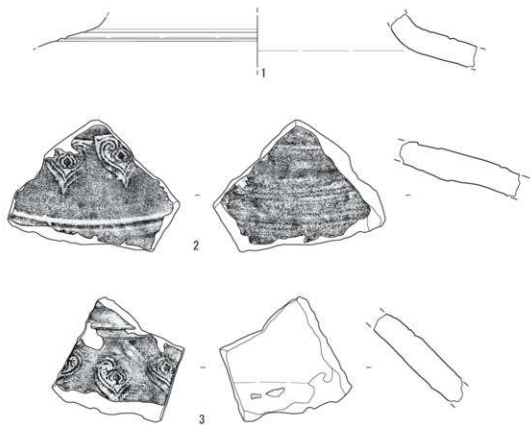
図3は前者と同様、肩部付近の資料と推測、器形は壺で傾きは前者に比較し、それ程倒れない。文様から同類の壺と想定される。これも器面外側に木の葉状の文様が施され明瞭な沈線も共通する。沈線を引く際の粘土の盛り上がる方向から上下の向きを確認、同様の文様が沈線で区画され二段の文様帯を成すものと推測した。器厚は1.7～2.0mmと厚手、内面は器面調整の擦痕が確認される。素地は黄白色を呈し、この資料では外面は黒色を呈すが内面に黒焼けはみられない。混入物が多く石英、白色、赤色、黒色粒が含まれる。

図中の1点(図2)の生産地は、タイのバンブーン県、バン・バンブーン窯産の可能性が高いと見解を頂いた。中国では無軸陶器を拓器と称しており、タイ産の拓器は首里城(第73集/2014)でも出土している。他に九州では博多筑港線2次調査で出土例があり(福岡市埋蔵文化財センター)、器種は大壺でこの資料は須志器質陶器と説明され木の葉状スタンプ文を施す。年代は14後～15cと想定されている。文様は類似するが須志器質陶器となっており別の窯の可能性もある。タイでは小規模な窯が多く点在し、発掘調査も進んでいない為、詳細は不明である。タイのバン・バンブーン窯はシーサッチャナーライ窯の初期と同時期に運用されていた窯、動物文、ビルマの印花文陶磁、クメールの彫刻文様からインドの影響を受けているとの見解もみられる。肩の広がった壺だが、輸出用ではなく船員が使用したものと見識があるが、用途は不明。

第19表 タイ産無軸陶器 観察一覧

調査単位: cm/CI

図版 図版	図 番 号	種別	器種	器形 (外反/直口)	部位	文様/外面	素地	生産地	時代	器厚	重量	出土地/曲輪 グリット/層序
第85図 図版65	1	拓器	壺	外反口縁	頸部	印花文	淡灰白色	タイ	14c末～15c前半/15c	1.4～1.5	75	二の曲輪/ R-95/石中
	2	拓器	壺	外反口縁	肩部	木の葉状文 (内巻き)	淡灰白色	タイ	14c末～15c前半/15c	1.6～1.8	185.4	二の曲輪/ Y-99/表探
	3	拓器	大壺	外反口縁	肩部	木の葉状文 (内巻き)	淡灰白色	タイ	14c末～15c前半/15c	1.7～2.0	128.1	出土地不明



第85図・図版65 タイ産無釉陶器

10 本土産磁器

肥前・砥部・瀬戸・美濃・有田等の地域で生産された本土産磁器は、総数で189点出土している。出土量が多いのは瀬戸・美濃産の資料で、生産地不明の資料を除けば出土量の半数以上を占める。器種としては碗・皿・鉢・急須・湯呑・杯・香炉・蓋物等、多種多様な資料が出土している。出土が多いのは碗の資料で、特に方言で「スンカンマカイ」と呼ばれる砥部産の碗が多く確認される。生産年代については、出土遺物の大半は近代（明治以降）に生産されたものと推定されるが、第86図5の有田産の皿は1660～1690年の間に生産されたもので、出土遺物の中では比較的古手の資料である。層序については、近現代の表土・耕作土層と想定される基本層序Ⅰ（Ⅰa・Ⅰb）層からの出土が大半である。また、四の曲輪キ-56グリッドのⅠa層では49点の出土が確認されており、出土が集中する様子がみられる。

第20表 本土産磁器 観察一覧

(調査単位：個、g)

国 県	図 番	技法	産 地	器 種	計測値					器形 (用途等)	文様	観察事項 (釉薬・調整痕等)	成形	表 地 色・編		生 産 年 代	出 土 地	
					口径	器厚	器高	底径	重量					白	黒			
第 86 図 ・ 図 版 66	1	型 取	砥 部	碗	口 径	0.3 13.4	5.2	4.4	230	口縁部・外反	外面：点箱、梅窓に水仙、桔梗。腰に胡文文・内面：口唇内面に点箱、委形窓に梅窗・見込み：松竹梅	透明釉（裏付け無し）・コバルト釉、見込み：目録5か所	型	白	黒	近代（明治以降）	四の曲輪 出土地不明	
	2	型 取	砥 部	碗	口 径	0.3 14.0	5.9	4.5	263	口縁部・外反	外面：点箱、委形窓に菊花。腰に三角文・内面：口唇内面に点箱、委形窓に梅窗・見込み：松竹梅、團扇	透明釉（裏付け無し）・コバルト釉、見込み：目録5か所	ロ タ ロ	白	黒	近代（明治以降）	四の曲輪 4-56 1a	
	3	銅 板	肥 前	皿	口 径	0.3 14.2	3.0	6.8	212	口縁部・内湾	外面：無文・内面：窓紋、全体に雲と委文を交互に配する	透明釉（裏付け無し）・コバルト釉・口唇裏付け：一部に砂付着	型 テ	白	黒	近代（明治以降）	四の曲輪 出土地不明	
	4	型 取	砥 部	皿	口 径	0.2 13.4	3.1	8.2	54	口縁部・内湾の輪花口縁・底部：麩の目印型	外面：唐草と團扇・内面：点箱、窓の中に松竹梅・見込み：松竹梅、麩目	透明釉（高台内にアルミナ塗布）・コバルト釉、裏付け：絲葉付着	型	白	黒	近代（明治以降）	四の曲輪 出土地不明 （表保）	
	5	手 掘	有 田	皿	口 径	0.4 —	—	12.4	51.8	染付の深さ？ /高脚品	外面：團扇 見込み：鳳凰（手掘き）	淡青白（裏付け無し）/外面：青黒（底の隠線は薄青）、裏付け付面にロタロ藍・内面：青/内外面に貫入	ロ タ ロ	白	黒	1660 1690	四の曲輪 4-56 1a	
	6	吹 き 給	瀬 戸 美 濃	小 鉢	口 径	0.2 5.5	0.4	2.0	2.4	15	口縁部：外反・底部：転を模す	無文	透明釉（裏付け無し）・口縁に鉄色の吹付け	型	白	黒	近代（明治以降）	四の曲輪 4-56 1a
	7	ゴ ム 判	肥 前	鉢	口 径	0.4 15.2	—	—	11.1	口縁部：直口	内面：四方様？（文様色：赤）	白色釉を染す	—	明 焼	黒	昭和	一の曲輪 7-71 不明	
	8	ク ロ ム 青 磁	瀬 戸 美 濃	香 炉	口 径	0.4 10.5	0.4	8.7	11.0	472	口縁部：逆丁字状	無文	青緑（外底面、内面露出）、外面：底面に同軸調整・内面：同軸調整痕顕著	ロ タ ロ	白	黒	近代（明治以降）	四の曲輪 4-56 1a



第 86 図 本土産磁器



图版 66 本土磁器

11 本土産陶器

薩摩・備前・内野山・瀬戸美濃等の地域で生産された本土産陶器は、総数54点出土が確認され、全形の伺える資料も認められた。生産地が推察できるものについては、備前産とみられる資料の出土が目立つ。器種としては播鉢や壺、碗や皿のほか、茶入れとみられる小壺、瓶、急須とみられる資料が確認され、出土の割合としては播鉢が多い。

生産年代が推定できた資料は15点ほどであるが、北谷城が廃城となった時期と想定される15世紀後半から19世紀頃まで生産された近世のものが主体であった。しかし、大半は近現代の表土・耕作土層と想定される基本層序Ⅰ（Ⅰa・Ⅰb）層からの出土である。

第87図Ⅰは、出土資料のなかでは古手にあたり、室町時代（中世）に生産された備前産の壺とみられ、基本層序Ⅲe層（グスク時代の層序と想定）から出土している。以下、特徴的な資料を6点抜き出し、個々の詳細な観察と図示を行った。

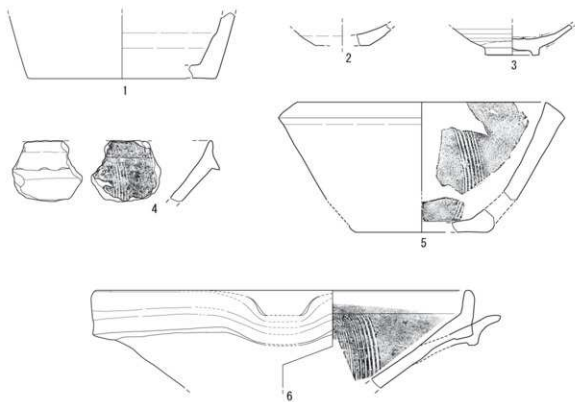
第22表 本土産陶器 観察一覧

(調査単位: cm, g)

第87図 図版 67	図 号	産 地	器 種	部 位	計測値					器形	文様 / 施等	調整板 / 素地 / 色	成 形 類	出 土 地
					口径	器厚	器高	底径	重量					
第87図 図版 67	1	備前 山	壺	底	—	1.0 5 1.5	—	15.2	69.9	ベタ底状を呈し、直線的に胴部へ立ち上がる	無釉	内外面とも暗灰色、芯部は暗赤褐色を呈し、白色粒が多量に混入される / 焼成不良? / 室町 (中世) 5+	ロ ク ロ	三の曲輪 B-81 Ⅱe
	2	瀬戸 美濃	碗	胴	—	0.6 3 1.0	—	—	12.9	ベタ底状を呈し、緩やかに胴部へ立ち上がる	内面: 灰釉・外面: 無釉	灰白色で細か / 調整板が明確 / 15 c ~ 16c	ロ ク ロ	四の曲輪 A-56 1a
	3	内野 山	皿	底	—	0.4	—	4.4	60.1	緩やかに胴部へ延びる	内面: 網目釉・外面: 透明釉 (高台藍)・見込み: 蛇の目釉割ぎ	黄灰色で細か / 18C 前半	ロ ク ロ	四の曲輪 Ⅱa
	4			口	—	—	—	—	49.5	外側口縁部下方に張り出した脛	網目6本残存 / 無釉	黄灰色で細か (砂粒混入) / 回転による器面調整 / 15 c 後 ~ 16 c 前	ロ ク ロ	二の曲輪 5-99 1b
	5	備前	鉢	口 / 底	20.0	1.8 3 1.2	10.5	11.0	135.9	外側口縁部下方に張り出した脛で、ベタ底	網目7本残存 / 無釉	灰色で細か (砂粒・黒色粒混入) / 回転による器面調整 / 14 c 後半 ~ 15 c 頃	ロ ク ロ	一の曲輪 ふ-71 不明
	6			口 / 胴	30.8	1.0	—	—	278.5	外側口縁部下方に張り出した脛	網目8本残存 / 無釉	赤褐色で細か (白色・褐色粒混入) / 回転による器面調整 / 16c 頃	ロ ク ロ	二の曲輪 7-94 不明

第 23 表 本土産陶器 出土量

地区	ブリエツ	期	高塚		備前				内野山				瀬戸 表遺	青津?	信楽?	不明								合計	
			壺	不明	楕鉢	壺	不明	甗	甗	甗	甗	甗	不明	不明	甗	楕鉢	壺	茶入丸	甗	急須	不明				
			口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴			
一の曲輪	S-112	不明	1																			1			
	ナ-78	不明															1						1		
	ム-71	不明		1	3																		4		
二の曲輪	K-92	I b				1																	1		
	N-95	I b					1																1		
	O-97 ~ 99	I b				1	1																2		
	P-Q-96	I b													1								1		
	P-100	I a				1																	1		
		I b					1																1		
	S-94・95	不明																					1 1		
	S-98	I b			1	1																	2		
	T-98	不明			1																		1		
	E-99	I b				1																	1		
	U-101	I b								1													1		
	Y-99	I a			1																			1	
		不明				1																		1	
Y-102	不明			1																		1			
Z-102	不明														1							1			
三の曲輪	E-81	甗 a															1						1		
	F-85	I a			1																		1		
	T-84	I b					1															1 2			
	Y-87	甗 a			1																		1		
	Z-86	I a								1													1		
四の曲輪	N-60	I b	1													1	1						3		
	P-32	I b								1													1		
	ア-58	不明																		1			1		
	キ-56	I a									1						1					1	3		
	キ-58	不明																		1				1	
		I a																1						1	
	サ-55	不明																					1		
	テ-57	I a																1					1		
不明	不明								1											1		2			
不明		1	2		4	1	1							1								1 13			
合計		1	4	3	3	11	1	1	4	3	1	3	1	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1	3	54



0 10cm
(33%縮小)

第87図・図版67 本土産陶器

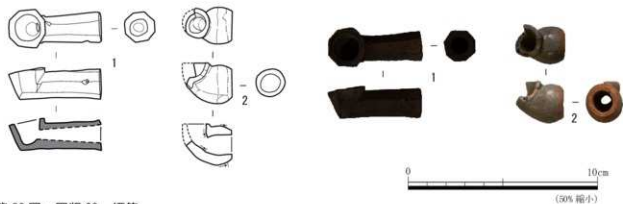
12 煙管

煙管は第88図に記載した2点が出土し、いずれも羅宇煙管と呼ばれる雁首と吸口を中央の吸管で繋ぐタイプのものの雁首の部分で、吸口の出土は確認されていない。

第88図1は沖縄産無釉陶器製の煙管の雁首で、完形の資料である。火皿の上面観、小口の形状は八角形を呈し、火皿の縁の一部に自然釉とみられる黒褐色釉の付着が認められる。色調は暗赤褐色を呈する。四の曲輪のエ-55グリッドI a層(表採)。

図2は沖縄産施釉陶器製の煙管の雁首で、火皿の部分が欠損する。火皿の上面観、小口の形状は円形を呈する。色調は淡緑灰色を呈し、透明釉を掛けるが、小口の内部と縁の部分は露胎する。二の曲輪のV-100グリッドI b層出土。

近隣では、平安山原A遺跡で沖縄産無釉陶器製、沖縄産施釉陶器製の羅宇煙管の雁首が出土しており、形状等も類似する。



第88図・図版68 煙管

13 沖縄産施釉陶器

いわゆる「上焼」(ジョウヤチ)と称されるものである。器種は、碗、小碗、鉢、小皿、壺、鍋、急須、水差(按瓶)、酒注、瓶、蓋、火炉、火取、香炉の14種類(煙管を含めると15種類)が出土した。第25・26に出土状況、後者はグリッド別、第24表に観察表を示す。本文では地区名称の「四の曲輪城門周辺」(遺物台帳の名称:10・11次調査区である三の郭南西・ノロ道付近・ノロ、他グリッド)を用いて述べる。

出土状況を第25表で見ると、I a層では層位不明の水差以外が出土し、I b層は水差、小皿の出土が無く、II a層では碗・小碗のみ、III a層では碗、瓶、壺、鍋、急須が出土している。

出土総数374点のうち二の曲輪が183点で48%と最も多く、次に四の曲輪城門周辺で74点19%、四の曲輪で44点、11%、三の曲輪が28点0.07%、その他の地区は僅かである。

出土地別の器種(煙管を含む)では、東丘陵[碗]、一の曲輪[碗、鉢、壺、急須、瓶、蓋]、二の曲輪[碗、小碗、鉢、小皿、壺、鍋、急須、酒注、瓶、火炉、火取、煙管]、三の曲輪[碗、鉢、壺、鍋、瓶、蓋]、三の曲輪北西[壺、瓶]、四の曲輪城門周辺[碗、小碗、鉢、壺、鍋、急須、水差(按瓶)、瓶、蓋]、四の曲輪[碗、小碗、鍋、急須、酒注、瓶、火取]である。

二の曲輪では、水差(按瓶)、蓋以外(出土地区不明の香炉を除く)の器種が出土しており、水差は四の曲輪城門周辺の出土であるが層位不明である。酒注は二の曲輪でI a層、四の曲輪でI b層、四の曲輪城門周辺では層位不明、瓶は一〜四の曲輪、四の曲輪城門周辺で出土し、一・二・四の曲

輪でI b層、三の曲輪ではIII a層出土がある。急須は二の曲輪でIII a層から2点出土している。

出土量が最も多い碗は、一の曲輪東、同石積と二・三の曲輪、三の曲輪北西では出土が無く、二の曲輪(M-93、0-96、P-100)、三の曲輪(T-84)ではIII a層出土がある。

殿舎跡が検出された二の曲輪、拝所の殿(トゥン)が所在する三の曲輪、四の曲輪城門周辺における器種の差異が祭祀儀礼に関連する違いがあるのかについては判然としなが、殿(トゥン)に至る経路と考えられている四の曲輪城門周辺での水差や酒注の出土傾向に留意が必要と考える。

碗(第89図1~14、図版69-1~14)

総数175点の出土である。下記に分類される。

- I類:直口碗は、いわゆる湧田碗である。高台脇から緩やかに膨らみながら立ち上がるもの(第89図1)、低い高台脇に僅かな段を有し直線的に立ち上がるもの(図3)がある。釉薬は透明釉(灰釉)と鉄釉があり、前者には有文と無文がある。
- II類:外反碗、高台脇から緩やかに膨らみながら口縁部が外反するものである(図12)。白化粧に透明釉、鉄釉を施すものがあり、前者には有文と無文、後者には①見込みに鉄釉を刷毛塗りし、蛇の目軸割を施すもの(図4)、②釉薬を掛け分け鉄釉・透明釉、鉄釉・白化粧・透明釉を施すものがある。

I類の第89図2は、鉄釉による施文の一部が残る。図5は高台脇まで施釉し、見込み中央に鉄釉の丸文が施される。図7は内外器面が暗褐色を呈する発色不良とみられるものである、同資料は図示を割愛したものも含め2点の出土である。光沢の無い特徴から喜納焼の可能性を想起するものである。

I類の図1は、器高約5.3cm、口径12.4cm、底径6.8cm。底部資料の高台脇に僅かな段差を有し直線的に開くものは、底径6.2~6.8cmである。重ね焼き時の溶着を防ぐ目砂・目土が僅かに残るものもある。口縁部資料には、図8の胴部が溶着した口縁部破片があり、不良品であっても購入していたことを示す資料である。

II類をほぼ完形の資料で見ると、器高や口径、底径に細かな差異があり、外反碗であるが外反の弱い部分が共存しており成形は均一でない。また、図示を割愛した口縁部資料には口縁下でやや強めの屈曲を呈するものもある。

底部資料では、高台脇に成形による段差の有無が見られ、畳付が平坦なもの、高台内側を面取するものがある。見込みには透明釉を剥ぐ蛇の目軸割が施され目砂・目土が残る。

第89図9・10は、白化粧に透明釉が施されるもので呉須による小丸文を円形に複数配し、その中央に鉄釉の丸文で1組となる文様を胴中央部の3カ所に施す。図11は呉須による円文の中に楕円を四つ葉状に施すものである。図6は、内外器面に鉄釉を施す。同図13・14は釉薬を掛け分けるもので、同図13は鉄釉を外器面と口縁部内面上部に施し、内器面が透明釉となるもの。図14は内器面が白化粧と透明釉となるもので、鉄釉を外器面から口縁部内面上部に施すものである。

II類の釉薬を掛け分けるものには、口縁部内面上部に施された鉄釉の施釉範囲が均等でないものと、釉を剥ぎ取ったと見られる均等な幅となるものがある。底部資料には、高台内底に施釉の有無が見られる。

小碗（第89図15～21、図版69－15～21）

総数20点の出土である。高台脇から緩やかに膨らみながら立ち上がるもので、口縁部が外反する。有文、無文、釉葉を掛け分けるもの、胴部外器面を面取りするものがある。

図15は口縁部が僅かに外反し、白化粧に透明釉が施されるもので、外器面の3箇所に外反碗の文様に類似するが、文様中央の鉄軸による丸文が施されず、呉須による小丸文のみを円形に複数配したものである。図16は白化粧に透明釉が施された無文のものである。図17～19は白化粧に透明釉が施され、胴部に面取が施されたもので図18は口唇部直下に僅かな段を有する縁をもつものである。胴部の面取幅は約1cmである。図20は、外器面に鉄軸を施し、内器面が透明釉となるもの。図21は、内器面に白化粧+透明釉が施され外器面は鉄軸となるものである。

出土した底部資料を見ると、外器面の鉄軸は高台内・外面まで施されるが畳付け付近は施軸されないものもある。見込みの蛇の目軸剥ぎは、白化粧が残る。底径と器高が4.2cmとなるものがある。

小皿（第89図22、図版69－22）

総数4点の出土である。第1図22は、口縁下の胴上部で屈曲するもので透明釉が施される。図示を割愛した胴部破片資料には、内・外器面に白化粧と透明釉が施され、内器面に呉須による絵付、外器面の沈線部分に呉須が施されたものがある。

鉢（第90図23～25、図版70－23～25）

総数22点の出土である。いわゆるワンブーと称される折縁口縁の断面形態が、逆L字状を呈するもの（図23～25）と口縁部がやや内湾するもの（図26）がある。釉葉を掛け分け、内器面は白化粧と透明釉、外器面は鉄軸となる。口縁部が折縁となるものには、口縁部の折縁上面がやや斜めとなり、口唇部断面形態が舌状を呈するもの（図23）。折縁は水平となり、口唇部に幅約7mmの面を有するもの（図24）、折縁が強く屈曲し斜め下を向くもの（図25）がある。

出土した口縁部資料には、口唇部に面を有するものに口唇部下側が丸みを帯びるもの、口唇部上端を僅かに面取るものがある。掛け分けの境目には、①舌状を呈する口唇部先端まで白化粧、それ以下の外器面に鉄軸を施す。②面を有する口唇部の下端以下を鉄軸とするものがある。

底部で見ると、畳付け以外の高台内・外面を施軸するもの（図25）、高台脇まで施軸するが高台外面には施さず、高台内底に刷毛により鉄軸を施すもの（図27）がある。見込みには蛇の目軸剥ぎが施され白化粧が露出する。同図25は蛇の目軸剥ぎの削りが深い。高台の畳付けの断面形態には、「U」字状、平坦、内外面共に面取されるものがある。

鍋（第90図28・29、図版70－28・29）

総数8点の出土である。鉄軸が施された小破片のみで、口縁部断面形態が折縁口縁となるものである（図28・29）。図28は折縁が斜めに屈曲し、屈曲部から口唇部に掛けての蓋が重なる口縁部内側は施軸されず、口唇部外器面側を施軸する。図示を割愛した資料には屈曲部より下位の内器面に施軸するものもある。胴部資料の施軸範囲は、胴上部の内・外器面に施される。

壺（第2図30、図版70－30）

総数18点の出土である。①内外器面を施軸するもの、②外器面のみ施軸するものがある。内面の素地の色調には、灰色、褐色を呈するものがある。図30は、外器面に鉄軸（黒釉）を胴下部ま

で施し、高台は露胎となる。①は胴部破片のみの出土で、いわゆる油壺（アングガーマ）と見られるものがある。

蓋（第90図31・32、図版70-31・32）

総数6点出土。図31は、油壺（アングガーマ）の蓋。図示を割愛した資料には、蓋上面の成形に違いがあり、摘まみの径や高さ、摘まみの根元に細い抉りの有無があり、上面のみ施軸され鉄軸と灰軸があるが、小破片には蓋蓋の両面に鉄軸が施されたものもある。蓋上面には、軸刺ぎが施される範囲があり、その幅には2.1～2.5cm、1.5cm、0.8cmがある。また、蓋上面の端に沈線が2条施されるものもある。蓋下面は露胎、壺口縁の中に収まる袴が残る資料では、袴の直径は7.7cmである。図32は、蓋上面に鉄軸が施され、袴が端に近い位置となる小型のもので、急須の蓋と考えられる。

酒注（第90図33～35、図版70-33～35）

総数5点の出土である。いわゆる「カラカラ」と称されるものである。図33の口縁部は、頸部から朝顔状に開き、口唇部外側を立ち上げるもので、内・外器面に鉄軸が施される。

図34の底部は、胴部の最大径となる位置に稜の部分に呉須を施すもの、図35は胴部の最大径となる部分が丸みを帯びた、その胴上部側に呉須を施すものである。

瓶（第90図36～41、図版70-39～41）

総数25点の出土である。図36は口縁部が朝顔状に開くもので鉄軸が内外器面に施される。図37は口縁部が玉縁状を呈するもので、透明軸が施されたものである。図示を割愛した胴部破片には、外器面に鉄軸が施されたものが大半で、内外器面に鉄軸、外器面に透明軸が施され沈線が1条圍繞するものもある。頸部に見られる特徴には、コブ状の装飾を施し呉須による文様を施すもの（図38）、図示を割愛した耳は1点のみ出土しており、渦巻き状を呈する飾り部分の破片である。底部では、いわゆる渡名喜瓶（図39）、外器面に灰軸（図40）と透明軸が施されたもの（図41）があり、後者には鉄軸が施される。

水差（第90図42・43、図版70-42・43）

総数5点の出土で、全形が覗えるものはなく破片である。方言で「アンピン」と呼ばれる大型の水差、弦（共弦、堤梁）と呼ばれる取手をもつもので、口唇部に白化粧が施される（図42）、外器面に鉄軸（黒軸）が施軸され、注ぎ口の先端内面にも軸が掛かるものがある（図43）。

急須（第90図44、図版90-44）

総数19点の出土で、二の曲輪でⅢa層から2点出土しているが、大半が胴部小破片のため図示を割愛した資料も含めて述べる。①白化粧+透明軸に文様が施されるものも多く、②鉄軸（黒軸）を施すもの（図44）、③外器面に呉須、内器面に白化粧を施すものもある。①の口縁部資料には、頸部を有し、頸部付け根から下側に施文範囲を2条の沈線で区画し、その中に文様を描くものがある。胴部有文資料にも沈線による区画があり、その中を斜め方向の沈線による文様が施され、文様部分には呉須や鉄軸（飾軸・緑軸）の使い分けや、呉須を施すもの、肩部が尖帯となり頸部へ掛けてすばまる範囲に呉須による施文が施されたもの、飛び鉋と見られる文様が、綾杉状となる文様を

持つもので透明軸が施されたものがある。

耳には2種類あり、短冊状の耳上部に角があるもの、耳上部に角がなく「逆U字状」を呈するものがあり、前者は施軸されているが発色不良で白化粧は施されない。後者は白化粧+透明軸が施され耳の外側（口縁部と反対側）に向く面に沈線が施されているものがあり、両者ともに直径5mm程度の孔が1個ある。②には、透明軸が施されていないものがある。

注口で見ると、鉄軸と透明軸があり、前者は内面先端が僅かに施軸され、後者は透明軸が施され、内面は露胎である。

火炉（第90図45、図版70-45）

総数3点の出土である。方言で「ヒール」と称され、用途は「暖を取る」「種火を移す」がある。

図45は、口縁部に施された抉り部分にあたり、鉄軸が内・外器面に施される。図示を割愛した資料には、内・外器面に鉄軸が施され口唇部が白化粧となるもの、内器面に白化粧が施されたものもある。

火取（第90図46、図版70-46）

総数10点の出土である。煙草盆の中に入れる火種入れで、方言で「ヒートゥイ」と称される。

図46は、白化粧に透明軸をほどこすもので、口縁部外面に呉須が施され、内器面が白化粧となるもの、図示を割愛した資料には、口縁部内器面の上部に僅かに呉須が施されるものがある。

胴部で見ると、胴下部で屈曲してすぼまり高台となる器形となる。

香炉（第90図47、図版70-47）

総数1点の出土である。緑軸が施されたもので、3次調査の出土品である。出土地区は不明であるが、城内の出土資料として捉え図示した。

第24表 沖縄産施釉陶器 観察一覧-1

(調査単位: cm, g)

第98国・ 図版69	国 番号	器種	部位	分類	口径	器高	底径	重量	特徴	出土地・層	
	1	甗	口～底	I	12.4	5.3	6.8	97	透明釉。高台部から縁やかに厚む。裏付けは厚紙。	二の曲輪F-94・95 石垣内出土 不明	
	2	甗	口	I	—	—	—	4.98	透明釉。外器面の口唇下に鉄粒の文様の一部。	三の曲輪F-85 II a	
	3	甗	底	I	—	—	—	6.4	56.5	透明釉。高台が他に比して低い。見込み中央部の器壁がやや厚い。	不明・不明
	4	甗	底	II	—	—	—	6.6	54.9	内外器面：鉄粒。輪軸：高台部まで及び部分あり。見込み：蛇の目輪 割ぎで輪軸を包む。鉄粒の丸文。	不明・不明
	5	甗	底	I	—	—	—	6.2	17.0	透明釉。見込みは鉄粒の丸文。見込みは僅かに白土。裏付けに目砂。	不明 I a
	6	甗	口	II	16.8	—	—	—	17.1	内外器面は鉄粒。	不明 I a
	7	甗	口	I	13.6	—	—	—	4.7	鉄粒。輪軸は紫色不貞。	二の曲輪石垣 I a
	8	甗	口	I	—	—	—	—	2.1	透明釉。口縁部内側に銅泥が塗着。	二の曲輪F-97・98 I a
	9	甗	口～底	II	13.5	7.2	6.2	30.2	—	白化粧+透明釉 口縁部の外反がやや強くなる部分もある。	四の曲輪F-56 I a
	10	甗	口～底	II	14.2	6.5	6.1	24.1	—	白化粧+透明釉 高台に輪軸後の指痕3ヶ所残存。	四の曲輪F-56 I a
	11	甗	口～底	II	14.0	6.6	7.0	42.5	—	白化粧+透明釉 文様は複数配される。	二の曲輪Y-99 不明
	12	甗	口～底	II	13.6	6.7	6.4	124	—	白化粧+透明釉 高台～高台部に指痕あり 裏付けは厚紙。	四の曲輪 (F) 不明
	13	甗	口	II	12.8	—	—	—	18.1	掛け分け 外：鉄粒 内：透明釉	二の曲輪Y-100 不明
	14	甗	口～底	II	13.2	5.8	5.8	52.1	—	掛け分け 外：鉄粒 内：白化粧+透明釉	四の曲輪F-56 I a
	15	小甗	口～底	II	8.7	4.2	4.2	33	—	白化粧+透明釉 高台に輪軸後の指痕3ヶ所残存。	四の曲輪 (F) 不明
	16	小甗	口～底	II	8.6	4.2	4.2	64.5	—	白化粧+透明釉 高台に輪軸後の指痕2ヶ所残存。	四の曲輪F-53 不明
	17	小甗	口	—	9.6	—	—	—	3.5	白化粧+透明釉 口唇近く以下の外器面の面取の間に紫色が濃い部分がある。	二の曲輪X-98 I b
	18	小甗	口	—	9.7	—	—	—	2.5	白化粧+透明釉 口縁は縁を有する。	不明 不明
	19	小甗	底	—	—	—	3.6	31	—	裏付けに目土が残る 高台の外器面輪軸後に輪軸溝があり。見込みの蛇の目輪割ぎにも目土が残る。	不明 不明
	20	小甗	口	—	9.6	—	—	—	4.1	掛け分け 外：鉄粒 内：透明釉 口唇近く以下の外器面は紫色不貞。内面に銅泥。	四の曲輪S''-44 I b
	21	小甗	底	—	—	—	3.8	13.1	—	掛け分け 外：鉄粒 内：白化粧+透明釉 高台外器面の輪軸後に輪軸溝あり。	四の曲輪F-59 不明
	22	小甗	口	—	10.0	—	—	—	1.8	透明釉 側部器面と口唇間に小さな小コブ状の成形を施す。	二の曲輪S-94・95 不明
	23	鉢	口	—	20.9	—	—	19.1	掛け分け：外：鉄粒+内：白化粧+透明。新緑の口唇以下の外器面は鉄粒。口唇断面は舌状。紫色不貞。灰色。	二の曲輪O-93, 94 I a	
	24	鉢	口	—	19.6	—	—	5.0	掛け分け：外：鉄+内：白+透明。新緑の口唇以下は鉄粒。口唇断面は舌下側に角を帯びる。	二の曲輪Y-100 I b	
	25	鉢	口～底	—	30.6	13.55	9.7	14.3	—	掛け分け：外：鉄粒+内：白化粧+透明釉。見込みの蛇の目輪割ぎは深く附られている。見込みを重ねた高台尖頂部が塗着し。裏付けには目土と矢張り片が付着。内底も輪軸。	四の曲輪F-56 I a
	26	鉢	口	—	—	—	—	12.4	—	掛け分け 外：鉄粒 内：白化粧+透明釉 口唇部は白化粧+透明釉。	一曲輪東石垣ム-71 高石垣不明
	27	鉢	底	—	—	—	—	170	—	掛け分け：外：鉄+内：白+透明。高台上部から部分的に輪軸れりがある。高台外器面は紫色。内底は銅泥塗りの鉄粒。蛇の目輪割ぎに目土付着。	不明 不明
	28	鉢	口	—	—	—	—	1.9	—	外器面は鉄粒。新緑の縁の上面は白土。内器面は鉄粒。	三の曲輪T-84 I b
	29	鉢	口	—	14.8	—	—	12.3	—	口唇部外面から側部は、輪軸されているが紫色不貞。内面は、口縁部上部は輪軸で以下は鉄粒。光沢無し。	二の曲輪東99 I a

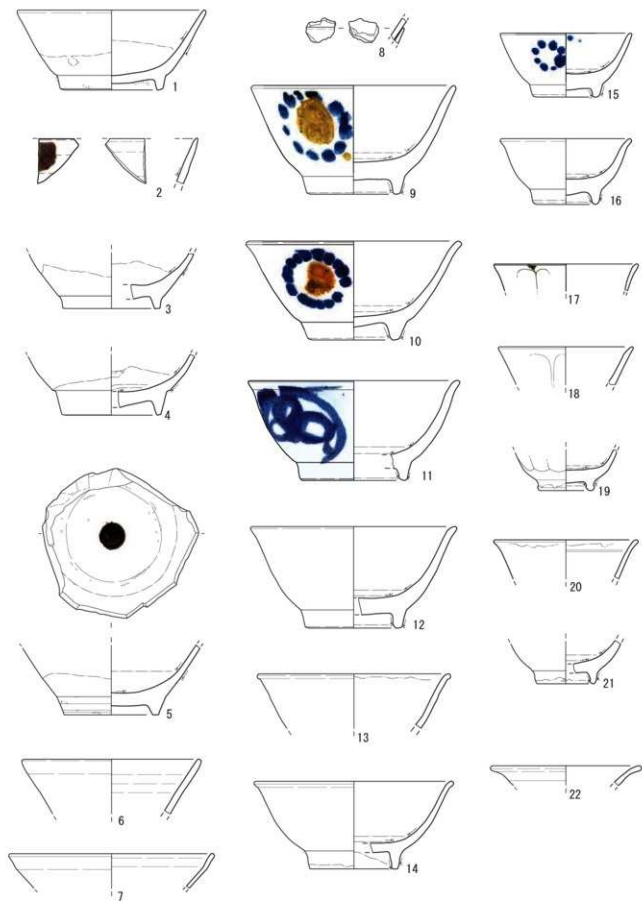
第 24 表 沖縄産施釉陶器 観察一覧-2

(調査単位: cm, g)

第 90 国・ 国 庫 70	国 番号	器種	部位	分類	口径	器高	底径	重量	特徴	出土地・層
	30	壺	底	—	—	10.4	232	胴下部で鉄釉（黒釉）を施す。釉垂れが見られる。高台内底に釉薬のついた指で触った痕がある。	西の曲輪Ⅰ-56 1 a	
	31	壺	—	—	—	7.2	190	鉄釉。上部の釉剥ぎの幅狭い。下面・露胎。	西の曲輪Ⅰ-56 1 a	
	32	壺	底	—	—	—	3.0	鉄釉。釉が薄く残る。下面・露胎。直径 7.2 cm、縦断面での口径 3.2 cm。	二の曲輪Ⅰ-100 1 b	
	33	酒注	口	—	4.6	—	—	2.2	鉄釉。口唇付近の光沢は弱い。	西の曲輪Ⅰ-55 1 b
	34	酒注	底	—	—	8.2	25.0	外器面に白化粧+透明釉。胴部最大径となる唇部周辺に貝肌。	二の曲輪Ⅰ-100 1 a	
	35	酒注	底	—	—	—	7.2	96.0	酒注；底面、外器面に白化粧+透明釉。胴部最大径から上位に貝肌。高台内は白化粧のみ。	西の曲輪Ⅰ(Ⅱ) 不明
	36	瓶	口	—	4.6	—	—	1.8	鉄釉。ふすめた感がある。	二の曲輪Ⅱ-94 1 b
	37	瓶	口	—	3.0	—	—	2.9	透明釉。玉縁口縁直下に発色不良がある。	不明 不明
	38	瓶	胴	—	—	—	—	29.0	白化粧+透明釉。文様は貝肌。コブ状の飾りの中央に沈線も 1 条圍繞。白化粧+透明釉は胴部内部に釉垂れあり。	不明 不明
	39	瓶	底	—	—	5.0	26.0	一部を除いて発色不良でカーキ色。内面は無釉。いわゆる渡も蓋瓶。	不明 不明	
	40	瓶	底	—	—	5.0	25.2	外器面は灰釉。内面露胎。高台から高台唇は露胎。	西の曲輪Ⅰ(Ⅱ) 不明	
	41	瓶	底	—	—	—	—	40.4	外面 透明釉+鉄釉（黒ずり）、裏付けは露胎。高台内は一部露胎。内面 白化粧+透明釉で発色不良。	西の曲輪Ⅰ(Ⅱ) 不明
	42	水甕	口	—	16.6	—	5.9	26.5	鉄釉。阿瓶；アンピン；口唇は釉剥ぎ、口縁部内面は露胎。胴部内器面は鉄釉。把手（環梁）付け痕が残る。	不明 不明
	43	水甕	注口	—	—	—	—	65.6	鉄釉。阿瓶；アンピン。胴部・注口の内部面は露胎。	西の曲輪Ⅰ(Ⅱ) 不明
	44	急須	底	—	—	5.8	43.0	外器面は鉄釉。底唇付近から露胎 底面に目土付着。	二の曲輪Ⅰ-99 1 b	
	45	火鉢	口	—	—	—	—	16.1	鉄釉。胴部文様帯から傘まり口縁部が垂直状となる。口縁部の決り部破片。	不明 不明
	46	火取	口	—	8.6	—	—	10.8	白化粧+透明釉。口縁部外器面の釉剥ぎに施された貝肌の範囲内にスジ状の発色不良が見られる。胴下部に文様の一部の貝肌。口唇は露胎。	二の曲輪Ⅰ-99・100 1 b
	47	香炉	口	—	14.4	—	—	19.0	緑釉口縁部の上面まで施釉。口唇部付近は緑色を呈するが、それより内側は青色に発色。同発色部分の施釉は他の部分より厚く施される。胴部も青みが残っている。内面は白化粧のみ。	不明 不明

第 25 表 沖縄産施釉陶器 出土量

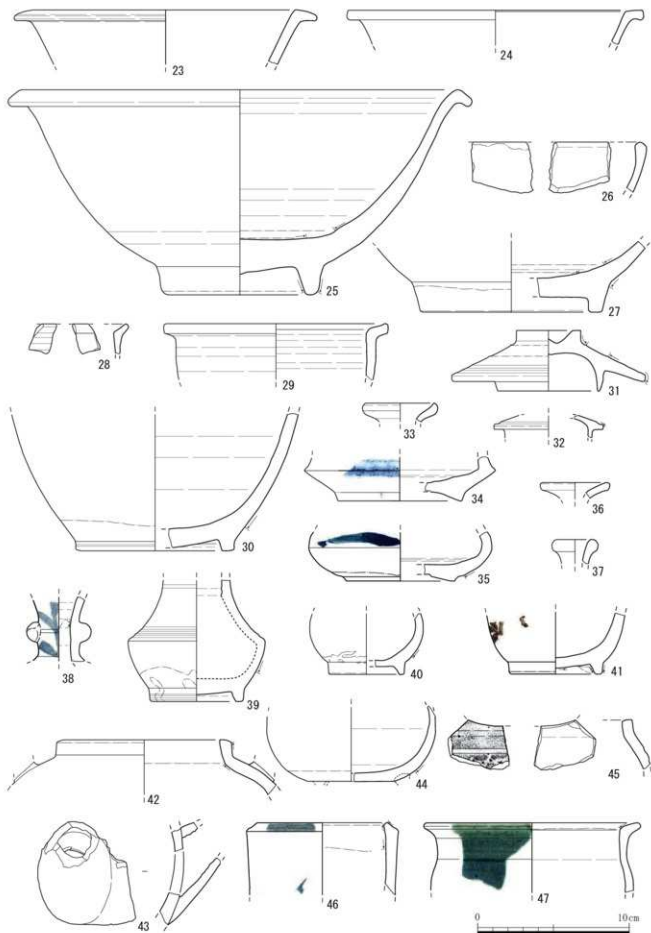
地区	器種	西の曲輪Ⅰ		西の曲輪Ⅱ		三の曲輪		三の曲輪		二・三の曲輪		二の曲輪		一の曲輪		東口遺		不明		計		
		西の曲輪Ⅰ		西の曲輪Ⅱ		三の曲輪		三の曲輪		二・三の曲輪		二の曲輪		一の曲輪		東口遺		不明				
		北	南	北	南	北	南	北	南	北	南	北	南	北	南	北	南	北	南			
観音		13	4	11	22	20		1	7	3	1	1	11	20	31	10	1	2	2	4	173	
小嶺		1	1	2	1	1							2	1	3					2	1	20
鐘					2	1			2	1			2	2	3					3	22	
壺						3	1		1	1			3	1	1	1					4	
瓶													2	1	1	1	1				10	
酒注				1		1			1	1	1		1	1	1						8	
急須				1		1							1	3	7	2	1			1	2	49
水甕(環梁)						4														1	3	
酒注					2	2							1								5	
壺				4	2	3	1		1				2	3		2				4	2	25
瓶					1	1			1						1					1	1	5
火鉢													1	1							1	2
火取															2	4					1	10
香炉		1			1																1	1
樽(環梁)																1						1
露胎不明				2					1	1	3		6	15	13	6	1	1	1	1	2	53
計				41	2	74	2		28			1	103		9	6				27	274	



第 89 図 沖縄産施釉陶器 1



図版 69 沖縄産施釉陶器 1



第90図 沖縄産施釉陶器2

(40%縮小)



図版 70 沖縄産施釉陶器 2

14 沖繩産無釉陶器

荒焼（アラヤチ）と称される沖繩産無釉焼き締め陶器の器種は、小皿、急須、鍋、播鉢、鉢、火炉、徳利、瓶、壺、甕の10種類（煙管を含めると11種類）が出土した。第27・29表に出土状況、後者はグリッド別、第28表に観察表を示す。本文では地区名称に「四の曲輪城門周辺」（遺物台帳の名称：10・11次調査区である三の曲輪南西ノロ道付近・ノロ、他グリッド）を用いて述べる。

出土状況（第27表）を見ると、I a層では全種類、I b層は壺、播鉢、鉢、鍋、瓶、II a層では壺のみ、III a層では播鉢、壺、III b層は器種不明のみの出土である。

総数398点のうち四の曲輪城門周辺が142点で35%と最も多く、次に二の曲輪が121点で30%、三の曲輪は5%、その他の地区は僅かである。

出土地別の器種では、一の曲輪〔播鉢〕、二の曲輪〔播鉢、鉢、火炉、瓶、壺〕、三の曲輪〔小皿、急須、鍋、播鉢、鉢、壺〕、四の曲輪北西〔播鉢、壺〕、四の曲輪城門周辺〔播鉢、鉢、徳利、瓶、壺、甕、煙管〕、四の曲輪〔鍋、播鉢、鉢、瓶、壺〕である。

播鉢と壺は、東丘陵から四の曲輪の全てで出土し、沖繩産施釉陶器の出土がない一の曲輪東、同石積においても出土している。甕（いわゆる水甕）、徳利は四の曲輪城門周辺（キ-56）、急須は二の曲輪（T-83）でのみ出土、火炉は二の曲輪から出土し沖繩産施釉陶器と同様である。三の曲輪ではIII a層から播鉢（Y-87）、壺（X-86）、二の曲輪ではIII a層から瓶（M-93・94）、III b層で器種不明（X-102）が出土している。

殿（トゥン）に至る経路と考えられている四の曲輪城門周辺で壺が多く出土し、いわゆる水甕が城郭内に出土が見られない出土状況には、集落の人々の活動の一端を示すものと思われる。

以下、各器種について特徴的な概要を述べる。

第27表 沖繩産無釉陶器 出土量

器種	地区		四の曲輪		四の曲輪城門周辺 （三の曲輪南西ノロ道周辺・ノロ ・ほかグリッド内）			三の曲輪			二・三の曲輪	二の曲輪				一の曲輪東石積	一の曲輪東	東丘陵	不明		計			
	層	不明	四の曲輪		三の曲輪			二の曲輪				不明	不明	不明	不明				不明	不明		不明	不明	
			I a層	I b層	I a層	I b層	II a層	II b層	III a層	III b層														I a層
小皿									1													1		
急須									1													1		
鍋			2						1													3		
播鉢		2	3	2	3		1	3	1		4	8	9	1		1	1	1		1	7	48		
鉢		1	1	3					1		1	1	5	1								1	15	
火炉														1	1							3	5	
徳利									3														3	
瓶		1		3	2	2																1	16	
壺				8	22	17	1	2	6	1		3	12	17			2		1	4	1	19	9	125
甕 or 甕																		1				1	6	
甕（水甕）									7														7	
煙管（原形）									1														1	
器種不明		2			19	58				4												1	28	167
計		23				140	3		23	1						121		1	6	4	7	69	298	

小皿（第91図1、図版71-1）

小皿は1点の出土である。推定底径5.6cmの小皿で、内器面に摩滅感がある。平安山原A遺跡（北谷町文化財調査報告書第38集2016年）に出土例がある。

急須

三の曲輪のⅠa層から1点のみ出土。小破片のため図示を割愛した注ぎ口の破片は、内・外器面が光沢のない黒色を呈する。注口先端には溶着とみられる土粒が付着する。

鍋

鍋は総数3点の出土、いずれも小破片である。図示を割愛したが口縁部断面形態が「く」の字状を呈するものである。

播鉢（第91図2～9、図版71-2～9）

総数48点の出土で、全形の覗えるものは無い。第27表の出土状況を示すように、二・三の曲輪ではⅢa層から各1点、計2点が出土している。胴部小破片（図8）が1点出土している。

各部位の特徴から、播鉢編年（安里ほか1987）^{21）}のⅡ～Ⅳ式と考えられるものが出土しており、Ⅳ式は四の曲輪城門周辺から出土している。以下、安里ほか編年の分類を「Ⅰ式」で示す。

口縁部資料で見ると、①底部からの立ち上がり直線的に外側に大きく開きながら口縁部に至るもの「Ⅱ・Ⅲ式」、②胴部が膨らみながら立ち上がり折縁口縁となる「Ⅳ式」がある。櫛目には、「Ⅰ・Ⅱ式」に見られる放射状に間隔を開けて施すもの、「Ⅲ・Ⅳ式」に見られる櫛目が連続するものがあり、前者の櫛目は後者に比して粗く深いものと浅い櫛目がかすれたように施されるものがある。後者は、胴部の成形がうねるもので凸部に櫛目が施される。櫛目の本数は「Ⅱ式」と見られる胴部片で6～8、10本単位で施され、櫛目には左・右斜め上に弧を描くものがあり、「Ⅱ・Ⅲ式」と見られる胴部片には左斜め上、「Ⅳ式」には右斜め上が見られる。

図2は、口縁下の外器面に横位の明瞭な2本の稜があり凸帯状を呈するもので、「Ⅰ式」の突帯に類する特徴を有し、内面に施される連続する櫛目は上端を撫でにより整える。櫛目の間隔があるように見える部分には自然軸が見られる。図3は折縁の内面上端に明瞭な稜がある。図6は粗い櫛目が間隔を開けて施されるもの、図7・8は胴部の成形がうねるもので櫛目が浅いものである。

鉢（第91図10～14、図版71-0～14）

鉢は総数15点の出土である。全形の覗えるものはないが、口縁部資料の特徴から、①口縁部が折縁口縁となるもの（図10）、②口縁部断面形態が逆L字状となるもの（図11）、②外反口縁部で、斜め上に開くもの（図12）、がある。

底部資料は平底の底面から直線的に開くもの（図14）があり、播鉢編年Ⅰ～Ⅲ式^{21）}の器形と同様なものが見られる。図示を割愛したものに平底の底面から緩やかに膨らみながら立ち上がるものがある。

火炉

総数3点の出土である。小破片のため図示を割愛するが、二の曲輪から2点、出土地区・層序不明が1点である。胴上部で屈曲する器形と見られ、類例資料として平安山原A遺跡（北谷町文化財調査報告書第38集2016年）の器形になるものと考えられる。

徳利

徳利は総数4点、図示を割愛したが、いわゆる「鬼の腕」、方言で「ターワカサー」と称されるもので、全形が覗えるものはなく頸・胴部の特徴から、胴中央部付近が太く最大径が17cm程度となるもので頸部に自然軸が見られるものがある。

瓶 (第92図15・16、図版72-15・16)

瓶は総数16点の出土で、二の曲輪ではⅢa層から1点出土している。

口縁部が朝顔状に開くもの(図15)、口唇部断面形態が「く」の字状となるもの(図16)である。

壺 (第92図17～32、図版72-17～32)

壺は、総数127点の出土である。全形を覗えるものはない。口縁部資料の特徴から大別すると、外反口縁、玉縁状口縁、折縁口縁となる。

I類：外反口縁

- a) 口唇部が僅かに肥厚するもの(図17・18)、
- b) 外反口縁で頸部が短いもの(図19)、
- c) 朝顔状に外反するもの(図24)、

II類：玉縁状口縁

- a) 口縁部を玉縁状に肥厚させるもの(図23)、
- b) 大型壺で口縁部を玉縁状に肥厚させるもので頸部近くに耳を貼りつけるもの(図25・26)、と同類の図示を割愛した胴部資料には、貼りつけた耳の下位に浅い凹線が2条回るもの、頸部と胴部の境目に凸帯を2条ほどこすものがある。

III類：折縁口縁。③折縁口縁の折縁幅が短く6～8mm程度のもの(図27)、

IV類：④屈曲する肩部に貼りつけた粘土帯を波状文に整形したものがある

底部資料は、①緩やかに膨らみながら立ち上がるもの(図28・29)、②やや直線的に立ち上がり胴下半部から膨らむもの(図30)、④底部からの立ち上がりが外側に強く傾斜するもの(図31)、⑤胴下部と底面の境目が角となるもので、底面の厚さが約2～3cmと特に厚い。(図32)、がある。

甕 (第94図33～35、図版74-33～35)

いわゆる水甕で、総数7点の出土である。全形を覗えるものはないが各部位の特徴から、口縁部には、図33の折縁口縁が斜め下に傾き、最大口径が口縁部にあり口縁直下に文様が施されるもの、図34の折縁口縁の断面形態が「逆し字」となるもので、頸部付け根と胴上部の間に文様が施されるもの、図示を割愛した小破片に、直口口縁部の口唇部を幅広とするものがある。

胴部から底部の接合資料である図35は、胴上部に最大径があり口縁部に掛けて窄まるもので、底部の立ち上がりの境目を面取りする。

これらに施される文様は、凹線、波状文、突帯、粘土帯、粘土貼り付けの円文、篋撫による幅広いの圓線部分が複数の段となるものが見られる。図示を割愛した図33と同様な口縁部破片折縁口縁資料には、胴部の文様帯部分が湾曲した変形が見られる焼き損じがあり、不良品であっても買いかめていたことがわかる。

註1)：安里進ほか「播磨福年からみた近世琉球窯業に展開」『名護博物館紀要3号』名護博物館1987年3月

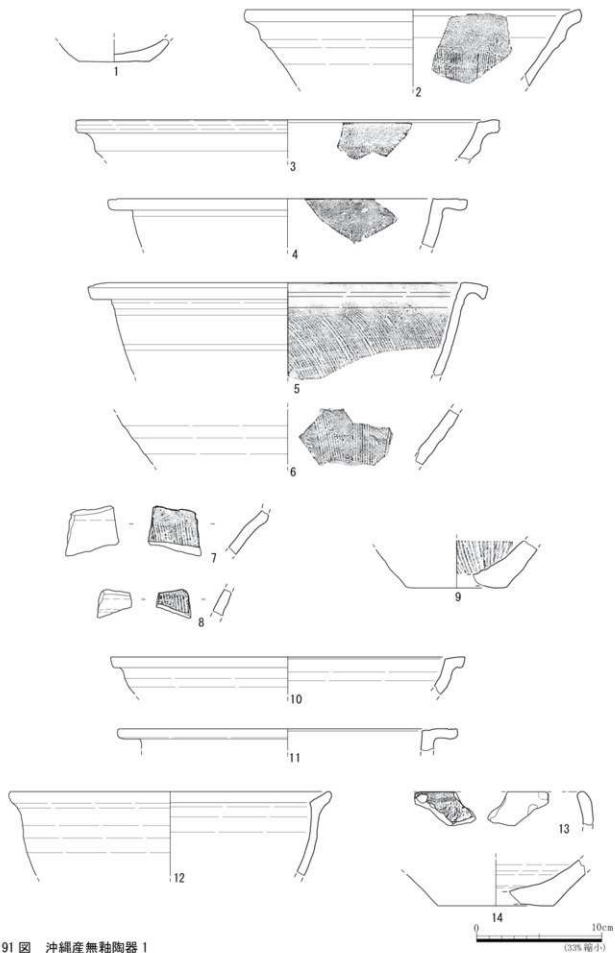
第28表 沖縄産無釉陶器 観察一覧-1

第91図・図版71	図番号	器種	部位	口径	器高	底径	重量	特徴	出土地・層
第91図・ 図版71	1	小甕		-	-	5.6	17.6	見込み中央部が最も深くなる。内器面に厚感感がある。	三の曲輪T-84 I a層
	2	楕鉢	口	23.6	-	-	53.9	口縁部が折口形的であるが、断面でみると内面で屈曲し斜め上に広がる器形。口縁部下(口唇部上端から下3cm程度)の外器面に屈曲部があり2本の線を有する。額目は上端を横える(額目を施した後に横方向の撫でによって磨かれたとみられる。)縦方向に、撫で消された部分がある。	地区不明、グリッド不明、層不明
	3	楕鉢	口	33.8	-	-	43.7	口唇部下に線を有する。額目の上端を横える。胴部の器壁がうねる。額目は密、額目幅1mm程度だが浅い。	地区不明、グリッド不明、I a層
	4	楕鉢	胴	-	-	-	57.1	額目を間隔を開けて施す。額目は10本単位。額目幅2mm、粗く、密で深い。器壁内外面がうねる。	地区不明、グリッド不明、I a層

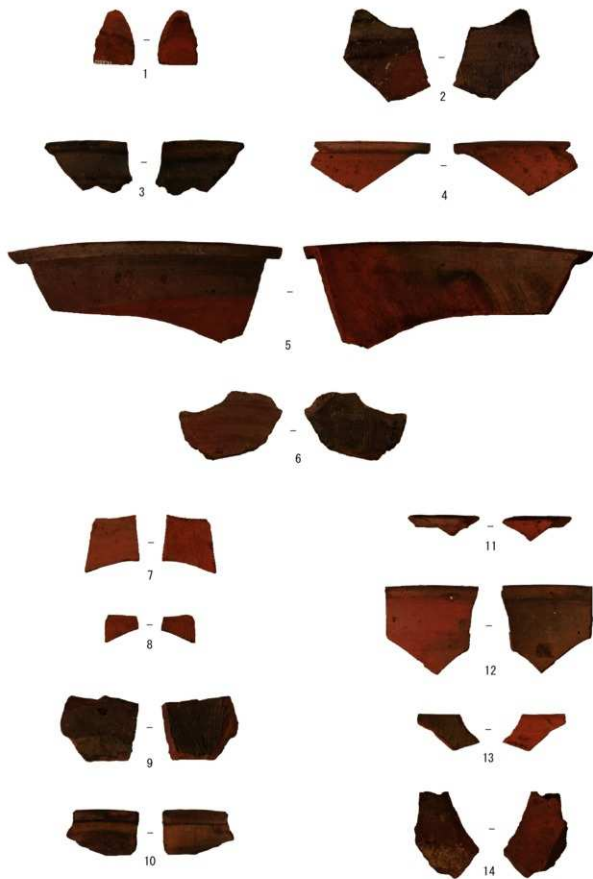
第28表 沖縄産無釉陶器 観察一覧-2

(計測単位:cm, g)

器種	図番号	器種	部位	口径	器高	底径	重量	特徴	出土地・層	
第91図・図版71	5	楕鉢	胴	-	-	-	23.2	胴目が郭状、胴目は幅2mm、細く、深い。	二の曲輪T-96 I a層	
	6	楕鉢	胴	-	-	-	6.6	胴目が浅い、上端を揃える、外器面がうねる。	三の曲輪T-87 III a	
	7	楕鉢	口	32	-	-	239.9	折口縁、折縁の上面に1条沈線、口唇部は下部端が尖る。胴目は郭状を呈し、7本筋位で僅かに間隔を開けて施す。	四の曲輪キ-56 I a層	
	8	楕鉢	口	28.8	-	-	62.9	折口縁、口縁部断面形態は「逆L」、口唇部は「U」字状。胴目は逆で上端を揃える。	四の曲輪(ノロ) I a層	
	9	楕鉢	底	-	-	-	8.0	胴目は逆で細く深い。	二の曲輪キ-92・93石垣内層不明	
	10	鉢	口	28.4	-	-	32.3	折縁口縁、折縁の口唇部下端が鋭角となる。	四の曲輪キ-56 層不明	
	11	鉢	口	27.0	-	-	17.8	折縁口縁、折縁上面に凹線が2条連続する。	四の曲輪ア-58 不明	
	12	鉢	口	25.8	-	-	58.5	外反口縁、口縁部内部面の基部に明瞭な稜がある。口縁部底下付足は、直状であるが次第に平準する。	二の曲輪T-99 I a層	
	13	鉢	口	-	-	-	13.6	内反口縁、口唇部は直状を呈し、口唇部直から外器面は褐色、内器面は赤褐色。	四の曲輪キ-40 I a層	
	14	鉢	底部	-	-	-	8.2	平底の底面からの立ち上がりが、大きく外側に開く。	地区不明、グランド不明、層不明	
	第92図・図版72	15	瓶	口	7.0	-	-	4.58	口縁部が明瞭状に外反する。	二の曲輪キ-93・95 I b
		16	瓶	口	6.0	-	-	3.50	外反口縁で、口縁部外側の断面形態が「く」の字状を呈する。	二の曲輪キ-93・94 III a
		17	甕	口	8.4	-	-	9.0	小型甕、口縁部が僅かに外反する。器壁は薄い。	一の曲輪アナ-79 No.5表層 I a層
		18	甕	口	8.4	-	-	10.1	小型甕、口縁部が僅かに外反する。	四の曲輪ア-60 I b
19		甕	口	10.6	-	-	48.6	中型甕、口縁部が外反、器色は灰色、素地は赤茶褐色。	三の曲輪北西フ-43南トレンチ(5号下部) II a層	
20		甕	口	10.2	-	-	30.2	折縁口縁、口縁部の断面形態は「逆L字状」、口唇部は方形で僅かに反る。	四の曲輪(ノロ) 層不明	
21		甕	口	13.6	-	-	74.6	折縁口縁、口縁部の断面形態は「逆L字状」、口唇部は方形。	四の曲輪ア-58 (南) 層不明	
22		甕	口	15.2	-	-	11.6	折縁口縁、口縁部の断面形態は「逆L字状」、口唇部は方形、胴部下に3条の凹線が連続する。	四の曲輪ア-58 (南) 層不明	
23		甕	口~胴	9.2	-	-	618.9	中型甕より大型より、胴上部に6本×1本の凹線が連続する。	不明 I a層	
24		甕	口	9.8	-	-	57.1	口縁部が直縁状に肥厚する。	四の曲輪C-板付足 層不明	
25		甕	口~胴	15.4	-	-	468.5	大型甕より口縁部が直縁状に肥厚させるが胴部との境目の下面は水平となる。取りつけた耳の文様部が残る。	三の曲輪南西ノロ 層不明	
26		甕	胴	-	-	-	280.0	大型直縁片、胴部の2条の凹線上位に耳を貼りつける。	三の曲輪南西キ-06 I a層	
27		甕	胴	-	-	-	189.5	胴部下に凹線4条、胴部に凸部を押しつぶし細から成り状に成形した文様が連続する。両者の間に強靭の一段がある。	不明 不明 I a層	
第93図・図版73	28	甕	底部	-	-	-	13.7	平底の底面から縁やかに膨らみながら立ち上がる。底面と胴部の境目は直縁取りが施される。内器面には胴部へ傾で上げた痕が残る。	不明 不明 層不明	
	29	甕	底部	-	-	-	12.4	平底の底面から縁やかに膨らみながら立ち上がる。底面と胴部の境目は直縁取りが施される。内器面の下部は明瞭な稜が残る。	地区不明、グランド不明、層不明	
	30	甕	底部	-	-	-	17.0	平底の底面からやや直線的に膨らみながら立ち上がる。底面と胴部の境目は丸みを帯びる。外器面に遺物?付着。	四の曲輪(ノロ) 層不明	
	31	甕	底部	-	-	-	22.4	728.5	底面と胴部の境目を直取、胴部への立ち上がりが外側に大きく開く。	四の曲輪(ノロ) 層不明
	32	甕 or 甕	底	-	-	-	19.0	95.7	底面と胴部の境目が明瞭な稜となる丁寧な成形。平底の底面から胴部へ、次第に径を大きくしながら直線的に立ち上がる。胴部器壁に比して底面が厚く、厚さ3cm。	四の曲輪ア-60 I a層
第94図・図版74	33	甕	口	46.2	-	-	4009	折縁口縁の内器面側が突出し、外器面側は折縁が斜め下に傾き、断面形が舌状を呈する。折縁下の外器面上部に2条×1条の凹線による文様区画の中に直状文を施し、粘土による円文を間隔を開けて貼りつける。	四の曲輪キ-56 I a層	
	34	甕	口	29.8	-	-	276	折縁口縁、口唇に2条の沈線、胴部と胴部の境目に凸部、胴部に沈線2条を巡らす区画の中に直状文を施す。間隔を開けて途切れる部分がある。粘土貼りつけによる円文を直状文に貼りつける。	四の曲輪(ノロ) 不明	
	35	甕	胴~底	-	-	-	24.4	7509	底面からの立ち上がる縁が胴部下で狭くなり胴上部に最大径があり、2条の凸部の上位に凹線「上」+1(下)が施され、両方に膨らむように粘土層が付けこまれる円文が施される。	四の曲輪キ-56 I a層

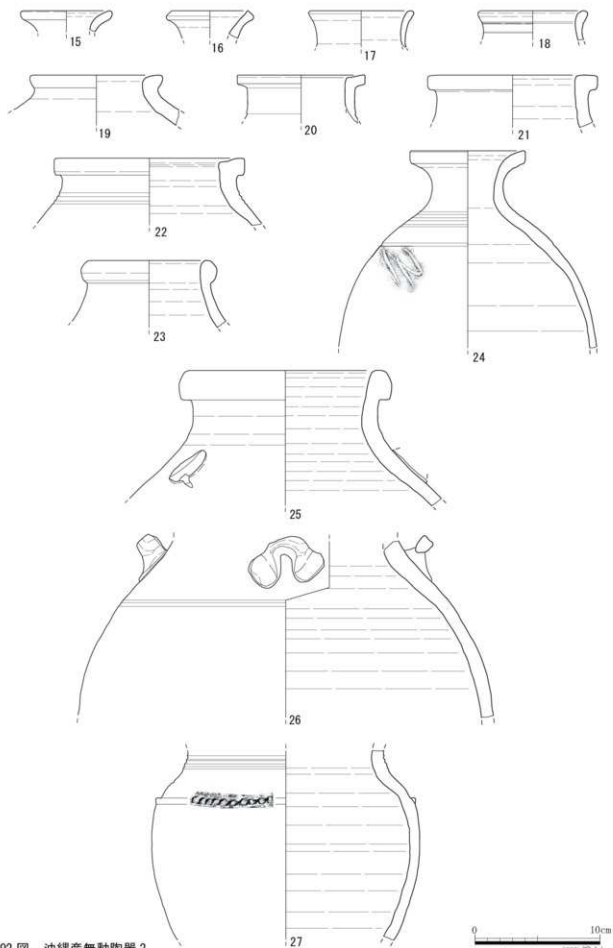


第91図 沖縄産無釉陶器 1

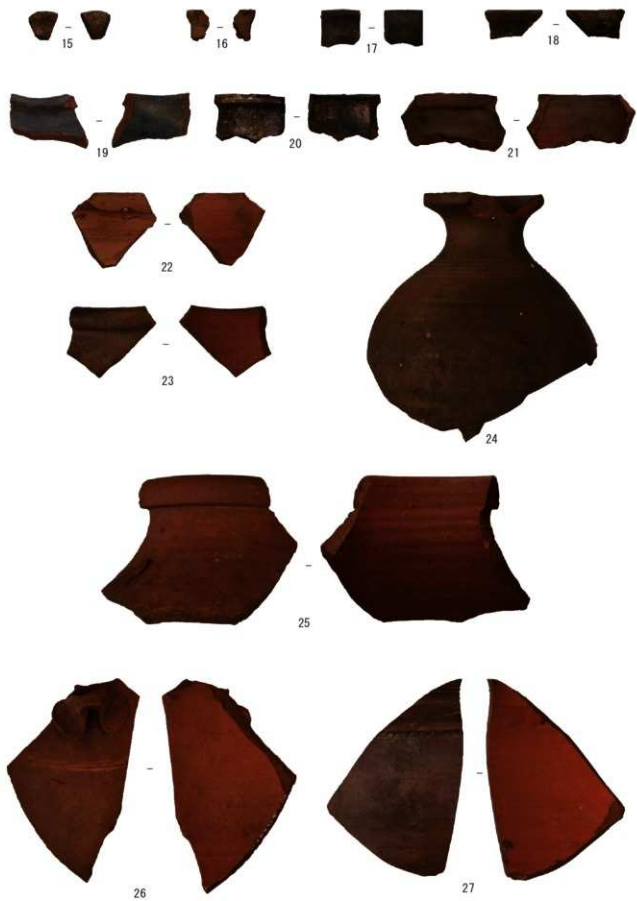


図版 71 沖縄産無釉陶器 1

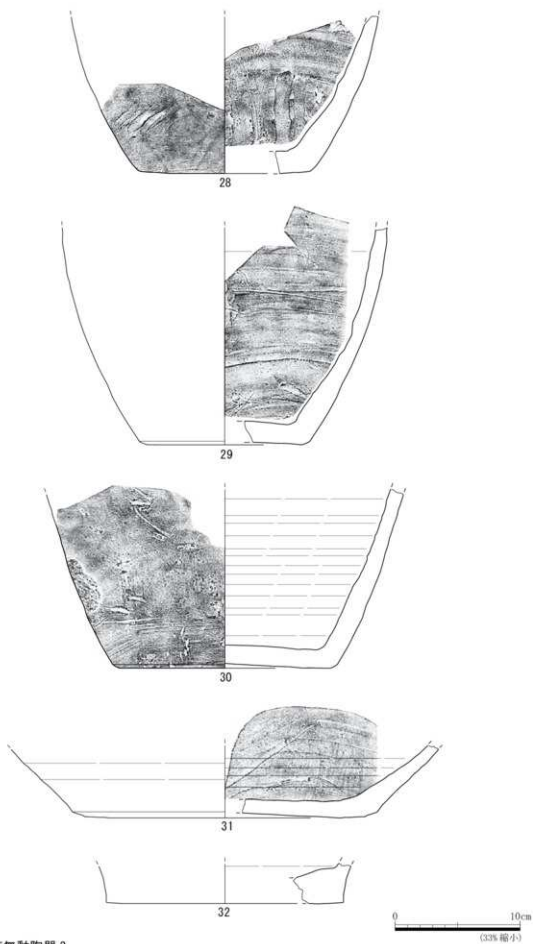




第92図 沖縄産無釉陶器2



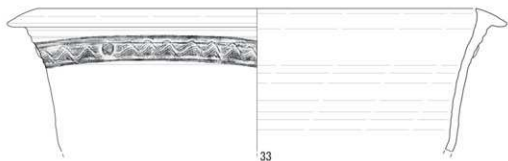
図版 72 沖縄産無軸陶器 2



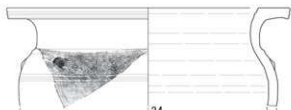
第93図 沖縄産無釉陶器3



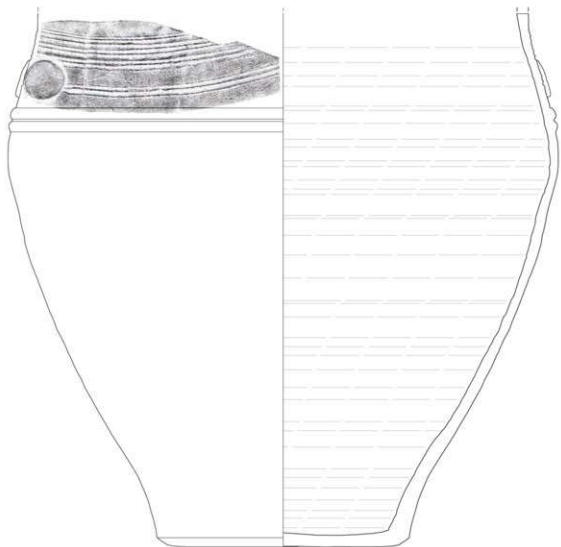
図版 73 沖縄産無釉陶器 3



33



34



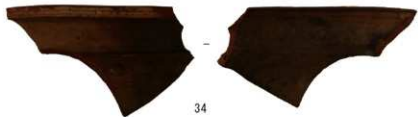
35



第94図 沖縄産無釉陶器4



33



34



35



(208 縮小)

图版 74 冲縄産無銘陶器 4

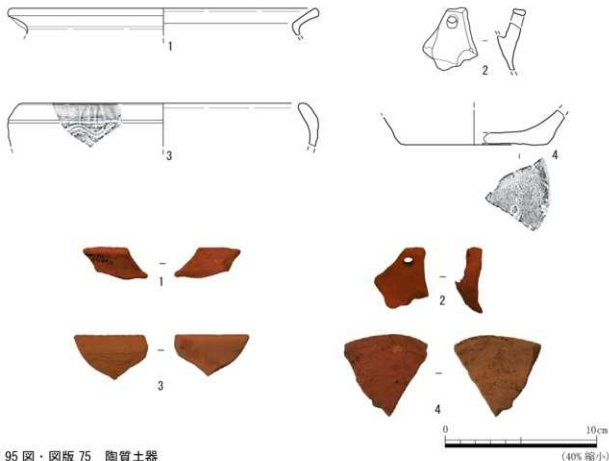
15 陶質土器

陶質土器は「アカムヌー」「カマガァーヤチ」と称される橙色系で軟質の土器群で、素地には混和材（雲母・赤色粒・黒色粒等）が含まれる。総数 119 点出土しており、器種は鍋、鉢（水鉢、搦鉢）、火炉、急須、土瓶などが確認されているが、出土したものは細片が多く、全形を伺える資料はない。そのため器形が推測できるような状態の良い資料、特徴的な資料を抜き出し、4 点を図示した。詳細については第 30 表に記載する。

集計の結果についても表に示したが、多くは基本層序 I a 層、I b 層からの出土であった。なお、2cm 以下の細片については集計から除外した。

第 30 表 陶質土器 観察一覧

第95図版	図番号	器種	部位	計測値				器色	混和剤	器面調整 (外/内)	観察事項	出土地
				口径	器厚	器高	底径					
第95図版75	1	鍋	口	20.6	0.5	—	—	橙	黒色粒△、 雲母△	ナデ/ナデ	外面に粘土を塗り付けており、耳の底かと思われる。	三の曲輪 W-85 I a 層
	2	土瓶	把手	—	—	—	—	橙	赤色粒△、 黒色粒△、 雲母△	ナデ/ナデ	台形状の把手で、下方より孔を穿つ。	二の曲輪 0-96 I b 層
	3	鉢	口	18.4	0.5 5 0.8	—	—	明橙	赤色粒△、 黒色粒△、 雲母△	ナデ/ナデ	口縁部は内湾し、口縁部外面下部にへら掻きによる波状沈痾が施される。	二の曲輪 0-93, 94, 95 I b 層
	4	不明	底	—	0.7 (底厚)	—	9.7	外：暗橙/ 内：明茶	黒色粒△、 雲母△	ナデ/	平底の底部で、底面には糸切り痕が明瞭に残る。	不明



第 95 図・図版 75 陶質土器

(40% 縮小)

第31表 陶質土器 出土量

地区	グリッド	形状	罎		罎		鉢		水鉢		鉢		次郎		急須		土瓶		不明		合計					
			口	胴	底	蓋	口	胴	底	口	胴	口	底	蓋	胴	蓋	口	胴	蓋	口		胴	蓋			
一の曲輪	M-71	不明																			1	1				
	N-71	不明																				1	1			
	L-72	不明																				1	1			
二の曲輪	L-91	I b						1														1	1			
	F-93	皿 a	1																				1	1		
	R-94	I b														1							1	1		
	O-93, 94, 95	I b					1			1													2	2		
	O-96	I a																					1	1		
		I b							1								1	1					3	3		
	O-97, 98, 99	I a												1										1	1	
	F-100	I a																				1	1	1	1	
		I b																					1	1	1	1
	Q-97, 98	I a									1													1	1	
	R-100	I b												1										1	1	
	R-96	I a	1																					1	1	
	S-92-93	不明													1									1	1	
	S-94+95	不明																					1	1	1	1
	S-97-98	I b												1									3	4	4	1
	T-99	不明														1								1	1	1
		I a																					1	1	1	1
	U-100	不明																					2	2	2	2
	U-101	皿 a																					1	1	1	1
	U-102	I b						1															1	2	2	2
U-99	I b	1																					1	2	2	
V-100	不明			1																				1	1	
V-101	I b						1															1	2	2	2	
W-100	I b																					1	1	1	1	
Y-102	I b																					1	1	1	1	
Z-102	不明												1											1	1	
	不明							1																1	1	
三の曲輪 北西部	R'-83	I b																					1	1	1	
	C'-87	I a																					1	1	1	
	R'-87	I a																					1	1	1	
		I a																					1	1	1	
		I b																					1	1	1	
	T-83	I a																					5	5	5	
		I a																					3	3	3	
	T-84	I b	1																				3	3	3	
		I b																					1	1	1	1
	R-77	I a																					1	1	1	1
	R-85	I a	1																				1	1	1	1
		I b														2								2	2	2
X-86	皿 a	1																				1	2	2	2	
T-85	I a																					1	1	1	1	
T-86	I a				1																		1	1	1	
Z-86	I a																					1	1	1	1	
	不明	不明																				1	2	3	3	
東丘段	Y-85	I a																				1	1	1	1	
	Z'-83	不明																					1	1	1	
四の曲輪	L''-44	I b																				1	1	1	1	
	M'-55	I b	1																				3	4	4	4
	M'-60	I a												1										1	1	1
		I a																						1	1	1
		I b																						1	2	2
		不明																						1	1	1
		I a																					1	1	1	
	N'-60	I b																					1	1	1	
		I b															1	1					1	1	4	4
	O''-44	I a																					1	1	1	1
	P-32	I a												1										1	1	1
	S''-44	I b																						1	1	1
	T'-36	不明												1										1	1	1
	T'-39	不明																					1	1	1	1
	U-36	I a												1										1	1	1
	V-36	I a																					1	1	1	1
	W-38	不明				2																		2	2	2
	X-34	不明	1												1									3	3	3
Y-37	不明																						1	1	1	
Z-38	I a	1						1														1	2	4	4	
AA-36	不明																						1	1	1	
	不明	不明																				1	2	4	4	
不明	不明	不明	1											2	1							1	1	15	15	
	合計		19	3	2	6	1	3	1	2	1	2	4	7	3	1	6	3	1	1	1	9	53	15	119	

16 土製品

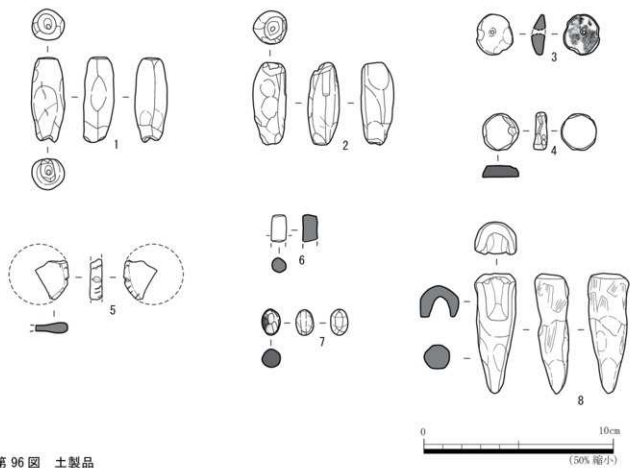
土製品は二の曲輪1点、三の曲輪で2点、三の曲輪北西で2点、四の曲輪で2点、出土地不明3点、計10点出土している。そのうち、実用品である土鍾が2点、そのほかは用途不明の製品が6点、合わせて8点を図示した。土鍾は2点とも瓦質、形状は管状を呈するもので、大きさもほぼ同じである。焼成は良好で、黒灰色を呈する。北谷町内では平安山原A遺跡(2016)、後兼久原遺跡(2003)で類例があるほか、勝連城跡(1990)などでも同様の形状のものが出土している。用途不明の製品は、形状から円盤状製品、円柱状製品、楕円形状製品、ソケット状製品とした。

第32表 土製品 出土量

地区	グリッド	層序	実用品				その他		合計
			土鍾	円盤状	楕円状	ソケット状	不明		
二の曲輪	O-96	不明						1	1
三の曲輪	W-77	III b	2						2
三の曲輪北西	ラ-43	I a		1					1
		不明				1			1
四の曲輪	N'-55	不明		1					1
	N'-60	I b				1			1
	不明							3	3
合計			2	2	1	1	4	10	

第33表 土製品 観察一覧

第96国・国版76	図番号	分類	形状	計測値				備考	出土地
				長軸	短軸	厚さ	重量		
第96国・国版76	1	土鍾	管状	4.5	1.8	—	9	完形で、長軸方向にあげられた孔の口径は約0.5 cmを測る。	三の曲輪 W-77 III b
	2			4.4	1.8	—	9	完形で、長軸方向にあげられた孔の口径は約0.5 cmを測る。	三の曲輪 W-77 III b
	3	不明	円盤状	2.1	1.9	最大0.8	2.8	いびつな円形で、厚さも不均一である。中央に孔径0.1 cm程度の穿孔を施す。	出土地不明
	4		円盤状	直径1.9	—	0.7	2	円盤状を呈し、厚さはやや不均一な製品である。平坦面は平滑に整えている。	四の曲輪 N'-55 不明
	5		円盤状	直径3.2 (推定)	—	0.2 / 0.6	2	破損しているが、円盤状を呈すると推測される。縁の部分が厚く、中央部に向かって薄くなる。	三の曲輪北西 ラ-43 北1のフ I a
	6		円柱状	残存部 1.45	0.8	—	0.9	円柱状を呈する製品だが、端部を欠損する。	出土地不明
	7		楕円状	1.4	1.0	1.0	1	ラグビーボールのような形状の製品で、完形である。表面は平滑に整えられている。	四の曲輪 N'-60 I b
	8		ソケット状	6.4	2.2	—	17	完形。ソケット状になる端部から細くなり、先が突る製品である。成型のためとみられる指痕などが認められる。	三の曲輪北西 ラ-43 西1のフ 不明



第96図 土製品



図版76 土製品

17 瓦質土器

瓦質土器は、還元炎焼成により器色が灰色系を呈するものと、淡茶色や暗赤色を呈するものがあり、混和材には白・黒色粒のほか、雲母の混入が認められる。

器種は鉢（挿鉢含む）、火炉、壺、破片資料のため断定はできないが厨子甕の屋根の一部かと想定されるものなどがある。全形を伺える資料はなく、器種の判断できない破片資料が大半であった。総数では68点出土し、うち特徴的なものを抜き出して8点を図示した。

第97図1、2については、菊花文スタンプを施す鉢で、図3の壺については胎土の特徴から瀬戸²¹が本土系瓦質土器と呼称する資料かと推測したが、器面調整等でやや差異があるようにも見受けられる。図4～7は沖縄県内で焼かれたものと推測され、図4については湧田古窯群²²出土の資料に類例がみられる。個々の資料の詳細については、観察表に記載する。

第34表 瓦質土器 観察一覧

(調査単位：cm)

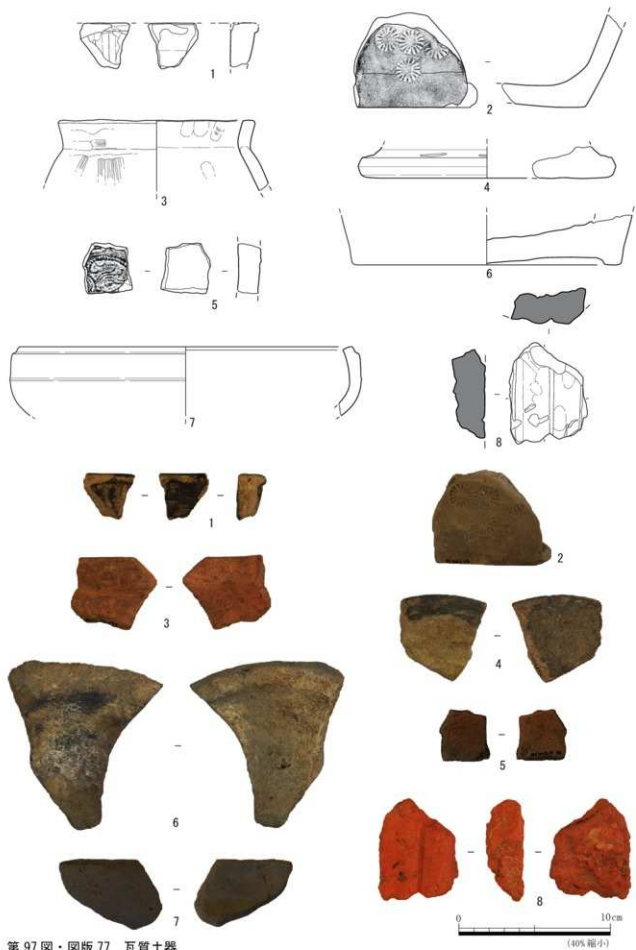
第97図・図版77	図番号	器種	部位	計測値			観察事項	生産地	器色	混和剤	器面調整 (外/内)	質	出土地
				口径	器厚	底径							
	1	鉢	口	—	1.2	—	口唇部は平坦面をなし、外面には灰帯を有する。内外面とも火を受けたのか、煤のようなものが付着し、黒色を呈する。	日本	黒・淡茶・黒	白粒△、雲母△	—/ロクロ	良	三の倉輪 F-95 Ⅱa
	2	鉢	底	—	1.3	—	平底の底部、外面に菊花文が連続してスタンプされている。	日本	淡茶・淡灰・淡茶	白粒△、雲母△	ロクロ・ナデ/ ロクロ・ナデ	良	二の倉輪 F-95 Ⅰa
	3	壺	口	13.0	0.8	—	口唇部は平坦面をなし、瓶頸でくの字状に折れ、瓶部～直る。内外面とも丁寧に器面調整を施す。	日本?	茶褐色・淡灰・茶褐色	白粒△、褐色粒△、雲母△	ヘラ・ナデ/瓶 頸、ナデ?	良	一の倉輪 F-71 不明
	4	不明	底	—	—	17.0	平底の底部で、円形をなすものとみられる。外面と底面は火を受けたのか煤のようなものが付着する。	日本	灰・淡茶・灰	黒粒△、白粒△、雲母△	ロクロ/—	良	二の倉輪 F-96 不明
	5	鉢	胴	—	1.3	—	外面に蓮花文とみられる文様を施す。	沖縄	暗赤・灰・淡茶	黒粒△、白粒△、雲母△	ナデ/ナデ	良	二の倉輪 F-93 Ⅱa
	6	不明	底	—	1.6 (底厚)	17.8	内面に一部腐り付着。	沖縄	淡灰	黒粒△、白粒△、砂粒△	ナデ/ナデ	良	一の倉輪 F-71 不明
	7	鉢	口	22.0	0.7	—	口唇部は平坦面をなし、口縁部外面には蓋受け状に段差を造る。	沖縄?	淡灰	黒粒△、白粒△、雲母△	ロクロ・ナデ/ ロクロ・ナデ	良	出土地不明
	8	不明	不明	—	—	—	表面に花網を施し、2cmほどの幅で区画する。断面は半円状を呈する。胴面にナデ調整を施し面を造る。裏面は破損のため断面を有さない。	沖縄?	暗赤	白粒△、雲母△	ナデ/—	良	二の倉輪 0-96 Ⅱa (石群下段)

註1. 瀬戸哲也「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化を考える』2004 今帰仁村教育委員会

註2. 沖縄県教育委員会『湧田古窯群Ⅱ』沖縄県文化財調査報告書第121集 1995

第35表 瓦質土器 出土量

地区	グリッド	層序	鉢			播鉢			火印			壺			不明 (厨子?)	不明				合計
			口	胴	底	口	胴	底	口	口	胴	口	胴	底		不明				
一の曲輪	D-112	I b														1			1	
	ツ-70	不明														1			1	
	ナ-71	不明											1						1	
	ナ-73	不明											1						1	
	ム-71	不明			1		1					1					1		4	
	ム-72	不明				1													1	
	ラ-70	不明													2				2	
	ラ-71	不明				1					1				2				4	
ラ-72	不明	1																1		
二の曲輪	R-93	I b			2											1			3	
	R-95	Ⅲ a														1			1	
	O-94・95	I a														1			1	
	O-96	Ⅲ a								1				2		6			9	
	P・Q-96	I a														1			1	
	Q-97・98	I a														1			1	
	R-95	I a														2	1		3	
	R-97, 98	I b							1										1	
	R-99・100	Ⅲ a				1										2	2		5	
	S-94・95	不明	1													1			2	
	S-95・96	Ⅲ a								1									1	
	S-96・97	不明														1			1	
	S-98	I b			1															1
		Ⅲ a			1															1
	T-98	不明															1			1
U-96	不明	1																	1	
V-101	Ⅲ a															1			1	
	Ⅲ c															1			1	
三の曲輪	T-83	I b														1			1	
	W-85	Ⅱ a			1														1	
		Ⅲ a															1			1
四の曲輪	N'-55	不明														1			1	
	ア-56	I a														1			1	
		不明															1	1		2
	ア-59	不明													1				1	
	キ-56	I a															1		1	
	キ-58	不明														1			1	
	サ-55	I a														1			1	
	サ-58	不明														1			1	
テ-56	不明														1			1		
不明			2													2			4	
合計		5	5	1	1	2	1	1	3	3				2	2	34	7	1	68	



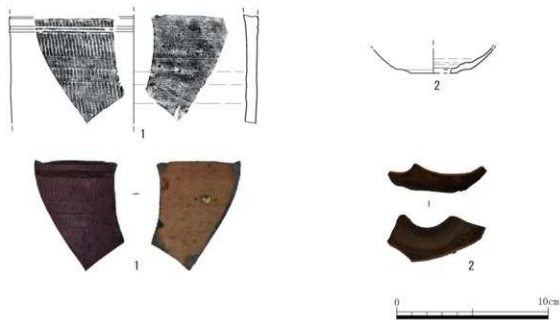
第 97 图 · 图版 77 瓦質土器

18 その他の輸入陶器（近世）

本項でその他の輸入陶器としたのは15～16世紀頃（近世）に製作されたとみられる中国やベトナム産の無軸陶器の資料である。確認された2点を図示した。

第98図1はベトナム北部で製作されたとみられる鉢もしくは壺の胴部片で、16世紀頃のものとして推測される。外面にはとびガンナのような技法を用いて施文し、破片上部には深い二条の沈線を巡らせる。長軸7cm、短軸4.7cm、器厚は0.7～0.9cmとやや厚く、重量は43.6g。二の曲輪のV-101グリッドⅢa層出土。

図2は中国産の明代（15～16世紀頃）に製作されたとみられる資料で、壺の底部付近の破片である。外面の一部には自然釉と推測される褐色の釉葉が付着する。内外面とも回転によるものとみられる調整痕が明瞭に残る。底径は推定3cm、器厚は0.1～0.4cmと薄手で、重量は11g。二の曲輪のY-99グリッドⅠa（表採）層出土。



第98図・図版78 その他の輸入陶器（近世）

19 石器・石球

石器 / 石材は1次～11次調査において66点得られた。器種は石斧、敲打器類（敲石 / 磨石 / 敲き兼用磨石）、砥石、石皿、石鏝で曲輪ごとの層序別集計を第36表に示した。

曲輪別の出土量では一の曲輪東12点、三の曲輪12点、四の曲輪8点の順に多い。石斧は東丘陵、二の曲輪、四の曲輪では認められず、一の曲輪、三の曲輪でのみ得られた。一の曲輪全体で11点、三の曲輪5点で器種は敲打器類が僅かに多い。

層序別では測量調査時に得られた表採資料が多く、I b層、II層、II a、II b、III a、III b、IV、V層からの出土は1～3点と少ない。緊急発掘調査と六次 / 七次調査は報告済みの為、割愛し、そのうち図掲載がない資料1点を作図、今回集計に加えた。

第36表 石器出土量

地区	グリッド/トレンチ	層序	器種	敲打器類			クダニ石	台石	石皿	砥石	石鏝	青石 石製品	石鏝	石板	石製品	不明 石製品	石材	小計	合計		
				石斧	敲石 磨石 敲き兼用磨石	磨石															
東丘陵	ヨ-83	II a層															1	1	4		
		II a層																1		1	
		I a層			1													1		1	
一の曲輪	ナ-78	層不明	1															1	1	15	
		ナ-71	層不明	1											2				3		3
		ラ-71	層不明	1				1											2		2
		ウ-71	不明		1														1		1
		ソ-72	表採		1		1			1									3		3
		ム-71	層不明			1													2		2
		ホ-70	表採	1												1			2		2
二の曲輪	9-97・98	II a層		1														1	1	6	
		S-92・93	層不明			1													1		1
		V-102	I b層							1									1		1
		T-101	層不明															1	1		
		T-102	層不明							1									1		1
三の曲輪	T-98	I b層		1														1	1	6	
		層不明	1															1	1		
		不明	1				1											2	2		
三の曲輪 北西	ラ-43/東トレ	I a層																1	1	2	
		層不明																1	1		
四の曲輪	L'-44	層不明			1													1	1	33	
		エ-56	層不明									1							1		1
		ナ-55	層不明																1		1
		ナ-56	層不明			1													1		1
		ナ-58	層不明																1		1
		ア-58/北側	層不明																1		1
		ナ-55	I a層								1								1		1
		ナ-56	層不明								1								4		4
		ナ-58	不明																1		1
		ホ-56	層不明	1															1		2
		N'-69	層不明			1													1		1
グリッド不明	表採/不明		1	1	5		1	1	1	1							1	4	16		
合計				5	6	3	13	1	2	1	7	1	1	2	1	1	1	21	66	66	

(1) 石斧

石斧は、一の曲輪東3点と三の曲輪各1点の合計5点得られた。形態は撥形と方柱状石斧が認められ、撥形としたものに多少差はあるものの大別した範囲でこれに収まる。破損資料の図3、4を除くすると形態を伺い知れる資料は3点である。又、刃部形態では刃先が大きく潰れ、敲石に転用したと考えられる資料も認められた。

サイズは12cmを超える石斧は認められない。分類基準の形態と重量は表のとおりとした。完形以外は長さ、重量とも判別困難な為、分けて表示、以下個別に略述する。

第37表 形態別重量分布

重量	形態			合計
	A. 撥形	B. 角柱形	C. 破損	
重い(300g以上)	1	0	1	1
中間(300g~100g)	1	0	1	1
軽い(100g以下)	1	1	2	2
破損(図3-4)			2	2
合計	3	1	2	6

第38表 形態別刃部相関

刃部形態	平面形		合計
	A. 撥形	B. 角柱形	
両刃	2		2
片刃	2		2
鑿状(両刃)		1	1
破損	1		1
合計	5	1	6

図1は撥形で基部は厚く現状で長軸が10cmに満たず小型の範疇にある。刃部は刃先が殆ど潰れ、特に裏面は刃面から基部に至る広範囲に破損が及び原形を留めない。両刃石斧だが基部の長さが短く刃部を何度か研ぎ直し結果的に長軸が短くなったと考えられる。刃の潰れは敲石に転用している。図2は小型資料で撥形を呈す。丁寧に成形し基部まで研磨が認められ側面観は厚手を成す。研磨は基端を除きほぼ全面に確認され、特に基部中央は良好である。又、刃部は刃先から2.5cm程度まで刃を付け両刃の形状を呈す。刃毀れが部分的に確認される。図3は破損資料で基部のみ残存する。基端の形状から器形は撥形を呈し、若干厚手の小型石斧と推測、基部の研磨は良好。図4も破損し刃部のみ残存、全体の器形は不明。石斧の幅に対し厚みが5割以下と薄く、偏平片刃石斧の形態が窺える。残存基部及び刃部の研磨は両面とも良好、刃面は短く研磨は狭い範囲に限られ、本来の状態と異なり刃の部分極端に短い。

図5は小型方柱状石斧の形態を成す。自然産を未加工のまま利用し刃部のみを付した資料で基部に成形痕は見られず、刃部は両面から研ぎ出すが幅が細く鑿状を成す。刃先から刃面上部の稜線まで約2cmで石斧の形態は弥生相当期にみられる資料と同種のもつと捉えられる。長軸は報告の中で最も長い。類例資料が糸満市真栄里貝塚で出土している。

第39表 石斧 観察一覧

国庫 図録 図号	図 番 号	残存 状態	サイズ	形態		刃部形態		計測値				材質	観察事項	出土地/ 地区、ブロット、 トレンチ、層序
				平面	側面	正面	側面	長さ	幅	厚さ	重量			
第 100 図・ 50 図	1	完形	小型	A. 撥形	a. 厚手	両刃	ア、両刃 (方潰れ)	9.0	6.15	3.0	310	斑レイシ	器面調整：側面、基端/磨りの痕跡 窪み：側面/柄の装着用、浅い窪み 加工痕：研磨、表裏面 石斧からの転用品	三の曲輪(11次) キ-56
	2	完形	小型	A. 撥形	a. 厚手	両刃	ア、両刃 (方潰れ)	7.8	4.3	2.9	172	輝緑石	器面調整：側面有り、基端は破損、 又は磨りなど未加工 研磨痕：有り、表裏面	一の曲輪、更 (8次)キ-70
	3	破損	-	A. 撥形	b. 中間	-	刃部破損	現存 5.1	3.9	2.1	58	斑レイシ	刃部欠損：基部のみ残存 形態：不明、おそらく楕形 研磨痕：有り、表裏面、側面	一の曲輪、更 (8次)ラ-71
	4	破損	-	A. 撥形	c. 薄手	両刃	イ、片刃	現存 6.8	6.5	1.5	123	砂質片岩	器面破損：全体の形態不明 研磨痕：有り、表裏面ののみ 刃部：刃面の曲線僅か、狭い	三の曲輪 (2次) キ-77 墓6
	5	完形	小型	B. 方柱形	c. 薄手	両刃	ウ、両刃	11.6	1.9	2.0	76.8	砂岩	基端：状態は自然産 加工痕：刃部のみ、基部/加工なし 研磨痕：有り、刃面両面に確認	一の曲輪、更 (8次)ラ-71

(2) 敲打器類

敲打器類は22点得られたが、集中的にはみられず一の曲輪東の6点が最も多い。形態は破損資料を省き楕円形、円形、長楕円形がみられた。サイズは完形のみ抽出し、長さで中型：7～9cm台、中型-大：10～13cm台が認められ、破損品では大型に成り得る資料も確認された。使用痕はa．敲きが主なもの、b．敲き+磨りの使用c．磨りのみで分類を行った。

第40表 敲打器類 形態分類

曲輪	遺物	敲石			敲き兼用磨石		回石		磨石		小計	合計
		卵球形	楕円形	俵形	楕円形	俵形	不定形	破損/不明				
一の曲輪東	表採			1	1	1	1	1			5	5
二の曲輪	皿a層								1	1		2
	石垣内赤土								1		1	
四の曲輪	表採	1	1						1		3	3
地区不明	—			1		1				1	3	3
合計		1	1	2	2	1	1	3	2	13	13	

a. 敲石

図6は縦長俵形で表面中央/側面/下面に敲打、特に表面は楕円状の敲打が認められる。図7～9は小型に属す。図7は片手で握れるサイズで、やや厚手を成し表面中央に敲打、裏面は平坦面をつくり稜線がみられる。多孔質で風化により鉱物の抜けた痕跡の可能性もある。図8は細身な楕円形で裏面が抉れ、側面はいびつで整わない。中央に2cm台の明瞭な敲打を有す。図9は厚手を呈し球状に近い。全面に敲打が確認できるが、細粒砂岩を用いており破損し易い。図10は重量があり敲打痕が表裏/両側面の中央に認められる。敲打は両面とも2.5cmと同一値を示し、両側面の敲打は小範囲である。くびれ平底土器と共伴出土した。

b. 敲き兼用磨石

図11,12は側面にノッチ状の窪みをもつ。図11は表裏面中央の敲打が顕著で深い。右側面に1.5cmの窪みが交互に確認できる。両側面の場合が多いが、本資料は片側のみである。

図12は欠損部が層理面から剥離、略方形の形態を有す。中央に敲打と周囲に明瞭な研磨が認められ、本資料も右側面に浅い窪みを施す。図13は石英脈の面から剥離、表裏面に研磨を残し、裏面が顕著で稜線も明瞭である。敲きの痕跡は側面、上面に僅かにみられる。

c. 磨石

図14は全体の三分の一程度残存、全面に滑沢な研磨が確認され使用頻度は高い。下面に若干の擦痕が認められる。図15は楕円形を呈し、研磨は表裏面にみられるが風化作用で鉱物の角閃石が部分的に抜け落ち多孔質な印象を呈す。図16,18は破片で一部が残存する。どちらも滑沢な研磨が認められ側面の一部にも研磨が及び、裏面は自然面が露呈する。

図17も破損し、残存部は僅かで研磨は1面のみ確認される。6次(11集)調査の報告に図版のみ掲載されたが、今回作図し改めて報告した。図19,20は厚みがあり原形は大型磨石の可能性がある。図19は風化が進み表面の研磨が薄く一枚剥がれた状態で研磨箇所が部分的に斑状に残る。図20も厚手、表裏/側面に滑沢な研磨が確認でき、閃緑岩のため鉱物が多く研磨が明瞭。裏面は自然面が一部露呈、僅かに黒く火を受けた痕跡が見られる。

(3) クガニ石

図21はクガニ石と想定され二分の一程度の残存と思われる。表裏面全体に研磨が及び、厚手を成し上端がやや窄む。下面は破損し形状は不明、平安山原A遺跡で8点出土した。

(4) 台石

図 22、23 は台石の範疇とした。22 は略球形で両面使用、断面は分銅形を呈す。表裏面中央に 2.0 ～ 2.5cm の範囲で深い敲打がみられる。敲石に比べ大きく重量があり、台石の範疇に含めた。図 23 は裏面に使用痕はなく平坦な自然面を呈す。台石の考え方として台石は敲石と対で敲く為の台に利用し敲石と同様、台石側の使用面にも敲打が残ると捉えた。

(5) 石皿

図 24 は使用面中央から破損、現存で 20cm を超し、残存部は全体の四分の一と考えられる。図上復元した場合、40cm 前後と想定、大型の石皿の可能性もある。使用痕は表面のみで中央に 15cm × 12cm の範囲で擦痕があり使用頻度は高い。厚みも重量もあるが、細粒砂岩で破損し易く消耗は早い。限られた調査区の為、確認できたものは 1 点のみである。

(6) 砥石

砥石は 8 点得られた。対象物、時期により 2 種類に分類可能である。1. 主に貝塚時代の石斧に刃を付ける為の砥石、2. グスク時代の刃物類を鍛造する際に使用する鍛冶関連の砥石、刃を研ぎ直す為の砥石等形態が異なる。貝塚時代の資料は置き砥石で使用痕は通常表裏面のみ、グスク期の砥石は多面使用型と懸垂型砥石がみられる。破損品を除き穿孔のある資料は 1 点である。この時期の砥石は浦添城跡、金工房跡や今帰仁城跡の調査などで確認される。図 25、26 は貝塚時代の砥石と考えられる。図 25 は使用痕が表裏全体に及ぶが、研磨は窪みの部分まで至らない。右側面に指掛け状の窪みが大小 2ヶ所、交互に認められる。

第 41 表 砥石形態分類

曲輪	層序	サイズ 形態 用途/機能	大型	サイズ不明	中型	小型			小計	合計
			不定形		板状	角柱形	短冊形	札状		
			厚手	破損	破損	手持ち	有孔/懸垂型	懸垂型		
一の曲輪東	一				1				1	1
二の曲輪	1b層					1			1	
	石垣外		1						1	2
三の曲輪	サ-55/表探	1							1	
	茶褐色土層							1	1	2
地区不明	表探(F杭付近)						1		1	1
合計			1	1	1	1	1	1	6	6

図 26 は自然礫を成形せず板状を呈す。置き砥石と考えられるが、裏面は安定しない。表/側面に研磨が認められ表面は僅かに反る。石英脈が表面中央を縦に通る研磨面に浅い凹凸が残る。又、下面には敲打痕もみられた。

図 27 ～ 31 はグスク期の砥石と考えられ、27 は破片で残存部は僅か、表/右側面に研磨が明瞭、裏面は破損し自然面を呈す。図 28 は小型の札状を呈す。上面に紐通しの孔が貫通していたと考えられる。研磨は滑沢で側面にも及ぶ。図 29 も上下破損、研磨は 4 面で中央に楕円状の浅い反りが確認できる。裏面に刃物痕と思われる擦痕が縦/横方向に認められる。図 30 はグスク期の遺跡から多く確認される砥石で角柱形を呈す。4 面に研磨が認められ中央が反り破損、欠けがみられる。図 31 は懸垂形砥石で短冊形を呈し、下部に向かい徐々に厚みを増す。上面中央に 6mm 程の孔が穿たれ貫通する。孔は両方向から穿ち、開け口は斜めに穿孔する。素材は沖縄島で産出しない流紋岩を用い研磨は表裏/両側面/下面にみられる。表裏面は中央が浅く反り、刃物痕が数か所認められる。

第42表 石器 観察一覧

計量単位：(cm/g)

施設 施設名	図 番 号	種別	存在 時期	サイズ	形態	観察面	計測値				石質	観察事項	出土層 / 地区、アソッド、 トレンチ、層序
							長さ	幅	厚さ	重量			
第189号 施設79	6	竪石	丸形	中型	透形	厚手	16.8	5.5	4.5	409	中粒砂岩 使用面：上部～中央 使用面：縦打/表面中央・下面	一の輪軸（裏）(8次) 2'121(7'12)	
	7	竪石	定形	小型	透形形	厚手	8.2	6.9	4.2	346	空白岩 使用面：縦打/表面 中央、内い/内み	一の輪軸（裏）(8次) 7'11	
	8	竪石	定形	小型	透形	厚手	7.6	5.1	3.2	154	中粒砂岩 使用面：縦打/表面 中央、内い/内み	一の輪軸（裏）(8次) 7'11	
	9	竪石	定形	小型	円形	厚手	7.8	7.2	5.0	303.5	細粒砂岩 使用面：縦打/表面 全面	四の輪軸（9次） 裏半分 表底	
第192号 施設81	11	竪石兼用 竪石	定形	小型	透形形	厚手	9.4	7.1	4.6	425	細粒砂岩 使用面：縦打/表面 中央、側面 研削/表面	三の輪軸、透形一四の輪軸 12次・11次 地区/層序不明	
	12	竪石兼用 竪石	縦型	中型	透形形	厚手	10.9	7	4.1	429	五粒砂岩 使用面：研削/表面 縦打/表面中央 中央/表面両端	一の輪軸（裏）(8次) 7'11	
	13	竪石兼用 竪石	縦型/平次	中型	透形形	厚手	11.8	6.3	6.6	518	中粒砂岩 使用面：縦打/表面、上面 研削/表面、側面	二の輪軸（5次） 8'101・101 表々	
	14	竪石	縦型	不明	不定形	厚手	5.1	6.2	6.2	313	閃緑岩 使用面：研削/表面、側面 縦削/下面、一部	四の輪軸（9次） 裏削/ロイ付付	
第193号 施設82	15	竪石	定形	中型	透形形	厚手/ 薄手	11.3	9.2	4.8	746	解石層間 石質白岩 使用面：研削/表面 側面	一の輪軸、裏広延（9次） 3'101 裏上	
	16	竪石	縦型	不明	不定形	不明	5.7	6.7	最大 1.5	306	中粒砂岩 使用面：研削/表面 側面/縦削、自然面露呈	二の輪軸（5次） 3'91・101（石室内赤土）	
	17	竪石	縦型	不明	不明	厚手	7.2	4.5	最大 4.5	415	中粒砂岩 使用面：残存面/ 全面研削	二の輪軸（6次） 3'94 裏々	
第194号 施設83	18	竪石	縦型	不明	不定形	厚手/ 薄手	7.9	5.4	2.1	90	正武岩 使用面：研削/表面、側面 断面、自然面露呈	一の輪軸（8次） 7'12	
	19	竪石	縦型/ 両分の一	中型	規状 不定形	厚手	8.5	7.0	8.9	605	中粒砂岩 使用面：研削/表面 側面の一部 縦打/一部側面	四の輪軸（4次） 3'100	
第195号 施設84	20	竪石	縦型	大型	不明	厚手	9.1	9.3	6.2	603	閃緑岩 使用面：研削/表面、側面 厚みの収縮/ 大型断面と側面	四の輪軸（11次）地区不明 裏削 8'1付付（底）	
	21	タマゴ石	縦型	大型	不明	厚手	13.7	5.6	6.0	1,000	中粒砂岩 使用面：研削/表面、側面 研削面/高い	一の輪軸（8次） 7'11	
第196号 施設85	22	石臼	定形	中型	輪軸形	厚手	16.5	16.3	7.7	1,222	細粒砂岩 使用面：縦打/表面 中央、右側面内	四の輪軸（9次） 裏削 裏半分	
	23	石臼	定形	大型	碄石形	厚手/ 不均等	13.3	15.4	8.3	2,100	細粒砂岩 使用面：縦打/表面中央/ 16cm幅露呈/ 縦打区	四の輪軸（2次） 8'141/層不明	
第197号 施設86	24	石臼	縦型	大型	不定形	厚手	23.3	19.7	12.7	8,790 (6,7kg)	細粒砂岩 使用面：表面、中央、内い 断面/自然面露呈	四の輪軸（4次） 地区不明 表削	
	25	竪石	定形	中型	不定形	厚手	12.3	4.2	4.7	736	中粒砂岩 使用面：研削/表面 窪み/右側面	三の輪軸（1次） 8'11 裏々	
	26	竪石	定形	大型	碄石 / 板状	厚手	21.6	9.1	5.1	1,868	中粒砂岩 使用面：研削/表面、右側面 断面の一部 縦打/下面の窪み	四の輪軸（11次）/ 2の調査地区 7'11 表削	
	27	竪石	縦型	不明	不定形	不明	4.7	2.7	1.8	26	高鉄岩 使用面：研削/表面、側面 断面/自然面露呈	二の輪軸（5次） 2'101 右側面	
第198号 施設87	28	竪石	縦型	小型	孔状	薄手	4.3	2.6	0.9	22	褐色片岩 使用面：研削/表面・側面 /上下端研削	三の輪軸（11次） 7'11 裏削色土層	
	29	竪石	縦型	不明	不定形	厚手	7.6	6	2.7	84	高鉄岩 使用面：研削/表面中央・ 縁部露呈/側面	一の輪軸（8次） 7'12	
	30	竪石	縦型	小型	角柱形	厚手	7.1	3.9	3.0	102	高鉄岩 使用面：研削/表面・側面 4面/上下端研削	二の輪軸（5次） 7'102 1.5	
第199号 施設87	32	石臼	定形	中型	碄石	厚手	8.3	7.3	7.6	630	細粒砂岩 加工層/打割面 側面/縁部が一段平ら	一の輪軸、最末6周（8次） 7'11	
	33	石臼	定形	大型	碄石/ 碄丸形	碄石	9.9	9.2	8.8	3,000	細粒砂岩 加工層/碄石に打割面 小範囲に平ら面	一の輪軸、最末6周（8次） 7'11	

(7) 石球

約8～9cm台の資料が2点得られた。図32は略球状を呈し、完形で側面に稜線が認められる。側面視は算盤玉に似た形状を成す。素材は砂岩で全面に細かい敲打が確認されるが、同様の形態の敲打器は類例がなく、稜線は加工痕か使用痕か不明。球状に近い形態は敲石 / 敲打器に用いるの前後の動作では機能的に使用しづらいと判断、石球の部類に含めた。

図33は大型の完形でほぼ球状を呈す。多面的に細かく面取りされ意図的に球状にした痕跡が窺える。首里城で同種の石器が認められ大小2類に分類、大型資料は8.5～9cmで石球（第3集/47集）や石弾（第120集/平成7）と報告例がある。當眞氏の分析では同サイズの資料を石弾（南島考古1994）と提唱している。又、糸満市真栄里の資料や糸数城、大城でも類似資料が出土している。当グスクで石弾 / 土弾 / 鉄弾が数点出土するが、関連史料や確実な事例がなく石球に分類した。〔軽石略記〕

軽石は長軸10cm大と3cm大の2点が出土した。軽石を用いた製品には漁網に伴う浮子（浮き）など紐掛けの刻みや人形 / 獣形の彫り / 加工穿孔を施した資料が多い。当グスクの軽石は製品として扱うには加工が曖昧な点と使用痕を明確に捉えられず記述のみに留めた。

〔資料①〕サイズ：縦10.4cm / 横8.7cm / 厚さ、最大値3.1cm / 重量73.6g / パミス。

出土地：二の曲輪 / 1次 / V-101 / V (0～5) / III e 層 / 台①3074

〔資料②〕サイズ：縦3.2cm / 横2.5cm / 厚さ1.7cm / 重量2g / パミス

出土地：三の曲輪 / 2次 / W-77 / 8層 / 黒褐色土 / 台68

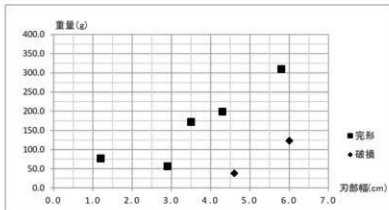
小結

グスク時代当時、北谷城周辺の環境は海に面した立地で、岩陰周辺には貝塚時代の遺跡も確認される。城郭内調査で66点の石器が得られ、特に石斧は今回の報告で5点、既に報告済みの1.6.7.13～16次で各1点、合計3点が報告されている。石斧は貝塚前4～5期相当の両刃石斧と、貝塚後2期相当の石斧と想定される偏平石斧 / 方柱状石斧も認められた。方柱状石斧には両刃と片刃の種類の両方がみられ当グスクでは両刃の石斧が出土した。

第99図にこれまでの調査（第6 / 7 / 13～16次）で出土した石斧のうち刃部が残存する資料を抽出し、重量と刃部幅を示した。刃部破損資料1点は除外、重量が300gを超える資料は1点のみ、100～300g未満は3点、100g未満が2点と、いずれも重量が軽い。刃部幅の値は、ばらつくが全て6cm以下の石斧となった。図が示すように刃部幅の狭小型で重量の軽い石斧のみ出土したことになる。弥生相当期の前半に石斧の多様化、後半から小型化、減少傾向など、本土、奄美諸島、沖縄においても共通して認知され北谷城でも同様のことが言える。形態は小型の偏平資料が僅かに多く、基部の厚手資料が2点含まれる。刃部形態分類では両刃タイプの石斧、片刃タイプの両者が出土している。

石斧と刃物類の砥石

砥石は大別すると石斧と刃物類用の2種類がみられる。又、石斧と刃物に使用される砥石では①サイズ、②形態、③石質の違い④使用面の数⑤用途⑥使用痕などが異なる。鉄器



第99図 石斧重量と刃部幅の相関

出土以前の石斧に刃を付ける砥石には大型、板状/不定形、石質は砂岩などが多く使われ、一面使用など特徴があり、置き砥石が多い。又、石斧以外に利器、貝製品、骨製品の研磨に用い⑥使用痕は判断し難く手触りで研磨痕を判断する。

一方、刃物類に使用される砥石は刀の刃を研ぐために使われる。砥石の素材も石斧を研ぐ砥石と異なり、刃物を研ぐ砥石は小型のものが多く。形態は角柱形/短冊形、石質は流紋岩、凝灰岩などが用いられる。使用面では多面使用が多く四面、又は五面、六面なども認められる。さらに用途の違いで手持ち砥石、懸垂型砥石と種類がある。使用痕については細かいシャープな刃物痕が何条も認められ容易に判断がつく。懸垂型砥石は刀を研ぎ直す為、腰に下げ携帯するが、中国では威信財としても捉えられている。勝連城跡(6集/1984)、今帰仁城跡(9集/1983・24集/2007)などでも携帯用の懸垂型砥石が出土する。

<石器素材>

第43表に石器の器種別に岩石組成を系統別に示した。火成岩系統の岩石は北谷城周辺、本島中部で産出されない為、石器以外の素材もある程度抽出し同定を行なった。第36表(集計表)に示した数は、今回報告の遺物のみ示し、第99図(グラフ)は過去に報告した石斧も比較に含め2点多く示し又、岩石組成表も同様に加えた。第43表では成り立ちから3系統に分類、火成岩系統6、堆積岩系統5、変成岩系統4の15種類認められた。系統別の比率では堆積岩系統が最も多く81.0%を占める。火成岩系統は11.2%、変成岩系統6.1%となった。縦軸の内訳では堆積岩系統の砂岩、とりわけ細粒砂岩が48.6%と多く要因は石皿が1点で8kgを越す為である。次いで中粒砂岩が24.8%で、その理由は多くの器種が使われた為と思われる。堆積岩類の岩石は北谷城周辺でも得られる事から不思議はない。火成岩系統の内訳では重量比で安山岩、玄武岩、閃緑岩の順が多い。安山岩、玄武岩は石材として得られ閃緑岩は2点が磨石に使われている。重量では多くないが個体数では流紋岩の4点は砥石に、斑レイ岩の3点は石斧に使われている。この6種類の火成岩系統の岩石は本島中部で産出されないにも関わらず北谷町内の遺跡でも頻繁に出土する事から北谷城にも遠方からの持ち込みで流入したものと考えられる。

第43表 器種別岩石相関(点数)

器種	系統											人工石	合計				
	火成岩						堆積岩			変成岩							
	安山岩	輝石角閃 安山岩	閃緑岩	玄武岩	流紋岩	斑レイ岩	粗粒砂岩	砂岩		結晶質 石灰岩	シルト質			輝緑岩	片状砂岩	砂質片岩	黒色片岩
石斧						3		1							2		7
砥石	1							2	3								6
置き兼用砥石								1	1				1				3
磨石			1	2	1		1	7				1					13
ケガシ石								1									1
石皿									2								2
石皿									1								1
砥石					4		1	1							1		7
石鏢								1									1
有孔石製品									1								1
石鏢									2								2
石板														1			1
石製品																	1
不明石製品																	1
石材	1				1			5	8	1	2		1		2		21
小計	2	1	2	2	4	3	2	19	18	1	2	2	2	2	4	2	68
合計			14						42				10			2	68

第 44 表 器種別岩石相関（重量）

器種	火成岩										堆積岩				変成岩				人工石	合計
	安山岩	輝石角閃 石安山岩		閃緑岩	玄武岩	流紋岩	斑レイ岩	礫質砂岩		結晶質 石灰岩	シルト岩	凝結岩	片状砂岩	砂質片岩	黒色片岩					
		砂岩	中粒砂岩					細粒砂岩												
石斧							567		77				172		180				996	
鎌石	346								1,309	1,433									3,088	
鑑き兼用磨石									549	425			429						1,403	
磨石		746	1,028	90				1,318	1,864				39						5,065	
クワ石									1,049										1,049	
台石										3,322									3,322	
石蓋										8,700									8,700	
紙石					413			730	1,968								22		2,633	
石鏝									12										12	
骨孔石製品										69									69	
石球										2,490									2,490	
石板																	9		9	
石製品																		45	45	
不明石製品																			379	
石材	1,320			1,978					5,114	6,050	174	1,338		90		1,961			17,025	
小計	1,666	746	1,028	1,168	413	567	2,048	11,433	22,689	174	1,338	211	519	180	1092	415		415	46,267	
合計			5,588						37,482					2,802			415		46,267	

第 45 表に岩石区分の分類を簡素化し、まとめた。系統別に岩石の成り立ちに違いがある。堆積岩系統の種類は北谷町周辺や沖縄島で得ることができる。砂岩などの岩石は石器に多用され、石英粒が多く含まれる個体は磨石に用いられた場合、使用頻度の高いものは研磨が滑沢に残る。変成岩の種類も沖縄島で産出されるものの一種で片状砂岩は石器に用いられることが多い。火成岩系統は沖縄島で産出されず、最も近い離島で久米島が挙げられるが、北谷町周辺で産出されず持ち込まれた可能性もある。

第 45 表 岩石の性質と分類

<鉱物> 主な鉱物：石英、黄鉄鉱、磁鉄鉱、滑石、方解石、石英など	
<火成岩>	
1 深成岩	花崗岩、閃緑岩、他
2 半深成岩	石英はん岩、ひん岩、他
3 火山岩	流紋岩、安山岩、他
4 火砕岩	細粒凝灰岩、シルト質凝灰岩
<堆積岩>	
1 砕屑性堆積岩	砂岩、細粒砂岩、泥岩、シルト岩、他
生物的・科学的堆積岩	
a. 炭酸塩岩	石灰岩、苦灰岩
b. 珪酸が主成分	チャート
c. 金属硫化物が主成分	マンガンジュールなど
d. 炭素が主成分	石炭
<変成岩>	
1 接触変成岩	緑色岩、珪灰岩
広域変成岩	
a. 堆積岩起源	粘板岩、石英片岩、他
b. 火成岩起源	緑色千枚岩、輝緑岩、他
3 磁砕変成岩	磁砕輝岩、他



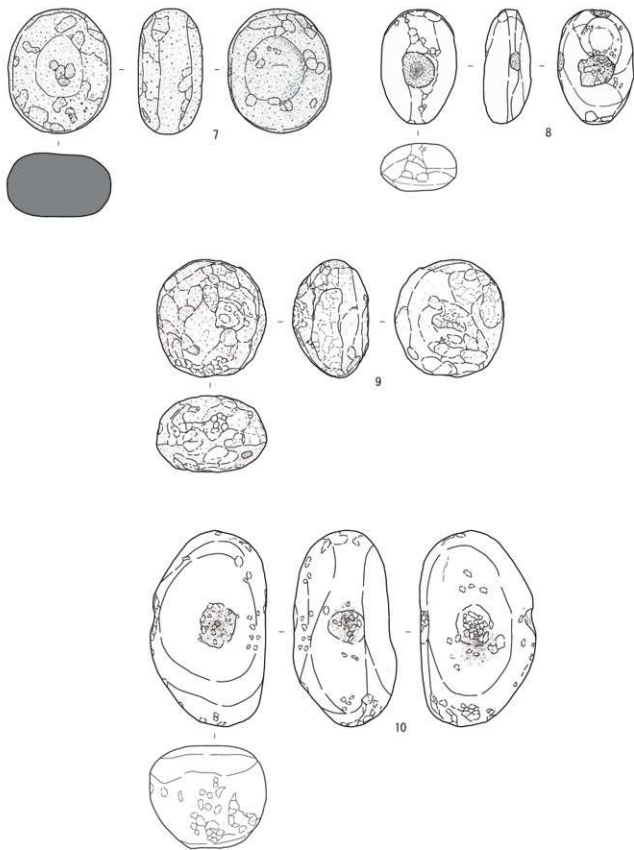
第 100 图 石器 1

0 10cm
(40%缩小)



图版 79 石器 1



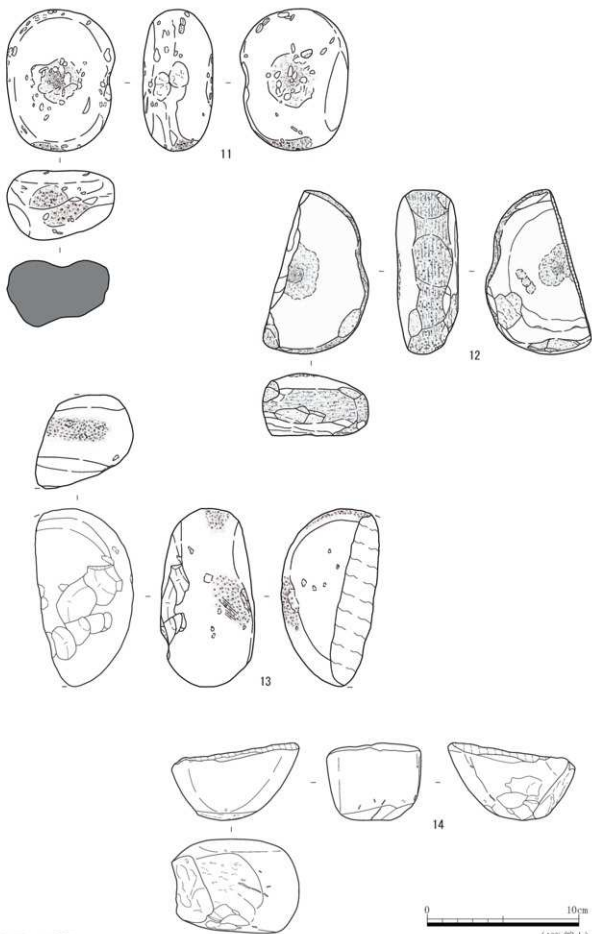


0 10cm
(40倍小)

第101圖 石器2



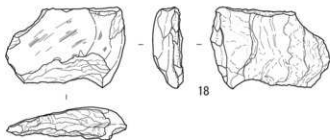
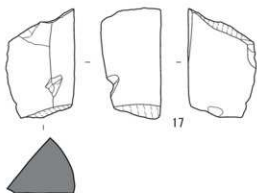
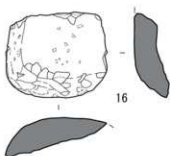
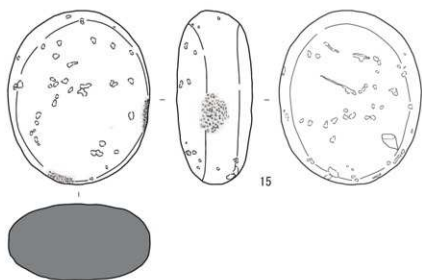
图版 80 石器 2



第 102 図 石器 3

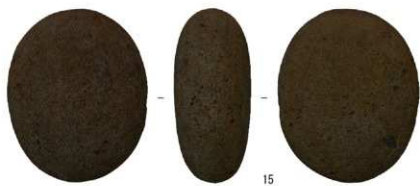


图版 81 石器 3



第103圖 石器4





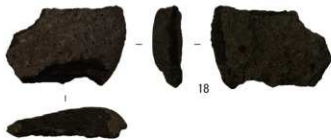
15



16



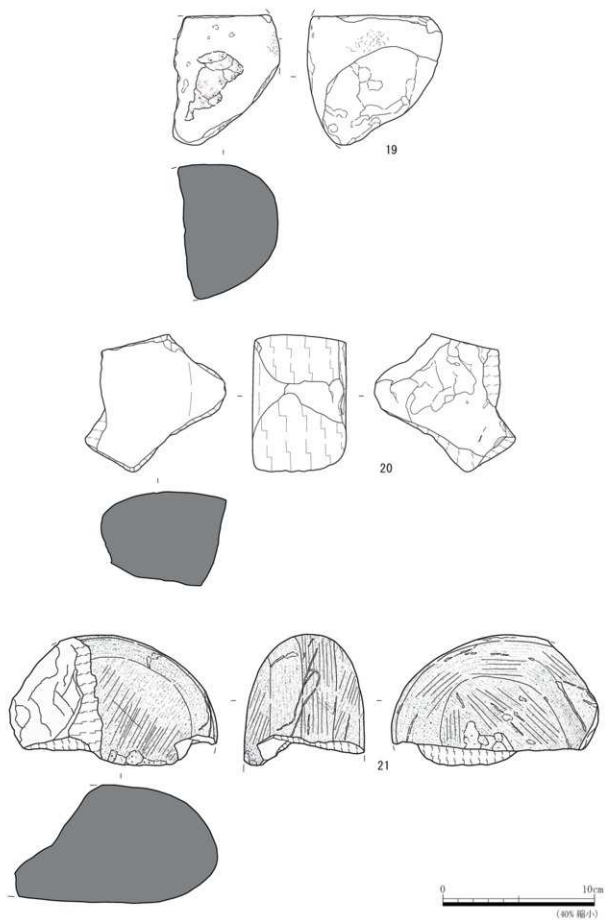
17



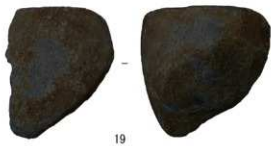
18



图版 82 石器 4



第104圖 石器5



19



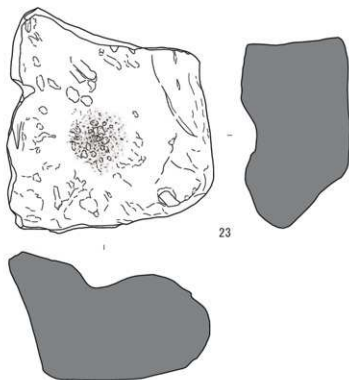
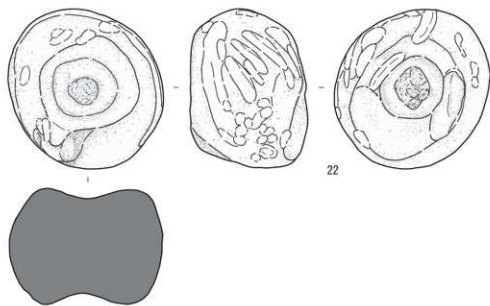
20



21



图版 83 石器 5



第 105 図 石器 6





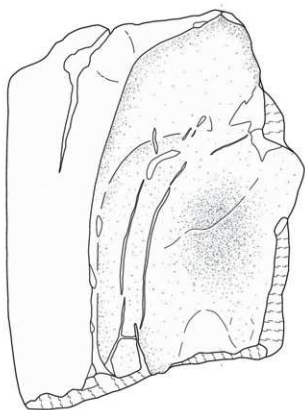
22



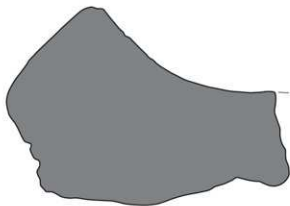
23



图版 84 石器 6



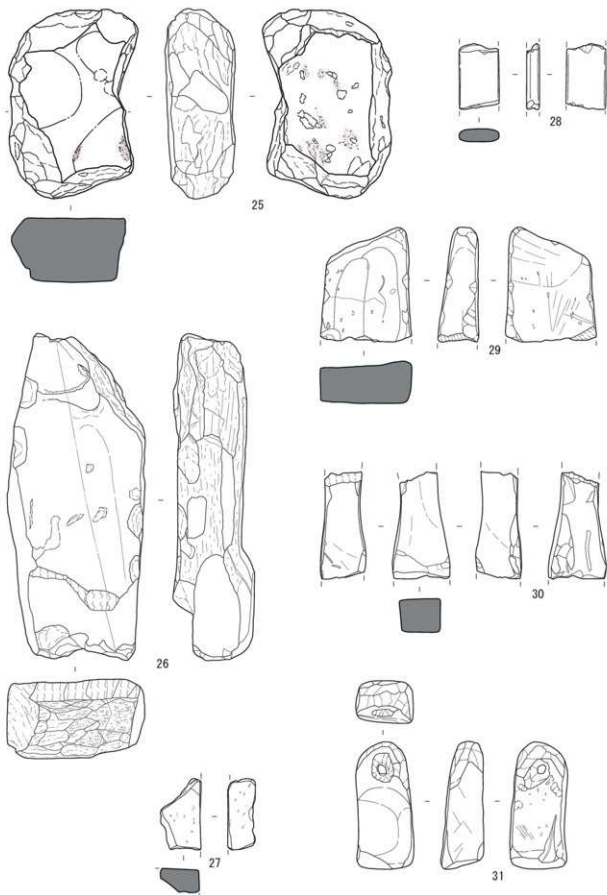
24



第106図 石器7



图版 85 石器 7



第 107 図 石器 8



25

28



26



29



30



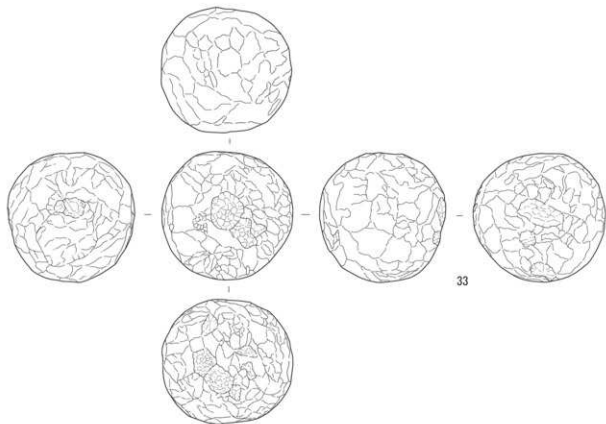
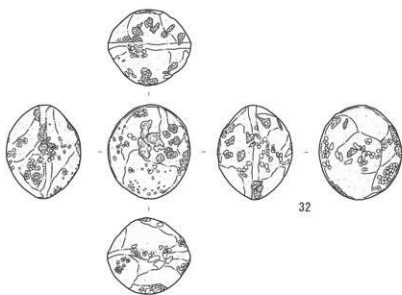
27



31

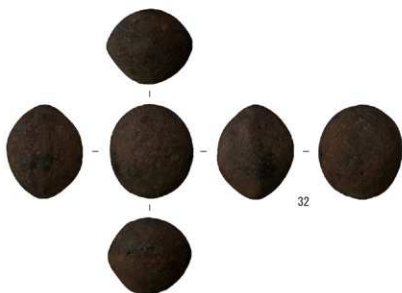


图版 86 石器 8

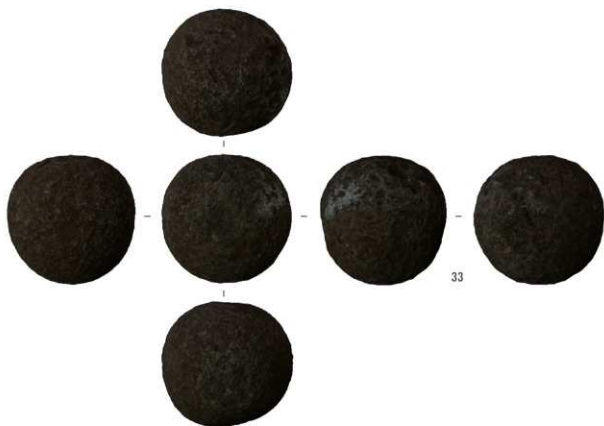


0 10cm
(30% 縮小)

第 108 図 石器 9



32



33



図版 87 石器 9

20 石製品

石器の項目で示したものの以外の石製品を掲載した。尚、この項目に掲げた製品は前項目石器の項で、集計及び器種別岩石組成表ともに纏めた。

1. 石錘

石素材の製品が1点得られた。一般的に縄文時代以後、漁労に関する資料は石錘の他、骨製釣り針、土錘、貝錘などがある。石錘には偏平な円礫の上下端部を打ち欠いた礫石錘、切れ目を施した切目石錘、礫に縦溝、又は縦溝に横溝を加え十字に溝を施す有溝石錘など種類がある。図1は完形で小型のアーモンド形を呈す。縦方向に表裏面刻みによる溝が一周する。彫られた線刻は断面がV字状の溝を呈し表から裏面に巡らせるが、上端部で溝は若干のズレが生じている。類例資料に今帰仁城跡(第9集/1983・第24集/2007)の石錘があり、こちらは縦・横溝の十字に溝を有す資料である。石錘の他、当グスクから土錘も2点出土した。

2. 有孔石製品

図2は丸みのある形状で残存部から判断し釣鐘形を呈す。上面の端に側面から貫通した孔は紐通しのもと考えられる。懸垂形砥石とも想定したが偏平/角型でない事、腰に下げる場合、丸みがつくと歩く動作の都度に揺れ安定せず用途として懸垂形の砥石に不向きと判断した。又、民俗事例にみられる小規模な追い込み漁「アギヤー漁」の漁労具にスルチカー石があるが、一般的なサイズと異なり小さく別形態の石錘の可能性もある。

3. 石板

図3は黒色片岩を用い薄く長方形を呈す。石板の一部と考えられる。明治時代、庶民が漢字を練習する際、紙の代用として使用していた。平安山原A遺跡でも出土している。

4. 砥石

図4は半欠し原形の厚さより中央部が特に使用頻度が激しく薄くすり減る。断面を観察すると荒砥と仕上げ砥の二層で圧着している。戦前、戦後に北谷グスク城内において畑など耕作を行っていた時期があり、その当時の資料と考えられる。

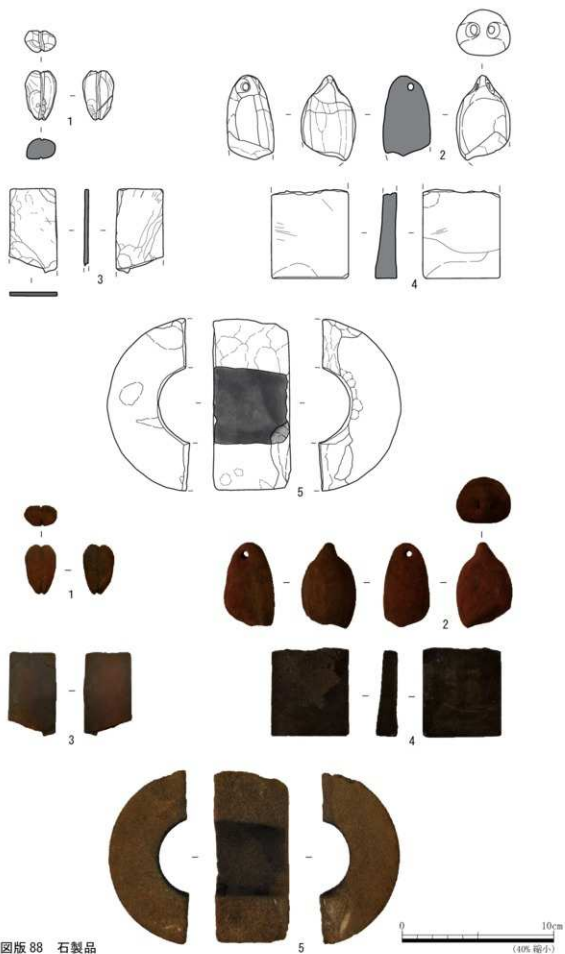
5. 不明石製品

図5は輪状を呈し、石質同定では人工石と結果が出ている。中心の穿孔内面には黒く変色した摩擦痕らしきものが確認される。米軍関連の製品の可能性がある。人造砥石の製造、使用は19世紀にアメリカで開始、均質で入手も容易なことから現在広く流通する。

第46表 石製品 観察一覧

調査単位: (cm, g)

第19988号	図番	種別	残存状態	サイズ	形態	側面観	計測値				石質	観察事項	出土地 地区/グリッド/ トレンチ/層序
							長さ	幅	厚さ	重量			
第19988号	1	石錘	完形	小型	船楫円形	楕円形	3.2	2.0	1.4	12	砂岩	加工痕: 縦刻/縦方向/表裏面/刻み一周 厚み: 均一	四の曲輪(4次) 地区、グリッド、層不明
	2	有孔石製品	破損	不明	釣鐘型/鈴形	厚手	5.6	3.55	3.1	68.6	細粒砂岩	加工痕: 上端、穿孔 穿孔径: 0.5 cm × 0.5 cm	三の曲輪(11次) E-56 黄褐色土層
	3	石板	破損	小型	札状	薄手	5.5	3.1	0.3	9.6	黒色片岩	加工痕: 側面/擦切り痕 表面/磨理面から剥離/自然面	一の曲輪東丘段(9次) G-83 4層
	4	砥石	破損	一	板状	薄手	5.9	5.1	1.4	45	人工石	形状: 板状 使用痕: 中央部/摩擦有	一の曲輪(9次) F-70
	5	不明石製品	破損	不明	円盤形/輪状	厚手	11.4	5.5	5.2	370	人工石	摩擦痕: 内側面/全体 摩擦痕で黒く変色	四の曲輪(11次) 地区/層序不明



第109図・図版88 石製品

21 球状製品

素材によって土弾、石弾などと称されるもので、形状が一樣に球状を呈するため、本報告においては球状製品としてまとめた。

一の曲輪で2点、二の曲輪で2点、三の曲輪北西で1点、四の曲輪で8点、計13点出土しており、うち7点を図示した。

素材としては土製のほか、石製のものについては砂岩、サンゴ塊、砂粒塊等を利用したものが確認されており、出土量としては砂岩製のものが多く、大きさは2cm台、3cm台、4cm台のものがみられ、出土量としては2cm台のものが目立つ。

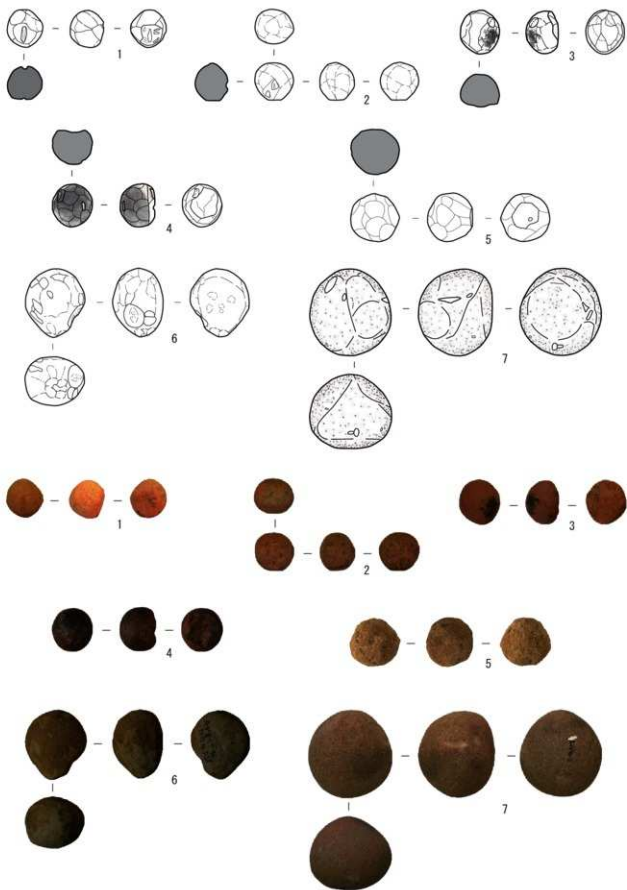
用途としては、火矢（ヒヤ）と呼称される三眼鏡（あるいは二眼鏡）の弾丸として使用されたものと想定されている。北谷城の所在する丘陵東部の南側麓で実施された調査（第13～16次調査）でも類例とみられる石弾のほか、青銅製の球状製品が出土している。そのほか、北谷町内の遺跡では平安山原B・C遺跡（2016）の調査でも石弾の出土が確認されている。以下、観察表で個々の遺物の詳細を記載する。

第47表 球状製品 出土量

地区	グリッド	層序	石弾				合計	
			土弾	砂岩	サンゴ塊	砂粒塊		不明
一の曲輪	ネ-70	不明				1	1	
	ム-71	不明			1		1	
二の曲輪	0-94, 95	1 b		1		1	2	
三の曲輪北西	ラ-43	不明	1				1	
四の曲輪	ノ-55	1 b	1				1	
	ア-56	不明		1			1	
	ア-59	不明		1			1	
	サ-56	不明		1			1	
	サ-57	不明			1		1	
	テ-56	不明		1			1	
	テ-57	不明			1		1	
	不明	不明		1			1	
合計			3	5	2	1	2	13

第48表 球状製品 観察一覧

第110図・図版89	図番号	種類	素材	計測値				備考	出土地
				長軸	短軸	厚さ	重量		
第110図・図版89	1	土弾	土	2.0	1.9	1.8	6.0	土を丸め焼き締めたもの。完形とみられる。表面に溝状の痕跡が認められる。表面の調整は全体的に丁寧であるが、一部平坦になる面があり、その部分についてはやや種な調整を施す。	四の曲輪 ノ-55 1 b
	2		土	2.1	2.0	1.9	7.0	土を丸め焼き締めたもの。完形の製品で、ややいびつな球状を呈する。表面の調整は丁寧で、刺突のような痕跡が2ヶ所認められるほか、指痕とみられる痕跡がある。	三の曲輪北西 ラ-43 不明
	3		土	2.3	2.1	1.3	8.0	土を丸め焼き締めたもの。一部欠損する。表面の一部に煤のようなものが付着し、黒化している。表面は丁寧に整形され、平滑である。	四の曲輪 不明
	4	石弾	砂粒塊	2.3	2.1	1.8	9.2	欠損する。表面は火を受けたのか、大部分が黒化している。表面は平滑で、ほぼ球状を呈する。	一の曲輪 ム-71 不明
	5		サンゴ塊	2.6	2.6	2.4	10.4	完形の製品で、ややいびつであるが球状を呈する。	四の曲輪 テ-57 不明
	6		砂岩	3.6	3.1	2.7	30.6	一部欠けたような痕跡がみられるが、ほぼ完形の製品とみられる。表面は丁寧に研磨される。形状はいびつな楕円状を呈する。	四の曲輪 テ-56 不明
	7		砂岩	4.6	4.3	4.0	93.0	完形とみられる製品で、ややいびつな球状を呈する。表面は丁寧に研磨を施す。	二の曲輪 0-94・95 1 b



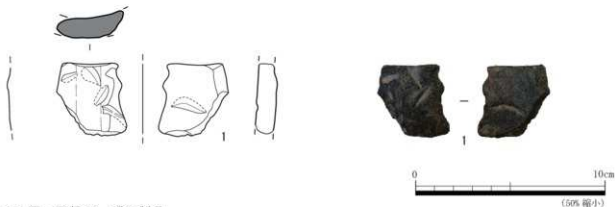
第110図・図版89 球状製品

22 滑石製品

滑石製品は第111図1に記載した1点が出土した。滑石製石鍋の胴部の破片資料とみられ、厚さは最大1cm、胴径は推定14.1cm、重量は25gで、色調は灰色を呈する。三の曲輪北西で、ラ-43グリッド西トレンチ(24cm)から出土。外面には幅広の調整痕が残るほか、内外面、破断面に二次加工の痕跡とみられるノミ状工具による抉り痕がみられる。

近隣では、グスクの南側丘陵麓で実施した第13～16次調査の報告書において、製品の可能性がある剥片資料が1点報告されている。

滑石の北谷町内及び県内の出土状況については、『平安山原A遺跡』(2018年)で詳細に述べられているため、そちらを参照されたい。



第111図・図版90 滑石製品

23 ガラス製品

ガラス製の玉とみられる製品が一の曲輪で1点、三の曲輪北西で4点、四の曲輪で2点、計7点が出土しており、うち6点を図示した。材質はすべて青みを帯びたガラスで、形状から丸玉、勾玉、管玉に分類される。以下、個々の詳細について述べる。

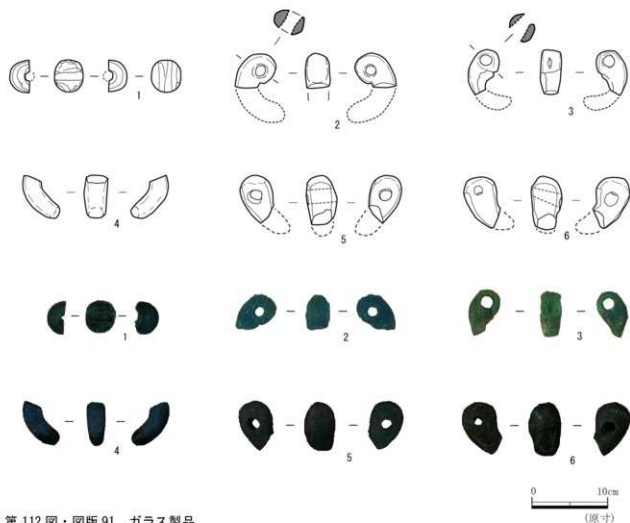
第49表 ガラス製品 出土量

地区	グリッド 番号		丸玉	勾玉	管玉	合計
	グリッド	番号				
一の曲輪	ム-73	不明	1			1
三の曲輪 北西	ラ-42	不明		1		1
	ラ-44	II a		1		1
	ム-43	I a			1	1
		I a		1		1
四の曲輪	N-55	I b		2		2
合計			1	5	1	7

第 50 表 ガラス製品観察一覧

(図版単位) cm, g

第 112 図・図版 91	図番号	器種	色調	計測値					備考	出土地
				縦	横	厚さ	孔径	重量		
	1	玉	青	1.0	1.0 (推定)	0.8	0.2 (推定)	0.4	丸玉で半分を欠損するが、断面は平滑である。表面には巻き上げ製作のためとみられる沈線が走っている。	一の曲輪 ム-73 不明
	2	勾玉	淡青色	1.8 (推定)	1.4 (推定)	0.7	0.2	0.6	下部部を欠損する。表面はあばた状で、孔はきれいな円形を呈する。	四の曲輪 N'-55 I b
	3	勾玉	淡青緑色	1.6 (推定)	1.2 (推定)	0.6	0.3	0.5	下部部を欠損する。表面はやや風化がみられる。	四の曲輪 N'-55 I b
	4	勾玉	青 (残存部)	1.1	1.0 (推定)	0.6	—	0.7	上部部を欠損する。表面には成形に伴うとみられる沈線が走る。	三の曲輪北西 ラ-44 南西地区 II a
	5	勾玉	淡青色	1.6 (推定)	1.4 (推定)	0.8	0.3	1.4	下部部を欠損する。表面は風化がみられる。孔はきれいな円形を呈する。	三の曲輪北西 ラ-42 南イナ 不明
	6	勾玉	淡青緑色	1.4 (推定)	1.3 (推定)	0.8	0.2 1 0.3	1.6	下先端部を欠損する。表面は風化がみられる。孔はきれいな円形を呈する。	三の曲輪北西 ラ-43 南イナ I a

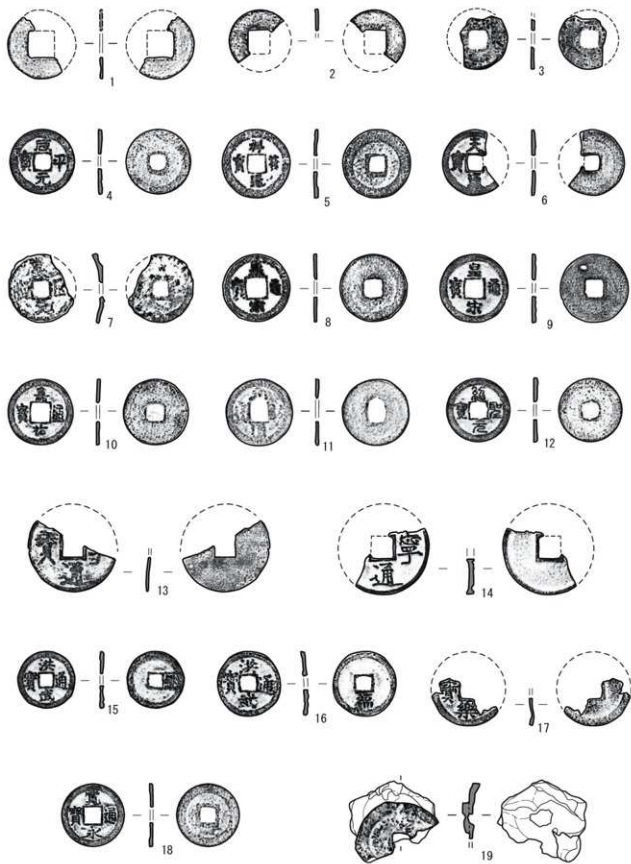


第 112 図・図版 91 ガラス製品

第52表 銭貨 観察一覧

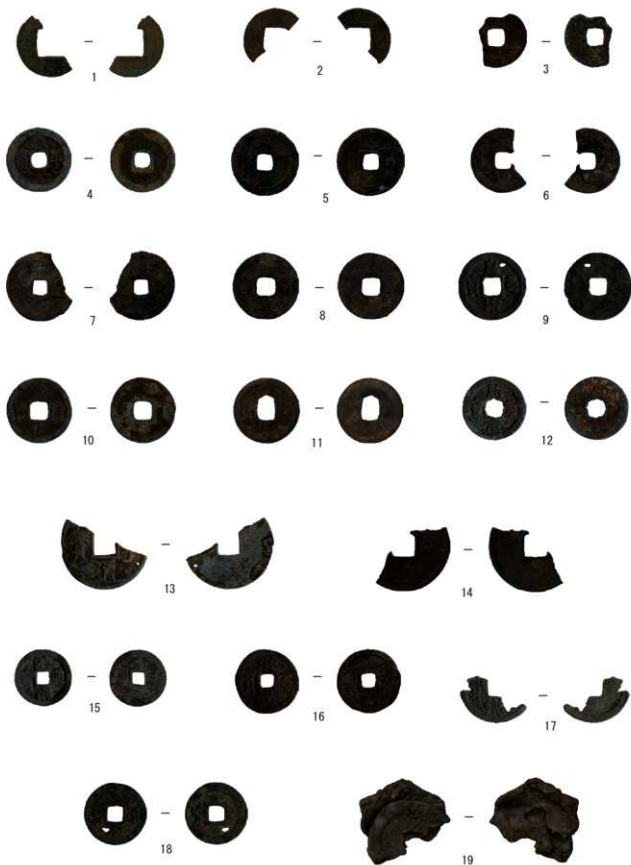
(複製単位: cm, g)

国 図版	図 番号	銭貨名 銭文	背文字	初鋳造	残存	計測値					字体	備考	出土地		
						外径	内径	縁幅	縁厚	重量					
第 113 図 ・ 図版 92	1	五銖銭	不明	BC18	南漢	銭	2.5 (推定)	1.0 (推定)	0.1	0.1	1.1	—	無文銭である。全体的に縁の付着により緑青色を呈するが、縁は明確である。孔が大きい。	三の曲輪北西 ラ-44 南江ナ I a	
	2	五銖銭?	不明	BC18	南漢	銭	2.4 (推定)	—	—	0.1	1.2	—	無文銭である。破損品であるが、縁の付着等はなく、良好な状態である。孔が大きい。	三の曲輪北西 ナ-43 北江ナ I a	
	3	開元通宝	不明	621	唐	銭	2.3 (推定)	—	—	0.1	1.6	隷書	縁と銭文は不明瞭である。	四の曲輪 N-55 不明	
	4	咸平元宝	無	998	北宋	完	2.5	0.6	0.3	0.2	2.7	真書	表面全体に縁の付着がみられ、緑白色を呈するが、縁と銭文は明確である。	二の曲輪 S-95 I b	
	5	祥符通宝	無	1069	北宋	完	2.6	0.6	0.3	0.2	4.5	真書	縁、銭文は明確である。	三の曲輪北西 ム-43 南江ナ I a	
	6	天禧通宝	無	1017	北宋	銭	2.5	0.6	0.2	0.2	2.1	真書	縁と銭文は明確であるが、文字は一部やや潰れている。	四の曲輪 サ-56 不明	
	7	天聖元宝	無	1023	北宋	銭	2.5	0.6	0.2	0.2	2.7	真書	縁は明確だが、表面が全体的に凸凹したような状態であり、銭文は今や不明瞭である。	三の曲輪北西 ラ-44 南江ナ I a	
	8	皇宋通宝	無	1038	北宋	完	2.6	0.6	0.3	0.1	3.6	不明	縁、銭文は明確だが、文字は潰れていて書体は断定できない。	三の曲輪北西 ウ-43 南江ナ I a	
	9	皇宋通宝	無	1038	北宋	完	2.6	0.6	0.3	0.1	3.7	真書	縁と銭文は明確であるが、文字は今や潰れる、自然に開いたものとみられる径0.2cmほどの孔が認められる。	出土地不明	
	10	嘉祐通宝	無	1056	北宋	完	2.5	0.7	0.2	0.1	3.3	真書	表面全体に縁の付着がみられるが、縁と銭文は明確である。	二の曲輪 R-95 I b	
	11	元祐通宝?	無	1093	北宋	完	2.5	0.9	0.3	0.1	3.1	行書	完整を呈するが、縁と銭文は不明瞭である。	出土地不明	
	12	順聖元宝	無	1094	北宋	完	2.4	0.7	0.2	0.1	3.7	篆書	表面に縁の付着がみられるが、縁と銭文は明確である。孔の四辺に抉りを入れて加工を施している。	二の曲輪 R-94 I b	
	13	崇寧通宝 ・五十銭	無	1103	北宋	銭	3.3 (推定)	0.8	0.1	0.1	3.1	—	破損品であるが、縁と銭文は明確である。表面は縁の付着により緑白色を呈する。人工か自然によるものか不明であるが、径0.1cmほどの孔が認められる。	四の曲輪 V-60 I b	
	14	崇寧通宝 ・五十銭	無	1103	北宋	銭	3.5 (推定)	0.9	0.1	0.3	4.2	—	破損品だが、縁と銭文は明確であり、状態は良い。銭厚は厚めである。	一の曲輪 ホ-71 不明	
	15	洪武通宝	有	1368	明	完	2.2	0.4	0.2	0.2	3.0	—	縁と銭文は明確であるが、縁の付着により一部凹凹しにくい。背面に「一銭」の文字が確認できる。	二の曲輪 P・Q-96 I a	
	16	洪武通宝	有	1368	明	完	2.4	0.6	0.2	0.2	3.9	—	完整だが、変形している。縁と銭文は明確である。背下に「福」とみられる文字が認められる。	一の曲輪 ム-72 不明	
	17	永樂通宝	不明	1408	明	銭	2.8 (推定)	—	—	0.2	0.1	1.1	—	銭文は明確であるが、縁は縁による腐食のためやや不明瞭である。非常に薄手である。	四の曲輪 テ-56 不明
	18	寛永通宝 (新寛永)	無	1697	江戸 (日本)	完	2.4	0.6	0.2	0.1	2.8	—	縁、銭文は明確であるが、表面の全体的に縁の付着が認められる。自然に開いたものとみられる径0.2cmほどの孔が確認できる。	四の曲輪 サ-56 不明	
	19	不明	不明	不明	不明	銭	—	—	—	上: 0.2 下: 0.15	12.0	不明	大銭が2枚重なりあって重なった状態である。	三の曲輪北西 ラ-43 南江ナ I a	



0 2cm
(70%縮小)

第113圖 錢貨



0 2cm
(70%縮小)

圖版 92 錢貨

25 鉄製品

一の曲輪で2点、二の曲輪で29点、三の曲輪で16点、三の曲輪北西で25点、四の曲輪で59点、東丘陵で9点、出土地不明が4点、計144点出土しており、うち14点を図示した。

刃物としては刀子、武具としては鉄鏃、実用品としては鉄鍋、天秤、鉄製農具とみられる鉾状製品、ヘラなどが出土しており、用途不明の製品については形状等で分類した。天秤とみられる製品や、ヘラについては近代に持ち込まれたものと考えられる。

最も出土が多いのは鉄釘で、特に四の曲輪の城門付近でまとまった出土がみられる。

また、製品ではないが、製鉄に関わる遺物として鉄滓が2点検出されたため、ここで併せて記述する。

集計表については鉄製品・鉄滓・銅製品をまとめて作成した。第53表に記載する。

・刃物

<刀子>破損した資料も含めて8点出土しており、第114図1の1点を図示した。全形のサイズが推測される資料としては、10cm前後のものが多くみられる。

図示したのは、ほぼ完形を呈する製品である。上原²¹は琉球列島で出土した刀子を形状からⅠ類(ナイフ形)とⅡ類(フック状)の2種類に大別しており、今回図示したものについては、刃部と茎の境界部分の上下に区(まち)を形成することから、Ⅰ-D類に分類されるものと思われる。

・武器

<鉄鏃>図2～7に6点図示した。形状としては、平頭式・莖頭式²²とみられるもののほか、図7のように頭部が丸みを帯びた形状のものが出土している。出土量はそれほど多くなく、グスク全城を調査できてはいないが、グスクのある丘陵端部にあたる三の曲輪北西地区でややまとまって出土する様子がみられる。

・実用品

<鉄釘>総数で102点の出土が確認されており、鉄製品の中では出土の大半を占める。しかし、錆による風化、破損が著しいものも多く、状態の良いものを中心として図8～13の6点を図示した。断面は四角形状を呈し、頭部は逆L字状を呈する角釘が多い。上記のようにグスク全城を調査できてはいないが、四の曲輪と三の曲輪の間に位置していたと想定される城門付近の調査でまとまった量の出土がみられることから、釘を使用した建造物等が存在した可能性がある。

<鉾状製品>図13に1点図示した。全体的に錆の付着や剥離が著しい状態であるが、原形のよくわかる資料である。勝連城跡²³の三の曲輪調査時に同様の形状の鉄製品が出土しており、ヘラやクワなど、加工・農具としての機能を持つものと推測される。

・鉄滓

製鉄に関連するものとして、鉄滓とみられる資料が2点検出されたため、本項にて記述する。なお鉄滓については、製品ではないため実測は行わず、写真のみの掲載とする。

鉄滓は2点とも二の曲輪P-100Ⅲa層からの出土である。図版93の14は長軸約5cm、短軸約4cm、重量132gで、図版93の15は長軸約3cm、短軸約2.5cm、重量30gである。

グスクの南側丘陵麓で実施した第13～16次調査でも、鉄滓の可能性のある資料が5点出土している。

註1：上原「琉球列島出土の刀子」『沖縄国際大学総合学術研究紀要17(1)』2013

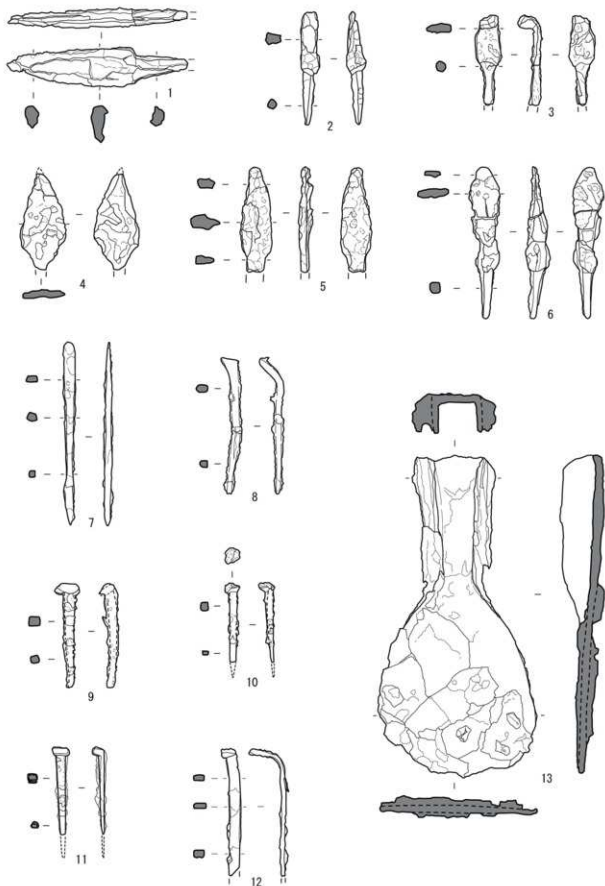
註2：上原・宮城「グスク時代出土の鉄鏝と骨鏝」『廣友会誌(3)』2007

註3：勝連町教育委員会『勝連域跡』1990

第53表 鉄製品 観察一覧

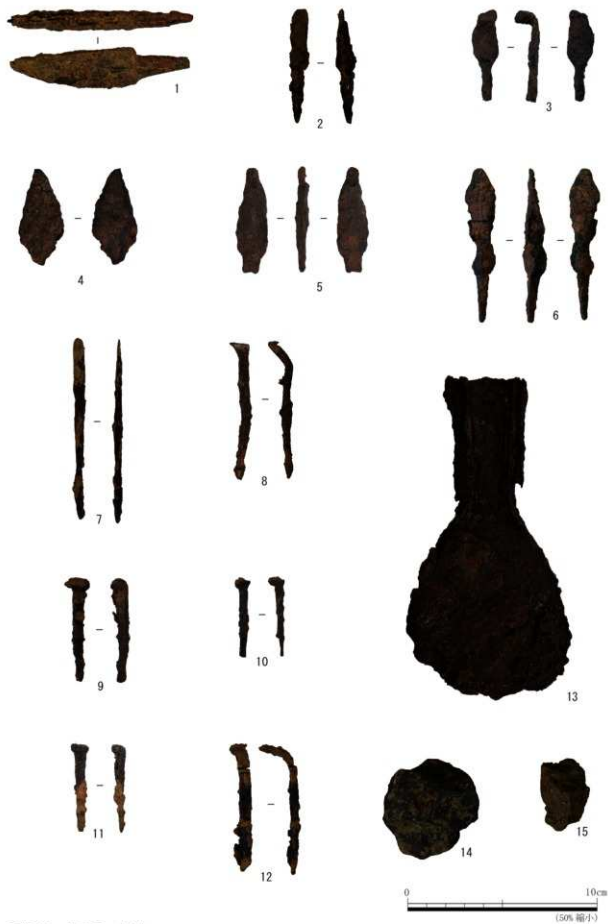
(調査単位：cm, g)

第144回 図版 93	国 番号	器種	計測値				備考	出土地
			縦	横	厚さ	重量		
	1	刀子	2.1	9.3	1.2 (最大)	22.7	茎の一部欠損。刃部の剥離が認められるが、ほぼ完形を呈する。	三の曲輪 ラ-43 不明
	2	鉄鏝	6.0	1.0	1.1	7.4	平頭式の鉄鏝。鏝身と茎は明確に区別され、長さは1対1になる。刃縁部の幅は鏝身の基部幅とほぼ同じ。腐食が著しいが、ほぼ完形を呈する。	三の曲輪北西 ラ-43 南13ヶ 不明
	3	鉄鏝	4.8	1.3 (刃部幅)	0.4～0.5	4.7	差頭式の鉄鏝とみられるが、刃部先端は折れ曲がり、基部先端も欠損する。	三の曲輪北西 ラ-43 I a
	4	鉄鏝	5.1	2.3	0.4	7.2	差頭式の鉄鏝。下端部は欠損し、刃部のみ残存する。裏面は剥離したような状態を呈する。	三の曲輪北西 ラ-43 I a
	5	鉄鏝	5.5	1.6	0.8	8.2	差頭式の鉄鏝。下端部は欠損する。	三の曲輪 F-77 III b
	6	鉄鏝	8.0	1.6 (刃部幅)	0.2～1.3	13.0	差頭式の鉄鏝で、完形を呈する。錆の付着もみられるが、原形がよく残っている。	三の曲輪北西 ラ-43 I a
	7	鉄鏝	9.7	0.7	0.6	7.0	完形を呈する。頭部は丸みを帯びて成形され、頭部に向かって徐々に薄くなる。	三の曲輪北西 ラ-43 北13ヶ 不明
	8	鉄釘	7.3	1.0	0.4	5.4	完形の角釘であるが、先端部付近でのく字状に折れ曲がっている。	三の曲輪北西 ラ-43 東13ヶ II a
	9	鉄釘	5.5	1.35	0.4～0.5	6.0	角釘で、先端部を欠損するが、原形がよく残る。頭部は逆L字状を呈する。	三の曲輪北西 ラ-43 東13ヶ II a
	10	鉄釘	4.2	0.8	0.2～0.5	2.0	角釘。先端部を欠損するが、原形はよく残る。頭部は逆L字状を呈する。	三の曲輪北西 ラ-44 南東13ヶ I a
	11	鉄釘	4.7	0.8	0.2～0.3	3.0	角釘で、先端部を欠損するが原形はよく残る。頭部は逆L字状を呈する。	三の曲輪北西 ラ-44 南東13ヶ I a
	12	鉄釘	6.7	1.0	0.2	3.9	角釘。下半部を欠損。頭部が逆L字状を呈し、身は扁平になる。	三の曲輪北西 ラ-43 西13ヶ 不明
	13	鏝状	17.0	8.5	0.4 (推定)	233.0	全体的に錆の付着と剥離が著しい。基部はソケット状を呈する。	三の曲輪北西 ラ-43 東13ヶ 不明



0 10cm
(50% 縮小)

第 114 図 鉄製品



図版 93 鉄製品・鉄滓

26 銅製品

一の曲輪で1点、二の曲輪で3点、三の曲輪北西で6点、四の曲輪で4点、東丘陵で1点、出土地不明が4点、計19点出土しており、うち10点を図示した。

種類としては銅鏡とみられるものや、実用品の銅釘のほか、武具などの装飾等に用いられたと推測される金具などが得られているが、用途不明の製品も多い。

以下、種類ごとに述べ、個々の遺物の詳細については観察表に記す。また、末尾に鉄製品、鉄滓、銅製品の集計表を併せて掲載する。

<銅鏡>第115図1に図示した1点の出土である。破片資料であり、台形状を呈する。原形は直径12cmほどと推測され、縁の部分は0.1cmほどの厚さの鏡面とみられる部分よりやや厚く0.3cmを呈する。断面の一部に連続して打割を加えたような痕跡が認められ、意図的に破断した可能性がある。今帰仁城²¹や勝連城²²では、銅鏡を裁断し二次的に加工した製品が出土しており、今回出土したのもそれらのような二次的な加工を意図したとも推測される。

<金具>武具等の金具と想定されるものとして図2～4まで3点を図示した。図2、3については表面や縁に装飾的な加工を施していることから、装飾金具と想定される。また、図2については山田グスクでよく似た形状の製品が出土しており、甲冑金具の座として掲載されている²³。

<銅釘>図5～7の3点図示した。図5、6は2cm程度の小型の釘で、図7はそれと比較して大型の釘である。また、図6については錆の付着により2本の釘が癒着している。

<用途不明製品>図8～10に3点図示した。加工や穿孔が施されるため、製品と推測されるが用途は不明である。それぞれの形状から円筒状、板状製品と呼称する。図8は円筒状製品としたもので、中央に穴があげられているが貫通せず、円筒状を呈する。図9、10は板状製品としたもので、どちらも薄い銅板を折り曲げ、加工する。図10については2ヶ所に穿孔を施す。

註1：『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』1991年 今帰仁村教育委員会

註2：『勝連城跡一四の曲輪北区発掘調査報告書一』2011年 うるま市教育委員会

註3：『山田グスク』2013年 恩納村教育委員会

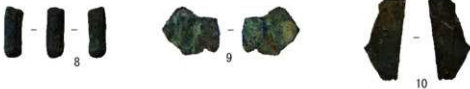
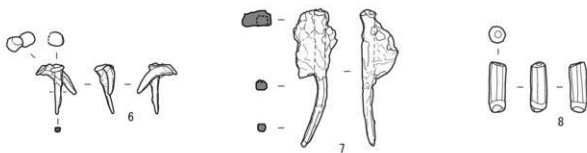
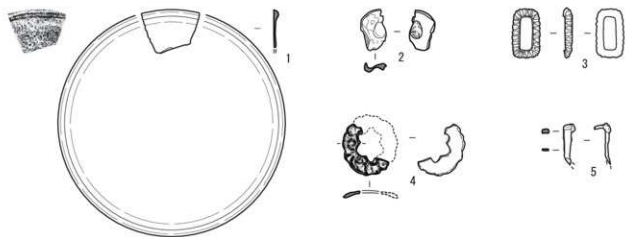
第54表 銅製品 観察一覧

[国産品] (mm)

第115 国・ 図版 94	図 番号	器種	計測値				備考	出土地
			縦	横	厚さ	重量		
	1	銅鏡	2.0	3.1	0.1 ∩ 0.3	4.5	銅鏡の破片かとみられる。鏡面とみられる部分は薄く、縁はやや厚くつくる。断面の一部に連続して打割を加えたような痕跡が認められる。	四の曲輪 キ-58 不明
	2	金具	2.1	1.4	0.1 ∩ 0.3	14.0	破損しており、原形は判然としない。縁の一部が折れ曲がり、中央部が円状にくぼんでいる。	東丘陵 ヨ-83 Ⅲ a?
	3	金具	2.6	1.5	0.5	2.3	四角形状を呈し、四隅はやや丸みを帯びる。中央は四角形の孔をあけており、縦1.75cm、横0.6cmを測る。形状は半月状に湾曲し、表面に刻み文様を施す。	三の曲輪北 西 ラ-43 I a
	4	金具	2.7	2.5	0.1 ∩ 0.2	3.5	半分ほど欠損するが、円状を呈するとみられる。湾曲した形状で、縁は波状に加工する。中央は孔があいており、こちらの縁も波状に加工され、縦1.85cm(推定)、横1.2cm(推定)を測る。	四の曲輪 N-60 I b
	5	銅釘	2.2	0.6	0.1 ∩ 0.2	1.0	先端部をやや欠損するが、原形がよく残る。頭部は逆L字状を呈する。	三の曲輪 北西 ラ-44 I a
	6	銅釘	2.7	2.2	—	4.0	小型の釘2本が錆で癒着した状態である。釘の頭部は丸状を呈する。	不明
	7	銅釘	7.3	2.3	—	21.0	大型の釘である。頭部付近には錆の塊が付着しており、形状は判然としない。	不明
	8	円筒状	2.7	1.0	0.2 ∩ 0.3	11.0	中央に穴があげられており、円筒状を呈する。	不明
	9	板状	2.7	3.0	0.5	5.0	銅板を折り曲げた痕跡のある製品である。	不明
	10	板状	4.3	2.2	0.1	3.0	薄い銅板を折り曲げ、二ヶ所に径0.1～0.2cmほどの穿孔を施す。	三の曲輪 北西 ラ-43 東イッテ

第55表 鉄製品・鉄滓・青銅製品 出土量

地区	グリッド	層序	鉄製品										青銅製品					合計			
			鉄 鏃	刀 子	鉄 釘	鉄 鍋	天 秤 ツ	鉾 状	ヘ ラ	環 状	板 状	塊 状	棒 状	鉄 滓	銅 釘	金 具	銅 鏡		円 筒 状	板 状	
一の曲輪	ホ-70	不明																1	1		
	ナ-73	不明		1															1		
	ム-71	不明		1															1		
二の曲輪	R-97・98	I b	1												1				2		
		Ⅱ a			1														1		
	R-99・100	Ⅱ a			1														1		
		I b			1														1		
	S-98	Ⅱ a			1														2		
	F-96	I a																	1		
	F-100	Ⅱ a													1				2		
	F・Q-96	I b			2														2		
		I b		1															1		
	U-100	Ⅱ a		1	1														2		
		不明																1	2		
	U-101	I b			1					1									2		
	K-92	I b			2														2		
	M-95	Ⅱ a		1															1		
	N-95	I b			1														1		
		Ⅱ a			1														1		
	O-96	Ⅱ e			1														1		
V-100	I b			1														1			
V-101	Ⅱ a			2														2			
W-99	I a					1												1			
W-100	Ⅱ a			1														1			
X-102	I b			1														1			
Z-102	不明									1								1			
不明	不明			1														1			
T-83	I a			7														7			
T-84	I b			1														1			
W-77	Ⅱ b		1								1	1						3			
不明	不明			4						1								5			
三の曲輪 北西	ラ-42	不明									3							1	4		
	ラ-43	I a		5	1	2									1			1	10		
		Ⅱ a				2													2		
		Ⅱ 2				1													1		
		不明			2	2		1											6		
	ラ-44	I a			2	1									2				5		
		Ⅱ a				1													1		
		Ⅱ 2				1													1		
		不明			1	1													2		
	四の曲輪	テ-56	不明			14							2							16	
テ-57		不明			1							1							2		
テ-56・57		不明			2														2		
エ-56		不明			3														3		
ア-56		不明			22								1					1	24		
ア-57		不明			2														2		
ア-58		不明			2														2		
サ-56		不明		1	2							1							4		
サ-57		不明			1														1		
キ-55		不明										1							1		
キ-56		不明									1								1		
キ-58		不明														1			1		
N'-60		I b													1				1		
不明	不明			1						1								2			
東丘陵	ヨ-82	Ⅱ a?			1														1		
	ヨ-83	Ⅱ a?		1	6										1			1	9		
	不明	不明			1														1		
不明	不明			1														1			
合計			12	8	102	1	1	1	1	1	3	13	1	1	2	4	5	1	1	8	165



第115図・図版94 銅製品

27 貝製品

二の曲輪で1点、三の曲輪で1点、三の曲輪北西で1点、四の曲輪で12点、東丘陵で1点、計16点出土しており、うち14点を図示した。

貝製品は装飾品と考えられるもの（貝符、貝玉）、実用品と考えられるもの（貝包丁、貝錘、貝匙）が出土しているほか、未製品とみられる遺物が1点確認されている。なお、貝匙とみられる製品については、小破片のため実測等は行っていない。以下、掲載した遺物について種類ごとに略述する。

・装飾品と考えられるもの

<貝符> 1点図示した。素材はイモガイ科のアンボンクロザメの体層部を板状に加工したもので、菱形に近い方形を呈する。表面には中心に隅丸方形の枠を作り、その中に目のような形の文様を浮文で施す。中央に穿孔するが、孔は貫通しない。この文様は木下（1996年）が「広田上層式」と定義した貝符に文様が類似する。しかし、広田上層式では文様が菱葉ぎに配される特徴があるが、本資料は一つの文様で完結している点で差異がみられるため、広田上層式の貝符を模して製作されたものと推測される。また、広田遺跡で出土した貝符については埋葬人骨に伴うという特徴があるが、北谷城で出土した貝符は包含層からの出土である点でも差異が認められる。これらの点を踏まえて、今回出土した貝符については南西諸島において出土がみられ、「広田タイプ」と呼称される、広田遺跡出土の貝符とは別系統の貝符であると推測される。

<貝玉> 4点図示した。素材にはすべてスイショウガイ科マガキガイを用いている。螺塔部を切り取り、平玉状にして上下あるいは片方面のみを研磨し、殻頂中央に穿孔する。図2については北谷町文化財調査報告書第12集（1992年）で報告済の遺物であるが、前述の報告書では遺物写真の掲載がなかったことに加え、実測図の修正を行ったことから、今回改めて掲載した。

・実用品と考えられるもの

<貝錘> 図6～8は有孔の貝錘であるが、素材となった貝種はすべて異なる。図6は巻貝のハナマルユキ（タカラガイ科）、図7は二枚貝のシラナミ（シャコガイ科）、図8は二枚貝のカワラガイ（ザルガイ科）を用いている。

<貝包丁> 図9～12は、形状から貝包丁と想定される資料である。素材として使用されている貝種は、巻貝のヤコウガイ（リュウテンサザエ科）、二枚貝のアコヤガイ（ウグイスガイ科）と推定され、ヤコウガイ製が1点、アコヤガイ製が4点確認されている。いずれも後背縁部や腹部を割り取り、腹縁部の表面ないし裏面に刃部を形成するためとみられる剥離痕が認められる。北谷町内の遺跡では、平安山原C遺跡（2016）で類例がみられる。

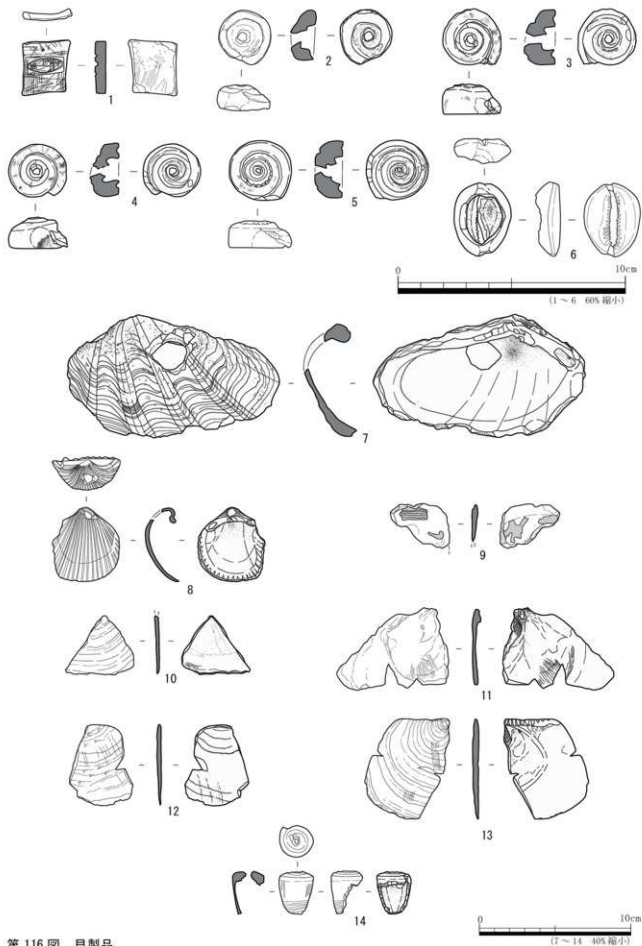
第56表 貝製品 出土量

地区	グリッド	層位	装飾品		実用品			その他	合計
			貝玉	貝符	貝錘	貝包丁?	貝匙?		
二の曲輪	S-98	I b			1				1
三の曲輪	C'-85	B a	1						1
三の曲輪北西	ク-44	不明	1						1
四の曲輪	N'-85	不明	2						2
		不明			1				1
	A'-56	不明				1	1		2
		不明				1			1
		不明							1
四の曲輪	キ-58	不明	1						1
	サ-55	I a			1			1	2
	サ-56	不明				1			1
	テ-56	不明				1			1
		不明				1			1
東丘陵	ヨ-83	III a?		1					1
合計			5	1	3	5	1	1	16

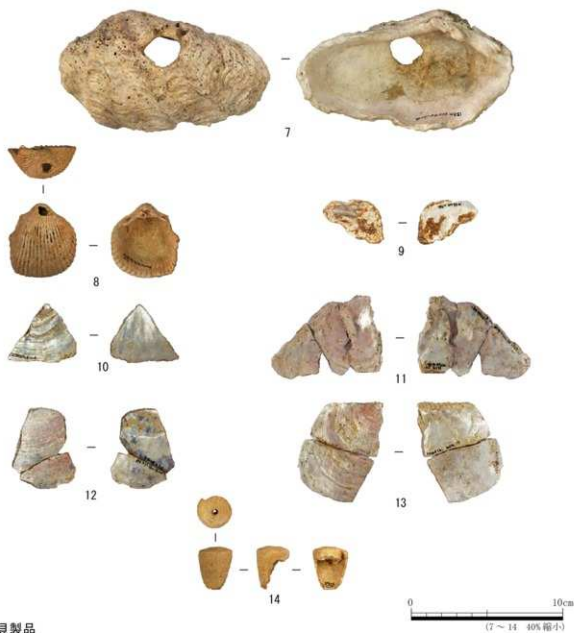
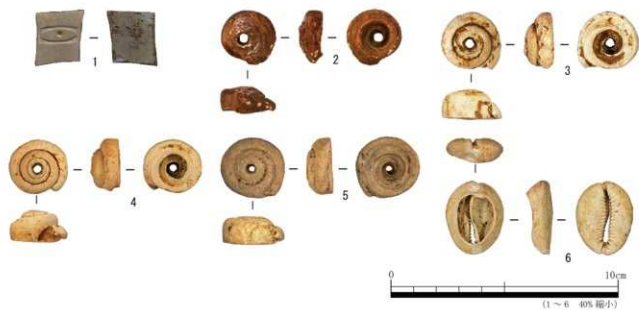
第57表 貝製品 観察一覧

(注: 単位は cm、g)

第116図・図版95	図番号	器種	種	計測値				備考	出土地
				縦	横	厚さ	重量		
	1	貝玉	ス(1)93'科 73'43'イ	2.4	2.3	1.2	5.5	殻頂中央に約0.3cmの穿孔を施す。色調は茶褐色を呈し、体層の一部に研磨痕が認められる。全体的に摩耗する。	三の曲輪 C'-85 II a
	2	貝玉	ス(1)93'科 73'43'イ	2.5	2.6	1.4	10.0	殻頂中央に約0.3cmの穿孔を施す。体層面の研磨が顕著である。	四の曲輪 N'-55 不明
	3	貝玉	ス(1)93'科 73'43'イ	2.3	2.6	1.4	9.0	殻頂中央に約0.2cmの穿孔を施す。表面に僅かに色が残る。体層面の研磨が顕著である。	四の曲輪 N'-55 不明
	4	貝玉	ス(1)93'科 73'43'イ	2.6	2.8	1.2	12.0	殻頂中央に約0.1cmの穿孔を施す。殻長部、体層面を研磨する。全体的に摩耗する。	四の曲輪 K'-58 不明
	5	貝符	イ5'科 73'43'イ?	2.5	2.2	0.5	2.2	完形。表面の一部に元来の貝の模様が残る。菱形に整形し、中心に文様を施す。中央に穿孔を施すが、貫通はしない。表裏側面とも丁寧に研磨を施し、研磨痕が明瞭である。	東側匠段 B-83 III a?
	6	貝鏃	93'93'科 73'43'イ	3.3	2.5	—	7.0	背面を削り取り、その縁を一部研磨する。腹縁部の欠損は使用痕と考えられる。	二の曲輪 5-95 I b
	7	貝鏃	シヤコガイ科 93'93'イ	8.2	14.0	—	228.0	殻頂部付近に裏側から打割し、2cm程の穿孔を施す。殻表面はあばたが多くみられ、風化による摩耗も著しい。	四の曲輪 I a
	8	貝鏃	4'43'科 73'43'イ	4.9	4.4	—	16.0	殻頂部付近に約0.5cmの穿孔を施す。腹縁の一部には後背からの打割痕が認められる。	四の曲輪 サ-55 I a
	9	貝包丁?	1,173'43'科 73'43'イ?	3.0	3.9	0.4	5.0	表面に剥離痕が認められる。	四の曲輪 サ-56 不明
	10	貝包丁?	93'43'科 73'43'イ?	3.9	4.5	0.3	4.5	腹縁部の裏面に押圧剥離を施し、刃部を形成する。	四の曲輪 ア-56 不明
	11	貝包丁?	93'43'科 73'43'イ?	5.5	7.4	0.6	12.8	表面に剥離痕が認められる。	四の曲輪 ア-56 不明
	12	貝包丁?	93'43'科 73'43'イ?	5.4	4.2	0.3	8.2	裏面に剥離痕が認められる。	四の曲輪 ア-57 不明
	13	貝包丁?	93'43'科 73'43'イ?	6.6	5.6	0.5	13.6	腹縁部の表裏面に押圧剥離を施し、刃部を形成する。	四の曲輪 テ-56 不明
	14	未製品	イ5'科 73'43'イ?	2.8	2.3	—	7.0	殻頂中央に約0.3cmの穿孔を施し、研磨する。体層部を半分ほど削り取る。	四の曲輪 サ-55 I a



第116図 貝製品



図版 95 貝製品

28 骨製品

骨製品は一の曲輪で4点、二の曲輪で1点、三の曲輪で5点、三の曲輪北西で2点、東丘陵で1点、計13点出土しており、うち11点を図示した。

骨製品は装飾品と考えられるもの(骨玉)、実用品と考えられるもの(骨鏃、骨針、へら状製品)のほか、円盤状製品、未製品、用途不明の製品などが確認されている。

第58表 骨製品 出土量

地区	グリッド	層序	装飾品		実用品		その他			合計
			骨玉	骨鏃	骨針	へら状	円盤状	未製品	不明	
一の曲輪	ネ-71	不明		1						1
	ラ-70	不明	1							1
	ム-71	不明		1						1
	ム-73	不明		1						1
二の曲輪	P・Q-96	不明							1	1
三の曲輪	W-77	III b			4			1		5
三の曲輪	ラ-42	II a				1				1
北西	ラ-43	不明		1						1
東丘陵	ヨ-83	III a?					1			1
合計			1	4	4	1	1	1	1	13

・装飾品と考えられるもの

<骨玉> 第117図1の1点を図示した。鯨とみられる魚骨の椎体を素材とし、中央部に穿孔を施す。

・実用品と考えられるもの

<骨鏃> 図2～5はすべて平面形が菱形を呈し、上原・宮城^(註1)が定義する菱頭式に分類されるものとみられる。鏃身の形状等から細分すると、II-B(平面形が菱形をより曲線化して、鏃身の挟りが概して鋭角で、その下位が細くなるもの)にあたる。勝連城跡で類例が多くみられる。

<骨針> 図6、7はいずれも破損品である。図6は素材としてイノシシの腓骨とみられる骨を利用している。先端部のみ残存し、先端を研磨し片刃状に整形する。図7は種類不明であるが腓骨を利用しており、両端部を欠損する。

<へら状製品> 図8は破損品であり、先端部のみ残存する。ウシまたはウマの肋骨を使用し、扁平な骨の先端部を研磨して片刃状に加工する。形状や加工方法が類似するものが今帰仁城跡で出土しているが、用途については不明である。

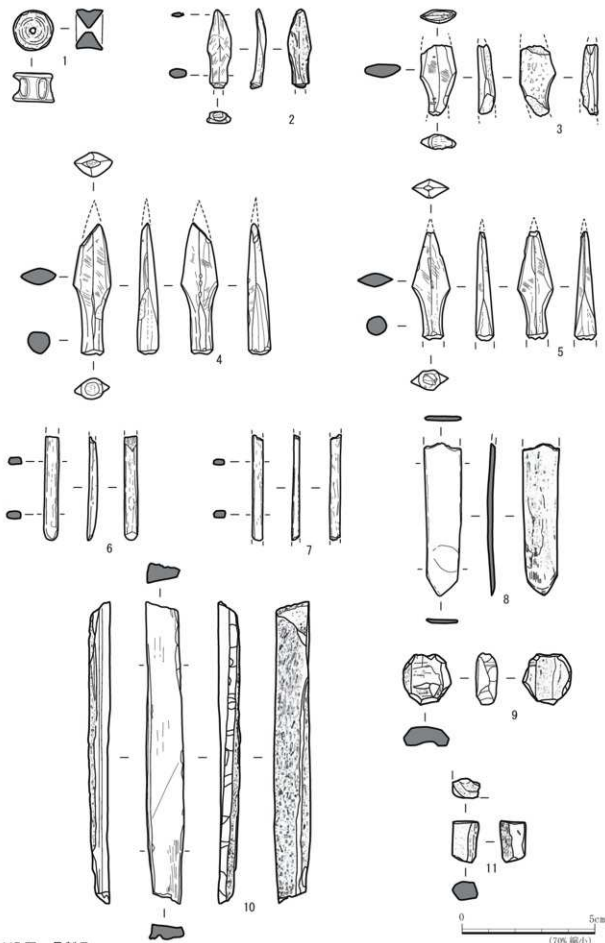
・その他

図9は円盤状製品で、ウシまたはウマの四肢骨を素材とし、側面を打ち割って円盤状に加工する。図10はウシまたはウマの四肢骨を素材とした未製品で、側面を打ち割り、板状に加工している。図11は獣骨を素材とした製品とみられるが、用途不明である。両端部を研磨し、板状に加工する。これら個々の遺物の計測値等については以下観察表に示す。

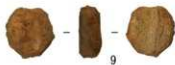
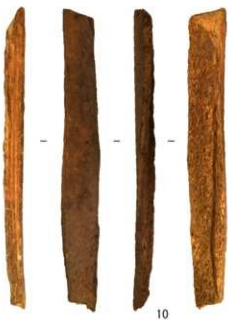
第59表 骨製品 観察一覧

(単位単位: cm)

期図 図版	図 番号	器種	種	部位	計測値				備考	出土地
					縦	横	厚さ	重量		
第 117 図・ 図版 96	1	骨玉	魚骨(鮫)	椎体	1.5	1.5	1.1	1.0	椎体の中心に約1mmの穿孔を施す。	一の曲輪 ラ-70 不明
	2	骨鏃	不明	不明	3.0	0.9	0.5	1.0	両面とも入念に研磨を施す。先端は丸みを帯びる。明確に基部をつくるが、欠損する。	三の曲輪 ラ-43
	3	骨鏃	獣骨	不明	2.7	1.3	0.6	1.3	表面は丁寧に研磨を施すが、裏面は自然面が残り、未完成品と思われる。先端部、基部は欠損する。	一の曲輪 ム-73 不明
	4	骨鏃	獣骨	不明	5.0	1.4	0.8	4.0	両面とも丁寧に研磨を施す。断面は匙型状を呈する。先端は欠損する。	一の曲輪 ネ-71 不明
	5	骨鏃	獣骨	不明	4.0	1.4	0.7	2.5	両面とも丁寧に研磨が施され、断面は匙型を呈する。先端部は欠損する。	一の曲輪 ム-71 不明
	6	骨針	イノシシ	肋骨?	3.9	0.5	0.4	0.9	先端部を研磨し、片刃状に加工。	三の曲輪 W-77 Ⅲ b
	7	骨針	不明	肋骨	4.0	0.4	0.3	0.6	両端部を欠損。	三の曲輪 W-77 Ⅲ b
	8	ヘラ状	ウシ or ウマ	肋骨	5.8	1.4	0.2	1.7	裏面の先端部を研磨し、刃をつくってヘラ状に加工。	三の曲輪 ラ-42 Ⅱ a
	9	円盤状	ウシ or ウマ	四肢	1.9	1.8	0.8	2.6	側面を打ち削り、円盤状に加工。	東丘段 ヨ-83 Ⅲ a?
	10	未製品	ウシ or ウマ	四肢	11.4	1.4	0.8	10.5	表面は研磨し、裏面は自然面が残る。側面を打ち削り、板状に加工する。	三の曲輪 W-77 Ⅲ b
	11	不明	獣骨	不明	1.6	1.0	0.8	0.9	両端部を研磨し、板状に加工。	二の曲輪 P・Q-96 Ⅰ a



第 117 图 骨製品



圖版 96 骨製品

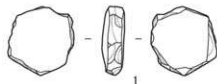
29 円盤状製品

円盤状製品は土器、青磁、白磁、褐釉陶器、沖縄産陶器、瓦等の破片を素材として円盤状に加工した製品で、総数 29 点の出土が確認されており、うち 1 点を図示した。

第 118 図 1 は土器を素材とした円盤状製品で、縦軸 3.7cm、横軸 3.5cm、厚さは 1.2cm を測り、側面を打ち欠いて円盤状に加工している。三の曲輪（第 2 次調査）の B' - 81 グリッド III a 層からの出土である。

第 60 表 円盤状製品 出土量

地区	グリッド	番号	土器		青磁	白磁	褐釉			沖無		沖施	瓦	石	合計	
			不明		不明	皿	壺	不明			撞鉢	不明	不明			平瓦
			胴	不明	胴	底	胴	胴	不明	胴	胴	底	筒			
二の曲輪	L-93	I b											2		2	
	R-99	I a						1							1	
	R-100	I b						1							1	
	T-99	不明						1							1	
	U-100	I a										1			1	
	U-102	III a												1	1	
	不明	不明											1		1	
三の曲輪	A'-85	II a						1							1	
	B'-81	III a	1												1	
	T-82	I b							1						1	
	T-84	I b				1									1	
	W-86	II a						1							1	
	X-86	I b									1				1	
		III a							1						1	
四の曲輪	A'-59	不明			1			1							2	
	E-56	I a						1							1	
	Ki-56	I a									3				3	
	Ki-58	不明						1		1		1			3	
	Sa-55	I a				1		1							2	
不明			1					1				1			3	
合計			1	1	1	1	1	10	1	1	5	1	5	1	29	



第 118 図・図版 97 円盤状製品

本遺跡で出土が確認された瓦のほとんどは、器色が赤色系を呈するもので、近代に生産されたものとみられる。少量灰色系を呈する資料も認められるが、これらは焼成不良等によるものと推測される。

一の曲輪で7点、二の曲輪で76点、三の曲輪で14点、四の曲輪で102点、東丘陵で5点、出土地不明が22点出土しており、総数で226点であった。四の曲輪では特にキ-56グリッドで出土が集中している様子がみられるが、完形の資料はなく、一括して廃棄したものと推測される。

器種としては丸瓦、平瓦が確認されている。以下、特徴的な資料を3点抜き出し、個々の観察と図示を行う。

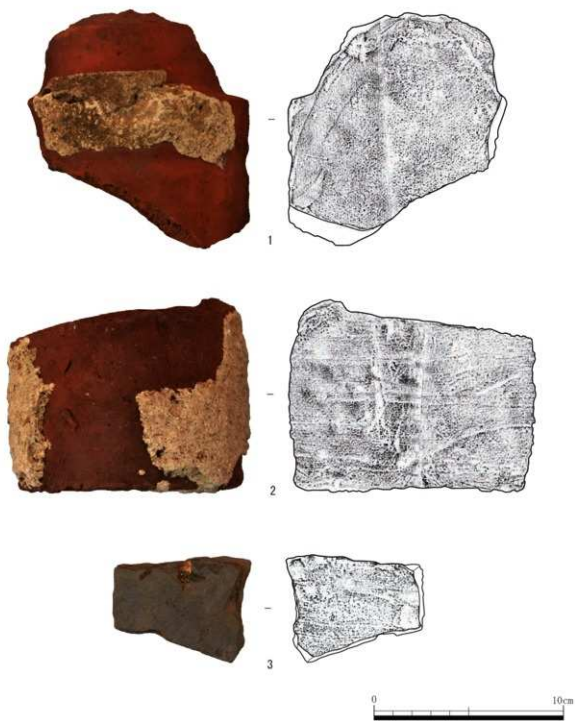
第119図1は赤色系を呈する丸瓦である。上端には玉縁部が残存し、表面には接着のための漆喰とセメントが付着する。裏面には布目痕が認められる。長軸12.3cm、短軸11.6cm、器厚1.4cm、重量343.5g。四の曲輪キ-56グリッドI a層(表採)。

図2も赤色系を呈する丸瓦で、両端部の表面に漆喰が付着する。他の丸瓦の出土資料と比較してカーブが強い。裏面には布目痕が残る。長軸13.1cm、短軸10.2cm、器厚1.3cm、489g。四の曲輪U-101グリッドI b層出土(ノロ道付近?)。

図3は灰色系を呈する平瓦である。筒部の破片資料で、裏面には布目痕が明瞭に残る。表面に混和材が欠落した痕跡が認められる。長軸7.3cm、短軸5.6cm、器厚1.2cm、重量74.6g。二の曲輪V-101グリッドI b層出土。

第61表 瓦 出土量

地区	グリッド	層	瓦				平		不明		合計	地区合計
			赤	灰	赤	灰	赤	不明				
一の曲輪	D-112	I b			2		1			3	7	
	フ-71	不明	1							1		
	キ-72	不明			1					1		
	キ-73	不明					1			1		
	ム-71	不明			1					1		
	L-93	I b			2					2		
	M-93	I b					1			1		
	M-94	I a			1					1		
	M-95	Ⅱ a			1					1		
	N-95	I b					1			1		
二の曲輪	O-93~95	I b			3					3	76	
	O-94~95	I a	1		4	1				6		
	O-96	I a			1			1		2		
	O-97~99	I a	1	1	1					2		
		I b	1	4	1					6		
	P+Q-96	I a			4					4		
		I b			2					2		
	P-100	I a	1							1		
		I b	1	2	2	1				4		
	P-95	I a			3					3		
Q-97~98	I a			5	2				7			
R-96	I a			1					1			
R-97~99	I b			1					1			
R-97~99	I a			3					3			
	I b			2	1				3			
R-99	I b			2					2			
T-98	不明			1					1			
T-99	不明				1				1			
U-100	I a			1					1			
	不明			2					2			
U-101	I b			3	1	1			5			
U-103	I b			1	1				2			
U-104	I a			1					1			
V-101	I a					1			1			
	I b			1	1				2			
Y-99	I b				1				1			
Y-101	I b			1					1			
	不明			1					1			
三の曲輪	Y-81	I b			1				1	14		
	Y-82	I b	2		1				3			
	W-77	I a	1	5	1				7			
	X-86	Ⅱ a			2				2			
	不明	不明			1				1			
四の曲輪	U'-44	I a			1				1	102		
		I b	2			1			3			
	N'-60	I a			2				2			
		I b	1		1				2			
	A'-58	不明			2				2			
	A'-59	不明	2	7	1				10			
	キ-56	I a	9	54					63			
	キ-58	不明			3				3			
	不明	不明	6	1	9				16			
	東丘陵	フ-83	I a			1					1	5
不明		不明			1	1			2			
ヨ-85		I a			2				2			
不明			8	1	60	12	13	1	1	82		
合計			39	1	160	12	13	1	1	226		



第 119 图 · 图版 98 瓦

第V章 科学的分析

第1節 脊椎動物遺体

北谷城の第1次調査から第11次調査において出土した脊椎動物遺体（魚骨・獣骨等）については、本町教育委員会の整理事業員が整理事業を実施し、早稲田大学教育学部（所属当時）の樋泉岳二氏に同定結果の確認を依頼した。以下、樋泉氏にご教示いただいた見解をもとに、北谷城出土の脊椎動物遺体の概略を記述する。

1. 分析方法

分析対象とした資料については、発掘現場において手で拾い上げたもの（ピックアップ資料）である。組成の集計については、資料数が膨大であることから最小個体数（MNI）の算出は見送り、同定標本数（NISP）を第62表に示した。なお、過去報告書が刊行され、資料整理が実施された調査年度出土資料については今回の集計に含めていない。

同定結果のローデータについては、頁数の都合上報告書への掲載を見送り、今後町HP上等で公開することとした。

2. 分析結果

脊椎動物遺体の概要：第120図に出土した脊椎動物遺体の全体的な組成の割合を示した。魚類、イノシシ・ブタ、ウシが最も多く、ウマがこれに次ぐ。リクガメ類、ニワトリもやや多い。他に、ウミガメ類、その他の鳥類、ネズミ、イヌ、ネコ？、シカ、ヤギ、イルカ、ジュゴンが確認された。ネズミは自然の遺骸と考えられる。

両生類・爬虫類・鳥類：リクガメ類が普通にみられたことから、当時の北谷グスクの周辺には自然度の高い森林が残されていた可能性が考えられる。

陸生哺乳類：イノシシ・ブタの多くは、形質的に野生イノシシとの明確な判別は困難だが、明確なブタも若干混じる。ウシ・ウマには解体痕（カットマーク、スパイラルフラクチャー）が頻繁に確認されたことから、これらの多くは食用とされたものと考えられる。シカは九州方面または大陸からの搬入品と推定される。

魚類：第121図に出土した魚類の組成の割合を示した。魚類はフエフキダイ科が最も多く、ブダイ科、ベラ科、ハタ科、クロダイ属もふつうである。他にエイ・サメ類、ダツ科、フエダイ科、アジ類（大型種）、ハリセンボン科などが確認された。出土種のほとんどはサンゴ礁またはその周辺域の生息種である。

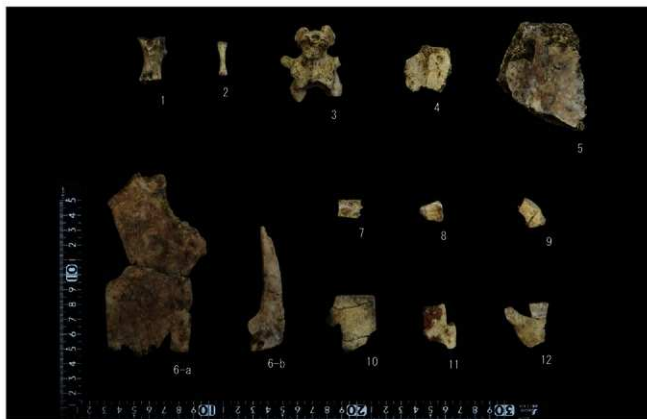
魚類部位名称

- 1 イタチザメ 歯 2 サメ類 尾椎 3 エイ 椎骨 4 ダツ科 腹椎 5 ダツ大型 歯骨 (L)
6 マハタ型 歯骨 (R) 7 マハタ型 前上顎骨 (R) 8 ハタ科 角骨 (R) 9 主上顎骨 (L)
10 主鰓蓋骨 (R) 11 第1椎骨 12 腹椎 13 大型アジ類 歯骨 (R) 14 主上顎骨 (L)
15 尾椎 16 腹椎 17 尾椎 18 アジ科 尾椎 19 フェダイ科 主上顎骨 (L)
20 前上顎骨 (R) 21 角骨 (L) 22 クロダイ 前上顎骨 (L) 23 歯骨 (R) 24 タイ型 尾椎
25 メイチダイ型 前上顎骨 (L) 26 ハマフエフキ型 前上顎骨 (R)
27 アマミフエフキ型 前上顎骨 (R) 28 キツネフエフキ 前上顎骨 (L)
29 フェフキダイ属 主上顎骨 (R) 30 歯骨 (R) 31 口蓋骨 (R) 32 方骨 (L)
33 角骨 (R) 34 腹椎 35 方骨 (L) 36 シロクラベラ 下咽頭骨 37 タキベラ 下咽頭骨
38 上咽頭骨 (L) 39 ベラA 下咽頭骨 40 ベラB 下咽頭骨 41 ベラ 前上顎骨 (L)
42 歯骨 (R) 43 角骨 (L) 44 方骨 (L) 45 ベラ科 腹椎 46 尾椎
47 シロクラベラ型 尾椎 48 イロブダイ 下咽頭骨 49 前上顎骨 (R) 50 歯骨 (R)
51 アオブダイ 上咽頭骨 (L) 52 下咽頭骨 53 前上顎骨 (L) 54 歯骨 (L)
55 ブダイ科 主上顎骨 (L) 56 角骨 (L) 57 方骨 (L) 58 腹椎 59 尾椎
60 ニザライ 主鰓蓋骨 (L) 61 尾椎 62 カワハギ 腰帯 63 フグ 前上 or 歯骨
64 ハリセンボン 歯骨

図版 99 の説明



圖版 99 脊椎動物遺體 1 (魚類)



ウミガメ 1 上腕骨 (R) 2 指骨 3 椎骨 4 椎骨板 5 肋骨板 6-a, b 甲板
 リクガメ 7 肋骨板 8 緑骨板 9 上腹板 (R) 10 中腹板 (L) 11 下腹板 (R) 12 刺状腹板 (R)



ニワトリ 1 鳥口骨 (R) 2 上腕骨 (R) 3 大腿骨 (L) 4 大腿骨 (R) 5 脛骨 (R) 6 中足骨 (L) ネズミ 7 大腿骨 (R)
 8・9 脛骨 (R) オオコウモリ 10 下顎骨 (R) イヌ 11 下顎骨 (L) 12 上腕骨 (L) 13 桡骨 (L) 14 大腿骨 (R)

図版 100 脊椎動物遺体 2 (上:ウミガメ、リクガメ・下:ニワトリ、ネズミ、オオコウモリ、イヌ)



1 切歯骨 (R) 2 上顎骨 (R) 3 上顎骨 (L) 4 下顎 (C・R) 5 下顎骨 (L) 6 下顎骨 (R) 7 下顎骨 (R) 8 下顎骨 (L)
9 環椎 10 軸椎 11 肩甲骨 (R) 12 上腕骨 (R) 13 橈骨 (R) 14 尺骨 (R)



15 第2中手骨 (R) 16 第3中手骨 (R) 17 第4中手骨 (R) 18 第5中手骨 (L) 19 寛骨 (L) 20 大腿骨 (L) 21 大腿骨 (R)
22 脛骨 (R) 23 距骨 (L) 24 踵骨 (L) 25 第3中足骨 (L) 26 第4中足骨 (L) 27 基節骨 28 中節骨 29 末節骨

図版 101 脊椎動物遺体 3 (イノシシ or ブタ)



ウサギ 1 上顎骨(L) 2 下顎骨(L) 3 肩甲骨(R) 4 桡骨(L) 5 尺骨(L) 6 第3中手骨(R) 7 大腿骨(L) 8 脛骨(L)
9 基節骨 10 下顎骨(L) 11 大腿骨(R)



ウサギ 1 頭骨(R) 2 下顎骨(R) 3 環椎 4 肩甲骨(L) 5 上腕骨(R) 6 上腕骨(R) 7 桡骨(R) 8 尺骨(L)
9 中手骨(L) 10 寛骨(L)

図版102 脊椎動物遺体4 (上:ウサギ・下:ウシ)



ウシ 11 大腿骨 (L) 12 大腿骨 (R) 13 脛骨 (R) 14 脛骨 (L) 15 距骨 (L) 16 踵骨 (L) 17 中心第4足根骨 (L)
18 中足骨 (L) 19 基節骨 20 中節骨 21 末節骨



ウマ 1 上顎 (白歯・L) 2 下顎骨 (L) 3 下顎骨 (R) 4 肩甲骨 (L) 5 上腕骨 (R) 6 桡骨 (L) 7 尺骨 (R) 8 寬骨 (L)
9 大腿骨 (R)

図版 103 脊椎動物遺体 5 (上:ウシ・下:ウマ)



ウマ 10 脛骨 (L) 11 脛骨 (L) 12 距骨 (L) 13 踵骨 (L) 14 中足骨 (R) 15 基節骨 16 中節骨 17 末節骨
 ジュゴン 19 椎骨 20 肋骨

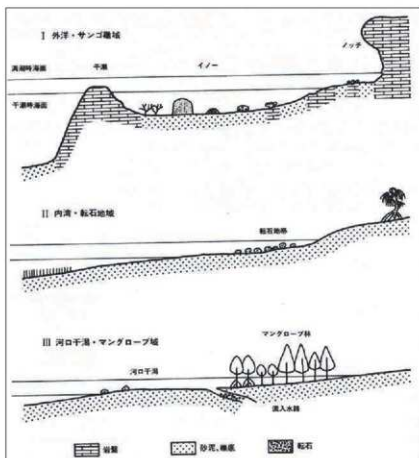
図版 104 脊椎動物遺体 6 (ウマ・ジュゴン)

第2節 貝類遺体

北谷城の第1次調査から第11次調査において出土した貝類遺体については、本町教育委員会の整理作業員が整理作業を実施し、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏に同定結果の確認を依頼したが、一部未確認のものも残っている。そのため暫定的な結果となるが、以下、北谷城出土の貝類遺体の概略を述べる。

1. 集計方法

今回対象とした貝類遺体は、発掘調査において目視により確認し、手で拾い上げたもの（ピックアップ資料）である。組成の集計については、データが膨大であることから最小個体数（MNI）の算出は見送り、同定標本数（NISP）で示した。同定標本数の場合、チョウセンサザエ等の殻とフタ・破片、二枚貝の左右殻と破片がそれぞれ1として集計されるため、最小個体数よりも過大評価となっている点については留意が必要である。生息場所類型については、黒住氏が古我知原貝塚の報告書（1987）で作成した貝の生息地に基づく類型（第122図・第63表）を参考にした。脊椎動物遺体の報告同様、過去報告書が刊行され、資料整理が実施された調査年次出土資料については今回の集計に含めていない。図版105から108に完形及び状態の良い貝類遺体の写真を掲載した。チョウセンサザエやヤコウガイ等、殻と蓋がある資料については集計表では一括したが、写真内では、a・bと付している。また、サイズの差異のため、一部番号が前後し配列している。

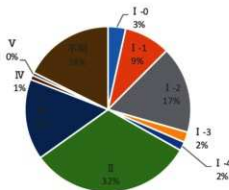


第122図 波浪の変化に基づく海洋地形の3タイプ（模式図） 註：『古我知原貝塚』より引用

2. 集計結果

今回の報告では調査地区を一の曲輪、二の曲輪、三の曲輪、三の曲輪北西地区、四の曲輪、東丘陵の6地区に区分けし、基本層序をもとに集計作業を行った。その結果は第64表に示した。総合計34,104個と膨大な数の貝類遺体が出土しており、海産腹足類30科157種、海産二枚貝類19科75種、淡水産腹足類3科7種、陸産腹足類4科6種が確認された。出土量が最も多かった地区は二の曲輪で10716個、次いで四の曲輪で9532個、三の曲輪北西地区で8271個、東丘陵で2702個、三の曲輪で1342個、一の曲輪で912個、出土地不明が629個であった。出土層序別では、二の曲輪、三の曲輪、東丘陵でグスク時代の文化層と想定されるⅢ層からの出土が多くみられる。

生息場所類型別では、内湾・転石地域に生息するⅡ類が32%、次いでいわゆるイノー（礁地：Ⅰ-2類）に生息する貝種が17%、河口干潟・マングローブ域に生息するⅢ類が16%、潮間帯中・下部（Ⅰ-1類）に生息する貝種が9%、潮間帯上部（Ⅰ-0類）に生息する貝種が3%、リーフの縁にあたる干瀬（Ⅰ-3類）、干瀬の外側にあたる礁斜面及びその下部（Ⅰ-4類）に生息する貝種はそれぞれ2%、淡水域に生息するⅣ類が1%、陸域に生息するⅤ類は1%以下であった。



第123図 生息地類型に基づく出土割合

貝種ごとの出土量の割合では、サンゴ礁のイノー内に生息する巻貝のマガキガイ（Ⅰ-2類）が12%と最も多く、次いで河口干潟に生息する二枚貝のアラスジケマン（Ⅲ類）が10%となっている。その他、スダレハマグリ（Ⅱ類：9%）、カンギク（Ⅱ類：9%）、クワノミカニモリ（Ⅰ-1類：4%）、ホソスジイナミガイ（Ⅱ類：4%）、フトヘナタリ（Ⅲ類：4%）、フトスジアマガイ（Ⅰ-0類：3%）、リュウキュウウミナナ（Ⅱ類：3%）、リュウキュウサルボウ（Ⅱ類：2%）、アマオブネ（Ⅰ-1類：1%）、オキナワヤマトニシ（Ⅴ類：1%）、オニノツノガイ（Ⅰ-2類：1%）、サラサバティラ（Ⅰ-4類：1%）、チョウセンサザエ（Ⅰ-3類：1%）、イソハマグリ（Ⅰ-1類：1%）、エガイ（Ⅰ-1類：1%）、シラナミ（Ⅰ-2類：1%）、シレナシジミ（Ⅲ類：1%）、スノメガイ（Ⅱ類：1%）、マスオガイ（Ⅱ類：1%）、リュウキュウシラトリ（Ⅱ類：1%）等の出土が目立つ。全体の出土割合で1%以上になるこれらの貝種を優占種とすると、22種で全体の72%を占める。

北谷城の所在する丘陵は、現在の海岸線からは直線距離で約500mの距離があるが、過去には丘陵西側の麓まで海が迫り、県道130号線が走る丘陵南側には河川が存在していたことが試掘調査で明らかとなっている。丘陵北側には現在も白比川が流れており、かつて丘陵は両サイドを河川に挟まれ、洋上に突き出た地形を成していたと想定される。また、北谷城付近の海岸は内湾状の地形を呈しており、内湾、イノー、河口域に生息する貝種が多く出土している様子は、北谷城周辺の地形の様相と整合するもので、これらの貝は遺跡周辺の海や河川で採集されたものと推測される。

また、平成10年～14年にかけて北谷城南側丘陵麓付近で実施された第13次～第16次発掘調査成果では、マガキガイの出土量が全体の半数を占め、オキナワヤマトニシ、アラスジケマン、カンギクがやや多くみられたと報告されており、グスク丘陵上の出土傾向も同様の傾向を示している。

今回は最小個体数の算出や最長組成の比較検討といった作業を行うことができなかったが、今後それらの作業を実施しさらに詳細な分析や周辺遺跡との比較等を行うことで本遺跡の貝類利用の状況を把握することが可能であると考える。

第 63 表-2. 北谷城出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型.

和名	学名	生息層 階級 階級	遺体 番号	和名	学名	生息層 階級 階級	遺体 番号
ベニツギガイ	<i>Cornu (Vignonius) beatus</i>	1-4	129	シヤコガイ類 <i>Trochidae</i>			
ハクワモ	<i>Cornu (Rhozonius) pertusus</i>		130	シヤゴウ	<i>Hemiphaedusa hemiphaedusa</i>	1-2	186
ハイロコナン	<i>Cornu (Rhozonius) retusum</i>	1-2	131	ヒメジロ	<i>Trochus onosca</i>	1-2	187
サササラン	<i>Cornu (Rhozonius) capitanus</i>	1-4	132	ヒメジロ	<i>Trochus squamosus</i>	1-2	188
カサシヤ	<i>Cornu (Rhozonius) vesulum</i>	1-4	133	シラネ	<i>Trochus maxima</i>	1-2	189
ヤサギサガイ	<i>Cornu (Rhozonius) nitidus</i>	1-2	134	カサシヤ	<i>Trochus maxima</i>	1-2	190
コシヤ	<i>Cornu (Punctulid) aculeatus</i>	1-2	135	ヤサギサ(トコリヤ)	<i>Trochus roseus</i>	1-2	191
ゴヤモ	<i>Cornu (Punctulid) pulchellus</i>	1-2	136	マルスダシガイ類 <i>Veneridae</i>			
ヤキモ	<i>Cornu (Punctulid) megas</i>	1-2	137	アラヌメガイ	<i>Periphyllota reticulata</i>	1-2	192
シシヤ	<i>Cornu (Strogonium) striatum</i>	1-2	138	スノガイ	<i>Periphyllota purpurea</i>	1-2	193
ヤサギサ	<i>Cornu (Vimosepus) fulgurum</i>	1-1	139	カサシヤ	<i>Glycyferita maris</i>	1-2	194
カサシヤ	<i>Cornu (Vimosepus) nitidus</i>	1-2	137	アラヌメガイ	<i>Glycerium tumidum</i>	1-1	195
シシヤ	<i>Cornu (Vimosepus) comatus</i>	1-1	138	カサシヤ	<i>Glycerium pacificum</i>	1-1	196
マダモ	<i>Cornu (Vimosepus) abraeus</i>	1-1	139	ユウカザハマグリ	<i>Pitar striatum</i>	1-2	197
カサシヤ	<i>Cornu (Lithonius) aburneus</i>	1-2	140	ウスハマグリ	<i>Pitar japonicus</i>	1-2	198
フシヤ	<i>Cornu (s.s.) marionae</i>	1-2	141	オホエシ	<i>Pitar pellucidum</i>	1-2	199
カサシヤ	<i>Cornu (Glycymeris) textilis</i>	1-2	142	スダシハマグリ	<i>Katysia japonica</i>	1-1	200
アラヌメガイ	<i>Cornu (Lithonius) lituratum</i>	1-2	143	トコリヤハマグリ	<i>Mexilis sp. cf. lissensis</i>	1-2	201
カサシヤ	<i>Cornu (Lithonius) leopards</i>	1-2	144	マルスダシ	<i>Liopecten latissimus</i>	1-2	202
イシヤ	<i>Cornu (Vignonius) latus</i>	1-2	145	ヤサギサ	<i>Borneria hiroi baezani</i>	1-2	203
カサシヤ	<i>Cornu (Vignonius) feodus</i>	1-2	146	オイカガシ	<i>Borneria hiroi</i>	1-2	204
ヤサギサ	<i>Cornu (Vignonius) amasiatus</i>	1-2	147	ヒメヤサ	<i>Ruditapes variegata</i>	1-1	205
マダモ	<i>Cornu (Vignonius) costatus</i>	1-2	148	ヤサギサ	<i>Katysia hantoni</i>	1-1	206
イシヤ	<i>Cornu (Vignonius) testis</i>	1-2	149	ヤサギサ	<i>Gomphus hubei</i>	1-1	207
タナコガイ類 <i>Trochidae</i>				ヤサギサ	<i>Corbia orientalis</i>	1-1	208
シラネ	<i>Ocymeris mesolatus</i>	1-2	150	ハマグリ類 <i>Donacidae</i>	<i>Mexilis sp. cf. lissensis</i>	1-2	209
タナコガイ	<i>Trochus subulatus</i>	1-2	151	タナコガイ	<i>Littorina cuneata</i>		210
ナツメガイ類 <i>Bullidae</i>				タナコガイ	<i>Littorina faba</i>	1-1	211
タナコガイ	<i>Bulla venosus</i>	1-2	152	シラネ	<i>Tellina virgata</i>	1-2	212
キセルガイ類 <i>Caudofoveatae</i>				シラネ	<i>Tellina stearnsi</i>	1-2	213
ツツメ	<i>Luchaphidius praecox</i>	V	153	シラネ	<i>Saxidomus nuttallii</i>	1-2	214
ナツメガイ類 <i>Caudofoveatae</i>				シラネ	<i>Gomphus palatum</i>	1-1	215
シラネ	<i>Saxidomus (s.s.) m. mearnsi</i>	V-8	154	シラネ	<i>Cyrtolium venosus</i>	1-2	216
オナヅマイガイ類 <i>Brachyneridae</i>				イシヤ	<i>Phoronis elongata</i>	1-1	217
オナヅマイ	<i>Brachyneris ovalis</i>	V-8	155	シラネ	<i>Asaphis villosus</i>	1-1	218
オナヅマイ	<i>Asaphis cf. elongata</i>	V	156	ハカシガイ類 <i>Mastoidae</i>			
二枚貝類 <i>Bivalvia</i>	<i>Angitia elegantissima</i>	V	157	タマキ	<i>Macra cuneata</i>	1-1	219
フネガイ類 <i>Arcaidae</i>				シラネ	<i>Macra mesata</i>	1-2	220
オナヅマイ	<i>Arca ventricosa</i>	1-2	157	シラネ	<i>Margarita nobilioris</i>	1-2	221
オナヅマイ	<i>Barbatia (Barbatia) implexa</i>	1-1	158	シラネ			
オナヅマイ	<i>Barbatia implexa</i>	1-4	159	シラネ			
オナヅマイ	<i>Barbatia (s.l.) unguiculatissima</i>	1-2	160	シラネ			
ハナエガイ	<i>Barbatia (Stilpnaria) stearnsi</i>	1-2	161	シラネ			
シラネ	<i>Arcaea (Arcaea) antiquata</i>	1-2	162	シラネ			
イシヤ				シラネ			
シラネ	<i>Homomya mutabilis</i> sp.	1-1	163	シラネ			
シラネ	<i>Melidius aculeatus</i>	1-1	164	シラネ			
シラネ	<i>Stolus conspurcatus</i>		165	シラネ			
ウツガイ類 <i>Pectinidae</i>				シラネ			
ウツガイ	<i>Pectinella brevisata</i>			シラネ			
ウツガイ	<i>Pectinella panamensis</i>	1-1	166	シラネ			
ウツガイ	<i>Pectinella lucata</i>	1-2	167	シラネ			
ウツガイ	<i>Pectinella margaritifera</i>	1-4	168	シラネ			
イシヤ				シラネ			
シラネ	<i>Ostrea fucigera</i>	1-2	169	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea bilineata</i>	1-1	170	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	171	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	172	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	173	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	174	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	175	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	176	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	177	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	178	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	179	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	180	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	181	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	182	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	183	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	184	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	185	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	186	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	187	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	188	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	189	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	190	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	191	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	192	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	193	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	194	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	195	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	196	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	197	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	198	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	199	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	200	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	201	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	202	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	203	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	204	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	205	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	206	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	207	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	208	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	209	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	210	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	211	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	212	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	213	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	214	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	215	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	216	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	217	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	218	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	219	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	220	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	221	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	222	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	223	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	224	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	225	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	226	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	227	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	228	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	229	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	230	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	231	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	232	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	233	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	234	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	235	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	236	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	237	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	238	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	239	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	240	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	241	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	242	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	243	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	244	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	245	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	246	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	247	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	248	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	249	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	250	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	251	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	252	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	253	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	254	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	255	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	256	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	257	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	258	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	259	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	260	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	261	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	262	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	263	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	264	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	265	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	266	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	267	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	268	シラネ			
シラネ	<i>Saxostrea marginata</i>	1-1	269	シラネ			
シラネ							

第 64 表 -1 北谷城出土 貝類遺体の詳細

	一の歯輪		二の歯輪						三の歯輪				三の歯輪を西						四の歯輪		裏付殻		不 明	合 計																			
	不 明	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	1 f	不 明	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	1 f	不 明	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	1 f	不 明			1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	1 f	不 明												
リュウキュウウナギ	1	1	3	1	3	2		3						2															2	33													
オキナビスカイ目		1																												1													
イボアゴ																														2													
ヤコウガイ		9	3	6	6			57	2	1				2												1	1	24	2	114													
チウセンサザエ	16	29	27		32	2		50		1	1	2	1	1	5									4	7	12	43	15	1	4	263												
コンゴサザエ			2		3			1							4														4	24													
カンボウ	13	6	62	11	185	23		2	147		1	2	1	4	1	10	171	6		1	1	9	1	1275	6	90	667	147	63	94	2996												
リュウサン科未詳			3	8	2			1																						14													
ニシキウズ		1	4						2																					1	29												
ムラサキウズ	5		10		9	6		26																					1	4	113												
ウズイギモシロ	1		1																											2													
ボンカハマ								3		1																				3	3	18											
ペニシタカ		1						1																						2													
サラサハナラ	33	4	6		15	4		67	2	2	3			1	9										34	14	44	29	3	270													
オキナワイシダツ		1			1										4											20		9	2	1	38												
ニシキウズ科未詳	1		3		3	1		26						1																2	63												
イシダツシアサオブ	1		1																											3	7												
コシダツアマガイ																															2	2											
キハアマガイ																															5												
フスジアマガイ		1																													7	1087											
マンアサオブ		3		13				6																							10	104											
オホアサガイ		1		7																											8												
オオマルアサオブ								1																							1	5											
アサオブ		6	33	15	42	3		44	1		1	2			5											1	25	3	28	77	7	286											
ヒラマキアサオブ								6	5																						27	79	120										
リュウキュウアマガイ								3						1																	5	11											
ニムキアサオブ																															1	1											
カバサカノコ								1																							1	2											
シマカノコ																																1	1										
カノコガイ		1	2		1			6																								3	27										
シマオカシマキ																																1	1										
ヒバノコ								4																								1	8										
アサオブ科未詳	1	3	9		12			1																							21	25	3	74									
マルタニシ								2		1																						2	3										
オキナツヤマシロシ	4	1	10		6			22																								30	92	1	175								
オニツノガイ	21	13	40		1	44	1		111	2	10		1	3	3	2	14	1												16	15	55	97	1	12	1	470						
コシニツノガイ		1			1																											2	8	13									
オホニツノガイ																																	1	1									
キイロカニモリ		1	3		22																											46	77		149								
コブツノエ																																1	1										
チウクワノシカニモリ																																1	1										
ヒナクワノシカニモリ																																12	12		12								
オオシマカニモリ																																1	1										
ヨコワカニモリ		1			1			1							1	2																1	6		13								
トウガサカニモリ																																	2	2		2							
ヒバカニモリ																																	2	2		12							
クワノシカニモリ	2	89	184		131	7		163	4	2	7	3			84	36															81	23	219	3	400	20	4	1459					
カヤノシカニモリ	2		3		1			1																								43	1	1	10		1	74					
フコヘナナリ					1	2																											176		934	15	57		3	1226			
カブガイ					1	1																											7		14	6	26		2	36			
リュウキュウウニナ	4	2	7		1	5	1		11																							87	3	1	2	482	4	85	215		11	36	947
イボウニナ								1																									32		39		11	7	2	93			
ウニナ科未詳																																	2	2					2	2			
ゴザアヒナ								24																										20				8		33			
トウガサカニナ	4				1			3																									8		2	3	13	29		1	64		
オノメカニナ																																		1	7					1	11		

第 64 表 -2 北谷城出土 貝類遺体の詳細

	一の歯輪				二の歯輪				三の歯輪				三の歯輪を覆				四の歯輪		裏付殻		合計							
	不明	Ⅰ a	Ⅰ b	Ⅰ c	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅱ d	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅲ c	Ⅲ d	Ⅲ e	Ⅲ f	Ⅲ g	Ⅲ h	不明	Ⅰ a	Ⅰ b	不明		Ⅱ a	Ⅱ b	不明				
スダカワニナ			2	1				10							3				2	1	12			31				
シシカワニナ	1		1	2				6							4				2	2	17		10	46				
タイワンカワニナ																					3			3				
カワニナ	2	1	2	4				6		1				19					13	8	36		22	139				
カワニナ科不明			1					1																2				
ウズラウサギ																				1				1				
ワタシムカシタビト								1							1					2	2			6				
ムカシタビト			3					3						1	1				1	1	1		1	14				
ヤサガキムカシタビト								3													3			6				
ホジマキガイ		4	13	3	24			28	3	1	1	3		1	2	2			4	2	16	36	5	152				
マダキガイ	135	247	209	20	283	28		1,824	37	102	17	2	61	24	63	49	2	5	75	76	466	704	2	462	16	30	4100	
スシウガイ								1																	1			
イボウダ	2		1	1				4													3				12			
ペニツガイ				1											1											2		
マイノツガイ																				2	2		1			5		
アノツガイ								1																		1		
タビガイ	15	2	2	4	1			20	1	3		2		1	1				2	4	29		6	3	96			
ウラダガイ		1	1					1																1		4		
スシガイ	3																			1	1		1			6		
スシウガイ科不明	1	3			1			5												4	7		15	1	37			
ムカシガイ科不明		1						1																		2		
ヤシラダカウ														1	1						1		1			4		
ホシヤシマダカウ								2														1			1	4		
ホシダカウ	1																									5		
ホシキダウ	1																									1	6	
コシダカウ																											1	1
ハジメダカウ								1							1												2	
アノツガイ																											1	1
アノツガイ	1	1	1	3	2			14						11			1		41	1	7	38		1	4	128		
キヨダカウ			1					2											1		4		1	1	1	11		
ハママルユキ	2	3	5	6				19		1				9			1		6	1	2	47		4	1	105		
タカウガイ科不明	1	34	52	9	48	5		107		2	1	2		4	4				2	2	56	83		46	5	465		
トビガイ		1	6	4	1			3		1										1	3		2	1	1	24		
ペンツガイ		1						1												1	1	6		1		11		
ロウロトガイ								1												1	3						5	
ホシダカウ					2																						2	
リスガイ		1	3	3				1													1	1					11	
ホシシウダカウ	1																	1		6				5	1		16	
タマガイ科不明			2	1				3												1	6	7					20	
イワカウホシ					1			1																			2	
ホシキ	2	3	5	2				12												1	3	6		2			38	
オオナトホウ				1																							1	
ホシキ科不明			1																								1	
イワカウキ																						1					1	
ウズラガイ								1																			2	
スシウダカウ																						1					1	
シマキ																						2					2	
シシカウ	3	6	1					7						1						1	6	6		1	1		32	
サツダカウ									1													1		2			5	
シシカウ			1					1						1							1	3	4				11	
ホシガイ														1								2					3	
ホシキ	4	1	3	1				1	6	1	2	2									1	6	9	3	1		43	
キナフレイシガイマシ					1																						1	
ウネレイシガイマシ								1	1													6				1	10	
タチベレイシガイマシ																						1					1	
レイシマシ																						1					1	

第 64 表 -5 北谷城出土 貝類遺体の詳細

	一の歯輪		二の歯輪					三の歯輪					三の歯輪を覆					四の歯輪		裏付縁		合計															
	不明	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	不明	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	不明	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	不明	1 a	1 b		不明	不明													
ヒメツキガイ		1			1																			7													
カガツツキガイ																								1													
ヒレインコ																								1													
シロザル														4								4		4													
ケイトウガイ																							3	4													
キクザル		1	1		1																			4													
シラネンシ	25	2	1	12	1	1	8	5	3		2		8	8							3	7	27	137	5	7	251										
リュウキュウザルガイ	1	7	4	3	1	4																		4	14	4		55									
カガツガイ	8	1	2	4	1		4	3	1		2			12										9	2	14	14	8	2	80							
リュウキュウアオイ														1															1								
シヤコウ	3		8				4	1	2		1	1											2	4		1	1	23									
ヒメジヤコ	3	3		4	1		13	1			8	1	1										12	14		1	1	63									
ヒシヤコ	1			1			1																1	4		3	1	13									
シラネ	149	3	9	17	2	1	43	2	1	7	1	17	2	1								9	4	40	1	146	8	4	488								
オオシヤネ	3																						1	2		3			8								
ナガシヤネ	3																							1			1		5								
シヤコガイ(料不詳)	4	17	23		9		74	7	1		5	4										2	3	4	10			3	183								
アサメガイ	5	2	10	16	1	1	48						2	6									3	7	23				131								
メメガイ	20	15	19	47	35	4	79	1	1		5	2	1	46	4							30	1	23	57	54	1	15	483								
カウサリ																							1							1							
アラスシヤメン	47	82	479	333	32	22	10	444	5	5	10	3	5	6	8	74						128	6	230	1479	120	2	28	2647								
ホスシヤネガイ	10	12	23	34	14		4	152						199									531	9	13	172	13	2	123	1283							
ユウカガハマダ		1	3				1							2									4		8		1			20							
ウスハマダ																								2	2	1	1	1			7						
オキナシ																								2						2							
スダレハマダ	114	60	214	254	28	35	4	254	4		1	48	327	3								480	6	253	612	1	183	12	68	3022							
トドメハマダ																															1						
マルオキナシ	1						2																1								4						
サザメ	1	1	5				5	3																1	1	1					13						
オキカガ	1						1	1						22									14		4					4	49						
オオシヤコ	1																														3						
ヒメアサリ														1	1									1							2						
ヤスマヤダシ																																1					
フキアガアサリ																									1							1					
ダチオキシ																																19					
種別不明	13	136	176	223	2	2	262	17	13	9	2	53	1	61	23							285	30	217	4	244	1	239	5	30	2166						
ハマダ(種別不明)														1										1								7					
マルスサシ(料不詳)							1																									1					
オノコ																																1					
リュウキュウナモノ	1	3					13	1		8				21										26		3					6	82					
ニコウ																																	1				
ヒメニコウ																																	2				
ササメ														1																		1	3				
リュウキュウシラ	2	3	5		1	2		10						23										63	6	72	6	6	3		198						
モナシ	2	1												1																		5					
マメ	2	2	3		8			20	1		5		31	40									63	7	21	8	6	10		237							
リュウキュウマメ	1	1	1		10	1		13		1			2	21									62	2	18	34	3			170							
タマ	2				6			3					1											1								13					
リュウキュウバカ	1	1																						1		5						9					
ユキ	1		2		2									16										23		1			7		53						
バカ(料不詳)																																4					
イハマ	3	2	7		10	2		17	1	2			50		82	3							25		32						216						
オノコマ																																8	6				
マメ(料不詳)																																	2				
合計	912	1041	2360	1102	2477	275	75	29	4350	166	211	77	25	287	57	1	518	1900	8	23	2	4	11	9	6	6308	243	2384	7	6890	1	5	2503	193	629	34104	
地区別合計	912				33716						1342						3271						9532				2792					629					



図版 105 貝類遺体 1 (巻貝)



図版 106 貝類遺体 2 (巻貝)



圖版 107 貝類遺體 3 (上: 卷貝、下: 二枚貝)



図版 108 貝類遺体 4 (二枚貝)

第3節 年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北谷城は、沖縄県中頭郡北谷町に所在し、北谷町南部の丘陵上に位置する。これまでの調査によって、5つの曲輪と2か所の平場が確認された。標高は中央部の最も高い場所で44.7mを測る。城の規模としては、首里城、今帰仁城、糸数城、南山城に次ぐ大きさとされる。北谷城は昭和58年から令和元年にかけて17回の調査が実施されており、15世紀頃に最盛期を迎えたと想定されている。

北谷城のこれまでの発掘調査で、炭化した遺物が検出されており、これらは城内における人間活動の痕跡を示すものと推測される。

本報告では、調査区内より採取された炭化物および土器付着炭化物、獣骨を対象に、堆積層や土器出土層位の年代観に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。

1. 試料

試料は、W-77グリッドの8層出土土器486付着炭化物、ヨ-82・83グリッドVI層あぜより採取された炭化物no495、ヨ-82グリッドの集石の下より採取された炭化物no580、ラ-43東トレのI層より採取された炭化物、B'-81グリッドのIV層出土土器337付着炭化物、W-77グリッドの32層出土土器58付着炭化物、ヨ-83グリッドのIX層赤土層より採取された炭化物no585、O-96石群下部第3層〔台帳番号3096～3104〕から採取された炭化物、ラ-44南西地区黒褐色層〔台帳番号1018、1076〕から採取された炭化物、ラ-44南西地区第3PIT〔台帳番号1489〕から採取された炭化物、ラ-43北トレンチ灰褐色層〔台帳番号1392〕から採取された炭化物、O-96第5層0～10cm〔台帳番号36〕から出土した獣骨1点の計13点である。試料の種類は炭化物9点、土器付着炭化物3点、獣骨1点である。

2. 分析方法

分析試料はAMS法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理:AAA)。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。一方、試料が脆弱で1mol/Lでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度のNaOHの状態では処理を終える。その場合はAaAと記す。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

骨試料はコラーゲン抽出(Collagen Extraction)を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土壌等の付着物を取り除く。試料をピーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったピーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで

1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン酸塩除去のため試料を透析膜に入れて1Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach,1977)。また、暦年較正用に一行目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアはRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0、較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪(年輪は細胞壁のみなので、形成当時の¹⁴C年代を反映している)等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13(Reimer et al.,2013)である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが(Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値(1年単位)を記す。

3. 結果

結果を第65表、第124図に示す。試料の測定年代(補正年代)は、486土器付着炭化物が775±20yrBP、no495炭化物が845±20yrBP、no580炭化物が555±20yrBP、ラ-43東トレ炭化物が665±20yrBP、337土器付着炭化物が795±20yrBP、58土器付着炭化物が855±20yrBP、no585炭化物が17,870±60yrBP、0-96第3層石群下部が730±20yrBP、南西地区ラ-44黒褐色層の2点が680±20yrBP、南西地区ラ-44第3PITが630±20yrBP、北トレンチラ-43灰褐色層が620±20yrBP、0-96第5層0～10cmの獣骨が620±20yrBPの値を示す。なお、事前に炭化物を確認した結果、no495とno585は針葉樹の炭化物に、ラ-43東トレはイネ科の炭化物に同定された。

暦年較正年代は、測定誤差を2σとして計算させた結果、486がcalAD 1,222～1,275、no495がcalAD 1,161～1,248、no580がcalAD 1,318～1,423、ラ-43東トレがcalAD 1,280～1,387、337がcalAD 1,216～1,269、58がcalAD 1,155～1,245、no585が21,862～21,435 calBP、0-96第3層石群下部がcalAD1,258～1,290、南西地区ラ-44黒褐色層の2点がcalAD1,275～1,387、calAD1,274～1,386、南西地区ラ-44第3PITがcalAD1,290～1,394、北トレンチラ-43灰褐色層がcalAD1,292～1,397、0-96第5層0～10cmの獣骨がcalAD1,296～1,398である。なお、no585のみ、極端に古い値を示すことから、図には含めていない。

4. 考察

試料は石垣で囲われた郭内で出土した土器、炭化物、獣骨と石垣外東側にある堀切状の窪地から出土した炭化物とされる。城郭内で出土した土器付着炭化物の3点についてみると、補正年代は855～775yrBP、暦年代は12世紀中頃～13世紀後半のものと推測され、当時の北谷城内で利用されていたものである可能性が高い。

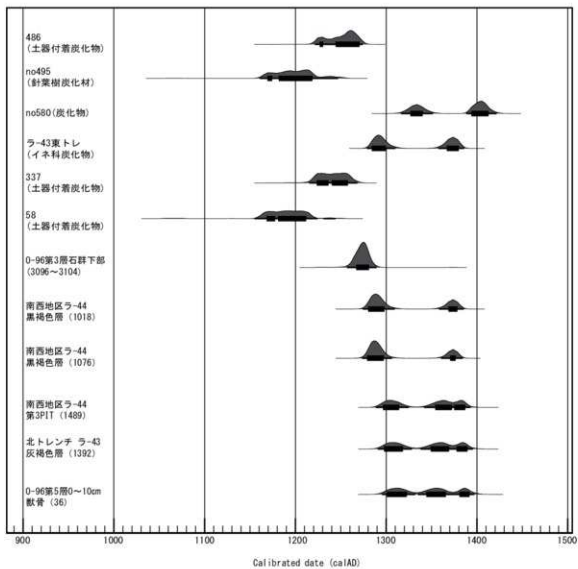
城郭内から出土した炭化物と獣骨は0-96第3層石群下部、南西地区ラ-44黒褐色層(2点)、南西地区ラ-44第3PIT、北トレンチラ-43灰褐色層、0-96第5層0～10cmの獣骨の計6点である。補正年代は730～620yrBPの100年の範囲に集中する。暦年代は0-96第3層石群下部が13世紀後半と他より若干古い値である。他の5試料は13世紀後半から14世紀後半の重なった年代である。土器の年代より100年程新しい値であった。

石垣外東側にある堀切状の窪地から出土した炭化物は、no495炭化材、no580炭化物、ラ-43東トレ炭化物、no585炭化材の4点である。no585炭化材は $17,870 \pm 60$ yrBPと極端に古い値を示すことから、古い時代の炭化材が再堆積した可能性もあり、堆積層の年代観や検出状況も踏まえ、再検討することが望ましい。他の3点についてみると845～555yrBPで暦年代は12世紀中頃から15世紀前半の300年の年代幅が認められた。

北谷城のこれまでの調査から15世紀頃に最盛期を迎えることとされることから、得られた年代は造成期から最盛期までの年代を示しているものと推測される。分析の目的である丘陵を利用し始めた時期や郭内の造成時期を検討する資料の蓄積になったものと考えられる。

引用文献

- Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ^{14}C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.



第124図 暦年較正結果

第 65 表 放射性炭素年代測定結果

試料名	基本層序	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年校正用	暦年校正年代		Code No.			
							年代値					
							1 σ	2 σ				
486 W-77 8層	III b	土器付着 炭化物	AaA	775 ± 20	-23.9 ± 0.6	775 ± 21	0	cal AD 1227 - cal AD 1231	723 - 719	calBP	0.003	TKA- 18722
							1 σ	cal AD 1245 - cal AD 1271	705 - 679	calBP	0.307	
no495 31-82-83 筑前あび	III a	炭化材 (針葉樹)	AaA	845 ± 20	-29.6 ± 0.3	845 ± 20	0	cal AD 1189 - cal AD 1175	781 - 775	calBP	0.002	TKA- 18723
							1 σ	cal AD 1182 - cal AD 1219	768 - 731	calBP	0.908	
no580 31-82 黒石の下	III a	炭化物	AaA	555 ± 20	-21.3 ± 0.3	556 ± 21	0	cal AD 1328 - cal AD 1341	622 - 609	calBP	0.365	TKA- 18724
							1 σ	cal AD 1395 - cal AD 1414	555 - 536	calBP	0.835	
ラ-43 東トシ 1層	I a	炭化物 (イナ科)	AAA	685 ± 20	-24.9 ± 0.5	686 ± 20	0	cal AD 1285 - cal AD 1300	665 - 650	calBP	0.579	TKA- 18725
							1 σ	cal AD 1368 - cal AD 1381	582 - 569	calBP	0.421	
337 B-81 IV層	III d	土器付着 炭化物	AaA	795 ± 20	-19.8 ± 0.4	796 ± 20	0	cal AD 1224 - cal AD 1237	726 - 713	calBP	0.397	TKA- 18726
							1 σ	cal AD 1368 - cal AD 1258	709 - 692	calBP	0.603	
58 W-77 32層	III b	土器付着 炭化物	AaA	855 ± 20	-27.3 ± 0.5	856 ± 20	0	cal AD 1189 - cal AD 1178	781 - 772	calBP	0.214	TKA- 18727
							1 σ	cal AD 1181 - cal AD 1212	769 - 728	calBP	0.786	
no585 31-83 次層赤土層	III a	炭化材 (針葉樹)	AaA	17870 ± 60	-28.3 ± 0.5	17,868 ± 59	0	cal BC 19822 - cal BC 19604	21781 - 21553	calBP	1.000	TKA- 18728
							1 σ	cal BC 19913 - cal BC 19486	21682 - 21435	calBP	1.000	
O-96 第 3 層石群下部 3096 ~ 3104	III a	炭化物	AAA	730 ± 20	-27.50 ± 0.21	731 ± 22	0	cal AD 1268 - cal AD 1282	682 - 668	calBP	1.000	IAAA- 182608
							1 σ	cal AD 1258 - cal AD 1290	692 - 680	calBP	1.000	
南西地区 ラ-44 黒褐色層 1010	III 1 ?	炭化物	AAA	680 ± 20	-30.41 ± 0.22	677 ± 23	0	cal AD 1281 - cal AD 1299	689 - 651	calBP	0.734	IAAA- 182610
							1 σ	cal AD 1370 - cal AD 1380	580 - 570	calBP	0.276	
南西地区 ラ-44 黒褐色層 1076	III 1 ?	炭化物	AAA	680 ± 20	-27.47 ± 0.22	681 ± 22	0	cal AD 1280 - cal AD 1296	670 - 652	calBP	0.841	IAAA- 182611
							1 σ	cal AD 1372 - cal AD 1376	578 - 572	calBP	0.159	
南西地区 ラ-44 第 3PT 1489	III 2 層下部	炭化物	AAA	630 ± 20	-27.50 ± 0.21	631 ± 21	0	cal AD 1297 - cal AD 1315	653 - 635	calBP	0.332	IAAA- 182612
							1 σ	cal AD 1355 - cal AD 1374	595 - 576	calBP	0.372	
北トシチ ラ-43 炭褐色層 1392	III 2	炭化物	AAA	620 ± 20	-28.16 ± 0.25	624 ± 22	0	cal AD 1274 - cal AD 1307	676 - 643	calBP	0.705	IAAA- 182613
							1 σ	cal AD 1362 - cal AD 1386	588 - 564	calBP	0.291	
O-96 第 5 層 0 ~ 10 cm 36	III e	獣骨	CoEx	620 ± 20	-7.03 ± 0.26	615 ± 22	0	cal AD 1299 - cal AD 1319	651 - 631	calBP	0.404	IAAA- 182614
							1 σ	cal AD 1350 - cal AD 1371	600 - 579	calBP	0.376	
							0	cal AD 1379 - cal AD 1391	571 - 559	calBP	0.220	
							1 σ	cal AD 1292 - cal AD 1329	658 - 621	calBP	0.393	
							0	cal AD 1339 - cal AD 1397	611 - 553	calBP	0.807	
							1 σ	cal AD 1302 - cal AD 1324	648 - 626	calBP	0.404	
							0	cal AD 1345 - cal AD 1367	605 - 583	calBP	0.398	
							1 σ	cal AD 1382 - cal AD 1393	568 - 557	calBP	0.197	
							0	cal AD 1296 - cal AD 1333	654 - 617	calBP	0.387	
							1 σ	cal AD 1338 - cal AD 1398	614 - 552	calBP	0.613	

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5,568年を使用。

2) yrBP 年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した振動は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) IAAA は酸-アルカリ-酸処理、CoEx はコールゲン抽出処理を示す。

5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.17.0(Copyright 1986-2018 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7) 1 σ 値を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 σ 値を丸めていない。8) 統計的に真の値が入る確率は0は68%、2 σ は95%である。

第VI章 論考

第1節 縄張り構造から見る北谷城

富真 剛一

沖縄県の県庁所在地那覇市から国道58号をおよそ16km北上すると、北進する国道の行く手を遮るように東西にのびる琉球石灰岩の丘陵が右手に立ちはだかる。この丘陵は東から西、つまり内陸側から舌状に海側に向かって伸びている。グスクはこの丘陵の海側に張り出す西端部を城城に取り込み、内陸へと連なる起伏に富んだ琉球石灰岩地形を巧く利用して築かれている。全城が石灰岩の切石積みと野面積みで構成された城郭としては、沖縄島中部に分布するグスクの中で世界文化遺産に登録されている中城城跡と勝連城跡に匹敵するグスクといえる。

北谷城の築城主体者についての明確な記録はないが、言い伝えでは金満按司、大川按司、谷茶按司等三つの按司系統それぞれが興亡を繰り返して最終的には首里城を中心とする王権に組み込まれたとされている。首里王府によって編纂された琉球最古の国歌謡集『おもろさうし』の巻十五（1623年編集）には「きたたんのてだ」（五十五）、「きたたんの世のぬし」（五十七・五十八）の名が見えているので、ある時期に彼らが城主だったことはまず間違いないであろう。また、同国歌謡集には北谷按司が大御酒を造り、酒蔵を建てて勝連にいる「おもいせざ」（思い兄者）を招待し、鑑を手土産にしようとして歌ったおももろも残っている。当時の北谷城の光景や隣接する按司との人間関係などを垣間見ることのできる内容である。

縄張りには第125図①の一の曲輪から四の曲輪までの主体部、②の北西側先端部、③の丘陵東側尾根部、④の白比川沿いの丘陵北側崖下段丘部、⑤の「ノロ道」と呼ぶ南の大手道を含む南側段丘部に分けられる。

①の主体部は、短軸南北幅約165m、長軸東西長さ約300mの南北に走る琉球石灰岩丘陵上に、標高44.7mを測る東の最高所にして一の曲輪を置き、西へ順に二の曲輪、三の曲輪、四の曲輪と並ぶ。

一の曲輪は、琉球石灰岩の自然地形を巧く利用して築かれている。岩盤と岩盤の間を切石や野面の石積でつなぐことにより線縁（曲輪を囲む石垣や土塁の上端ラインのこと）とし、ほぼ台形である。琉球石灰岩が露出する自然地形と人為的に削平された平場とに分けられる。平場の面積は60㎡ほどであるが未発掘のため詳細は不明である。白比川に接する北面と古集落側の南面では琉球石灰岩の切り立った断崖が遮断線になり切石積の城壁は見られない。しかし東面では、発掘調査によって城壁の根石にあたる二列の石列が検出された。またこの城壁の南東側のコーナー部でも切石積の根石を二段確認することができた。いずれの石垣も琉球石灰岩を切石加工したもので長軸が50～60cm、短軸が30～40cmの比較的大きめの石材が使われている。発掘されたこれらの根石から城壁を復元すると、厚さが幅9m程の重厚な石垣だったことがわかった。一の曲輪の東端部にこうした城壁が築かれたのはこのグスクの弱点が東側に続く丘陵部だったからであろう。この弱点を補うため一の曲輪から東の丘に続く斜面下部に堀切(a)この堀切は発掘調査の結果16世紀頃には埋没したと考えられている）を設け、さらに尾根続きの東側に出曲輪（主郭から離れて設けられた曲輪のこと）を置いたのである。堀切地表面の標高は約36m、一の曲輪東端部のトップの標高が約44m、その比高差は現状でおよそ8mもあり、東端部の石垣が残っていたと仮定して石垣

の高さを4m（根石幅の厚みが9mもあることから石垣の高さは少なくとも4m以上はあったと考えられる）と考えた場合、堀切底からの比高差は10m以上になる。防衛ラインとして十分機能する。さらにその東の先にも出曲輪を置いてあるので東からの侵入者に対しては完璧な遮断線となった。侵入者に備えた腰曲輪は、じつは堀切の北側にも置いてある。堀切がある周辺は、一の曲輪から東に傾斜する斜面下部にあたり、標高が最も低くなったところで白比川からの侵入には嚴重な警戒を要する地域となる。そうした弱点をカバーするために置かれたのが腰曲輪群(b)である。

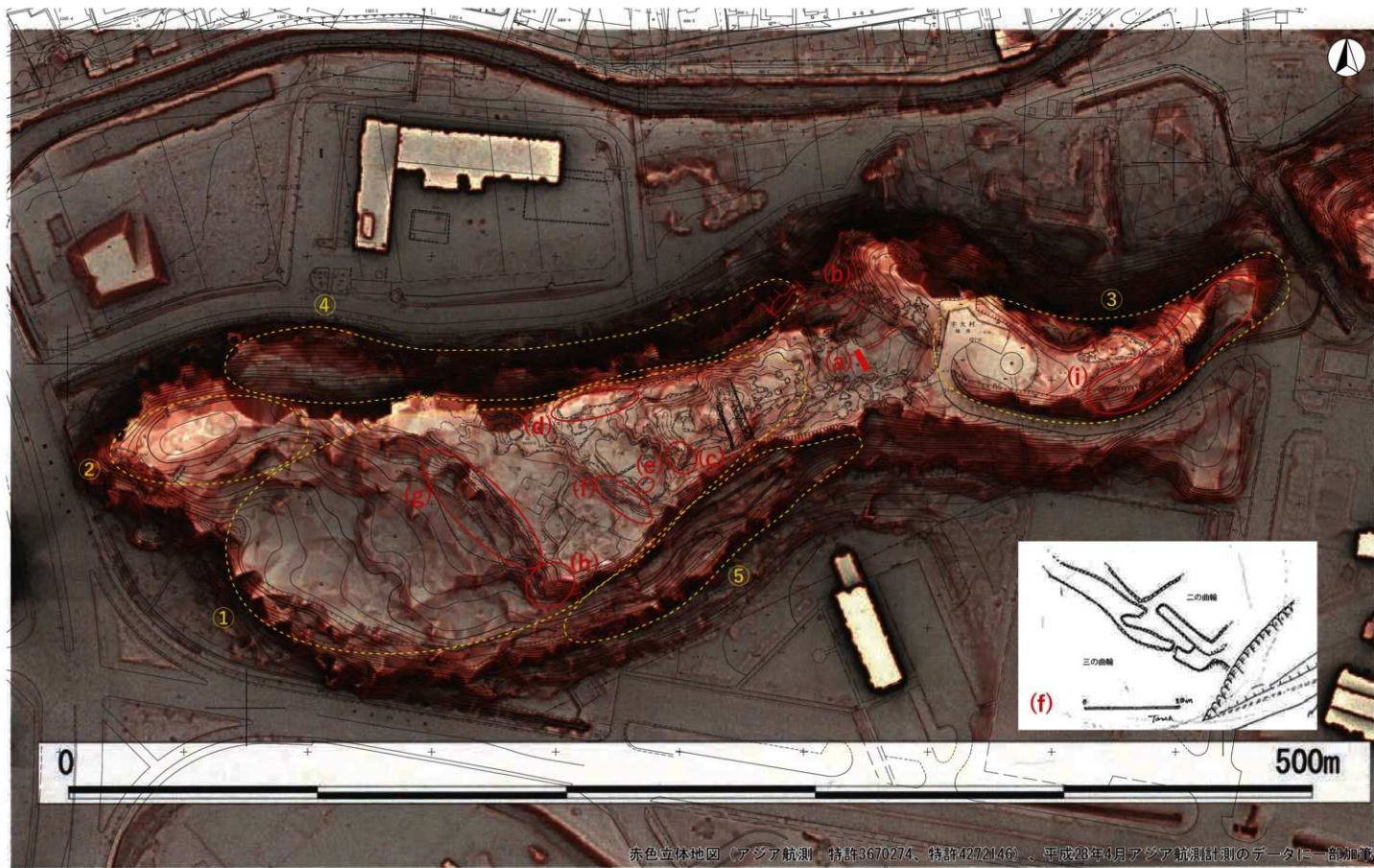
一の曲輪の虎口は、地形的な形状からみると南壁側に開いていたとみられるが、後世の擾乱によって大部分の石垣はすでに崩れ落ちほとんど原形をとどめていないので断定はできない。なお、一の曲輪東端部城壁周辺の発掘では、石弾や骨鏃などの武器類が出土した。この城壁沿いで実戦があった可能性もある。

二の曲輪の平場の面積は280㎡である。一の曲輪と二の曲輪の間は、琉球石灰岩の自然地形を残したままになっているが南東側に石積(c)が見られるので、琉球石灰岩の高低差を利用しながら一の曲輪との塁線にしていたと思われる。この曲輪の北面には付属する腰曲輪(d)が断崖に沿って設けられている。また、三の曲輪との境には雑然とした石積の塁線（曲輪縁の上端のラインのこと）が認められた。その下部を発掘したところ加工された幅2mを測る石垣の根石部分が検出されたことで現在みる雑然とした石積は、加工された面石が除かれた後の中込石だということが分かった。曲輪内部の約三分の二は、琉球石灰岩の露頭に被われているため、平場そのものの面積はかなり狭くなっている。平場の発掘調査では、建物に伴う基壇の一部ではないかとみられる石列遺構と西壁の塁線に直交するようにして葎(しとみ)石垣(e)が見つかった。そのことから曲輪の内部は狭い空間でありながらも居住空間と通路とが仕切られていたようである。出土した貿易陶磁器の年代観によると検出された遺構群は14世紀～15世紀中ごろと認識されている。また、貿易陶磁器がごとく被熱した状態で出土していることからこの時期に焼け落ちたものとみられている。

この曲輪の虎口は南西側に開いていたと考えられているものの後世の擾乱を大きく受けたため構造については判然としにくい。しかし、残された石積の塁線と発掘で検出された根石列の検討をおこなったところ縄張図(f)のような外構形の虎口構造だったのではないかと筆者は考えている。

三の曲輪は、二の曲輪の西側に連なる曲輪で二の曲輪との落差は2mほどである。一の曲輪や二の曲輪に比べ岩盤の露出が少なく平場面積も3200㎡と広がっている。曲輪が置かれた区域は元々東から西に向かって傾斜する地形であり、こうした傾斜地に平坦な平場を確保するため大掛かりな造成工事を行っている。最も低くなった西側では1m以上の造成層が確認された。造成された時期は、出土した土器の炭化物から13世紀後半から14世紀代である。

曲輪内では高低差や仕切り畔および岩盤と岩盤の間のスペースをつかった平場造成などが確認されることから、この広い平場がいくつかの区画空間で構成されていたことがわかる。後世の畑区画としての疑問は若干残るものの、区画そのものが何れも均一化しているのをみると、こうした空間が三の曲輪内における建物の敷地空間だった可能性は高い。その一つとして三の曲輪南側における発掘成果が挙げられる。発掘調査は、北谷町教育委員会が熊本大学考古学研究室と1991年に実施し、その調査成果が「北谷城第七次調査」として報告されている。それによると、この発掘区では門跡とそれに並列する建物跡および通路遺構などが検出されている。また、伐採によっても三の曲輪中央部に方形に区画された石積も確認されている。この石積で圍繞されている区画は、「殿」と称され地元の人々に尊崇されているが、近年になってグスク内にあったいくつかの拝所もこの一角に集められ遷座するようになった。さらに曲輪の北西部にあたる「西グスク」に連なる尾根上の



赤色立体地図（アジア航測：特許3670274、特許4272146）、平成28年4月アジア航測計測のデータに一部加筆

第125図 北谷城の縄張り

発掘調査においても石垣の根石部分と基壇上に建つ建物跡が発掘調査で検出されている。とくにこの区画では、オオムギ、コムギ、イネ等の炭化物、威信財となる貿易陶磁器、鉄鍔や石弾などの武器、銭貨等が出土していることから軍倉跡ではないかと筆者は考えている。炭化物の年代測定では13世紀後半から14世紀前半の年代を示しているようである。

曲輪の北側と南側は、東から続く切り立った断崖に面しているため重厚な石垣は築かれていないが、北側には付属する腰曲輪が岩盤と岩盤の間をつなぐように設けられている。また南側では、付属する腰曲輪はないものの粗雑な低い石積が確認できる。曲輪西側の塁線つまり三の曲輪と四の曲輪との間は、岩盤と岩盤の間をつなぐ石積や自然地形を巧く組み合わせ仕切られている。両曲輪が立地する高低差は3mから4mもあり防御ラインとして十分に機能するにもかかわらず三の曲輪と四の曲輪の塁線に沿って長さ約30m、幅1,5mの腰曲輪(g)を置き、石垣上面にも平場を拵え、さらに四の曲輪側に向かって二カ所の雉、つまり突出部を置いていることも四の曲輪からの侵入に対しては神経質すぎるほど厳重に警戒していたことが縄張り(第125図)から読み取ることができ。ではこうした二重三重の防御施設を構築しなければならなかったのはなぜだろうか。おそらく、後述するようにこの三の曲輪の下方に続く四の曲輪南東側に大手の虎口、北西側と南端崖下に懸門が開いていたからではなかろうか。同一の曲輪内に三カ所の虎口があると防御上脆弱になる。敵軍の侵入を許せば次に三の曲輪が危険に陥ることは明白である。そうした防衛力の脆弱さを克服するため三の曲輪と四の曲輪の間に強力な防御ラインを設ける必要が生まれたのではないだろうか。

三の曲輪の虎口は西の隅に開いている。この虎口には、西に大きく張り出す琉球石灰岩の大きな岩が接続する。大岩の上に石を積み上げたり岩盤を削ったりして削平段を置いている。またその周囲が崖面を造るので防御施設として十分に機能する。つまり出丸的な小曲輪(h)になっているのである。この小曲輪は、南麓に展開する集落側から城に登ってくる「ノロ道」と称される大手道の監視と四の曲輪や三の曲輪の虎口を防御するのに都合がよい。実に巧くできている。

四の曲輪は城内で最も広い面積を有する。岩盤の露頭があまり発達していないこともあり、戦前・戦後のある時期まで畑として耕作されていたようである。戦後、米軍基地に接収されて以後は自由な立ち入りが禁止され耕作もできなくなり、しだいに曲輪全域がブッシュに被われるようになっていった。そのため曲輪内部がどういう構造になっているのか具体的にはわかっていない。地形図の上で見ると標高が高い東半分の平場と標高の低い西半分の平場との比高差は10m以上もあることから四の曲輪を補強するように、その西南側に石積が積み五の曲輪があった可能性もある。詳細な調査が行われていない現状では曲輪全域を一つの曲輪として捉え記述することにした。

曲輪の南から西縁にかけての区間は琉球石灰岩地形特有の切り立った断崖をつくりだしているため防御ラインの塁線となる石積がほとんど見られない。ところが崖の発達が見られない区間や登りやすくなっている一部の区間には粗雑な石積も散見でき全く自然の状態で放置されているわけではない。この北谷城は前述したように琉球石灰岩の自然地形を巧く利用して築城した関係で、崖が発達している区間においては城壁に簡単に接近することが難しいためとくに石積みが高くせず、反対に接近が容易で防御するのに困難な区間は石積を相対的に高く積み、その弱点をカバーしようとしたものと思われる。

城と関連した付帯施設には城門、建物、井戸などいろいろあると思うが、この四の曲輪には、南側に大手の城門、西端部に井戸と関係すると思われる懸門、北西側に濠湾や白比川との関連が考えられる懸門が開いていることが確認できた。

南側の大手の城門は、四の曲輪南東側に位置しており鍵状になった甕城である。つまり外枳形の

構造になっている。発掘調査によって城門に伴う北側の壁石(切石加工された根石7~8個が残存)と石階段の一部が検出された。残念なことに南側の壁石は失われ中込石と思われる栗石が僅かに残っているだけであった。そのため城門全体としての形状は把握できなかった。「改造池城橋碑文」(1821年)には白比川の本橋を石橋に改造したことが記されており、北谷城の城門や城壁などの石材が架橋時に持ち去られた可能性は高い。現存する遺構から城門を復元すると、北側の壁石の長さが3m、石垣の高さは2.5mを測る。壁石の中心部には琉球石灰岩製のコ字形に削られた石材がはめ込まれておりホロソ石の上部構造ではないかと思われるが判然としない。城門の内側には岩盤が露出しているところと栗石が点在しているところがあり床面は敷石だった可能性がある。城門入口の間口は石階段の幅から推定するとほぼ2m。城門の向きは東向きで、その前に踏面1mの石段が4段取り付き、この石段を南に下っていくと古集落の伝道集落に至る。グスクと伝道集落をつなぐ道のことを地元の人たちは「ノロ道」(グスクで行われる神事の際、神女であるノロが馬に乗って通る道ということからの呼称)と称している。城門から城内に入る道が敷かれた坂道となる。その坂道の北側には岩盤と雑石積を組み合わせた袖石垣が築かれている。ところが坂道を挟んだ反対側の地形を見ると窪地となり谷底のようにになっている。しかしそこには谷底との仕切り壁となる袖石垣が築かれてない。こうした構造が取られたのは、城門を突破して城内に入ってきた侵入者の右脇腹に対して出丸方向からの横矢を効かす工夫からであろう。城門の建造時期については、出土する遺物の年代観から14世紀から15世紀中頃といわれる。

四の曲輪の西端に城壁の畧線が途切れ半円形に挟まれたところがある。梯子さえ使えば城外の崖下に容易に降りることができ、降りたところの近くに湧水がある。この湧水は地元の人々から塩川(井戸)と呼ばれ、飲み水や豆腐造りにも利用されるほど良質の水が湧き出る由緒ある井戸として知られる。古くから神聖な場所として尊崇され現在に至っている。北谷城は琉球石灰岩の上に築かれているということもあって城内には水場となるようなところがない、またこれまでの調査でも水場は全く確認されてない。水の確保には大変苦労したと思われる。塩川は城の畧線の直下にあり、城内近くで水が得られるところはこの塩川に限られる。したがってこの場所には、井戸に行き来する口としての懸門があった可能性が高い。

三の曲輪の北西部は、西グスクに向かって舌状にのびる尾根続きの基部にあたることである。ここに設けられた発掘区では石垣の根石が検出された。根石がやや大きめの石材であること、根石の石列がカーブを描きながら三の曲輪と四の曲輪の間の石垣に向かってのびていくことが確認された。そのことからこの根石の石列は、三の曲輪と四の曲輪の遮断線となる城壁石垣の基礎根石であることが考えられる。

三の曲輪北西部の北側崖下には、自然地形でありながらあたかも帯曲輪の形をした庇状の段丘面が丘陵上の畧線と並行して東西にのびていることが確認された。北谷城の丘陵は、琉球石灰岩と砂岩層が互層を成し、両層の不整合部では砂岩層の浸食度合いが強いために石灰岩層が庇状に発達する。丘陵縁部の中腹ではこうした地形が削平段のようになるため、自然地形でありながら腰曲輪のような機能を持つことになる。こうした地形は白比川に面した北側(④)と伝道集落につながる南側(⑤)で顕著である。とくに北側では白比川を介して港湾となる白比川河口部に接するため東シナ海に開く玄関口となり得る。この北谷城が海と繋がるためにこうした琉球石灰岩段丘地形が有効に使われたと思われる。踏査の結果、北谷城三の曲輪北西部に懸門が置かれていたことが突き止められた。また、佐敷興道の墓と伝わる岩陰や金満按司の墓と伝承される半洞穴などは、この懸門監視のための施設として使われたとも考えることができる。

②の北西側先端部には琉球石灰岩地形を平らに造成した平場を置いている。この平場のことを地元で「西グスク」と称し、城内で最も神聖な空間として崇められ聖地になっている。「西グスク」では顕著な石積は認められないが、切り立った断崖の縁を巧み取り込む形で塁線とする。ここからは東シナ海を見渡すことができ、グスクの北を流れる白比川の河口は眼前にある。一種の物見曲輪（主郭とは別の眺望の効く高所にあって、いち早く相手方の動静を把握するための曲輪で、物見の櫓を建てることもある）であろう。北谷城西端の城域として捉えられる。また、白比川を挟んで北側の対岸には河川と並走する琉球石灰岩の小丘陵があり、その先端部にはこのグスクの出城と伝わる「池グスク」があったとされるが戦後の米軍基地建設に伴って丘陵ごと削平され失われてしまった。

③の丘陵東側尾根部には石切り場跡の削平段地形を巧み取り込んで出曲輪を置いている。現在、この曲輪には直径9mもある米軍用貯水タンクが建設され尾根の頂部が削られ平坦な地形になっているが、1945年頃制作の米軍地図で見ると標高153フィート（約46.6m）を測り、もともとの曲輪のトップ（154フィート、約46.9m）とほぼ同じ高さだったことがわかる。100m足らずの至近距離に主郭部と同じ高さの尾根が連なることは城にとって大きな弱点となる。こうした地形的弱点をカバーするためにこの丘に出曲輪を置いたのである。

令和元年、米軍から基地内調査の許可を得て縄張調査を実施した。その結果、丘の中腹部に岩盤に残された石切痕や切り出された石材を確認することができた。石材の切り出しは琉球石灰岩特有の摂理面から切り取られている。切り取られた岩盤の切断面は直線的である。上面観は畦畔状を呈して削平段地形(i)をつくりだしている。こうした様相の岩盤は、琉球石灰岩の層理を巧み切り取った後にできるもので自然地形にはみられない。おそらく人間の手が加わったためこのような特殊な形状をしているのであろう。琉球石灰岩の岩盤に刻まれた削平段地形は、丘の下から上ってくる寄せ手に対しては遮断線となり有効な防御施設となる。以前の調査でもこの尾根伝いの西側崖下一帶から築城時期に伴う石切り場跡が確認されたという報告がある。おそらく石切り場跡に残る特殊な形状の削平段を巧み取り込むことで出曲輪として機能させたと思われる。出曲輪は、敵軍を遠方であらえて、主郭の防戦態勢を有利にするとともに敵軍を挟撃するのに重要な曲輪となる。地元の人々が「東グスク」と称しているのもかつてこの丘が出曲輪だったという土地の記憶を反映しての呼称ではなかろうか。この曲輪には以前「東の御嶽」も遷座していたというが米軍基地に接収され立ち入りができなくなったため現在では三の曲輪内に別の御嶽と一緒に合祀されている。

第2節 北谷グスクの拝所と祭祀

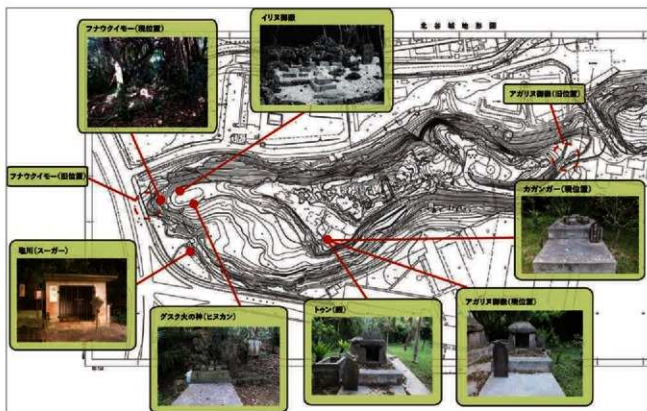
琉球大学名誉教授

赤嶺 政信

一 拝所

現在、北谷グスク内にある主要な拝所としては、アガリヌ御嶽、イリヌ御嶽、トゥン（殿）がある。標柱あるいは説明板には、それぞれ「東り御嶽」「西御嶽 十三香炉」「北谷城内『殿』」と記されている。所在地は、アガリヌ御嶽とトゥンが三の曲輪、イリヌ御嶽が西側丘陵の先端に近い所である。ただしアガリヌ御嶽は、本来はグスクの東側丘陵にあったもので（第126図参照）、現在地で祀られるようになった経緯は以下のとおりである。

戦後北谷グスクが軍用地として接収されたことを受けて、グスク内にある3つの拝所は1960年にキャンプ瑞慶覧内の長老山に移された。1993年に再びグスク内に遷座されることとなったときに、アガリヌ御嶽は元の場所ではなく、現状のようにトゥンのあった三の曲輪の一角に祀られようになった。アガリヌ御嶽があった場所には杭を打ち込み、元の位置がわかるようにしてある。



第126図 北谷城内の拝所

1713年に首里王府が編集した『琉球国由来記』には「北谷城内之殿」というのが見えるが、現在三の曲輪にあるトゥン（殿）に該当することは間違いない。さらに『由来記』には、北谷ノロの「崇所」として、「ヨシノ嶽」（神名テンゴノ御イベ）と「城内安室崎之嶽」（神名イシラゴノ御イベ）の2つの御嶽と「北谷巫火神」が登場する。「北谷巫火神」は、現在の北谷ノロ殿内で祀られているノロ火の神に該当するが、由来記の2つの御嶽と現在の2つの御嶽との対応関係はどうなっているのか。

『北谷町海岸・海城地名』（北谷町史編集事務局編 1985 北谷町役場）では、城内安室崎之嶽についてつぎのように説明している。

北谷グスク内安室崎の御嶽は、岬の突端根方、南の海上にむく地点に位置してあったが、戦後米軍による道路拡張に伴って、遷座した。この御嶽は、ニライ・カナイへの遣拝所と推測されるが、御骨（ミクチ）があったとの伝承もある。（13頁）

この説明で不可解な点は、「岬の突端根方」と「米軍による道路拡張に伴って、遷座した」という部分である。「根方」というのは岬（丘陵）の下という意味だとすれば、「城内安室崎之嶽」という名称と食い違うことになる。また、城内安室崎之嶽が「城内」（丘陵の上）にあったならば、道路拡張によって遷座する必要は生じないと思われる。

じつは、現在、イリス御嶽よりさらに奥の方にフナウクイモー（船送りのモー＝丘）と呼ばれる拝所（図版109）があるが、このフナウクイモーは、かつては現在の国道付近にあったもので、戦後の道路拡張の際にグスク内に移されたものであることがわかっている。先の安室崎之嶽についての説明は、フナウクイモーのことに混同している可能性が考えられる。『北谷町の拝所』（北谷町教育委員会編・発行 1995）では、『北谷町海岸・海城地名』の説明を参照しつつ、アガリヌ御嶽はヨシノ嶽に、イリス御嶽は城内安室崎之嶽に該当するという見解を示している（91～92頁）。ただし、その根拠については必ずしも明確とはいえず、さらに説明の余地があると思われる。



図版109 フナウクイモー 現況（平成30年9月27日撮影）

城内安室崎之嶽とイリス御嶽の対応に関しては、「安室崎」の「崎」が岬に通じる言葉であることに注意したい。すなわち、北谷グスクはかつて海につきでるかたちの岬状になっていたグスクであり、イリス御嶽がより海に近い西側突端部に位置していることと城内安室崎之嶽という名称は符合する。さらに、『由来記』における城内安室崎之嶽の神名は「イシラゴノ御イベ」であるが、イシラゴは石あるいは岩の意味であり、イリス御嶽のイビ（石の香炉）の背後に岩が突き出ていることと神名のイシラゴは関連していると推測することができる。なお、ヨシノ嶽のヨシ、および神名とされるテンゴの語義については、いずれも不明である。

明治17年頃に田代安定によって記録された『沖繩島諸祭神祝文類別表』には、北谷村の「神拝所」として「東り城御嶽」「イリ城御嶽」「ノロ社」があげられている。「ノロ社」はノロ殿内のことであろう。「東り城御嶽」「イリ城御嶽」と御嶽名に「城（グスク）」という字が入っているのに注意したい。じつは、アガリヌ御嶽があった一帯をアガリグスク、イリス御嶽がある一帯をイリグスクと称したという伝承があり、田代の記録からすると、明治17年頃には「アガリグスク御嶽」と「イリグスク御嶽」という呼び方があった可能性が想定できる。

イリス御嶽の標柱に「西御嶽 十三御香炉」と記されているとおり、イリス御嶽には13個の香炉が安置されているが、『北谷町の拝所』によれば、13個の香炉は、十二支とそれを一つに結ぶ火の神だという解釈があるという（92頁）。

グスクの西側丘陵部に「グスク火の神」という拝所があるが、イリヌ御嶽に入る前に拝む拝所とされる。また、イリヌ御嶽は男子禁制だとされ、御嶽の入口付近に「この聖〔城〕 男子立入るべからず 北谷祝女」と記された石製の標柱が立つ。

三の曲輪の一角に「カガンガー」という拝所があり、名称が記された石碑には「東リ御嶽グサイ、平成十七年七月吉日建立」とある。「東リ御嶽グサイ」というのは、「東リ御嶽と関連している」という意味であるが、じっさい、カガンガーという井泉が、かつてはアガリヌ御嶽の近くにあったと言いつたされている。

アガリヌ御嶽の祠の右脇に、今帰仁のクボウ御嶽への遥拝（ウトウシ）用とされる石が安置されているが、その由来については不明である。

グスクの西側麓には北谷スーガー（塩川）という井泉が現存する。『北谷町の拝所』によれば、この井泉はグスクグサイニーガーとも呼ばれ、戦前までは宇北谷の人々が生活用水や正月の若水を汲む井泉として利用し、現在は、北谷ノロ殿内が正月3日のハチウビーと8月11日のカーウビーの行事の際に拝んでいるという（97頁）。

二 祭祀

『琉球国由来記』では、ヨシノ嶽と城内安室崎之嶽は北谷ノロの「崇所」とされているが、2つの御嶽においてどのような祭祀が行われたかについての記述はみえない。一方、グスク内のトゥンに関しては、以下の記事が見られる。

北谷城内之殿 (北谷村玉代勢村)

稲二祭之時、花米九合宛・五水八合宛（此時、朝神・夕神二度）・神酒一宛（此時、惣地頭供物、按司同断）、花米九合宛・五水四合宛（此時、朝神・夕神二度）、神酒一宛（玉代勢地頭）、花米九合宛・五水六合宛（此時、朝神・夕神二度）、伝道大屋子・津嘉山大屋子・吉味大屋子。シロマシー器・神酒壺宛（麦。玉代勢村百姓中）、神酒三宛（麦。北谷村百姓中）、供之。北谷巫ニテ祭祀也。

「稲二祭」は、稲の穂祭（現在の五月ウマチー）と大祭（収穫祭、六月ウマチー）のことである。この記事から、稲二祭のときの供物は花米、五水（泡盛）、神酒（ウンサク）、シロマシ（稲穂をすりつぶして水を加えたもの）などで、供物の提供者は惣地頭と按司地頭、玉代勢地頭（脇地頭）、伝道大屋子・津嘉山大屋子・吉味大屋子（北谷間切の3名の夫地頭）、北谷村の百姓、玉代勢村の百姓らで、司祭するのは北谷ノロであったことがわかる。「朝神・夕神二度」とは、朝と夕刻の2回にわたって行われる神行事という意味である。

近年の北谷グスクでの祭祀については、2019年6月17日の五月ウマチーの観察にもつづいての現状の記述からはじめることにする。旧暦5月15日の午後4時頃に、北谷ノロを含む北谷ノロ殿内の家人と北谷郷友会の役員など10名ほどが北谷グスクの三の曲輪に集合し、五月ウマチーの拝みの準備が始まった。主要な供物は市販されているバック詰めの米とピンシー（瓶子）2つで、ピンシーの1つは北谷ノロ殿内が、他の1つは郷友会が準備したものである。拝みが行われたのは、トゥン（図版110）とアガリヌ御嶽だけで、離れた場所にあるイリヌ御嶽を拝むことはなかった。グスクからノロ殿内に戻ってからは、あらたに参加した郷友会の関係者14、5名が一緒になり、ノロが主導してノロ殿内の祭壇に対する拝み（図版111）がなされ、6時頃には拝みは終了した。



図版 110 トウンでの拝み



図版 111 ノロ殿内での拝み

戦前から戦後にかけての時期の北谷グスクにおける祭祀については、1992年刊行の『北谷町史第三巻資料編2民俗上』（以下では『北谷町史第三巻』）を参照しながら整理していくことにする。

『北谷町史第三巻』では、五月ウマチーについて、以下のように説明されている。

北谷では祝女存命中は、玉代勢からはニブトツイ、伝道からはチナトツイの男性神役などが祝女殿内にお供に来ていた。祝女はシルバサージにマンサージ・結いあげた髪に山かずらを巻いて、馬ののってトウンに上がった。祝女ピンスのほか北谷・玉代勢・伝道の字ピンスも供えた。祝女なきあとは祝女殿内の家人がイリヌウタキ・トウン・アガリヌウタキにシムウンサクと祝女殿内のピンスを供え祈願している。(419頁)

先述したように、現在の五月ウマチーではグスクへ供物を供出するのはノロ殿内と字北谷郷友会であるが、かつては、北谷・玉代勢・伝道の3つの字から供物（ピンス）が供出されていたことがわかる。なお、この説明に登場する「祝女」は、先代のノロである。

さらに『北谷町史第三巻』では、六月ウマチーについての以下の説明がみられる。

北谷では各戸から米一合ずつを徴収し、クミウンサクをつくり、北谷グスク内にあるイリヌウタキ・トウン・アガリヌウタキに供える。ほかに白米一斗・ピンスを供え、マンサクの御願をする。このときも五月同様祝女のタキヌブイ（嶽上り）には、玉代勢からニブトツイ、伝道からはチナトツイの神役が来てお供した。(421頁)

ニブトツイは「柄杓取り」という意味で、沖縄の広い地域に見られた男性の神役名であり、儀礼の場において柄杓で神酒（ウンサク）を注ぐ役目を担う。玉代勢のニブトツイは、かつてはノロと一緒にグスクに登り、トウンでのウマチー儀礼の際に、神酒を注ぐ役割を担ったものと思われる。

チナトツイ（綱取り）は、一般にノロが馬に乗って拝所を巡回する時などにノロの乗る馬の手綱を引く役割を担う者のことをいい、北谷では五月と六月のウマチーのタキヌブイの際に、ノロの乗る馬の手綱を引いたものと思われる。

『北谷町の拝所』によれば、戦前は、北谷三箇（北谷・伝道・玉代勢）が合同で行う北谷大綱引き（13年マールの寅年6月25日）に先立ってのメーウガミ（6月23日の綱引き安全祈願）の際には、普段はノロ以外は立入りが禁止されているイリヌ御嶽へ、村の三役をはじめ一般の女性や男性が立入ることが許されたという（92頁）。

三 拝所が残っていることの意義

グスクが軍用地として接収されて以後、グスク内にある御嶽や殿などの拝所は、土地の改変がなされたアガリヌ御嶽は遷座せざるを得ない状況になったものの、アガリヌ御嶽以外は破壊されることなく残されていることを確認することができたが、以下の理由によりその意義は極めて大きいと思われる。

1点目は、沖縄のグスクは首里城がそうであるように、その内部に聖域（御嶽）を抱えていることが大きな特徴であることが指摘されてきたが、その点は北谷グスクにおいても確認することができ、グスクと御嶽との関係を考察する際の材料の1つとして貴重である点である。

2点目は、グスク内にある「殿」の存在に関わることである。1713年の『琉球国由来記』を参照すると、グスク内に「殿」が存在するのは、北谷グスク以外に、大里城、浦添城、中城城、越來城、勝連城などがあり、北谷グスクは、グスクとしての機能を失って以後もグスクが村落祭祀の祭場として使われていることをめぐる問題を考える際の貴重な材料のひとつといえる。

3点目として、グスク内に拝所が残っているために、今日でもグスク内での五月ウマチーと六月ウマチーの祭祀の実施が可能になっている点をあげることができる。そして、グスク内やノロ殿内での祭祀の在り様は、沖縄におけるかつての農村の村落祭祀の実態やその歴史をめぐる問題について考察する際の貴重な参考資料といえる。

参考文献

- 田代安定『沖縄島諸祭神祝女類別表』
- 北谷町史編集事務局編 1985『北谷町海岸・海域地名』北谷町役場
- 北谷町教育委員会編・発行 1995『北谷町の拝所』
- 北谷町史編集事務局編 1992『北谷町史 第三巻資料編2 民俗上』北谷町役場
- 外間守善・波照間永吉編 1997『琉球国由来記』角川書店

第Ⅶ章 まとめ

北谷城では、昭和58年度から令和元年度まで保存目的のための発掘調査等が行われた。本章では、前章までに述べた内容に触れながら、過去30余年の調査成果をまとめる。

第1節 地質・地形

1. 地質・地形

北谷城は、北谷町役場の南およそ1.8kmに位置し、東西約500m、南北約150m、標高約44mを最高地とする丘陵上に築かれている。丘陵の地質は、主として琉球石灰岩と石灰質砂岩の互層からなり、比較的下部では海生化石を含む石灰質砂岩が卓越する。石灰質砂岩は固結度が弱いため浸食されてノッチ状を呈する。このノッチ状になった岩陰部で貝塚時代後2期（概ね7世紀から11世紀頃）の遺物が散見され、近世墓や戦時中の防空壕といった横穴が構築されている。丘陵縁辺部では、ノッチの底部分が崩壊して断崖となり、特に白比川に面した丘陵北側では顕著である。丘陵麓では、地表下1～2m（標高2～6m）で基盤岩類（島尻層群の泥岩層、通称クチャ）が確認された。このことから丘陵を形成する琉球層群の厚さはおよそ40mと推測される。

なお、白比川の対岸側に並走する小丘陵一帯でも基盤岩類が確認でき、北谷城の丘陵から連続するような地質であることが判断できる。

2. 地形の変遷

戦後、米軍の占領下に置かれた沖縄県では、基地建設に伴って戦前の地形は大きく改変された。北谷城でも例外ではなく、尾根や小丘陵は分断・削平され、丘陵南麓から広がっていた伝道・玉代勢・北谷の三箇字（集落）と北谷ターブックワ（田圃）は造成工事によって消滅した。

近世に描かれた古地図や文献史料等を見ると、近代とほぼ変わらない位置に道や集落が認められるため、近世から近代までは地形の大きな変化がなかったと判断される。

一方、グスク時代の地形は後代とはやや異なっていたようである。試掘調査の結果、丘陵南側平坦地には河川があり、12世紀頃までに埋没した湿地帯があったようである。また、丘陵麓まで海が迫っていたことが確認された。洋上に突き出た地形は自然の要害をなし、良港となり得る河口を南北に持つ地勢は、防衛と交易を行うのに適した条件を具備していたと予測される。

丘陵まで海が迫っていた様子は、北谷城から北へ約2km離れた平安山原遺跡（沖積地：キャンブ桑江北側）の発掘調査の結果から類推できる。同地では11～14世紀に河口部で浜堤が発達し、陸地化と共に集落が形成される過程が確認された。このように、グスク時代の地形は近世以降とは異なる様相であった。なお、北谷城周辺における先史時代の様相は不明である。

第2節 丘陵利用の変遷

北谷城が立地する丘陵では、貝塚時代前3期から現代までの遺物が確認されている。出土遺物の年代から、同丘陵が利用された時期を概ね5期に大別した。

1期（貝塚時代前3～4期。縄文時代中期後半～晩期前半に相当）

貝塚時代前3～4期の遺物が少量確認される。『北谷町の遺跡』（1994）によると、「一の曲輪の

東側（後述する堀切付近）では、伊波・萩堂式土器系統の土器が採集できる地域」とされている。本書刊行時点では、当該期の遺構は確認されていない。

2期（貝塚時代後2期。古墳時代後半～奈良・平安時代に相当）

平地の底部から胴下部にかけて括れた形状を持つ土器いわゆる、くびれ平底土器が多数確認されている。丘陵上の発掘調査ではグスク時代の遺構をほとんど掘り下げていないため、その下位にあると予想される1～2期の遺構の有無は不明である。2期のオリジナルな遺物包含層は未確認だが、遺物の量及び出土状況から本来存在していた遺物包含層が後代に改変されたと判断される。斜面地の岩陰部では、くびれ平底土器と共に人骨や海産貝等が確認できる。

3期（グスク時代。概ね中世に相当）

グスク土器や中国産陶磁器等が大量に確認される。11～12世紀代の遺物は僅少で、平地の玉代勢原遺跡が密に出土している。全期を通じて3期の遺構、遺物の量が多く、最も丘陵を利用した時期といえる。中でも15世紀代の青磁が他を圧倒していることから、この頃に最盛期を迎えたと考えられる。三の曲輪の地山の上面では、グスク時代のピットとそれらを覆う造成土が確認された。また、石垣や殿舎等の遺構が構築されるなど大規模な普請が行われ、遺構からみても、本期に最も丘陵を利用したことは明らかである。石垣を除くほとんどの遺構は16世紀前半までに造成に伴い埋没し、廃城と化した。本期は、遺構や遺物の状況から、前期（13世紀後半～14世紀）、中期（14世紀～15世紀中頃）、後期（15世紀中頃～16世紀前半）に細分が可能である。

4期（近世～近代）

沖縄産陶器や本土産磁器等が確認される。廃城となった北谷城は、三箇字の祭祀場として利用されていた。丘陵上にあった御嶽や拝所、祭祀を取り仕切っていた「北谷ノロ」の存在や祭祀の様子は、近世に記された史料から確認することができる。一の曲輪北側から明朝系瓦が出土しており、何らかの施設が存在が予想されるが、詳細は不明である。丘陵斜面地には、横穴式の古墓が80基以上確認された。1960年代には、これらの古墓を基地外へ移転するよう米軍の命令が出ているため、現在はほとんどが空き墓となっている。墓庭や墓室内に残された厨子甕の破片や聞き取り調査等から、これらの古墓は4期に造営されたものと判断される。

5期（沖縄戦～現代）

沖縄戦に関する遺構や遺物が確認される。戦時中には、丘陵上部や麓に塹壕や蛸壺等が造られた。白比川に面する北麓には、近隣の集落から駆り出された村人により造られた「特攻艇秘匿壕」が残存している。戦後、一帯は全て基地として接収され、グスク内の拝所の一部や古墓はグスクの外へ移転が余儀なくされた。1993年、グスク外の拝所は再びグスク内に遷され、現在も祭祀が行われている。



第127図 2期（貝塚時代後2期）のイメージ図（作画：中村恵氏）



第128図 3期（15世紀頃）のイメージ図（作画：中村恵氏）



第129図 4期（17～18世紀頃）のイメージ図（作画：中村恵氏）

第3節 層序・遺構・遺物

本節では、5期に分けた丘陵利用時期の中で最も利用度が高く、かつ発掘調査の記録が残る3期（グスク時代）の遺構や遺物等を中心に記述する。初めに、基本層序（5枚）の概要を述べる。

1. 基本層序

- I層：近現代の表土及び耕作土。2層（a：表土及び攪乱、b：耕作土）に細分可能。
II層：近世の層。2層（a：赤色土・b：赤～赤褐色土）に細分可能。
III層：グスク時代の層。5層（a：黒褐色土、b：黒色土、c：褐色土、d：赤色土、e：黒色土）に細分可能。III a層は廃城後（近世）の遺物を含む。
IV層：グスクの丘陵南麓の湿地の堆積層。12世紀頃までに形成されたと考えられる。
V層：地山。丘陵上で確認される赤色の層。グスク時代のピットが地山の上面で検出される。

丘陵上部では、地山（V層）まで完掘した調査区が少ないため暫定的な所見ではあるが、地山の直上に黒色土（III e層）が認められる。III e層では、くびれ平底土器の他、グスク時代の遺物が出土している。このことから、III e層はグスク時代の遺物包含層と捉えた。また、三の曲輪北西部の地山上面で検出したピット内の埋土から採取した炭化物の年代測定を行ったところ、13世紀後半から14世紀後半の年代が得られた。三の曲輪北西部では、III e層の存在は不明であるため、地山上面で検出した上記ピットがIII e層期の遺構年代を示すものではない。しかし、地山直上の遺物包含層（III e層）及び地山上面に構築されたピット埋土に含まれる炭化物の年代から、グスク時代以前の遺物包含層及び、遺構は未確認である。

三の曲輪南西部では、黒色土（III b層）と赤色土（III d層）の互層堆積が確認された。地山と判断される赤色土と黒色土の互層は厚さが1mを越え、30枚程に分層が可能である。築城に伴う造成土と考えられる。層中から、12世紀半ばから13世紀後半の年代が得られたグスク土器や13～14世紀代の陶磁器が出土した。15世紀代のものは含まれていなかった。これらのことから、三の曲輪南西部の造成の時期は、早ければ13世紀後半、遅くとも14世紀代となる。

二の曲輪南西側では、部分的な盛土に伴う褐色土等（III e層）が確認された。同層の掘削は行っていないため遺物は得られていない。グスク時代の堆積層と考えられるが、詳細は今後の調査に委ねたい。

グスク時代の遺物を多く含む層に、I b層とIII a層が挙げられる。前者は近現代の耕作土、後者はグスク廃城後の造成土と捉えた。但し、III a層の下部は、グスクが機能していた時期の遺物包含層の可能性があるため、一概にIII a層の全てが廃城後のものとは断定できない。二の曲輪では、I b層の時期にIII a層上部を改変している様子が土層断面で確認できた。このことから、本来のIII a層は現状よりも厚さを有していたが、I b層の時期に改変されたと判断した。そのため、I b層にはグスク時代の遺物が多く含まれ、III a層には近世以降の遺物が混入している、と解釈した。

本章2節2期の項及び、本節で記述したように、丘陵上において貝塚時代後2期の遺物包含層は認められていないが、くびれ平底土器の出土量から推測すると、本来存在した貝塚時代後2期の遺物包含層が後代（グスク時代）に改変を受けたと思われる。グスク時代の遺物包含層もまた、近現代の耕作行為によって攪乱を受けているため、グスク時代の層に混入したくびれ平底土器等がグスク時代の遺物同様I b層から出土している、と捉えた。

三の曲輪では、未攪乱の赤色土層が確認されている。上位の耕作土（I b層に該当）、下位の黒褐色層（III a層に該当）とは区別され、出土遺物にグスク時代の遺物と近世の遺物が混在することから、近世頃の層（II a層）として位置付けた。

丘陵南の平坦地では、基盤のクチャ層のほか、東西に軸を持つ湿地帯が確認された。湿地帯は12世紀までに埋没（IV層）したと考えられており、丘陵麓から平坦地（湿地帯の埋没土上部）までは、赤～茶褐色土を呈する土砂（II b層）が堆積している。堆積及び土色の状況から判断すると、土砂の供給源は丘陵上部または斜面地の地山由来と考えられる。土砂流入の理由として、グスク築城に伴う造成或いは、近世以降の耕作によって裸地（またはそれに近い状態）が生まれ、麓に土砂が流入したと想定される。既報告によると、麓から平坦地にかけて堆積するこれらの層（調査時のIII～V層）の時期は、戦前（III層）とグスク時代（IV、V層）としている。しかし、調査時のIV、V層から近世の遺物が出土しているため、本報告では近世の層と捉え直した。IV、V層の帰属時期は、今後の調査で明らかにする必要がある。

2. 遺構

主な遺構には、石垣や基壇（殿舎跡）、建物跡、城門跡、堀切跡、造成跡、柱穴（ピット）、石切り場等がある。これらの遺構の概要について記述する。

石垣

一～三及び四の曲輪の一部で確認された。一の曲輪では、大量の礫とその下に厚さ9mにも及ぶ東壁（根石）が検出され、堅牢な石垣の存在が明らかとなった。二の曲輪では厚さ2mを測り、西壁において、通路と想定される平坦面（W・X-99グリッド）が確認されている。総じて言及できることに、切石を用いた布積みはごく一部で、ほとんどは未加工の野面積みとなっている。これら野面積みの地中部には切石の根石（EL約38.0m）が残っていることから、元々は切石積みであった石垣の面石が取り去られて中込石が崩れたものと解され、一部米軍や町教委の調査により動かされた経緯はあるものの、本来の石垣や根石の位置を示唆していると思われる。なお、二の曲輪西壁に現存する野面の石垣は、根石から概ね1m程度の高さを有している。

基壇（殿舎跡）

二の曲輪（R-95～100グリッド）にて一直線上に配された切石をIII層中で検出した。切石上面のレベルは38.0～38.2m。二の曲輪の石垣（根石）とは軸を異にし、残存する石垣を単純に北へ伸ばした場合は基壇と交差することになる。そのため、①石垣と基壇には時期差がある、②石垣と基壇が両存する場合、石垣は直線的ではなかった、のいずれかが考えられるが、現在のところは不明である。他のグスク同様、北谷城における二の曲輪も按司の居所と思慮され、同基壇は殿舎に伴うものと判断される。III層の上部は近現代の耕作に伴って攪乱されているため、礎石の有無については不明である。基壇周囲から被熱した青磁、白磁、褐釉陶器等が300点以上出土しており、所産時期が16世紀まで下るものは認められない。

建物跡

三の曲輪北西部にて検出した。三の曲輪は北西部が西へ舌状に延びる地形をしており、縁辺部にて弧状を呈する根石が確認されている。根石内側（東側）のマウンド部分を掘り下げたところ、南

北に軸を持つ柱穴の並びが地山上面で検出された。当地から、威信財となる貿易陶磁器の他、武器や銭貨、植物遺体等が集中して出土したため、何らかの建物跡があったと想定された。物見台や倉庫等の存在が考えられる。周辺には石垣の中込石と思われる大小様々な礫が広がっている。突出した地形から白比川以北を一望でき、崖下には金満按司の墓が位置することなどから、同地は北谷城の中でもやや特異な空間だったと思われる。

城門跡

四の曲輪南東側にて確認された。門の規模は、残存状況からは高さ2.5m、奥行き3.0を測る。門は東に向いており、北側は崖に接する。城門跡の南方向へは布積みの石垣が5m程延び、西へ折れる。四の曲輪の外縁をなす石垣と考えられる。本城門は、地元の古老により「ノロ道」と称される道上に位置している。現在の地籍図には、麓から三の曲輪へ延びる里道があり、位置や形状がノロ道とほぼ一致する。これらの状況から、当該城門は北谷城における大手門と考えられる。

堀切跡

一の曲輪東側の斜面下部(ヨ-82～83グリッド)にて尾根を縦断する形で確認された。地表面から最深部までの比高差は約1mと浅く、床面は地山となっている。既往調査では堀切の可能性があるとしつつも、溝状遺構、くぼ地、との表現にとどめている。本報告では、遺構の位置や埋没時期、埋没層に含まれる遺物の年代幅等から堀切跡と捉えた。床面に近いレベルから礫を伴うピットが検出された。ピット内の炭化物からは14世紀前半から15世紀前半までの年代が得られている。

造成跡

三の曲輪W-77グリッドの西側にて確認された。地山由来と思われる赤色土が黒色土と互層となり、厚さ1m以上にも及ぶ堆積層である。層中には、グスク土器を主体に陶磁器類が僅かに見られた。土器付着炭化物の年代測定結果や遺物年代から、13世紀後半から14世紀代に構築されたものと判断される。近坑のB'-81グリッドでも赤色土と黒色土の混在が認められた。W-77と比べると、層厚は約40cmと薄く互層をなしていないが、こちらも造成跡と考えられる。本造成土は丘陵上面に平坦面を設ける目的で構築された蓋然性があり、東から西へ傾斜する本丘陵において、(曲輪内で)より西側ほど厚みを増すものと想定される。そのため、曲輪の縁辺部にあたるW-77はB'-81よりも厚みがあると判断される。

柱穴(ピット)

二～四の曲輪で確認されている。二の曲輪では、基壇の下部層及び地山上面で検出された。グスク時代のもつと判断されるが、詳細な時期や性格は不明である。三の曲輪南西部では、2次及び7次調査にて同じグリッド(X-86)を調査し、共に黒色土(基本層序のⅢa層)掘削後の地山面でサンゴ礫を伴う柱穴群と、それらより一回り小さな小穴群を確認している。前者柱穴群の並びはやや規則性があり、7次調査時には、周辺の石敷き遺構とセットで門状遺構として捉えられている。三の曲輪北西部では、建物に伴うものと考えられるピットが検出されている。四の曲輪では、P-32グリッドの地山上面においてピットを確認しているが詳細は不明である。

石切り場

2019年度、一の曲輪より更に東に位置する米軍の貯水タンク付近の踏査調査で2か所確認された。1か所は、戦後に分断された尾根の間近にあり（丘陵の東端）、もう1か所はそれよりも西側に位置する。前者は幅12cm、長さ1m程の明瞭な窪みが石灰岩の表面に残っている。底状に発達した石灰岩を割り取る際の加工痕と思われる。後者は上面観がクランク状を呈し、垂直に石灰岩が面取りされていた。いずれも人為的なものと判断される。地形図上、丘陵東端の標高は約23mとなっており、戦後間もなく米軍が作成した地形図と比較すると5m以上低くなっている。よって、前者の石切り場は戦後のものである可能性が高い。もう一方は時期不明である。

3. 遺物

北谷城出土の遺物は、第1～11次調査において出土した遺物の中で、これまで未報告だった遺物を中心に整理し、調査区を大まかに6区（一・二・三の曲輪・三の曲輪北西地区・四の曲輪・東丘陵）に分けて集計作業を行った。調査面積は概ね、一の曲輪（458㎡）、二の曲輪（220㎡）、三の曲輪（92㎡）、東丘陵（37.5㎡）、四の曲輪（36㎡）、三の曲輪北西地区（26.5㎡）の順になる。一の曲輪は、8次調査で一の曲輪東の石垣周辺にて調査（450㎡）を行っているが、8次調査は掘削範囲や深度について不明瞭な点が多いため、留意が必要である。

集計作業の結果、総計30,970点と膨大な量の遺物が確認された。地区毎にみると、最も出土遺物が多かったのは二の曲輪、次いで三の曲輪、四の曲輪、一の曲輪、東丘陵、三の曲輪北西地区となり、二の曲輪で出土遺物が多い点については調査面積が広いことも考慮する必要があるが、基壇やピット、敷石遺構などの遺構が集中して検出されている様子から、グスクのなかでも活動の中心となる場所であったことを示している。

最も出土量が多かったのは土器で、次いで青磁、褐釉陶器を主体とする貿易陶磁器の出土が目立つ。土器は大まかにくびれ平底土器を主体とする後期土器とグスク土器に分類されるが、出土量でみると両者に大きな差はない。地区別で出土状況を見ると、調査区全域で出土がみられるが、三の曲輪北西地区では出土が極端に少なく、東丘陵では他の調査区よりやや出土量突出する様子が認められる。

貿易陶磁器は、出土量が突出して多いのは青磁、次いで褐釉陶器、白磁となり、これらと比較すると染付は極端に少ない。三の曲輪北西地区では元代末～明代初期に比定される元染付の梅瓶、酒会壺が確認されており、どちらも図上復元が可能な量の破片資料が出土している。元染付の酒会壺は首里城跡や今帰仁城跡、勝連城跡などの拠点グスクのみから出土する威信財的な遺物であり、北谷城の按司の有力さを物語る資料として注目される。青磁は15世紀下限、白磁・染付は16世紀下限のものが主体で、12・13世紀を下限とする古手の資料は数点のみの出土である。グスク時代前半期を象徴する遺物といわれる玉縁口縁白磁碗のほか、徳之島産カムイヤキA群は僅かしか確認されない。同じくグスク時代前半期の遺跡で多く出土が認められる滑石についても、字桑江に所在する小堀原遺跡・後兼久原遺跡と比較して北谷城での出土は1点のみと僅少である。このことからグスク時代前半期における丘陵の利用は非常に低かったと考えられる。地区別にみると、出土量が多いのは共通して二の曲輪、次いで三の曲輪で、東丘陵で出土量が多い土器とは様相が異なる。このことから、グスク時代中頃から後半期には二の曲輪、三の曲輪といった城郭内、貝塚時代後期には東丘陵周辺が活動の中心的な場所であったと想定される。現段階では東丘陵を含めその他の調査地区でも貝塚時代後期のプライマリーな層が確認されていないため、貝塚時代後期の丘陵の利用状況

を明らかにするためには今後さらなる調査が必要である。

また、貿易陶磁器の中には被熱を受けた遺物が確認されており、これらは二の曲輪で検出された基壇と、三の曲輪北西地区で多く認められる。三の曲輪北西地区では上記の元染付や勾玉等のガラス製品、銭貨や鉄鐵、鉄釘等の金属製品、植物遺体等の出土が集中する様子から貴重品を保管する倉庫や物見台等の建物の存在が想定される。三の曲輪北西地区では被熱した陶磁器類のほか、被熱して融着した銭貨が確認されたことから、二の曲輪、三の曲輪北西地区に存在していたと想定される建物の火災があった可能性が考えられる。これら被熱した遺物については、16世紀まで下る遺物は無く、Ⅲ a 層以下から出土しない傾向が認められる。

出土量はさほど多くなく、調査区は小規模と限られていた状況であるが、球状製品と鉄鐵、骨鐵等の武具は三の曲輪北西地区、一の曲輪の東側石垣周辺などでやや出土が集中する様子がみられる。一の曲輪の東側石垣はグスクの東端部、三の曲輪北西地区については倉庫・物見台の存在が想定され、いずれもグスクの防御を考える上で重要な場所であることが考慮されよう。

第4節 総括

北谷城では、町教育委員会による保存目的のための各種調査が昭和59年以降17回行われ、17回目となる踏査調査において新たな知見も得られた。具体的には、三の曲輪北崖下にて五の曲輪と捉えられる平場や、一の曲輪の東側にて石切り場と想定される空間が確認されたことが挙げられる。本節では、これらの成果も踏まえて総括を行う。

北谷城の構造は、少なくとも5つの曲輪と、地元の古老からの聞き取りでは「西グスク」、「東グスク」と呼ばれる2か所の平場から構成される。丘陵最高所には一の曲輪が位置し、西へ二の曲輪、三の曲輪、四の曲輪が連なる。三の曲輪北西部から西側へ狭小な尾根が延び、西グスクと繋がる。尾根の北崖下には五の曲輪が位置し、白比川に南面する。一の曲輪から東へ尾根が延び、その先に東グスクがある。尾根は緩やかな凹地をなしており、底地からは尾根を分断する形で堀切が確認されている。これらの曲輪や平場が確認できる丘陵全体の面積は、約61,000㎡となる。

一の曲輪では、平場と布積みの石垣が確認された。平場部分は未発掘のため、詳細は不明である。東壁部分では、大量の礫と、内外壁面の幅が9mにも及ぶ根石が礫下から確認された。北谷城で最東部に位置する一の曲輪の中で、更に東にある東壁は、尾根伝いに東側から侵攻する外敵を防ぐ第一線であり、交戦上重要な場所であったと予想される。尾根に直交する城壁の位置や地下に残る根石幅、地上部に残る礫量から、堅牢で重厚な城壁の存在が窺える。なお、東壁周辺から石弾や骨鐵等の武具が出土している。

東グスクは、一の曲輪や堀切の位置関係から、外敵の監視、迎撃、挟撃する上で重要な場所であったと思慮される。令和元年度の踏査調査において、東グスクの一角から石切痕がある石灰岩の岩盤を確認した。岩盤の上面視はクランク状で、切断面は垂直をなしていた。明らかに人為的なものであるが、加工時期は不明である。グスクの石垣に用いる石材供給地（石切り場）であれば県内初の事例となるため、今後慎重な調査が必要である。

二の曲輪では、平場を圍繞する野面積みの石垣と殿舎に伴う基壇を確認した。石垣下から、内外壁の幅が2mになる根石が検出され、根石には切石が用いられていた。地上部分に切石は見られないが、白比川に掛かっていた木橋を1820年に石造に改修した碑文や、その際にグスクの石垣を用いた伝承等から、グスク時代にはあった切石が、後代に取り除かれた可能性がある。

殿舎に伴う基壇は、外縁部に切石を配石し、内部に10～50cmの礫を敷き詰めている。外縁部の1辺の長さは残存部分で9mを測る。基壇の上部は近現代の耕作の影響により攪乱されているため、礎石の有無は不明である。礫敷の下層からピットが確認されており、基壇構築前にも何らかの建物があつたと推測される。基壇及び石垣の構築時期は、14世紀代から15世紀中頃と考えられる。基壇周辺では15世紀中頃から後半を下限とする陶磁器類が被熱した状態で出土しており、この頃に殿舎が火災にあつた可能性がある。一の曲輪及び三の曲輪との間の城門の位置については不明であり、今後の調査で明らかにする必要がある。二の曲輪は按司の居所と考えられ、北谷城における中心的な場所である。

三の曲輪では、南西部で造成土、北西部で建物の存在を確認した。造成土は30枚余の地層からなり、厚さは1mを越える。出土遺物から13世紀後半から14世紀代に構築されたものと判断した。北西部は白比川以北を一望できる地形で、曲輪端部から弧状の石垣が認められた。石垣の内側には大量の礫が広がり、礫下にて列状に並ぶピットを検出した。ピット埋土の炭化物から13世紀後半から14世紀後半の年代が得られている。三の曲輪北西部から出土する遺物には、元末から明初の染付(梅瓶、酒会壺)や多数の中国貨銭、鉄鏝、石弾、植物遺体、被熱した陶磁器類等があり、他とは一線を画している。倉庫や物見台等の建物の存在が想起される。石垣以西には狭小の尾根が延び、尾根の北崖下に位置する五の曲輪との間には懸門が存在した可能性がある。

四の曲輪では、石垣と城門跡が確認された。曲輪の南から西縁までは石垣が無く、切岸状を呈する。石垣は、南東側に位置する城門跡付近で認められる。城門跡は、残存部から高さ2.5m、奥行き3mの規模を測り、門口は東を向いていることが判る。門跡の北側は斜面地となり、岩盤を上手く利用して門の一部をなす切石を積み上げている。門外から城内へ入ると、礫敷きの斜路を時計回りに登り三の曲輪へ到達することができる。斜路右手方向には、腰曲輪の可能性がある平坦面が数段控えており、侵入者の右手方向から横矢を掛けられる構造となっている(この平坦面の性格については、今後の調査で明らかにする必要がある)。城内から門外へ出ると、岩盤を利用した石階段が数段続き、ノロ道と称される斜路を下り麓の伝道集落へ至ることができる。聞き取り調査によると、ノロ道は馬で登ることができたとのことである。他の曲輪の石垣同様、城門は14世紀から15世紀中頃までに造られたと考えられる。四の曲輪内には僅かな高低差を持つ平坦面が幾つかあるが、ほとんど未発掘のため詳細は不明である。曲輪の西端崖下には塩川と呼ばれる井戸があり、城の攻防を左右した伝承が残っている。

五の曲輪では二の曲輪に匹敵する広さの平場を確認した。平場の縁辺部は切岸状を呈する。五の曲輪南東部(三の曲輪北西部から西へ延びる尾根の直下)にて、直径約2mの転石が確認された。転石の上部にはサンゴ礫等があり、平坦をなしていた。平坦面から比高差約5mの崖上(先述の尾根部)では不自然な傾りが認められた。発掘調査が未実施のため詳細は不明であるが、この転石から尾根に懸門があつた可能性がある。崖上は狭小な尾根となっており、間近には三の曲輪北西部が

広がっている。三の曲輪北西部の手前には弧状の石垣（根石）が巡り、まるで城内へ侵入者を阻むかの様である。また、狭小な尾根の存在も意味有り気に映る。白比川河口部に最も近く、海へ開く玄関口となり得る五の曲輪には、何らかの施設があったと推測される。

西グスクは、北谷城で最も神聖な場所で、男子禁制とされている空間である。これまでに発掘調査が行われたことは無く詳細は不明であるが、洋上に突き出た地形は、船の出入りを監視するに適した場所であったと思われる。

出土遺物では、くびれ平底土器やグスク土器、青磁、褐釉陶器の出土量が多い。このことから北谷城丘陵周辺における盛期は、貝塚時代後期後半とグスク時代である、ということが言える。くびれ平底土器は、東側丘陵部を始めとして曲輪部・丘陵斜面地にも広く分布している。これまでの調査では、曲輪部内における遺物包含層の上層はグスク時代、下層は貝塚時代後期という設定がなされてきたが、集計作業の結果、上下層ともに一定の割合でくびれ平底土器が出土していることが判明した。このことから、丘陵上で出土するくびれ平底土器は、当該期の遺物包含層が曲輪整備の際の切土・盛土によって各層に混入・残存した可能性が高い、と見なした。また、グスク時代前半期の遺物である、滑石や玉緑口緑白磁碗、カムイヤキ、グスク土器（古相）が極端に少ないことから、丘陵上では、グスク時代前半期の人々の活動痕跡が希薄と言える。さらに、16世紀以後の遺物も全体量から見れば少ないため、廃城後は丘陵上での活動は低かったであろう。

出土した陶磁器の中には、被熱の痕跡のあるものが認められた。鑑定していただいた大橋康二氏によると、被熱の程度は火災によるものに近いとのことであった。これらはグスク時代の遺物に限られており、その分布を見ると二の曲輪殿舎付近と三の曲輪西端部に集中している。このことから、二の曲輪殿舎及び三の曲輪西端部の建物跡で火災があったと判断される。

三の曲輪北西部からは、中国産陶磁器や鉄鏝、石彈、銭貨等のほか、イネ、オオムギ、コムギ等の栽培植物が多く出土した。上記栽培植物についてそれぞれ¹⁴C炭素年代測定を行ったところ、いずれも13世紀後半から14世紀前半の年代を示し、出土した栽培植物の総重量のうち90%以上はコムギ及びムギ類が占めていた。試料を分析した高宮広土氏によると、近隣遺跡における栽培植物の出土状況から、（当該期は）畑作中心の農耕システムであった可能性を述べている。その他、特筆すべき遺物に元末明初の染付（三の曲輪北西部出土）が挙げられる。当該遺物の出土は県内でも稀であり、首里城跡や今帰仁城跡、勝連城跡などの拠点グスクから出土している。北谷城には、これらのグスクと比肩する有力な按司が存在したと考えられる。

按司の存在については、首里王府によって近世に編纂された古歌集「おもろさうし」に見ることが出来る。巻十五(1623)には、「きたたんのてだ」(五十五、五十六)、「きたたんの世のぬし」(五十七・五十八)を褒め称えるおもろが見られ、巻十五ノ五十四には、北谷の按司が大御酒を造り、酒倉を建てて勝連にいる「おもいせざ」(思い兄者)を招待し、鎧を手土産にしようとして歌ったおもろが残る。当時の北谷の風景や勝連按司との関係が想起され注目される。按司に関する明確な記録はないが、伝承として金満按司、大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったと伝わる。

城の築城時期についても記録がなく不明である。丘陵の利用時期については、くびれ平底土器の出土状況から、7～11世紀には何らかの利用があったと推測される。12世紀代の遺物はほとんど

見られなくなる一方、麓の玉代勢原や小堀原等の平地遺跡が盛況しており、この頃は平地を中心に集落が展開していたことが窺える。13世紀に入ると再度丘陵が利用され始め、早ければ13世紀後半には三の曲輪にて造成行為が行われる。

グスクの変遷は、前期・中期・後期に細分が可能である。前期は曲輪内の造成が行われた13世紀後半～14世紀、中期は石垣や殿舎が築かれた14世紀～15世紀中頃、後期は廃城となった15世紀中頃～16世紀前半と捉えられる。遺構の検出や遺物の出土量が多い中期は、北谷城の最盛期にあたる。前期の遺構には、三の曲輪造成土が主で、造成土下に見られるピットも前期に含まれる余地を残す。中期は曲輪を圍繞する石垣や二の曲輪の殿舎、三の曲輪の建物跡が挙げられる。後期には、石垣を除くほとんどの遺構は造成により埋没する。

北山、中山、南山が鼎立していた三山時代、自然の要害に立地する北谷城は、中山にとつての交通の要衝であったことは疑いようがない。そして、中山による三山統一後も、地方における拠点的グスクとして、勝連城や中城城と同様に存続していた。そのことは、北谷城が立地する地形、グスクの規模、現存する遺構、遺物が雄弁に物語っている。

近世、廃城となった北谷城は、三箇字の聖城であったことが史料から読み取れる。『琉球国由来記』(1713)には「ヨシノ嶽」と「城内安室崎之嶽」が、『琉球国旧記』(1730)には「北谷城内殿」の記述が認められ、ヨシノ嶽は東グスクの「東御嶽」に、城内安室崎之嶽は西グスクの「西御嶽」に、北谷城内殿は三の曲輪の「殿」に比定される。これらの拝所では、首里王府から辞令を受けた各地の神女(ノロ)を中心に祭祀が執り行われ、三箇字では「北谷ノロ」がその役割を担っていた。

第VI章2節にもあるように、『琉球国由来記』にてグスク内に「殿」が存在していたのは、北谷城以外に、大里城、浦添城、中城城、越來城、勝連城などが挙げられている。このことは、北谷城の廃城後(近世)もグスクが村落祭祀の祭場として利用されていたことを示す。発掘調査では、殿があったとされる三の曲輪内のマウンド状地形を掘り下げ、礎敷遺構を確認した。同遺構の性格は判然としませんがグスク時代まで遡る可能性があり、今後更なる調査、検証が必要である。

沖繩戦時の北谷城では、日本軍によって塹壕や特攻艇秘匿壕などが建設された。令和元年度の踏査調査では、五の曲輪の平場にて高射砲の台座に類似する八角形の構築物を発見した。聞き取り調査によると、北谷城には高射砲陣地があったとされているため、これらに関連する戦争遺構と思われる。その他、白比川に面した北麓には、爆雷を積んで出撃する「特攻艇」を秘匿した壕が構築された。

沖繩戦後、北谷城は米軍によって地形改変を受け、グスク内の拝所や古墓は移転を余儀なくされた。移転させられた拝所は、三箇字の尽力によって再びグスク内に遷され、現在でも「北谷ノロ殿内」を中心に祭祀が行われている。これらの拝所の存在や祭祀の在り様は、グスクと拝所の関係、村落祭祀の実態やその歴史をめぐめる問題について考察する際の貴重な資料となっている。1970年代の航空写真から、二～四の曲輪平坦部及び堀切付近が畑地となっている様子が看取される。いわゆる「黙認耕作地」と呼ばれるもので、米軍基地内でよく見られる土地利用である。

現在、グスク丘陵上には非常に多くの礎が残存している。北谷城の石垣は、木橋であった池城橋

等の石造化（1820年）に伴って城外に持ち去られたとされ、城内に残存する礎の大半は城壁の中込石であると考えられる。これらは厳密な意味においては原位置を保っているとは言えないが、中込石が大きく移動する必要性・蓋然性もあまり考えられない。実際、石垣の根石列が検出された箇所付近では大量の礎が根石の上部に残存している。翻つて言えば、残存礎量が多ければ多いほど、その付近にあったはずの石垣は厚い或いは高かった可能性がある。ただし、礎量が少ない＝石垣が小規模であった、とは断定できないため、なお慎重を期したい。あえて言うならば、現況で大量の礎が認められる一の曲輪東壁は、重厚で高さのある石垣であった可能性が高く、二・三の曲輪境の石垣も比較的厚重であった、と考えられる。

以上のように、北谷城は交易・防衛上恵まれた地勢において、自然地形を巧みに取り込みながら堅牢に築かれ、三山時代から琉球国成立後まで存続したことが良好に残る遺構から確認できる。グスクが築かれた立地から、中山における重要な拠点であったことは疑いようが無い。北谷城の按司に関する史料は少ないものの、首里城跡や今帰仁城跡、勝連城跡など限られたグスクから出土する威信財が北谷城でも認められるため、これらのグスクに比肩する有力な按司がいたと予想される。遺物の質や量、遺構の状態等から、北谷城は、世界文化遺産に登録されている中城城跡と勝連城跡に匹敵するグスクといえる。廃城後は丘陵麓の集落の聖地として尊崇され、北谷ノロを中心に五穀豊穡等の祭祀を行う場所となった。しかし、沖縄戦時には日本軍によって特攻艇秘匿壕等の戦争遺跡が造られ、戦後は米軍基地と化し、拝所の一部はグスクの外へ移転が余儀なくされた。これらの拝所は北谷城を聖地とする人々の尽力によって再びグスク内に戻され現在も祭祀が行われている。

このように、北谷城は、グスクの立地及びその成立から現在までの変遷を確認することができ、沖縄の地理的及び歴史的特殊性を解明できる極めて独自性の高い拠点的グスクである。

第5節 今後の課題

- ・一の曲輪の性格の把握（平場における遺構の有無確認）
- ・二の曲輪の石垣と基壇の関係（位置及び時期の特定）
- ・二の曲輪南西部の部分的盛土の性格把握
- ・二の曲輪西側石垣の形状（外壁は1列なのか複数列あるのか）
- ・二の曲輪の城門の位置の把握
- ・三の曲輪の性格（殿の成立時期）
- ・四の曲輪における石垣（根石）の有無確認（後代に除去されたのか）
- ・四の曲輪の性格把握（建物跡があるのか）
- ・四の曲輪の城門付近にある数段の平場の性格（腰曲輪か）
- ・五の曲輪の性格の把握（平場における遺構の有無確認）
- ・懸門の存在確認（四の曲輪西端部及び五の曲輪南東部）
- ・丘陵南麓～平地の地層の堆積年代確認（遺構年代の把握）
- ・石垣の面石を取り外した時期の特定
- ・石切り場の利用時期の特定
- ・戦前における東ノ御嶽の場所の特定
- ・金満按司の墓の機能の検証

参考・引用文献

書名・篇名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所	巻・節番号
【北谷城—北谷城第 次調査—】	1984	北谷町文化財調査報告書第 1 集	全巻	
【北谷城第 2 期—北谷城発祥地調査—】	1985	北谷町文化財調査報告書第 2 集	全巻	
【北谷城—北谷城第 3 次調査—】	1991	北谷町文化財調査報告書第 11 集	全巻	
【北谷城—北谷城第 4 次調査—】	1992	北谷町文化財調査報告書第 12 集	全巻	
【北谷城—北谷城第 5 次調査—】	1994	北谷町教育委員会	全巻	
【北谷城—伊良原 遺跡—北谷城調査報告書—】	2010	北谷町文化財調査報告書第 32 集	全巻	
【北谷町史】	1981	北谷町史	全巻	
【北谷町の遺跡】	1984	北谷町文化財調査報告書第 11 集	全巻	
【北谷町史】第 1 巻通史編	2005	北谷町教育委員会	全巻	
【北谷町の地名】	2006	北谷町文化財調査報告書第 24 集	全巻	
【北谷城地区史料集第一巻—正保伝説及石段遺跡—】	1992	神橋教育委員会	全巻	
【北谷城遺跡の沿革 前子 門上巻—「志子」コレクション収録記念報告—】	2014	鎌倉市史前動物骨埋蔵施設	はじめに	1-1
【歴史編纂資料（原典ノ部）】	1914	既述名実編	はじめに	1-4
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—北谷宮参道—】	2019	神橋教育委員会文化課編	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—北谷宮参道—】	1984	神橋教育委員会文化課編	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—中野川右衛門（1）—参り参道—】	1985	神橋教育委員会文化課編	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1987	神橋教育委員会文化課編	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1988	神橋教育委員会文化課編	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1989	神橋教育委員会文化課編	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1991	神橋教育委員会文化課編	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1991	神橋教育委員会文化課編	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2001	監修 新編発行/著者 原典集交流/発行所 むすび	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2018	監修 新編発行/著者 原典集交流/発行所 むすび	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2016	神橋教育委員会	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2012	著者 上野実子/写真 富山誠司/株式会社河出書房新社	原巻の検討	巻 2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2015	興隆文化史/「考古学探究 第 42 号（通巻 245 号） 第 1 号」 p. 63 ~ 74	上部	IV-3-1
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2018	既述高元大塚参道発祥地センター	上部	IV-3-1
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2014	既述高元大塚参道発祥地センター	上部	IV-3-1
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2005	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-2
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1984	平凡社	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-3 ~ 11
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1997	文芸堂	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-3 ~ 11
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2001	吉岡/西上/森陽社	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-3 ~ 11
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2009	今村/仁文/調査報告書 第 26 集	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-3 ~ 7
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1984	神橋町教育文化財委員会	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-3-5
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	1998	神橋町文化財調査報告書 第 13 巻	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-5
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2005	神橋町史前動物骨埋蔵施設	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-5-6
【神橋町史の遺跡調査報告書—原典集—高元大塚参道—】	2006	神橋町史前動物骨埋蔵施設	伊豆山頂遺跡文化財発掘調査報告書 (12)	IV-3-5

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちやたんぐすく							
書 名	北 谷 城							
副 書 名	総括報告書							
巻 次	-							
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第44集							
編著者名	松原哲志・太田葉摘美・山城安生・東門研治・上地千賀子・常眞嗣一・赤嶺政信・ (株)パリオ・サーヴェイ							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所 在 地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2020年(令和2年)3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′		m ²	
ちやたんぐすく 北 谷 城	おきなわ 沖 縄 県 北 谷 町 あざ字 大 村 城 原	473260		26° 18′ 18″	127° 46′ 10″	19840213 { 20191227	発掘面積 1,408 m ² 踏査面積 9.5ha	保存目的の踏査・発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北 谷 城	城跡	貝塚時代 後期		くびれ平底土器・石器・貝製品		東丘陵地区より貝札が出土		
		グスク時代	城門・ピット群・基壇・石垣・堀切	グスク土器・カムイヤキ・白磁・青磁・染付・褐釉陶器・天目・銭貨・金属製品・骨織・植物遺体		三の曲輪北西地区より元染付が出土。火災により被熱したとみられる陶磁器類が出土		
		近世 ～現代	溝状遺構・ヨシノ嶽(東御嶽)、北谷城内之殿、城内安室崎之嶽(西御嶽)・壱塚・蛸壺	沖縄産施釉・無釉陶器・陶質土器・本土産陶磁器・瓦				
要 約	<p>北谷城は東西約500m、南北約150m、標高約44mを最高地とする丘陵上に築かれている。かつては丘陵麓まで海が迫り、洋上に突き出した地形は天然の要害をなしていた。丘陵の南北に良港となる河口を持ち、防衛と交易に適した地形であったと予測される。昭和58年度以降17回の調査が行われ、5つの曲輪や西グスク、東グスクと呼ばれる平場が確認された。北谷城が所在する丘陵は貝塚時代後期から利用されるが、11～12世紀には平地の遺跡が活況する。13世紀に再び利用され、早ければ13世紀後半から築城に伴う造成が行われる。14～15世紀に最盛期を迎え、15世紀中頃から16世紀前半に廃城となる。堅牢な石垣や殿舎跡の他、威信財となる貿易陶磁器の出土等から、勝連城跡や中城城跡に匹敵するグスクといえ、「おもろさうし」からも有力な按司の存在が窺える。廃城後は聖域として尊崇されていたが、沖縄戦時に日本軍によって戦争遺跡が丘陵一帯に構築され、戦後は米軍基地に接収された。一部の拝所をグスク外へ移転させられるも、地域の尽力により再びグスクへ遷され現在も祭祀が行われている。以上、北谷城は他に例を見ない独自性の高い拠点のグスクである。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第44集

北 谷 城

— 総括報告書 —

編 集： 北 谷 町 教 育 委 員 会

発 行 年： 2020 年（令和 2 年）3 月
〒 904-0192 沖縄県北谷町字桑江 226 番地
TEL 098 - 936 - 3159

印 刷： 株式会社 東洋企画印刷
〒 901-0305 沖縄県糸満市西崎町 4 丁目 21-5
TEL 098 - 995 - 4444
